

---

# 仮面ライダーベルゼブブ

THIS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーベルゼブブ

### 【Nコード】

N7280V

### 【作者名】

THIS

### 【あらすじ】

ミッドチルダに最近、一つの都市伝説ができた。それは黒い蠅の魔王が怪物を狩っていると言うもの。

凶悪化していく犯罪の裏で暗躍する、人を襲う謎の怪物シード。突然現れる機械兵器アーマード。人の恐怖をあおり、死をもたらすゴースト。

これら三つの事件を追う時空管理局の二人の執務官と地上の捜査官達。

彼らは必然的に都市伝説の魔王と遭遇することになる。

これは一人の優しい魔王の物語。

一人ぼっちの魔王と彼と出会う人（物？）達の物語。

「お前に魔王という名の恐怖を味あわせてやる。冥土の土産にな！」

## プロローグ―闇夜の大蜘蛛と暴食の魔王

魔法世界ミッドチルダ。

管理局の地上本部が置かれている首都では近年の犯罪の凶悪化の対応が問題となっていた。

改善を試みる動きがあり一時は減少の傾向を見せたのだが、ここ数カ月でまた急激に広がってしまった。

その原因は質量兵器の増加と・・・人が怪人、または怪物に変化して異常な戦闘力を発揮して暴れまわるという信じられない原因なのだ。

人が怪人や怪物になった原因は不明。Sランクを確実に超える戦闘力を持つ故にその鎮圧のために高ランクの魔道士に出動を余儀なくされる事態となっていた。

とあるビルの一角。紅の月が不気味な光を照らしている中。

そこで一人の女性が悲鳴をあげていた。

「きゃあああああ!!」

見上げる彼女の視線の上には先ほどまで傍に歩いていた男が血まみれになっている。

「かかかかっ・・・おいしいねえ。人の恐怖と悲鳴というのは。」

血まみれの男の身体を持っているのは巨大なクモの怪物。牛すら簡単に飲み込めそうなほどの巨大なクモにその蜘蛛を人間化させたような怪人の上半身が頭の部位にくっついている。

巨大な蜘蛛の怪物がビルの空き地に自身の糸で巨大な巣を作っている。そこには血まれの男以外にも複数の人間の死体が糸にくるま

れていた。糸の隙間から見える肌は干からびてカサカサになってしまっている。

「いい糧を見つけた。いいリンカーコアも持っているようだし……。これでまた一つ……。」

女を見る怪物がゆっくりと彼女に迫る。

「私の力があがるわ……。」

「ひっ……。くっ……。」

女性が悲鳴と恐怖を押し殺しに緑色のスフィアを四つ作り出し、それを怪物に放つ。

高速で放たれた魔力スフィアは怪物に命中、しかし、命中しただけであった。

「とっさに殺傷設定では放つ……。いい判断。でも私に通用するかどうか話は別。」

スフィアは命中し、強い衝撃を怪物に与えたはずだった。だが、怪物は平然としている。

「あっ……。ああ……。」

「普通の魔道士にはいいスフィアね。少し痛かったわ。でも……。それだけよ。」

怪物は糸を吐き出し彼女を縛りあげ、其のまま引き揚げる。

そして値踏みするかのように彼女に近寄る。

「綺麗な顔……。これを食べる事ができるなんて……。中々美容にもいいわね。」

怪物は満足そうに頷く。そして、その言葉を聞いた女性は恐怖のあまりに失神寸前になっている。

「あっ……。ああ……。あああ……。」

失禁もしており、もうまともに喋る事もできない。ただ……。恐怖に全身を震わせるだけ。

怪物は口を広げる。スポイトのような口に、2本の牙。その牙から滴り落ちる唾液がア

スファルトに落ち、白い煙と共に音を立てて溶かす。

これを彼女の身体に流し込んで・・・内部から溶かして飲み干す。まさに蜘蛛の食事の

仕方をそのまま再現している。

「じゃあ・・・頂きます!!」

怪物が牙を付きたてようとした瞬間だった。

「ぐふっ?!」

怪物の顔面に衝撃が走り、大きくのけ反った。

そして、風切り音とともに女性を縛っていた糸が切れる。女性だけじゃない。

怪物が止まっていた蜘蛛の巣の糸もズタズタにされ、ちぎれてしまったのだ。

糸を切られ、落ちていく女性。しかし、不思議な浮遊感とともに彼女はゆっくりと地面に下ろされた。

彼女の目には無造作に地面に落下する死体と、怪物の巨体が映る。「うう・・・っ・・・誰じゃああああ!!・・・私の食事を邪魔するのは。」

食事を邪魔された上に巣までも破壊されたことに怒りをこみあげ怪物は接近してくる相

手は何者かを肌で感じるのが遅れてしまった。

「あっ・・・ああああ・・・。」

女性は真っ先にその存在を肌で感じていた。寒いわけでもないのに、身体の震えが止まらないのだ。

異常な空気に怪物も感じ取ったのか震えだす。

「・・・我は暴食を司る者。」

低く響き渡る男の声がゆっくりとした足音とともに聞こえてきた。

「・・・我は冥府を司る者。」

その足音が聞こえてくるたびに女性と怪物の震えが大きくなっていく。

「我が喰らうはこの世の毒。身勝手な欲と言う愚かしくも浅ましい物にまみれた罪と穢れ。」

怪物は焦ったかのようにあたりを見回す。

ビルの陰から・・・その者は姿を現す。

「さあ・・・今宵の毒は・・・いかがな味かな？」

現れしは人型の異形の怪物。

全身を黒い殻のような物で覆われている。頭には昆虫を思わせる銀のアンテナのような

二本の触角。目には紅く輝く大きな複眼。複眼の間にはガラス玉のような第三の目。口元

も鋭い虫を思わせる銀色の牙が付いている。両手の五本の指の先には短くも鋭い鋼の爪。

そして指には銀のシンプルな指輪がはめられていた。

全身に鎖が巻かれ、特に両腕と両足の脛にはまるで何かを封印するかの様に暗い銀の

小手や足具の上から鎖が巻かれていた。

腰には鎖で封印された銀のベルトが付いており、中央で紅い宝玉が光を放つ

背中に蟲の羽を彷彿とさせる紅いマント。

「魔王・・・ベルゼブブ！」

怪物はその異形の姿を見て、声を震わせながら名を言う。

「そう・・・我は暴食と冥府を司る魔王・・・魔王ベルゼブブ。名を呼ばれた魔王・・・ベルゼブブは特に動じた様子も見せずに怪物に向けて指をさす。」

「・・・お前に、魔王と言う名の恐怖を味あわせてやる。」

それは宣告。それを受けた怪物と女性は震えあがる。

「・・・冥土の・・・土産にな。」

ゆっくりとした歩調で怪物にむかって再び歩き出すベルゼブブ。

縮まる距離を開けようと後退する怪物。実際の距離と精神的には追いつめられていた。

「くっ・・こうなったら、お前の力も喰らってくれる!!」

追いつめられていた怪物は口から無数の糸を吐き出す。

「ハイバイブネイル・・・。クリムゾンスラッシュ。」

しかし、その糸を紅い光を纏った右手の爪がその糸をまとめて斬り払う。

糸を斬り払われて驚く怪物。その驚いた瞬間に ベルゼブブの拳はすでに怪物の顔面にめり込んでいた。

「がああ!？」

「・・ふん!」

突然の衝撃にのけ反る怪物を蹴る。

巨体を誇る怪物がふきとばされ、壁に叩きつけられる様を女性は啞然として見ている。

「ぐっ・・くそ・・。」

怪物は実力の差を思い知り、とっさにその場から逃れようと胴体からビルの屋上へと糸を飛ばす。

そして、その糸から素早く逃げようとした瞬間。

魔王は左腕から鎖を飛ばし、それを振り回して怪物に向けて叩きつけた。

「ぐぎゃ!？」

地面に落ちて潰れるような悲鳴を上げる怪物。

その怪物に向けて、魔王はさらに鎖を振り回し怪物を何度も打ちさえる。

空を切る素早さとしなやかさは鞭のようだが、鈍器のような重い打撃を与える鎖の連撃は怪物に容赦のないダメージを与えていた。

「ぐっ・・ぐおっ・・ぐああ!？」

遠心力のかかった鎖の振り下ろしに地に伏した怪物。

「くっ・・くそおおおおおおおお。」

怒りが頂点に達した怪物の姿が変わる。黒いオーラが全身から噴



き出し、目が紅く光り姿が変わっていく。

ももとの巨体がさらに二周りほど大きくなり、全身を黒い装甲が覆う。爪もながくなり、文字通りそれは・・変身だった。

それとともに全身に受けたダメージもたちまち消えてしまった。

禍々しい力に、女性も身をすくませる。

「暴走・・。これはまずいですね。」

魔王の傍に黒い魔道書が現れ、怪物の状態を見てため息をついた。  
「調子に乗るなああああああ！！」

巨体を駆使して、先程から想像もできないくらいのスピードで魔王に襲いかかる怪物。

しかし、怪物の手は魔王を捉えることはなかった。

「ぐっ・・・あっ・・・。」

「・・・つまらないな。」

突進をかわし怪物の手や足を縫う様に避け、カウンターという形で胴体に膝蹴りをくらわしている魔王。

怪物は己の突進から逆にダメージを受ける形となり、後ろに揺ける。

膝蹴りを受けた部位は亀裂が入り、その破壊力の大きさがうかがいしれる。

「ふん！」

その怪物を後ろ回し蹴りで吹き飛ばす。

「ぐっ・・・ぐぐぐぐっ・・。」

立ちあがる怪物だが、ダメージが大きいためその動きは鈍い。

「シールドの暴走すら相手になりませんか。流石です。」

魔道書の賛辞に何も答えず、魔王は冷酷に告げる。

「・・・終焉の時間だ。」

魔王の右足の下から紅い光を放つ魔法陣が現れる。

「戒めを解くは、黒き稲妻の鎚。」

その言葉と共に右足の拘束がはじけ飛び、脛の足甲がスライドして、開く。

足甲の中から現れたのは黒い稲妻を放つ三つの宝玉。

「ちっ……。」

怪物が逃げようとするが、地面から突然現れた鎖に縛られ、動きを止める。

「くっ……くそ……!!」

必死に戒めを解こうとする怪物。怪物の力をもってすれば普通の鎖やバインド系の魔法など簡単に引きちぎれる。

「なんで……解けない?! 力も……入らない……。」

だが、その鎖は引きちぎれもせず、怪物の身体を縛り続ける。

「おせっかいかもしれませんが、あなたの鎖を借りました。まあ、あの巨体なら必要もないはずですが、念の為です。」

「ふっ……。おかげで確実に仕留める。」

魔道書の心遣いに軽く笑みを漏らす魔王。

彼は闇夜の中、首のマフラーを虫の羽に変えて跳躍。

雲から出てきた紅い月を背に、空中で一回転。

そして、黒い稲妻を纏った右足から怪物に落下するように突撃。

戒めを受けた怪物を地面に縫い付けるように黒き稲妻の鉄槌は下された。

その衝撃は怪物の身体を突き抜け地面に巨大なクレーターを作っ

た位だ。

「がっ・・・ああっあ・・・。」

凄まじい衝撃と蝕む黒き雷と共に身体に刻まれた魔方陣。

魔王は怪物の身体を縫い付けた右足に力を込め、後ろへ宙返りをしながら飛び退く。

破壊された怪物の身体が必死に自己修復をかけようともがくが・・  
すでに手遅れだった。

修復しかけた身体が次々と崩壊していくのだ。

「ちっ・・・ちくしょうおおおおおおお！！！」

怪物の身体に刻まれた魔方陣が輝く。

「あがきなどせず・・・逝け！！！」

魔王が空を切ると同時に怪物は派手な音を立て爆散する。

突然の爆発に女性は思わず目をかばう。  
吹き荒れる爆風はすぐに止む。  
怪物の姿はもちろんの事、魔王の姿もすでになかった。

あとがき

はじめまして。THISです。皆さんが書いているのを見て、私も自身が最初期に練っていたアイディアを魔法少女リリカルなのはの世界を利用して書かせてもらいました！！

時代系列はVivioのミッドです。原作キャラは今のところはユーノと捜査官役としてティアナとはやて、フェイトを出す予定ではありません。

皆さんに小説を見てもらうのは初めてで、誤字、脱字、至らない表現、など多々あると思います。

ですからこんな私でよければ、いろいろな意見を頂ければと思います。感想、アドバイス、批判でも結構です。よろしくお願いします。

プロローグ―闇夜の大蜘蛛と暴食の魔王（後書き）

あとがきはここでしたか！？

# hazukasidesu

今度からはここで書きます。よろしくです。

## 憤怒と暴走 前編（前書き）

さて：この小説の主人公である魔王であり仮面ライダーであるベ  
ブゼブ。

その正体を明かすのを今回は渋ってしまいました。

前編の中に出てくる人物の中にその正体があります。

読んでいただいてなんとなく予想している人もいるのかもしれない  
せん。

中編ではその人物を中心に書いていきますので、わかっていくと  
思います。

中、後編と三部で一話を構成する予定で、後編で正体は明かしま  
す。

あまり面白みはないかもしれませんが、よろしくです！！

## 憤怒と暴走 前編

「・・・ここまでは、その人の証言や。」

地上本部のとある会議室で、八神はやてが捜査員達に報告する。

「みんなの知っている通り、これまでに起きた魔道士の連続失踪事件。その犯人・・・まあ、人と言うべきかどうかは微妙やけど、その犯人らしき相手に遭遇して、無事だった人の証言や。」

報告書を見た捜査員達から動揺が走る。

それはそうだろう。

女性が目撃した犯人が人語を話す巨大な蜘蛛の怪物である事。

その怪物の周りには干からびた犠牲者の死体があった事。

そして、その女性を助けたのは魔王と名乗る怪人で、女性の魔法にびくともしなかった怪物をあっさりと倒して姿を消したという事だ。

「怪物の死体は何も残っていない。でも、巨大なクレーター、怪物の出した糸と、行方不明だった魔道士達の死体がすべて見つかったことからしても、証言に矛盾はあらへん。」

『・・・・・・・・』

捜査員一同この報告に言葉を失っている。

何しろ魔法を使う彼らからしても、信じられない話ばかりだったからだ。

「おそらくこの事件その物はこの時点で終わったと考えていいと思う。でもこれと似たような事件はあちこちで起こっている。」

画面が切り替わり、そこで地上本部の周りだけでなく、管理世界のあちこちで似たような怪物による殺人、傷害などの事件が起こっている。

しかし、その怪物はすぐに姿を消してしまう。その理由は定かではなかったのだが。

「そして、その正体不明の怪物を倒して回っている存在が・・・今回

の事件にも出てきた魔王の可能性が高いちゅうわけや。」

怪物の正体は判らず、対処方法も不明。そんな彼らをあっけなく倒す謎の怪人。

「謎の怪物の正体に、それを倒した怪人の捜査が今後の方針。これはあくまでも個人的な見解やけど、魔王と名乗ったその怪人が怪物についても何か事情を知っている可能性が高いと思ってる。」

彼女の見解に反論する者はいない。何しろ皆も同じことを考えていたからだ。

「でも、捜査する時は最大限に慎重に行動する事。何しろ、怪物は武装隊の魔法に余裕で耐え、その怪物を簡単に倒した怪人を相手にするやからな。」

その一言を最後に、その日の捜査会議は終わった。

## 無限書庫。

そこはあらゆる書物が眠っている場所であったが、無限と言われる蔵書故、現在の司書長、ユーノ・スクライアが来るまで多くの知識が死蔵された状態になっていた。

現在、ユーノの活躍のおかげで、書物は整頓され、管理局の貴重な情報源となりつつある。

現在彼は、幼なじみでもある八神はやての依頼で、とある単語を検索していた。

「・・魔王・・ベルゼブブ。」

管理外第97世界のある神話に出てくる魔王。人間の七つの大罪の中の一つ、暴食を司る存在で、その姿は羽に髑髏が描かれた巨大な蠅とされている場合が多い。糞の山の王などのイメージから冥府を司る者としてもみられており、かなりの大物とされている。

ルシフェルと同じく墮天した天使だという意見もある。

もちろんこれは宗教に出てくる神話の中の話であって、実際に出てくるとなると話は別になってくる。



「……古代ベルカにも蠅の魔王の名は出てこない。魔王の名はでてくるけど……。」

古代ベルカの戦国時代には代表的な聖王を初め、霸王、冥王、雷帝など数々の有名な王が出てくる。その中に魔王と呼ばれる存在も一人だけいた。その名を持つだけあり、世界に絶対の恐怖を与え、一致団結した王達に打ち滅ぼされたとされる。その団結をきっかけに古代の戦国時代は終わりを迎えた。その魔王の名は……。

「ユーノさん!!」

探索魔法をかけている彼に多くの本を持ちながら話しかけてきたのは、彼の部下だった

歳の頃は二十歳前後だろうか。アッシュブランドの背中まで隠れる長い髪に、切れ味すらも感じるほど端正な顔。眉が黒い枝のようになっているのと耳がトがつているのがちょっとしたアクセントになっている。額にはバンダナが巻かれており、紅い瞳の上から細いフレームのメガネをかけている。その体は細身だが、引き締まっている上に、貧弱な印象はない。

「こちらの資料ここにおいておきますね。」

無限書庫司書——バーハルトは資料を置き、ユーノの探索魔法の結果のぞき見る。

「あっ……ああ。」

「ついでにコーヒーも入れておきます。いい茶菓子もあるので。」

「ありがとう。」

バーハルトの入れるコーヒー、お茶は大変評判がいい。人の好みや体調に会った分を作れるので、司書達の癒しになっている。

「ふう。」

「検索は順調ですか？」

「まあ……ね。でも有用な物の選別が中々ねえ。」

バーハルトの持ってきたのはカフェオレで、微かな眠気を覚え始めていたユーノにはちょうどよかった。

「……蠅の魔王ですか。」

「古代ベルカの魔王の事も調べたけど、これも伝承程度しか判らない。史実として、多次元を危機に陥れていたのは間違いないけど・・・。」

「・・・・・・。」

途中までで出た検索結果を見ながら、バーハルトも唸る。

「かなり時間がかかりそうですね。もう少し有用な単語があればいいですけど。」

「そう・・・だね。」

ユーノは幼馴染の八神はやてからの依頼書を見してみる。

「・・・魔王に人を喰らう怪物か・・・。他に・・・ん？」

報告書の中に出てきた女性の声でしゃべる魔道書、それと鎖に目を止めるユーノ。

「相手と自身を拘束する鎖と・・・魔道書か・・・。」

バーハルトは報告書の内容を見て、少し顔をひきつらせていた。

「・・・けっ・・・結構内容は詳細ですね。」

「被害者であり、事件の目撃者でもある女性が、航空武装隊の人だったから。恐怖の中で見るべきところはしっかり見ていたみたいだ。」

「そっ・・・そうなんですか・・・。」

そう言いながら震える手で茶菓子に手を伸ばそうとしたバーハルト。

そんな彼が突然吹き飛ばされ、書庫の本棚に突っ込む。

「・・・相変わらず見事なドロップキックだ。」

ユーノは吹っ飛ばされる一部始終を見て、平然としている。

「ティータイムなら私達を呼びなさい！！」

大柄に部類されるバーハルトを吹っ飛ばすドロップキックをしたのは一見すると中学生に見えるくらい小柄で金色でラブラドルのようなふわふわとした髪の女性だった。

「アリスを止めないのか？」

「・・・止める価値があると思う？」

ドロップキックをかました少女――アリスの後から出てきたのは黒の短くぼさばさした髪 of 強面の二十代後半の男――アガリア。二メートル近い背丈と広い肩幅。左目に切り傷があるので、強面がさらに酷くなっている。

アリスを止めないのかと言っていたのは二十代前半位の珍しい白い髪の女性――リース。綺麗だがクールで冷たい光と切れ味を誇る顔立ちと白衣の上からでも判る抜群のスタイル。妖艶さまで醸し出している彼女だが、その表情には呆れがあった。

「・・・お願いですから、二人ともアリスを止めてください。」

突っ込んで倒れた本棚から現れたバーハルトがため息をつきながらも立ち上がる。

「相変わらず、なんともないのか？」

「無限書庫の不思議の一つねえ。」

「・・・勝手に怪談の仲間入りにしないでください。」

「・・・ってこっちを無視するな!!」

順に、ドロップキックを喰らい、本棚に突っ込んだのにもかかわらず平然としているバーハルトに対して、呆れに近い感覚で驚くアガリア。

その不思議なまでの頑丈さにすでに不思議現象と認識しているリース。

それに突っ込みを入れるバーハルト。

そのやりとりにおいていかれてむくれるアリス。

「はい。ちゃんとみんなの分の紅茶とコーヒー。それに茶菓子を用意しているから。」

やれやれと言いたげに、アリスにカフェオレを渡すバーハルト。

「うっ・・・うん。判っていれば・・・よろしい。」

顔を赤らめ、小さくなりながらもカフェオレを受け取るアリス。それを口にして満足そうな笑みを浮かべる彼女。

それを微笑ましく思いながらもバーハルトはリースにレモンティ、アガリアにはブラックコーヒーを渡す。皆の好みをきちんと把握し

ているのがバーハルトだったりする。

彼らはお菓子を時に口にしながら、何気ない談笑をしている。

「・・・君達がいると退屈しないですむよ。おかげで眠気も吹っ飛ぶ。」

そんな彼らをのんびりと傍観しているユーノもその輪に入っていない。

これが無限書庫の日常であった。

それは暗い闇の中だった。

「・・・今回のシードもやられたようじゃのう。」

黒いローブで顔と全身を隠した老人が杖をつきながら、スーツを着た男に視線をやる。

どこかの営業と言っても差し支えない清潔感のある格好。このような場でなければ何も違和感などなかっただろう。

「・・・忌々しい。今回は「暴食」の傑作でもっと収穫できると思ったのに。」

「まあ・・・本家本元にやられたら世話ないわな。」

二人の会話に加わってきたのは作業着にヘルメットというどこかの工事現場で働く格好をした男。髭も茫々だった。

「それでも、最低限のクライムは収穫できた。もっと育ててもらったら暴走する力を隠せずに管理局に公になってしまいう事を考えたら、あれでよかったと言えるが・・・。」

三人の足元の闇が光を放ち、蜘蛛の怪物と、それを倒した魔王――ベルゼブブの姿が映っていた。

「あれはプロトタイプだったんだろ？俺のアーマードとじいさんのゴースト、兄ちゃんのシードを融合させようとした究極の失敗作にして最悪のロストナンバー。」

作業着の親父――メキスの言葉に老人――リッチも頷く。

「ああ。素晴らしい素体があったからそれで作ってみただけという

存在。いくつのロストログアも使ったと言うのに基地をその世界ごと消滅させたデータも残らぬ最悪の失敗作。」

「だが・・奴は生きていた。そして、我々が想定していなかったスペックを発揮している。」

スーツの男――カウターは映像に背を向けて歩き出す。

「その秘密も探らないといけない。種はべつに奴にも仕込んでいる。それを餌にする。」

「がんばっているわねえ。」

そんな三人にからかい交じりに話しかけてくるのは、黒い革のドレスに身を包んだ中学生くらいの黒髪の少女。三人の上の何もないところに腰掛けて笑っていた。

「おいおい。リリースお前はそんなに気楽でいいのか？」

「失礼ね。私も仕事はキチンとしているわ。本格的に動けるように色々と手をまわしているんだから。」

黒髪の少女――アイは笑いながら下に降りる。

「・・・・あの方の復活はまだ遠い。その力の源であるクライムは何とか供給できているけど、根本的な解決にはならないわ。」

「・・・忌々しい。ベルカの魔王め・・。聖王、霸王よりも奴が一番・・。」

カウターの手が震える。

「・・・気持ちは察する。我々の軍勢もまだ封じられている。力すらもな。」

カウターの気持ちはこの場にいる他の三人も同じようだ。

「目指すは・・・我々と主の完全な復活。そして・・。」  
そこから四人の声は重なった。

『審判の時を必ず・・主のために!!』

四人は動き出す。一つの目的のために

「……」

夜。暴走と言ってもいいほどの速度で走る車。その速度は暴音を伴ってあらゆる物を振り切ろうとしていた。

そんな暴走車を追跡する二台のパトカーと二人の航空魔道士。

その逃走劇の先に一人の女が突っ立っている。

暴走車と、パトカー、そして航空魔道士達がそれに気づいた時にはすでに遅かった。

暴走車にはね飛ばされ、宙を舞う女。

「くっ……くそ……」

空を飛んでいた航空魔道士の一人とパトカーが一台止まり、地面に叩きつけられた女の元に駆け寄ろうとする。

「……あれ？」

しかし、倒れたはずの女が何事も無かったかのように立ちあがる。

「おっ……おい。大丈夫なの……か……はっ?!」

声をかけようとした魔道士に対する返答は身体を貫く女の獣の腕であった。

「……………気をつけろ……化け物が……」

何も言えずに、微かな念話を送った魔道士。その念話が彼の……遺言だった。

物言わぬただの物体となり果てた魔道士を見下ろしていたのは、女ではなかった。

そこにいたのは異形の怪物。チーターの姿を模した獣人だった。

その光景を見ていたパトカーの中の管理局員。

その彼らにチーターの獣人は爪を向けていた。

逃走続けていた暴走車の前にも怪物が立ちふさがる。

それは身の丈二メートル後半はある牛の怪人。巨大な鋭い角。厚い毛皮の下にはす甘辞意ほどに発達した筋肉。脚は巨大な蹄になっているが、手は人間のように五本の指がある。

目を紅く光、高速で迫っている暴走車に殺気を振り向けている。

それに暴走車を運転していた人は恐怖を覚えたが、すでに遅かった。

「うおおおおおおおおお！！」

牛の怪人が雄叫びをあげて突進。

高速で走る暴走車に衝突する怪人。

そして、暴走車がぐちゃぐちゃになりながらも強制的に止まる。

バンパーはもちろん、エンジン、車の前半分が運転席ごと抉られたかのように壊れている。突進した怪人はまったくの無傷で、ダメージを負った様子もない。

むしろ怒りが高まったのか眼がさらに赤く輝く。

「ぐおおおおおおおおお！！」

角に刺さった車を、怪人は首の力だけで後ろに飛ばす。

まるで空き缶をなげるかのような軽い感触で飛んで行く車。

だが、宙を舞っているのは一トン近くある鉄の塊。

その事実を車が道路に落下した重い破碎音で認識させられる。

牛の怪物の目が今度はパトカーに向けられる。

そして、そのまま突進。パトカーを跳ね飛ばす。

怪物に目を向けられた瞬間に中にいた管理局員の二人はとっさに外に出たので無事ではあった。

だが、怪物の怒りの視線は降りてきた二人に向けられる。

「にげろおおおお！！」

そんな二人を助けるために上空にいた魔道士が砲撃魔法を放つ。

よけようともせずにもともに受ける怪物。

設定はもちろん殺傷。

だが、怪物はそれを受けたのにもかかわらず平然としている。

「……………」

しかし、怪物の足は止まっている。

それを見たパトカーに乗っていた魔道士はとっさに魔法で応戦。数発のスフィアを放っていた。

接近戦を得意と人もいたが、さすがに暴走する車に真正面から突

っ込んで無傷、なおかつそれを跳ね飛ばすほどの怪力を持つ相手にそれは危険なのは判っていたのだ。

だが、在りえないほどの頑丈さは遠距離での攻撃でも全く歯が立たない。

「ぐおおおおおおおおおおお。」

怪物が凄まじい雄叫びをあげた。

その雄叫びは声その物が圧となり、空を飛んでいた魔道士と、地上で戦っていた二人の魔道士を吹き飛ばした。

「ぐあ!？」

空中に落下し、全身を強く打ち気を失う航空魔道士。

地上にいた二人もあちこち打ちつけて意識がもうろうとしている。そんな三人に怪物は突進をしかけようと角を相手に向けて、足で地面を何度も蹴っている。

——終わる……。辛うじて意識があった一人がそう思った瞬間だった。

どこからともなく聞こえてきた銃声、それと怯む怪物の姿。そこまでで……。彼の意識は途絶えた。

「ぐるおおおおおあっ!？」

横槍を入れられた怒りに怪物は銃弾が飛んできた方を見る。

「……。悲惨だ。」

その人物は路地裏から銃型のデバイスを手に出てきた。闇に彼の姿は隠れていた。

彼の傍らには黒い表紙の魔道書が宙を舞っている。

「主……。あのシードは……。」

「判っている。あれは……。憤怒だな。」

魔道書の言葉に、冷静に応える男。

そんな彼に牛の怪物は突進をしてくる。

男は手にしたデバイスから銃弾を連射するが、それで突進は止ま



らない。

しかし、それに慌てることなく銃を打ちながら突進をかわす。路地裏のビルの壁を碎きながら、怪物は立ち止まり再び突進。

とっさに男は右手から鎖を出現、踏み出そうとした片足を鎖で打ちすえ、バランスを崩した怪物は派手に地面を削りながら転倒する。「……今回、結界は展開されていない。早めに決めた方がいいか。」

男は手にした銃のデバイスを消す。

男の腰に鎖で拘束されたベルトが現れる。

ベルトとともに彼の左手を上にかざすと頭の上に赤と青の魔道陣。

足元には白と黒の魔道陣が現れていた。

「変身。」

その一言と共にベルトの中央部を拘束していた二本の鎖がはじけ飛び、紅い光を放ち、

足元と頭の上の二つの魔方陣を紅い鎖でつなげ、牢獄を作る。

神父がするような片手での略式の祈りの仕草で目の前で左から右、次に上から下と顔を

隠すかのように十字を切る。

その仕草に合わせるかのように足元の魔方陣が上へあがり、頭上の物は下がる。

二つの魔道陣が重なり、すれ違った中から現れたのは黒い殻に覆われた異形の魔王の姿。

魔道陣が身体をすべて通り過ぎたと同時に左手の爪を右から左へと薙ぎ彼を閉じ込めて

いる牢獄を打ち砕く。

砕かれ、紅い粒子となって消えていく鎖の中、魔王が降臨する。

「・・・お前に、魔王と言う名の恐怖を味あわせてやる。・・・冥土の土産にな。」

その言葉と共に、魔王ベルゼブブは歩き出す。それを怪物は得意の突進で迎え撃つ。

## 憤怒と暴走 前編（後書き）

・・・うう。変身シーンが難しかった。

テーマとしては魔法陣、十字、解かれた戒め、鎖と牢獄です。

咎人をテーマとして変身を考えてのですが、いかがでしょうかね？

あと・・・魔王なのにあまり魔法はつかってませんね。

仮面ライダーでもあるので、某大魔王のような不死鳥を飛ばしたり、無数の爆発する光の球を投げるなどのあまり派手なもの考え物ですし・・・。

派手な魔法を入れるべきか、それは控えるのか…意見ください！！

## 憤怒と暴走 中編（前書き）

・予想以上に文章量が多くなりすぎました。  
文章の量が多い割に・・・こっちは展開が遅いな。  
予定していたよりも話の数が増えそうです。

## 憤怒と暴走 中編

突進してきた牛の怪人。その突進をベルゼブブは紙一重で交わす。  
「ぐるおお!!」

それにもめげず再び突進。

紅いマフラーをはためかせながらベルゼブブは紙一重で、しかし  
余裕でかわす。

何度も突進するが、ベルゼブブの身体をその角が捉えることはな  
い。

そして・・・

「・・・いい加減に止めろ。」

懲りずに突進してきた牛の怪物を交わしながら、左足で鋭く足を  
払う。

鋭い足払いに牛は再び転倒。自身の突進の勢いのまま地面を転が  
る。

「さて・・・これで。」

「ぐるあっ!」

「む?」

起き上がった牛の怪物が剛腕を振るう。

それを片手で受け止めるベルゼブブだが、見た目以上の力に押さ  
れる。

「力だけはあるようだな。」

ベルゼブブはそう言って、力比べを瞬時に止める。

押し込んだ相手の力を腕を引く事で流れを逆に寄せ、そのままあ  
いての凄まじいまでの勢いと力を殺すことなく、上空へと投げ飛ば  
す。

巨体が宙に舞い、そのまま地面に落下。

その衝撃に地面は陥没。牛の怪物からも息が吐き出される。

「だが、力だけでは私は倒せ・・・ん?」

地面に叩きつけられた衝撃は怪物の巨体も合わさり、かなりの物のはずだ。

だが・・・怪物は何事も無かったかのように立ちあがる。

「・・・効いていない？」

ベルゼブブはその事に疑念を思いながら、拳を振るう。

その拳は怪物の胸部に命中。だが、怪物は微動だにしない。

「ぐるおおお！！」

怒りにまかせて腕をふるう怪物。それをかいくぐり、頭に、腹、腕に素早く拳を繰り出すベルゼブブ。

それでも相手にそれがきいた様子はない。

大ぶりの一撃を飛びながらかわし、怪物の頭に飛び回し蹴りをくらわせる。

まともに命中したはずなのに、怪物はベルゼブブの方に視線を固定したままだ。

「なっ？」

蹴りを繰り出した足を無造作につかむ怪物。ベルゼブブはそれを察し、とっさに腕つかまれた足に力を込め、もう片方の足を振り上げる。そしてその足を踵から怪物の腕に叩きつける。

「！？」

怪物は足を離す。痛みは感じなくても、衝撃は伝わるのだろう。その衝撃に足を手放してしまったのだ。

そしてベルゼブブは間合いを離す。彼の傍に魔道書が現れる。

「・・・気を付けてください。あれは・・・狂戦士バーサーカーになっています。」

狂戦士。それは怒りのあまりに正気を失い、対象が完全に破壊されるまで戦う狂いし戦士のことだ。厄介なのが正気を失っているがゆえに、見境いがない。そして痛みも感じなくなる上に、肉体のリミッターも解除されているゆえに凄まじい力を発揮するという点だ。

まさに、破壊の為の戦士。それが狂戦士。

「・・・よほど、強い憤怒をもっていたのだな。」

そんな相手を前に、哀れみの視線を向ける魔王。その視線の先で

は怒り狂う怪物の姿。

「せめて・・・ここで終わらせる。」

そう言って、彼が足元に魔道陣を展開させた瞬間だった。

彼の眼前にチーターの怪物が迫ってきたのだ。

展開を中断し、その爪を腕で受け止めるベルゼブブ。

「・・・もう一体いたのか。」

動きを止めたチーターの怪物に拳を繰り出そうとするベルゼブブ。その瞬間、チーターの怪物の姿が消え、拳が虚しく空を切る。

そして、チーターの怪物の爪がベルゼブブを襲う。

「ぐっ？」

素早く反応しきれなかったベルゼブブ。攻撃しようにも、された瞬間にはチーターの怪物はその場を離脱している。あまりにも早い動きに翻弄される。

「・・・いい加減に・・・止まれ。」

だが、ベルゼブブの左足が白い風を吹き出し、ベルゼブブの目が紅く光る。

そしてチーターの怪物が目にもとまらぬ速度で接近するのに合わせて、白い風を纏った風を振り抜く。

「ギャア!？」

白い風に加速され、目にも止まらぬ速度を得た回し蹴り。それをカウンター気味にくらったチーターの怪物は後ろに吹き飛ばされる。しかし、動きを止めていたベルゼブブを襲ったのは、凄まじい突進だった。

「ぐおっ？」

「ぐるおああああああ!!」  
後ろ怪物の凄まじいまでの突進。それに跳ね飛ばされるベルゼブブ。

ビルの壁に叩きつけられ、軽くうめき声が上げながら彼は立ち上がる。

改めて見てみるとチーターの怪物と牛の怪物が迫っていた。

「・・・こいつら、同じ憤怒を持っているのか。」

パワーとタフネスに優れた牛の怪物に、スピードと柔軟性に長けたチーターの怪物。この二体が組むのは敵から組むのは最悪に近い。―――仕方ない。少し派手なことになるが。

ベルゼブブが戦い方を切り替えようとしたときだった。

ベルゼブブの周りに無数の魔道陣が展開。その中から無数の人の形をした異形が浮かび上がるように出てきたのだ。

―――なんだ・・・こいつらは？

全身を鋼の色をした細身で、なおかつ無骨な装甲服のような物で身を包んでおり、頭は同じく無骨なヘルメットとバイザーが付いていた。手にはアサルトライフルのような火器を持っている。

現れた異形達は一斉にベルゼブブに向けて引き金を引く。

銃口から吐き出される無数の弾丸。

無数の銃口から一斉に吐き出されれば、それはまさに・・・弾丸の嵐と言うべき状態。

それがベルゼブブだけでなく、周りのアスファルトやビルの壁すらも削り、土ぼこりが舞い、その姿を隠す。

土埃であらかた見えなくなったところで異形達は撃つのをやめる。そして、その瞬間に彼は動き出していた。

突然飛んできた鎖が異形の内三体を薙ぎ払い、打ち砕いたのだ。

それに気づいた異形達が再び引き金を引くが、すでに土煙の中に彼はいなかった。

すでに彼らの目の前にいたのだから。

ベルゼブブの右手の爪が青い炎を上げる。

「ハイバイブネイル・・・ブルークラッシュュ!!」

青い炎による爪の一撃は爆発を伴い異形を六体、一撃で葬る。

そして、その異形の破片を見て、彼らの正体に軽く驚きをもらす。「命を感じなかったからおかしいと思っていたが・・・機械だったのか。」

爆発とともに飛び散る機械の部品。



仲間が二回の攻撃で半数近くやられた事に疑問も恐怖も覚えずに、淡々と引き金を引く異形の機械。

弾丸の雨をかくぐり、手にした爪で残った数体の機械の異形を切り裂いた。

——目的はあいつらを逃がす事か。してやられた。

そして、牛の怪物とチーターの怪物はその場から姿を消していた。

——仕方無い。この場合は……ん？

ベルゼブブは立ち去ろうとしたその時だった。彼の身体をオレンジ色の輪が巻きつき、その動きを封じた。

「うごかないで。」

それと同時に無数のオレンジのスフィアが彼の周りを囲む。

声の主が周りの風景から浮かび上がるように現れる。オレンジ色の髪の女性は気の強そうな視線と銃型のデバイス——クロスミラージユをベルゼブブへと向けていた。

彼女の名はティアナ・ランスタ―。時空管理局の執務管であった。

カウターはビルの屋上にため息をつきながら、隣に現れたメキスを見る。

「余計な真似とは言わないで置いてやる。」

カウターの後ろには牛の怪物とチーターの怪物の姿。

「それは光栄。こっちとしてもスレイブの性能を試してみたかったからな。別に礼はいらねえが……。」

メキスはため息をつく。スレイブ達は確かにカウターの作ったシードを逃がすための時間稼ぎにはなった。だが……それだけだ。

相手が悪いと言えはそれだけだが、あまりにもあっさりとやられていた。

「こりゃ……改良しねえといけねえな。」

「あいつはこれまでの闘いから推測するに接近戦が得意だ。接近戦対策に盾や近接武器、それに対応するソフトを用意すべきだと思うぞ。」

カウターもなんだかんだいって、その改良点をしてあげている。

「どうも。基本装備だけでなく、設計から考えなおさねとな・・・。」

メキスは色々と改良を検討しながらその場から姿を消す。

「・・・さて。仕切り直しだな。」

カウターが牛の怪物とチーターの怪物がいた方を見る。

そこには一人の大柄な男――ミノスと、パンクスーツを着た女性――ヘイスがいた。

男の眼には理性がなく、息が激しいがその場でじっとしている。

「ようやく五人目。まだ・・・まだいるわ。」

女性の方も理性こそはあるが、そこに言い知れぬ狂気がこもっている。

「今夜は一人で十分だろ？まだ・・・お前らの憤怒は始まったばかりだ。ゆっくりと、解放していけ。」

「ええ。そうさせてもらうわ。」

ヘイスの答えと共に、カウターその場から去っていく。

「・・・私達の憤怒は・・・まだこれからよ。」

「ぐおおおおおお・・・。」

帰宅途中だったティアナは地上局員の悲鳴の混じった無線にいち早く駆けつけていた。

いや、正確にはかけつけようとして、魔王と遭遇したと言った方がいい。

バイクを静かに止め、得意の幻術にてステルス状態になり怪物達の戦いの一部始終を見ていたのだ。

牛の怪物を投げ飛ばすベルゼブブ。そこに乱入してくるチーターの怪物。

そこに乱入してきた謎のロボット軍団。

それを難なく蹴散らしたベルゼブブ。

二体の怪物が逃げていた事を確かめ、気を抜いた瞬間に、彼女は動いた。

バインドで腕と手首、腿と脛と四重のバインドをかけ、動きを完全に封じたのだ。

「あなたが・・・都市伝説で有名な魔王なのね。」

彼女自身が想像していた以上に恐ろしい姿をした異形。

「あなたが私達と同じく言葉をしゃべるのは判っているわ。だから聞きたいの。最近あちこちで事件を起こしているあの怪物は何なの？そして、あなたがその怪物と戦う理由はなんなの？」

拘束したとはいえ、相手の力がどれほどの物かまったく判らない状況で、執務管として、事件の真相に迫ろうとするティアナ。

その問いに、軽く首を横に振るベルゼブブ。

「・・・・これは私の気まぐれから来る忠告だ。」

異形から聞こえてくる声は、人の声その物。

「シードにかかわるのは止めた方がいい。あれは人の罪の根源のようなものだ。あれをかかわる事すなわち・・・人の深い業とかかわることになるぞ。」

「シード？あの怪物のこと？人の業って・・・。」

問い直そうとした彼女だったが、彼を縛っていたバインドがいつの間に消えている事に気づく。

「――あれをどうやって？」

自由を取り戻すベルゼブブは言葉を続ける。

「人の業。すなわち、神の定めし七つの大罪。あれは・・・その中の憤怒。」

拘束を解いたベルゼブブはティアナの方へ足を一步踏み出す。周りのスフィアなど全く気にする様子も無い。

「本来なら・・・この事を忘れてもらうはずだったがこちらの決断が一步遅れたか。」

ベルゼブブの姿が蜃気楼のようにおぼろに消えていく。

「えっ？」

「先ほどは見事だった。気を抜いていたとはいえ、拘束されるまで気付かなかったぞ。先ほどの言葉はその研ぎ澄まされた幻術の冴えに対するこちらからの返礼。受け取るがいい。」

そんな言葉を残し、ベルゼブブは姿を消す。

——まさか幻影!?

あちこちを見回すが、音一つすら立っていない。

「・・・サーチも無駄ね。」

クロスミラーージュによるエリアサーチにも引っかからない。

「・・・ふう。仕方ないか・・・。」

ベルゼブブが姿を消すとともに、空から航空魔道士。道からパトカーがかけつけていた。

「報告は以上です。」

二時間後。

ティアナは地上本部で、先ほどの事件について彼女が魔王と遭遇した時の事を話していた。

「・・・七つの大罪・・・その中の憤怒ねえ。」

話を聞いて頷くのははやともう一人、フェイト・T・ハラオウン執務管だった。

「魔王も・・・案外おしゃべりやな。」

「・・・まあ、私の拘束した方法に深く感心したからです。幻術だと思破った時点で今度は同じ手がきくとは思えませんがね。」

ティアナは対峙した相手の実力の底知れなさに軽く身震いしていた。

今にして思えば、拘束されていたのにもかかわらず動揺しなかったのは置かれた状況にたいする自身の実力をよく判っていたからだろう。

大した脅威にならない。そのように魔王は判断したのだ。

「・・・でも、憤怒の怪物というその忠告、信憑性あるかもしれない。」

「フェイトはそう言いながら、ある映像を出す。そこには事件の被害者の写真。」

「襲われた車なんだけど・・・地上局員達が追っていた違法改造された車だったの。乗っていたのは、暴走族グループ・マッドマッハーズ。このミッドでも五本の指に入るほどの巨大なギャンググループで、犯罪組織との関係も噂されています。」

治安の悪化が問題となっているミッドチルダ。その一因としてこのギャングと犯罪組織が手を結び、抗争などが凶悪化しているというものもある。

「そして、その中の幹部の内、四人が昨日までに何者かの襲撃によって殺害されています。」

現れるのは殺害された四人と、その現場の映像。

いずれも車ごと真正面から押しつぶす、または鋭い爪のような物で身体を貫かれたり、切り裂かれたりすると言う手段で殺されている。

そして、目撃者は誰もいない。

その理由は簡単だった。

殺害現場にいた四人と一緒にいた仲間、通行人すらも一緒に殺されているのだ。

殺された人間は軽く二十は超えている。

「・・・これは・・・むごいですね。」

「・・・まってえな。この殺され方は・・・。」

殺害方法を見たはやてがその殺され方と今回の事件との共通点を見る。

「ええ。今鑑識に診てもらっていますが、おそらく・・・。」

この惨殺の犯人。それはティアナが目撃したという二体の怪物の可能性が高い。

ティアナがベルゼブブと戦っている二体の怪物の映像を出す。

「今回の事件も、109隊がマッドマッハーズの幹部一人を逮捕し

ようと追いかけていた矢先だったそうです。」

「逮捕？」

「ええ。一か月前、彼らは一人の少女を殺しています。」

彼女達は憤怒というキーワードから、事件の真相にたどり着こうとしていた。

## 憤怒と暴走 中編（後書き）

むう。今回は超シリアス。そして・・・管理局が警察役になってる！！！！

まるでアギトやクウガのような展開だのう。

個人的にはコメディ好きですが、なかなか書けない！！

テーマが重すぎたのかもしれない。

まあ・・・この事件の後に、ほのぼのとした日常を書くとしましようか。

あと、中編、後編にする予定でしたが、あまりにも増えてしまったので、後編から終結編へと一話増量します。

もっとコンパクトに、簡潔にしたほうがいいのかもれない。

意見があつたら、どんどん書いてください。

## 憤怒と暴走 後編（前書き）

ハイペースで書いてます！！

アイディアがわくわく。

書きたい話などがたくさんあるおかげですね。

さて…今回も皆さんに楽しんでもいただければ幸いです。



## 憤怒と暴走 後編

彼女は昼の街を歩いていた。

「・・・どこにいるの・・・。」

彼女の心を染めているのは憎しみと憤怒。

そしてその対象である人間達を探していた。

彼女の脳裏に浮かぶのは変わり果てた彼女の妹の姿。

それをやった犯人が誰か判っていた

でも・・・管理局はそれを逮捕することができなかったのだ。

彼女達は必死に彼らに詰め寄った。

愛しい妹をそんな目にあわせた奴らがのうのうとしている。

それが許せなかった。

でも・・・彼らは動かなかった。

あんな事をしでかした奴らは我がもの顔で暴走している。

それに・・・彼女達は憤怒した。

その憤怒が彼女に歩く力を与えていた。まるでろうそくのように命を憤怒の炎で燃やして力に変えている。

「どこに。」

彼女――ヘイズは街をさまよう。

獲物を狙う猫のような危険な目をサングラスで隠しながら。

そんな屍のように歩く彼女が誰かとぶつかり、彼女は倒れる。

「すっ・・・すみません。」

ぶつかった男は急いで彼女に駆け寄り、手を伸ばす。だが、彼女はその手を払い、何事も無かったかのように立ちあがり、歩き出す。  
「・・・あっ・・・あの？」

そんな彼女を見て、慌てて彼は追いかける。

「大丈夫・・・ですか？」

そして、男は話を駆ける。

「・・・・・・。」

「？怪我とかは？」

「何にか変な物でも？」

「・・・・・・。」

「ああ。そうか。こっちを無視しているのか。でもそれなら反応が返ってこないのは？」

「・・・・・・。」

「見えてますか？私の事見えてますか？？」

「・・・・・・いつ・・・・・・。」

「あっ・・・やっと反応。」

「いい加減にせんかああああああああああ！！！」

男のしつこさにヘイズが切れる。

「いい加減もうしつこくしつこく・・・・・・。」

そんなヘイズの反応を・・・

「すみませんでした。」

「いまさら謝って・・・・・・。」

「いや、今のと先ほどの含めてです。」

男の無茶苦茶な論理に頭を痛めるヘイズ。

「・・・・大体・・・・。」

そう言ったヘイズの言葉が止まったのはお腹の虫が鳴った身体。

—————そう言えば・・・最近・・・何も食べていない・・・。

それを自覚した瞬間、先ほどまで恐ろしいまでに浮かび上がっていた力が抜け、彼女はよろめき倒れそうになる、

そして、それをとっさに支えた男が笑顔で話しかける。

「ぶつかったお詫びと、失礼な振る舞いのお詫びを兼ねて・・・一緒にお昼でもどうですか？もちろん、こっちが奢りますので。」

そうやってきたのは銀色の長い髪にメガネをかけた男。

そしてヘイズはあいにく持ち合わせはなかった。

「あんた・・・名前は？」

「バーハルトです。できればそっちも名前を・・・。」

柔らかな笑みでの彼の問いに、ヘイズはぶっきらぼうに自分の名前を言った。

「・・・カオスだ。」

女性――ヘイズを食事に誘ったバーハルトは思わずそうつぶやいてしまった。

彼女はまるでむさぼるように食事と喰い散らかしている。

無我夢中で食べ続ける彼女はよほど飢えていたのだろう。

あまりにがさつですごい勢いの食べっぷりに周りの人達も引いている。

すでに、食器の数は十を超えている。

2人がいるのはバーハルトの行きつけの店。

古く小さな食堂ではあるが、彼はそこが大変お気に入りだった。

「はしたないくらいに・・・食べるねえ？」

そう声をかけたバーハルトに対して・・・ヘイズは食を止めて・・・きつい視線を送る。

「・・・はしたなくなったら・・・そんなに食べていいの？」

彼女の視線の先には床に綺麗に重ねられた食器。彼女が食べた量の三倍以上はある。

それを食べた人物は・・・言わなくてもいいだろう。

「まあ・・・これでもまだ八分目にもなっていない。」

食べた本人バーハルトは平然と言ったのける。

「・・・もう何も突っ込まないわ。」

ちなみに彼女が出された食事にがついているのを確認してから、彼は食事を始めていた。

横目で見ると綺麗に食べているように見える。そのはずなのだが・・・いざ蓋を開けてみると恐ろしい量を食べているのだ。

どのような食事の取り方をしているのか全くの不明だった。

「・・・まあ・・・ごちそうさま。」

食事をいただき、少し顔色のよくなった彼女を見て微笑むバーハルト。

この食堂がお気に入りなのは、おいしいのはもちろん、値段も手ごろなうえに量も多いので、それほど財布が痛まないのだ。

「・・・あんた結構高給なのね。」

「そうなのかな？」

食堂の人から来たらお得様なのは違いないのだが・・・それでも彼が来ると忙しい。それ故に彼は来ると決めた前日に時間も指定した上で電話しているのだ。

そうすれば、仕入れも十分に行える。

大食いを超え、巷の飲食街からは「暴食の君」と呼ばれる猛者になっっているのだが、その気配りはかなり細やかなので、飲食街からも大切なお得意様となって人気なのだ。

会計を済ませて店を出る二人。

その金額にヘイズが顔をひきつらせていたのは仕方のないことだ。

「ありがとう。またこのお返しはするわ。」

そう言いながら彼を別れようとするヘイズ。

そんな彼女の背に向けて彼は言った。

「まだ・・・間に合うよ。」

その言葉に、ヘイズは立ち止まってしまった。

「間にあうって・・・何が？」

少し固くなってしまった声。あまりの固さに声が震えてしまっている。

「それはあなた自身が良く判っている事だよ。」

話しかけてきた時と同じ柔らかい笑みのバーハルト。

だが、その言葉の重みは段違いだった。

「まだ・・・人であるあなたなら、まだ間に合う。」

「・・・」

「じゃあ・・・また会おう。」

そう言ってバーハルトが去ろうとした。  
今度はその背中に向けて彼女は問う。

「間にあうって・・・それっていつまで・・・？」

その言葉に彼は振り向きもせずに応える。

「あなたが・・・人である限り。後悔して、苦しむ事が出来る理性と心を持っている限りいくらでもやり直せるよ。」

その言葉を最後に彼は人ごみの中に姿を消していく。

「・・・あいつ・・・もしかして私のことを？」

彼女の問いに応える者はその場にはもう誰もいなかった。

「・・・行こうか。」

そう言ってその場から去ろうとした彼女。

その彼女の目の前に柄の悪い男がいた。

「あんた・・・ヘイズだな？」

「だとしたら？」

彼女の後ろに彼の仲間と思われる男が二人。ヨコからも2人。

彼女は五人の男に囲まれていた。

港の打ち捨てられた倉庫。管理者のいなくなったそこはギャング達の格好の隠れ家になっていた。

そして、そのギャング達にマッドマッハーズも例外ではなかった。

そこに五十人以上ものメンバーが集まっている。

「・・・やべえよ。」

集まっていたメンバーの一人が身体を震わせていた。

彼らの仲間、それもリーダー格である幹部とその仲間が無残に殺されているのだ。

その動揺は他の皆にも伝わっていく。

「びびってんじゃねえよ。」

そのボスである白髪の男——ガイが皆を叱咤する。

歳は二十前後。黒い革のジャケットとスラリとしながらも蛇や豹を思わせる筋肉質の身体。顔に小さな裂傷が付いているのが何よりの特徴だろう。

「あの事件の呪いだとぬかしている連中もいるようだな？」

彼の一睨みに周りのメンバーも静まりかえる。

「……あんな物はまやかした。今、こっちもコネを使ってこんなふざけた事をしている野郎どもを探している。大体……犯人の目星も付いているからな。そいつらを捕まえたら……」

そこまで言って彼が何をしたいのかよく判っていた。

「お前らはせいぜい、復讐されないように気をつけておけ。」

気だるさまで感じるそのふてふてしい態度。

「はい!!」

そこまで言って彼らのアジトに入ってくる者がいた。

「……あん？誰だあんた？」

入ってくるのはオレンジ色の髪をした気の強そうな女性——ティアナ。

その周りには二十名程の武装局員もいる。

「……管理局か。」

「ええ。私の名前はティアナ・ランスター。執務管よ。」

その名を来たガイがおかしそうに声をあげて笑う。

「おやおや。執務管様がわざわざこっちに来るなんて。でかい組織にしたとは思っていたが、ココまでとはな。」

「……アリガ・コースネット。」

ティアナの口から出た名前にメンバーの中の数人が動揺する。

「この名前に聞き覚え……あるわよね？ガイ・スコーディオン。」

「……さてな。」

ガイはその名前に特別な因縁がないようにふるまう。

それでも、ティアナは続ける。

「一か月前。彼女の死体が発見されたわ。無茶苦茶に凌辱された上

に、縄にぐるぐるに巻かれて引きずりまわされたという無残な姿でね。」

その声に微かだが怒りが含まれている。

「ほう。犯人は見つかったのか？」

「・・・・・・・・・・」

悔しげにティアナはガイを睨みつける。

「だよな。このままだと、迷宮入りになってしまふよなあ。」

ガイは不敵な笑みでティアナを睨みつける。

——絶対逮捕されないって自信あるみたいね。

ガイは管理局の上層部とコネがある。そのためにこの事件の首謀者だと思われても一執務管では捜査妨害などを受け、ヘタに手を出せない状態にある。

理不尽だと叫びたいところを堪え、彼女は要件を手短に応える。

「私がここに来たのは張り込みのためよ。」

「張り込みだあ？」

「あなたを狙う犯人を捕まえるために。」

その話を聞いたガイはまた声をあげて笑った。

「がははあはっ、それなら心配に及ばねえよ。ふざけた事をしてる相手に心当たりがあるんでな。こっちもメンバーの何人をそこに送っている。しかし・・・」

ガイはティアナが連れてきた武装局員の数に眉をひそめる。

「張り込みにしては・・・やけに大人数だな。」

「あなたの保護も兼ねているから。」

これでも不十分よとティアナが不満を漏らす。

「保護だ？なんで俺が保護されないと・・・」

ガイがそこまで言っ言葉を止めたのには理由があった。

「やっ・・・見つけたわ。」

歩いてきたのはヘイズ・コースネット。

その後ろには巨大な袋を担いだミノス・コースネットがいた。

「・・・嫌な予感がしていた。」

「——はい。あなたの虫の知らせは・・・一種の予知に近いくらいにあたりますから。」

黒いローブを纏った男が闇の街を走る。

ビルの上から上へ飛び越え、多少の差など飛び超えていた。

「——希少技能として、登録されてもいいのではないのでしょうか？」

「シャレにならないぞ。」

その姿は闇に紛れ、誰も見えない。

「空を飛べるのならもっと速いのだが・・・間にあうか・・・。」

彼の向う先は・・・港であった。

「さがしていた野郎どもがやってくるとはいいい度胸だな。」

ガイの合図で、周りのメンバーがパイプや魔法、違法とされる拳銃などを構える。

その中で、ティアナまでもがデバイスを構えていた。

「・・・なんで手が血まみれなの？」

ヘイズの手が血で汚れていたのだ。怪我をしている様子はない。

それに異質な物を敏感に察したのだ。

「簡単よ。」

そう言った彼女にメンバーの一人が鉄パイプで殴りかかる。

「ちよっ？」

鉄パイプは彼女の頭を寸分たがわず捉えた。

あたりに響く鈍い音。

「・・・もう、手遅れなのかもしれないわね。」

しかし、帰ってきたのは悲しみの声。

鉄パイプをまともに頭に受けて・・・彼女は無傷だったのだ。防御系の魔法を一切使っていないのにもかかわらず。



「ぐおおおおおおおおお！！」

ミノスが巨大な袋を放り投げ、雄叫びをあげる。

無造作に投げられた袋から現れたのは・・・五人の死体だった。

「なっ・・・に？」

それはガイが報復として送ったメンバーの中でも手だれの五人。

「ミノス・・・もう我慢の限界なのね。いいわ。」

その言葉と共に、ミノスは姿を変える。

牛の怪物へと。

「なっ・・・ななな・・・」

「人が・・・怪物に！？くっ・・・」

動揺する中、ティアナは己の予想が悪い意味であたっていた事に辟易していた。

ミノスへ一斉の攻撃を開始する皆。

だが・・・その程度でミノスは怯みもしない。

「ぐおおおおおおお！！」

ミノスが駆けだす。

それが・・・虐殺の合図になってしまった。武装局員とメンバーがそろって対抗するにも、彼を倒せない。それどころか次々と。

「・・・なんで・・・怒りがわいてこないのかしらね。」

一方、ヘイズの方は怪物の物へと変化した手を見て悲しみを浮かべていた。

目の前でミノスが起こす暴力。

それを見て喜悦の感情が出ない。

しかし、身体は反応する。

クロスミラージュをダガーモードにしたティアナと対峙したからだ。

——あの人・・・管理局員？しかも・・・執務官。

ティアナの胸に光るバッチそれは彼女がかつて訴えたときに対応した人と同じバッチを左胸に着けていたのだ。

「・・・・・・・・」

無言でヘイズも自身の姿をチーターの怪物へと変える。

飛んでくる無数のスフィアを避け、あるいは爪で切り落とし、瞬時にティアナに肉薄し、その爪で彼女を捉える。

だが・・・その爪は見事な空振り。彼女の姿が消えたのだ。

「・・・嗅覚で捉えるタイプではなくてよかったわ。」

姿を現すティアナ。さっきのは幻影。つまりおとりだったのだ。

「甘いわ。」

しかし、突き付けられた魔力刃をヘイズは素手でつかんで封じる。

「えっ？」

力を込めてもびくもしない。

「くっ・・・くう・・・。」

「・・・なんで。」

焦るティアナの耳にヘイズの声が届く。

「なんで・・・あいつを逮捕してくれなかったの？」

ヘイズは涙を流していた。流しながら・・・人の姿にもどっていた。

「なんで・・・あいつは私達の妹を殺しておいて・・・酷い事をして・・・平然とのさばっているのよ!!」

その言葉はまさに被害者の叫び。

「・・・ごめんなさい。」

ティアナはその叫びを・・・ただ受けることしかできなかった。

「やはり・・・あなたがこの事件の犯人だったのですね。」

危機的状況、ヘイズの爪がその気になれば一瞬でティアナを切り裂けると言う中だ。

ティアナはヘイズと向き合っていた。

「・・・ごめんなさい。私達の力が・・・及ばなくて・・・」

「いまさら謝られてももう・・・遅いわ。私・・・もう・・・化け物になっってしまったから。」

悲しそうに変身させた自分の爪を見るヘイズ。それはもう人からかけ離れている。

「もう・・・遅いのよ!!」

爪を振るうヘイズ。

それは吸い込まれるようにティアナの身体を切り裂くはずだった。でも、爪は彼女の身体に触れる直前で止まっていた。

「・・・なんで・・・よ。」

真っ直ぐにヘイズと向き合うティアナ。

その眼はとても澄んでいた。真っ直ぐ己のふがいなさを受け止めていた。

そして・・・涙を流していた。

「なんで・・・そんなに真っ直ぐに私を見れるのよ!!」

泣き崩れるヘイズ。

そんな彼女にティアナはクロスミラージュを引き、ティアナは言いきった。

「まだ・・・手遅れじゃない!」

その言葉はまっすぐだった。

真っ直ぐ過ぎてまぶしいくらいだった。

「だって・・・あなた・・・泣いているじゃない。涙を流せるじゃない! 心が痛いって叫べるじゃない!! 苦しむことができるじゃない!」

その言葉に顔を上げるヘイズ。それは涙でぐちゃぐちゃになったとても人間らしい彼女の素顔がある。

そんな彼女に向けて手を差し伸べるティアナ。

その手を取ろうとしたヘイズ。

だが、ヘイズの表情がすぐに驚愕に彩られる。

そして、いきなり彼女を突き飛ばしたのだ。

「えっ?」

驚くティアナの耳に入ってくるのは風を切る音。

そして・・・何か柔らかい物が貫かれたような嫌な破裂音。

「がっ・・・はっ・・・。」

起き上がったティアナが目にしたのは大人の腕ほどの太さがある

巨大なモリのような物で身体を貫かれ、そのまま壁に縫い付けられたヘイズの姿だった。

「……さすがに効いたか。」

してやっつたりの表情をしているのはガイ。

その隣には巨大なモリを発射する機械を持つロボットのような物がいた。

「自衛のためにアーマードってやつを買って正解だったぜ。」

「あんた……。」

「ぐううううう……。」

腹を貫かれながらも必死にもがくヘイズ。

「まだ死んでなかったのかよ化け物。」

その言葉と共に再び放たれるモリ。

それが彼女の右胸を貫く。

「がっ……あああああ……。」

それを見て……激昂したのが、ティアナだった。

三発目を放とうとしたガイの手に向けてスフィアを放ったのだ。

「……いい加減にしろさい！」

「なんだ？化け物をかばうっていうのか？」

ヘイズを化け物と言いきった彼に再び魔法を放とうとして、ティ

アナは二人の男に背後から捕まった。

「なっ……。」

「いいから大人しくしとけ。」

そう言っただけになったヘイズを見る。

口から血を吐き出し、傷口からおびただし血を流しながらも、ガイを睨みつける。

一人の人として強い光が宿った目。

「気に食わない目だ。失せろ化け物。」

彼の合図と共に放たれる巨大なモリ。

それが、彼女の左胸。つまり心臓を貫く。

派手な血しぶきが吹きあがる。

そして・・・それで彼女は力なく沈黙してしまった。

「流石に死んでくれたか。安心安心。」

そしてガイの視線はティアナに向けられる。

「さて・・・あんたをどうするか・・・このまま嗅ぎまわられるのも困るしな・・・。」

ガイが眼ざわりと判断したティアナをどうしようか考える。

「怪物騒ぎはごまかせねえ。だが、これを逆に利用して始末するのが常套・・・。」

ロクでもない事を考えていると思いティアナは密かにスフィアを出して、拘束している二人を倒そうとしていた。

「ヘイズズズズズウウウツツ!!」

そんな時、雄叫びをあげながら壁をぶち破って現れるミノス。

理性を無くしたはずの彼の眼に映ったのは三本のモリによって身体を貫かれ、壁に力なく縫い付けられているヘイズの姿。

それが何を意味しているのか・・・彼は判ってしまった。

「うおおおおおおおおおおおお!!」

判ってしまったから・・・最後の一線を越えてしまった。

「やかましい。あいつも片づけろ!!」

ミノスに向かってモリを数発連続で放つ。

そのモリは怪物と化したミノスに刺さる。だが・・・刺さっただけだった。

「なっ?」

「うおおおおおおおおおお!!!!」

雄叫びと共に全身に刺さったモリが飛び抜ける。

そして怪物と化したミノスの身体がさらに変わる。

身体の筋肉が膨張、そして黒く変色するとともに固くなっていく。眼は紅い光を放ち角も大きさを増している。

「やべえ。」

とっさにその場から逃げるガイ。

そのあとを追うミノスに向けて放たれるモリ。

しかし、そのモリはミノスに当たっては弾かれる。  
そのままその突進でモリを放っているアーマードを跳ね飛ばす。  
跳ね飛ばされたアーマードはそのまま動かなくなる。

彼の怒り狂った眼は逃げるガイに向けられていた。

「まずい。あんなのが街に来たら・・・。」

逃げまどうマッドマツハーズをよそにティアナはミノスを追う。

彼の暴走を止めるために。

壁に縫い付けられたままのヘイズを見て・・・ごめんと一言つぶやきながら。

誰もいなくなった部屋。

ヘイズはまだ意識があった。

でも、もう長くはない。そんな自覚もあったのだ。

———これも・・・天罰なのかな。

地面に横たわる事も無くそのまま消えようとしていた彼女の命。

しかし、彼女の身体が独りでに浮く。

———あっ・・・えっ？

すでに痛みや感覚すらも失った身体。視界だけが彼女の身体が地面に横たわった事を教えてくれる。

「・・・遅かったか・・・。」

彼女の視界に映ったのは黒いローブをまとった見知った男。

「あんた・・・なんでここにいるの？」

「虫の知らせってやつだ。でも・・・間に合わない事も多い。」

ローブをとって、男は素顔を見せた。

銀色の髪に黒い枝のような眉毛をしたメガネの男——バーハルトだった。

彼は優しい笑みで今際のヘイズを見ていた。

「・・・もう・・・手遅れだった。私は・・・化け物。」

「そうなのか？俺にはそうは見えない。」

部屋の状況を見る。

大きな血を流しているのは彼女だけだったのだ。

「遅れてしまったけど・・・手遅れってわけではなかったよ。」

「そう・・・なの？」

「君は怪物じゃない。憎しみと怒りに支配された怪物じゃない。君は・・・人間だ。」

その言葉が彼女の心の中に入り込んでいく。乾いて干からびてひび割れた心に降り注ぐ恵みの雨のごとく、彼女の心に沁み込み、潤していく。

「ありが・・・とう。ありが・・・とう。」

その潤いは涙となって彼女の頬を伝う。

そんな二人のやりとりが無粋な真似をしようとする者がいた。

先ほどミノスに弾き飛ばされたアーマードだ。

壊れているらしく、あちこち破損しながらモリを二人に向けていたのだ。

それを見たヘイズは表情を懸命に危険を訴えようとする。力が全く入らない、すでに命尽きかけている身体で助けようとする。

でも、その必要はなかった。

バーハルトが右腕を振るうと同時に、蒼い炎に包まれた鎖が延ばされそのままアーマードを打ちすえたのだ。

凄まじい衝撃にアーマードは完全に壊れてしまい、爆発する。

ヘイズはバーハルトの出した鎖を見て軽く驚く。

そして・・・同時に納得もする。

「そうか・・・あなたが魔王だったんだ・・・。」  
すべて納得した。

彼はすべて知っていた。彼女が怪物で、誰を狙っていたというのもすべて。

その上で食事に誘って警告してくれたのだ。

「・・・食事はおいしかったか。」

「ええ。眼がさめるくらいにおいしかったわ。曇っていた心が綺麗

に晴れるくらいに。」

「それはよかった。」

そう言って、彼は表情を引き締める。

「あなたの弟は私が責任を持って終わらせる。もう・・・それしか。」  
そんな彼にヘイズは微笑みと共に軽く首を横に振るう。

「わかった。だから・・・安心して眠ってくれ。」

「ええ・・・。ゆっくり・・・寝させてもらうわ。ゆっくり・・・と。」

」

そう言って・・・彼女は眼を閉じる。安らかな笑みで。

そんな彼女を悲しそうな笑みで見送り彼は立ち上がる。

彼の腰に出現するベルト。

そして・・・上下に魔道陣が展開した。

「・・・変身。」

ベルトの封印が解け、魔道陣が紅い鎖につながれ引き寄せられる。  
中から現れるのは黒の異形の魔王ベルゼブブ。

十字を切ると同時に、彼の身体を囲っていた牢獄は破壊される。

彼の赤い複眼はヘイズを見ていた。

「せめて・・・人として安らかに眠ってくれ。怪物の相手は・・・怪物  
が引き受ける。」

異形の魔王が今・・・動き出す。



## 憤怒と暴走 後編（後書き）

さて・・・予想通りだと思いますがようやくライダーの正体を公開です。

プロローグに当たること話がかかなり長くなってしまったのが反省です。

次でこの事件は幕を閉じます。

この事件のテーマにもあるようにこの話と通した敵やライダーのテーマは二つ。一つは異形の怪物となった身と心、または魂。もうひとつが・・・罪です。

かなり重いテーマです。

今回は事件の悲惨さも相まって・・・結構シリアスになってしまいました。

ですが・・・もう少しお付き合いください。

終わった後に少しはコミカルな日常編を挟もうと思いますので。

あと、執務官ツて弁護士や検察のようなバッチをつけているものなのでしょうか？もしそうでしたら・・・教えてください。修正をかけますので。

## 憤怒と暴走 完結編（前書き）

・・・勢いで書きました。

悲しい事件・・・ここにて完結させようと思います。

## 憤怒と暴走 完結編

ガイは車で逃走していた。

「くっ・・・あんな化け物・・・相手にしてられるか!!」

その速度は決して遅くない。

そのはずなのだが・・・。

「ぐがおおおおおおおお!!」

怪物と化したミノスの突進の速度はその車に迫る勢いだったのだ。怪物の怒りは完全にガイに向けられている。

邪魔する者を全部吹き飛ばしながら、ガイを追っている。

それがごみ箱だけでなく、車すらも跳ね飛ばして・・・。

そのミノスの後を追っているのはティアナ。

愛用のバイクにまたがり、ミノスを追っていた。

「・・・なんて速さ。これじゃあ・・・まずい。」

ミノスの突進はさながら道で装甲列車が暴走しているようなものだった。

彼女の後を追って、武装隊員も空を飛んでいる。

その数が半分以上に減っている。

「――すみません・・・負傷者がたくさんいます。」

マッドマッハーズのアジトでの戦闘で、メンバーの多数をミノスは殺害している。

あらかじめミノスと言う怪物の特徴を聞き、対応を考えていた武装局員達も命までは落としていないが、負傷した者が多数出てしまったのだ。

「――しかたないわよ。この場合は生きていなくてもうけ物と考えるべきだわ。アジトの現場引き継ぎを誰かに・・・」

「――緊急事態!!」

ティアナ達の念話に割り込むのはアジトに残った武装局員の姿。  
「――第三の怪物がアジトに出現。そっちに向かって飛んで行き

ました。

第三の怪物。その存在に心当たりあるのかティアナがその特徴を問う。

——はい……。報告にあった黒い蟲のような怪物。通称——魔王と呼ばれている。

そこまで、ティアナは気付いた。

すべてを薙ぎ払い暴走を続けるミノスの背中に向けて上空から突進してくる黒い影。

「嘘……」

そして、その影がミノスの背中を踏みつけるように蹴りを放つ。

「ぐおおお!？」

突進のために前かがみになっていたミノスはその勢いのまま前のめりに転ぶ。そして突進の勢いそのままに道路を激しく削りながら滑っていく。そのミノスの背中の上には蹴りを放った黒い影が乗っており、さながらスケートボードのようにその勢いを殺すようにミノスを横滑りにする。

そして、止まる直前に両手から鎖を出し、それを左右の壁に打ち付け、軽く上に飛んでミノスの上から降りる。

「……派手な……登場ね。」

あまりに派手な登場に、ティアナ達は立ち止まって唾然となる。

「我は暴食を司る者。」

鎖をしまいながら黒き影はミノスを見据えていた。

「我は冥府を司る者」

ミノスは怒りと共に起き上がる。

「我喰らうはこの世の毒。身勝手な欲と言う名の愚かしくも浅ましい物にまみれた罪と穢れ。そして……今宵は止まらぬ憤怒をいただくでしょう。」

ミノスは激しい怒りに向け、赤く光っている瞳で……涙が光っていた。

そして黒い影は……その怒りを真っ直ぐに受け止めていた。

「今宵の毒は・・・かなり苦い味がするようだな。」

黒い影の言葉に皆は聞き入っていた。

「我は・・・魔王・・・ベブゼブブ。お前の憤怒を喰らう者。」  
魔王の名乗り。

「さあ・・・お前に魔王と言う名の恐怖を味あわせてやる。」

それ共に発せられる威圧にミノスは少したじろぐ。

「冥土の・・・土産にな。」

そう言って、ミノスにゆっくりと迫るベブゼブブ。

それを見てミノスは突進を繰り出す。

前回よりもさらに威力とスピードが増した突進。

「封を解くは蒼き魔炎の斧。」

それを迎え撃つのは魔王の右拳。

彼の右手の鎖が解き放たれ、右拳が斧となる。

蒼い炎を纏った右拳の斧を突進に合わせてミノスに叩き込む。

「ぐるおっ!？」

蒼い爆発共に吹き飛ばされるミノス。斧の一撃に、胸のところに大きな裂傷ができ、そこから血が噴き出している。

「流石にこれくらいでは倒れないか。」

ミノスが怒りと共に大地を踏む。

それと共に大地に亀裂を走らせながら衝撃が走ってきた。

「・・・深紅の血盾。」

その衝撃を受けとめたのは左手に出現した赤い血のような巨大な盾。

その盾に向かって殴りかかるミノス。

「砕。」

しかし、砕けた盾がまるでガラスのように鋭い破片となってミノスに襲いかかる。

「があああああああ!」

全身を切り刻まれながらも、ミノスは止まらない。

「・・・白き衝撃。」

その彼の足を止めるのは白い暴風のような衝撃。

立ち止まった彼に左拳を赤く染めながら素早く迫るベルゼブブ。

ミノスもそれに応じて殴りかかるが、その姿が一瞬にして消える。

素早く上に飛んだベルゼブブは左拳を繰り出し、ミノスをよろめかせ、右、左とに二連続の飛び回し蹴りを叩き込む。

よろよろと後退するミノス。その間に右手には蒼い炎が集束。

「蒼い砲牙。」

そこに迫り打ちとして、素早く接近右手の蒼い炎を開放、斜め上気味に砲撃として放つ。

ミノスを宙に浮かせながらその巨体を全部飲み込む程の太さの蒼い炎の砲撃。

射程その物は短くしてあるのか、百メートルまでで炎が止まる。

砲撃は五秒ほどで終わり、打ち上げられたミノスが地面に落ちる。

「ぐっ・・・があああああああああ・・・。」

全身を焦がしながらも立ち上がろうとするミノス。肉体の破損が大きく、動きがぎこちないはずなのだが、その怒りはまだ・・・おさまらない。

「・・・そろそろ・・・終焉の時間だ。」

ベルゼブブの言葉と共に彼の右足から黒い電撃が走る。

「せめてもの手向けだ。本気の一撃で終わらせる。」

彼の言葉と共にミノスの身体を地面から出た無数の鎖が拘束する。

「ぐあああああああ！！」

それを無理やり引きちぎろうとするミノス。あまりの力に鎖が一本ちぎれてしまう。

「戒めを解くは黒き稲妻の槌。」

ベルゼブブの右足の拘束が解け、左右にスライドする。

スライドした中から現れるのは黒い稲妻を放つ三つの宝玉。

彼の足元には赤ではなく黒い魔道陣が現れる。

「我が右足に宿る鎚はすべてを打ち砕く物。」

その言葉と共にミノスの上空に現れる黒い魔道陣。

同時にミノスの身体を重圧が襲いかかる。

「うがあああああああ!!?」

その重さにミノスの身体が道路に陥没、結果として大地に縫い付けられる格好になる。

「無限に増す重さと、その硬さ、蝕む黒き雷にてすべてを打ち砕く。魔神殺しの鉄鎚。」

動きを封じられたミノス。そのミノスに向かって魔王は言った。

「その一撃を・・・受けるがいい。」

魔王はマフラーを蟲の羽に変えて飛ぶ。

そして・・・黒い電撃に覆われ、魔神殺しの鎚とかした右足を軸にして宙を舞う。

赤く染まった月を背に、重さを増して右足から突撃していく魔王。

その一撃はミノスに重圧をかけていた黒い魔道陣を貫き、ミノスの身体を地面に縫い付け、その衝撃は地面にも伝わり、その余波で地面が大きく抉れた。

「が・・・はっ・・・!!?」

地面にできた巨大なクレーター。その大きさは四車線の道路すべてに広がり、一番深い所で巨体を誇るミノスが完全に隠れるほどの深さがある。

そして、破壊されたミノス身体に現れる黒い魔道陣。

ベルゼブブは後ろに飛び退き、クレーターの外からミノスを見据える。

「ミヨッルミル・クラッシュ。これがお前を葬った技の名前だ。我が名と共に覚えておけ。」

怒りがまだ冷めないのか、声も出せぬほどに破壊された身体で涙を流しながら懸命にもがくミノス。だが・黒い魔道陣から上がる稲妻がミノスの身体を蝕み、最後の時を告げる。

その姿に言葉を少し詰まらせながら、魔王は告げる。最後の言葉を。

「もう・いい。お前の憤怒はもう終わりだ。後はこっちが引き受ける。だから・無駄なあがきなどせず・・・もう・眠れ・」

魔王が背を向けると同時に、ミノスの身体が爆発。その爆発はクレーターの全てを覆い隠す程の巨大な物だった。

あまりに圧倒的で・そして、悲しい戦いだった。

ティアナがベルゼブブの戦いを見て思った素直な感想がそれだ。

「・・・」

黙ってたたずむベルゼブブ。その体がある方を見る。

「・・・助かったぜ。」

そこには爆発を見て引き返してきたガイの姿があった。

今回の事件の発端となった人物。その人間がのうのうとしている。

ティアナがそれに憤りを隠せない。

だが、それはどうも魔王もおなじようだった。

ガイに向かって歩き出すベルゼブブ。



「えっ？ なっ・・・なんだこいつ？」

その眼は・・・紅く光っていた。

————まさか・・・怒っている？

全身から凄まじい怒気を隠そうともせずあらわにしているベルゼブブ。

その怒気にティアナだけでなく、周りの人間全てが身体を震わせていた。

慌てて逃げようとするガイ。

だが、その車は動かない。

「くっ・・・鎖？」

地面から現れた鎖がガイの車を拘束し、動けないようにしていたのだ。

車が駄目だと悟り、走って逃げようとするガイ。

その体をベルゼブブの右指から飛ばした鎖が捉えた。

「えっ・・・ちよっ・・・うあああああああ。」

ベルゼブブの方へと引き寄せられるガイ。

そして、凄まじい怒気を発しているベルゼブブとガイが対峙する事になった。

「ガイと言う名だったな。あいつ——ミノスの最後を・・・お前は見たか？」

「・・・・・・・・・・。」

「人は・・・誰しもが罪を犯す。大なり小なりな。それは・・・生きている上で仕方のない事だ。心で思ってしまう事は仕方ない事同じくな。」

ベルゼブブの手がガイの身体をつかみその身を軽々と持ち上げる。

「だが・・・お前がしたのは・・・大罪以上の罪。己の欲のままに奪い、壊し、心を、絆を踏みにじった。許しがたい罪を・・・お前は悦楽として行った。今回の事件はお前の自業自得としか言えない。何しろお前が巻いた憤怒の種だからな。」

「ひっ・・・・・・・・ひ・・・・・・・・。」

「あまりに外道。お前を殺してやりたいところだが・・我は罪深き存在。この場でお前を殺してしまえば、あの二人を止めた意味がなくなる。それに外道を手にかけるほど落ちぶれた手をしていないのでな。」

そして、ベルゼブブはガイをゴミのようにその場に放り出す。

「だが・・・今度そんな真似をしてみろ・・・我が直々にお前の罪を・・・喰らいに行くぞ!!」

その言葉と共に地面に叩きつけられた右手の鎖は大きく道路を打ち砕き、大きな亀裂を起こしていた。そんな物を叩きつけられた日には人間など・・原型も留めていない。

「ひっ・・ひい・・・・。」

あまりの恐怖に失禁しながらへたり込むガイ。

「・・・願うは、お前が自身の罪と向き合う事を・・。」

そう言って、その場から黙って去ろうとする魔王。

「待って!」

その背に声をかけたのはティアナだった。

ゆっくりと振り向く魔王に声をかけたのはいいが、どうすればいいのか分からなくなっているティアナ。

そんな彼女にベルゼブブは告げる。

「・・・お前に頼みがある。ヘイズを・・・彼女を人として・・葬ってくれ。」

「えっ?」

「あいつは人として死ねた。だから・・人として・・。我のような怪物ではなく、人として静かに葬ってくれ。弟は・・もう遺骸はない故に・・な。」

その言葉に頷くティアナに満足したのか、魔王——ベルゼブブはその場を去る。

「頼むぞ。」

それをその場にいた誰もが追おうとはしなかった。ただ・・・その背中を見送るだけだった。

街を見回せるビルの上・・・そこにバーハルトは変身を解いて座っていた。

彼の眼には広がるミッドチルダの大都市の明かりがある。

「なあ・・・ヘル。」

「なんででしょうか？」

ヘルと呼ばれし魔道書は主の言葉に応える。

「人は・・・なぜこんなにも罪深い。」

「・・・。。。。。」

バーハルトの言葉にヘルも答えられない。

「この事件の発端となったあの人の罪・・・想像以上に重すぎる。」

「・・・まさか、右指の鎖の力で？」

彼の右指の鎖。それには相手の記憶を読み取る力が備わっている。そして、それは人だけでなくパソコンなどのデータも読み取れ、そして書き換える力もあるのだ。

「でも・・・罪を犯すのが人なら・・・それを止めるのも、赦すのも人です。それ故に、主も止めたのでしょうか？あの二人を・・・。」

「・・・ああ。」

バーハルトは立ち上がる。

「最近、奴らの動きが派手になっている。おかげで管理局も無視できなくらいに。」

「今回の事件・・・かなりの被害がでてしまいましたからね。」

彼らはいくまでも闇から彼らを狩っていた。管理局にもばれることなく密かに。

だが、もうそれはできない。彼らもシードと呼ばれる怪物、そして魔王——ベルゼブブの存在を認知してしまったからだ。

「・・・やることは変わらない。だが・・・どうなっていくのかは全く判らないな。」

「ええ。私も心配しております。」

深々とため息をついたバーハルトは言う。

「……カオスだ。」

その嘆きは誰にも届かず、都市の暗い闇に消えていった。

シードと呼ばれし怪物。その被害は絶大なものだった。

管理局の中で初めて公開された映像は彼らの脅威を知らしめるのに十分だった。

そして、それきっかけとして水面下で計画されていた二つの計画が本格的に動き出す。

一つはパラディン計画。

もう一つが・・エンジェル計画。

そして・・エンジェル計画の中に一人の名前が挙がっていた。

その名はガイ・スコーディオン。その計画の装着者の一人として選ばれていた。

バーハルトの言った混沌がミッドチルダで吹き荒れようとしていた。

## 憤怒と暴走 完結編（後書き）

・・・ガイというキャラはなかなかヒールとして使いやすそうとして・・・今後も話に絡ませてもらうことにしました！！

私も書いていてかなり腹の立つキャラだと思いましたが、ゆえに使いやすい。

賛否両論があると思いますが、また意見をいただければ幸いです。次は魔王の日常と、新キャラを登場させようと思います。

そのあと・・・また大事件を起こそうと思いますのでよろしく願います！

## 暴食の魔王達の日常（前書き）

魔王がなぜ複数形か？

その理由は読んでみればわかります。

まあ・・タイトルがうまく合えばいいのですがね。

## 暴食の魔王達の日常

眩い朝の中・・・銀色の髪の男はすやすやと眠りに入っていた。  
頭の左右には角。額には第三の目がある異形の姿だ。

目覚ましが鳴るが・・・そんなの無視して一向に眠り続けている。

「主・・・起きてください。」

そんな彼に向って起こしに来たのは一冊の魔道書。

本の身で必死に彼を揺さぶっているのは中々シユールだ。

「・・・まあ、こんなので起きてくれたら苦労しませんか。」

魔道書——ヘルはいつもの事ゆえに慌てない。

「さて・・・今回のメニューは何にしましょうかね。」

彼女の前で幾つかの選択肢が示される。

「うん。今度は新しい趣向にしましょう。」

そして、先ほど思い付いた叩き起こしメニューを実行。

それは・・・。

某世界の馬鹿達の投稿ビデオに出てきた物でロシアの学生による  
荒いドッキリの中の一つを参考にしたのだ。

バーハルトの耳にヘッドホンを装着。

音量の設定はもちろん最大。

流す音楽は・・・ヘビーメタル！！いや・・・ある意味デスメタル  
と言ってもいい！！

「ミュージック・・・スタート?!」

『|||||!!?!?jをええ!!!!!!!!!!?!?』

いたずら目いたヘルの事共に激しいという言葉では物足りないくらい  
の破壊的な音楽が最大音量、しかもバーハルトの耳元で炸裂する。

「ぐああられVべえれ!？」

訳も判らない声とけいれんを起こしながら飛び起きるバーハルト。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・。」

その息はとつても荒い。

「いや・・・やっと起きました。おはようございます主さ・・・ま？」

そして、彼は無言でヘルをつかむ。

彼の目からハイライトが消えている。

「何度も・・・何度もいうがな・・・。」

軽く怒りをあらわにしている男。

「もっと普通に起こせというところだろうが!このたわけもののがあああああああああつああああ!!」

この家の主であるバーハルトの朝は毎日このように始まっている。

「・・・おかげで一発で目が覚めわ。危うく、永遠の眠りになるところだったがな。」

「あれくらいいしないと・・・主さま眼をさませんよ。」

「・・・むう・・・そんなに目を覚まさないのか？」

少し不機嫌ながらもヘルからトーストを受けるバーハルト。

「もっと焼きますか？」

「そうだな・・・。まあ・・・今日はこんな物にしておくよ。」

そう言ってトーストを口にするバーハルト。本日・・・厚切り三十枚目である。

「いつもより十枚少ないですね？」

「・・・新しいマーガリンが予想以上にこってりしたからな。こんな物で十分だ。」

そう言ってトーストを食べ終え、牛乳（一リットル紙パックにして四本目）を飲み干す。

「サラダもかなり食べたし・・・まあお昼は二口分で十分だろう。」  
空になったサラダボール（レタス一玉、トマト大三つ、玉ねぎ三つ・ゆで卵十個など・・・）



「サンドイッチはつくっているのですね。」

「ああ。その方が楽だからな。」

二口分のお昼のサンドイッチ、〔四十×十五センチほどの長さのパンにレタス、厚みのあるベーコン、チーズなどの具がびっしり〕

「ごちそうさまです。」

「お粗末さまですって、主が作っているのですから問題はないですよね。」

バーハルトは言いながら、バンダナを額に巻く。すると彼の左右の角が無くなっていく。

「そうだな。じゃあ、いつてくる。」

そう言って、バーハルトは今日も出勤する。彼が住んでいるのはミッドチルダ郊外の森の中にある。古びた大きな屋敷。部屋ならいくらでも余っているありさまだ。

ちなみに朝食、および持っていく昼食について突っ込んでくれる者は誰もいない。

ティアナは一つの墓の前にいた。

「……ごめんなさい。あなたの無念……まだ晴らせていないわ。」

そこに書かれている名前はヘイズ。そしてミノスとアリガの名前もある。

「でも……あの魔王が少しは晴らしてくれた。そして、その魔王が私にあなたをこうやって人として吊ってくれて。まあ……弟さんの全てとはいかないけど……折れた角みたいのはあったから、それを遺骨代わりにして妹と一緒にしたわ。」

ティアナが花を手向け、冥福をささげる。

彼女は事件の被害者として埋葬されている。人として吊うための措置。

シードとしてのサンプルとしていくつか持っていくことは止めら

れなかったが、それでもこうやって弔う事が出来たのだ。

「・・・じゃあね。私もがんばる。」

ティアナは執務管になってから色々な凶悪事件にかかわってきた。その中には相棒に裏切られるという手痛い思いもしている。

でも、それらをすべて力に変えて彼女は前に進んでいる。

墓地から出たら、彼女の親友がそこにはいた。

「ティア、もう終わった？」

彼女の名前はスバル・ナカジマ。

訓練校から機動六課まで一緒にいた相棒にして、今でも付き合いのある彼女の親友。

「うん。」

現在スバルはレスキュー隊に所属しており、ミッドで起きた怪物騒ぎも知っていた。

「悲しい事件だったわ。今回は私も止められなかった。」

「止めたのって・・・噂の魔王？」

ティアナはその言葉に頷く。

「多分・・・優しい魔王。」

「優しい・・・魔王？」

「私の個人的な見解だけどね。」

優しい魔王なんているのだろうか？スバルの疑問に苦笑いを浮かべるしかないティアナ。

「それより今日ご飯食べにいこ。」

「うん。そう言えば一緒に来るって言っていたあなたの後輩は？」

「・・・ええと・・・」

今回は彼女達2人だけではない。お別れ会を兼ねて、異動する親しい後輩をスバルが誘っていたのだ。

スバルがその後輩の姿を探していた時だった。

道路を横切る猫。

それを男の子が追いかけていたのだ。

そして・・・それに気づかずトラックが突き進む。

「あれって・・・不味いじゃないの!？」

ティアナの言葉と同時にスバルは走り出していた。

相棒であるスケートローラー型のデバイス、マッハキャリバーを出しながら。

でも・・・間に合うかどうか判らない。

何しろトラックは一向にスピードを落としていなかったからだ。

トラックに気付き立ち止まってしまう男の子と猫。

トラックがようやく子供に気付き、あまりにも遅すぎるブレーキを踏むと同時だった。

トラックの前を横切るように何かが通り過ぎ、子供と猫を助けたのだ。

「えっ？」

その光景に啞然となるティアナ。

スバルの方は安堵のため息をつきながらその彼を見る。

「ディーノ君!遅刻の上に危ない真似をしない!!」

その彼は癖の強いぼさぼさの黒髪に野性味と同時に人懐っこい笑みをした少し小柄な十代後半の青年。まるで人懐っこいラブラドルなどの大型犬を思わせる彼だ。

「すみませんでした!!でも・・・要救助者は無事です!!」

サムスアップをするディーノの腕には啞然としている子供と猫がいた。

彼は子供と猫を下ろし、よく言ってい聞かせる。

「危ない真似はするなよ。ちゃんと道を渡るときは左右確認して無事だと確認するようにね、出ないとほら・・・トラックを運転していたおじさんも心配してこっちに来ちゃった。」

その言葉に子供と猫はそろってトラックを見る。そして同時に納得したようにそろって頷く。

トラックを止め、慌ててかけよる運転手。

その彼にもディーノはため息をつきながら色々と注意を言っ聞かす。

その時栄養ドリンクとコーヒーを渡してあげた時には運転手は涙を流していたようだ。

場所は変わって、ティアナはディーノがスバルの仲のいい後輩であるという理由をまざまざと見せつけられていた。

「そう言えば・・いつも一緒にいる相棒はどうしたの？」

「この地区のみんなにあいさつ回りがしたいって言ってな。出払っているんだ。」

「・・相棒ってデバイスじゃないの？」

ティアナは顔をひきつらせながら質問する。

「いんや。アギトやリインみたいな可愛い妖精だよ。」

「妖精って・・まさか融合騎？っていうか・・一つ言ってもいい？」

『何？』

2人は声を綺麗にそろえる。

「あんたら・・・どんだけ食うのよ！」

ティアナはスバルがたくさん食べるのは知っていた。長い付き合いなので、もうその光景にもなれたはずだった。

だが・・その後輩までもが同じくらいの食欲を誇っているとしたら話はべつだろう。

すでに二人で、五十人分くらいは食べている。

ティアナが厨房を見ると・・・色が抜け、真っ白になったコックたちの哀れな姿。

この二人の無茶苦茶な量に振り回され、悲鳴を上げ、弄ばれた哀れな姿。

さすがにティアナもこれにはひきつった。

「じゃあ今度はこれをもう十人前頼みましょうか！？これもおいしかったし・・全部頼んじゃえ？」

「おう。ガンガン行くぜ！！」

その言葉に死の宣告を受けたかのように悲痛な表情を受ける真っ白なコック達。もう・彼らの笑いは乾き切っており、感情は愚か、魂も、力も残っていない。

「あんたらしい加減にやめなさい!!」

ティアナがストップをかけたのは、当然のことであった。

『まだ腹八分目にも鳴っていないのに!!』

二人のその返答に絶叫したくなったティアナがいたのはまた別の話である。

バーハルトもそのころお昼をとっていた。

特大のサンドイッチを味わいながら、ゆっくりと・・なのになり早く食べ終わる。

「はっ・・はははははっ・・・。」

その光景に、ユーノも顔をひきつらせる。

他の司書仲間もだ。

「相変わらず健啖家。」

それを見たバーハルトは顔を赤らめる。

「いえ・・・。お恥ずかしい限りで。」

「まあ・君が子供のころからそうだったし。」

ユーノの言葉にバーハルトも懐かしそうに目を細める。

「記憶喪失の私を拾ってくれた事・・今でも感謝しています。」

「それはスクライア部族全員にも言ってほしいよ。」

2人は初めて出会った時の事を思い出していた。

久しぶりに部族の元をおとずれたユーノは記憶喪失の少年と出会った。

銀色の髪と変わった眉毛。彼の頭の両脇には角が生えており、そして・・額には三つ目の眼を持っていた。

「我の名前・・覚えていない。」

彼が見つかったとされる遺跡のカプセル。そこに刻まれたBAと

アルファベット。そこから先はユーノがスキャンをしてもその部分ごと削られており判らなかった。

だから・・ユーノはそのアルファベットから名前を付けたのだ。バーハルトと。

姓は孤児であったユーノと同じくアルファベットに

「額の眼と角は・・相変わらずバンダナで隠しているのか。」

「はい。ばれたら色々と不都合ですから。」

いつも付けているバンダナをとると、そこには何もない額。だが・

・  
・  
魔法陣と共に戒めが解かれるとそこには三つ目の眼が存在していた。

頭の左右には角も出ている。

「・・・隠すの大変だね。」

角と額の眼はふだんはバンダナで封印している。生まれつき備わった異形の物だが、それをみんなに見せて驚かせるわけにはいかないのだ。

「角そのものは出し入れができるんですよ。でも・・まあ、万が一の事がありますので。」

バンダナ無しで角を消して見せる彼。

「ユーノさんには感謝してます。司書としての仕事を紹介してください。」

「いいよ。元々君は僕よりも頭が良かったし、僕からしたらいい人材をコネで獲得できたと思うているくらいだよ。」

その眼の力に関してユーノはよくわかっていない。ただ・・彼自身が見つかった遺跡が古代ベルカの墜落した船の中だったというのが不確定要素。

そこから、彼がどこかの国の王族・・または戦争の為に生み出された存在と言う可能性が高いとみている。

その一端なのかもしれないが、彼の魔力は・・途方も無く高い。戦いを好まないバーハルトから、計測は断られているが、軽く見てもオーバーSはくだらない。

「ユーノさんちよつと・・・ってうわっ!？」

そんな二人に話しかけようとしたアガリアがバーハルトを見て驚く。

「って・・頼むから全開の状態は止めてくれ。」

「ああ・・すまない。でも・・この姿もいい加減見慣れただろ?」

「まあ・・何度見ても驚いてしまうのは・・申し訳なく思うが・・。」

ちなみに司書仲間と一人の少女には彼のその角と眼は受け入れられている。

最初はかなり驚かれたのだが、皆受け入れてくれている。

「いつ来客が着てもおかしくないのだぞ。普段からきちんと・・・隠しておけ。」

それどころか他の皆にばれないように心配してくれる始末だ。管理局内では彼らだけの秘密となっているが、それ故に団結にも一役買っている。

魔法世界は多少の異形は問題ないという事だ。犬耳の使い魔や小人サイズの融合騎など色々な者たちがいる。まあ・・それをよく思わない人もいるのも変わらない。

だからこそ、バーハルトもここで自分の姿を認めてもらえることを嬉しく思っていた。

「――まあ・・もう一つの姿を見たら・・話は別だろうがな。」

そして、彼の抱えている秘密はその異形よりもさらに深い。その事を知る者は不幸なのか、ある意味では幸いなのか無限書庫にもいない。

「さっそくの来客だな。まあ・・あいつは問題ないがな。」

「お邪魔します!!」

やってきたのは金色の髪に赤と翡翠のオッドアイをした八歳の少

女。

名前を高町ヴィヴィオと言う。

「あっ・・・バーハルトさん、角と眼を全開にしている。」

彼女が彼の角と額の目を知っている唯一の少女。

「・・・前々から聞こうと思っていたが、何故角と眼を出している状態を・・・全開というのだ？」

「・・・さあ？」

ヴィヴィオが可愛らしく首をかしげるのを見て、その視線をアガリアと向ける。

「・・・明らかにあなたの言い方を真似しましたね。」

「リースの奴のせいだ。ほら社会の窓だって全開になっていると言うじゃねえか。」

「私の角と眼は社会の乱れ、または露出と同じ意味合いですか。」

その説明に頭を軽く抱えるバーハルト。

「ああっと、それよりも探している本があるんだ。」

ヴィヴィオは無限書庫司書の資格を持っている程の本が好きで、調べたい事があれば欲この無限書庫に足を運んでいる。

「何？」

「古代ベルカの戦争、聖王について調べ物を・・・。」

「この前言っていタ友達に自身のことを説明するためか？」

「うん。だいぶ仲良くなったんだけど・・・もっと知らないといけない事があるんだなって思ってる。」

ヴィヴィオの生まれに関しては、バーハルトもユーノと共に聞いている。

それを聞いたバーハルトも自らの目と角、そして記憶を失って遺跡で発見された事を教えたのだ。

「わかった。私が探そう。」

バーハルトの検索魔法。彼の魔力光は金。光輝く綺麗な魔力で、検索の魔方陣を無限書庫のど真ん中に出現させる。

スクライア一族から最初に教えてもらった魔法を、彼は想像できな



いほどの規模で行う。

無限書庫一室でも万を下らない数の書物がある。それを彼は同時に、検索する。

それは大規模な魔力だけでなく、繊細な制御と並はずれた情報処理能力も必要になる。

その三つを彼は兼ね備えており、無限書庫の中で一番のスピードと一番の正確な検索を行う。

検索が終わった後、バーハルトは十冊ほどの本を取り出し、ヴィオの処に持っていく。

「これとこれだな。まだ部屋がいくつがあるが……。」

「十分だよ。ありがとう。」

ヴィヴィオは笑顔でお礼を言う。

「どういたしまして。」

その笑みに笑顔で応えるバーハルト。口調こそ、どこかの王族のような偉そうなところがあるが、彼は基本的に笑顔を好む。

「そうだ。ついでにいい茶菓子がある。少しお茶にしようか。」

「うん。」

笑顔でその誘いに乗るヴィヴィオ。

「・・・先お昼食べたばかりなのに、もう茶菓子ですか？」

そのやりとりでユーノは突っ込みを入れながら、一緒にお茶をいただく事になった。

バーハルトが入れるお茶やコーヒーは本当においしいからだ。

一通り食事やゲームなどを楽しんだあと、ティアナ達は改めてデイーノを紹介してもらった。

「一応スバルさんの下で働いていたですが・・・なんか適性があるって言われて突然異動になったんすよ。」

デイーノは少々大雑把なところがあり、そそかしい。だが、野

性味もある無邪気さも同時に兼ね備え、憎めない。それに・・・基本的にいい奴だ。

「適性？」

「最近怪物騒ぎが頻繁にでているでしょ？その対策として、ある計画が持ち上がったの。」

「ああ・・・例の強化ユニットの話しか。確かに・・・必要かもしれないわね。」

ティアナの耳にもシードの出現が表面化と事件の被害の深刻さを受け、二つの人体強化ユニットのプロジェクトの話を耳にしていた。「実は・・・ディーノ君がその中の一つ『パラディン計画』の装着者選ばれたんだ。」

「ええっ!？」

耳にしていたプロジェクトの中心と言ってもいい人物に出会える事になるとはティアナも思ってもみなかった。

「俺だって不思議です。傲慢じゃないけど魔道士ランクFなのになあ？」

「らっ・・・ランクFで・・・選ばれた？」

魔道士ランク最低ランクのF。微かな魔力がある程度の非常に低いランクの彼が選ばれたのだ。

「あれ？私はべつに不思議じゃないと思うけど・・・。」

驚くティアナをよそにスバルはむしろ納得していた。

「何度も聞きますけど、なんでっすか？なんで選ばれた事に納得を・・・？」

「悪いけど・・・それは教えない。自分で気付きなさい。」

そう言って可愛らしい笑みを見せるスバル。

それに・・・ティーノは顔を真っ赤にしていた。

「うっ・・・いっ・・・いじわるっす。」

————あらら・・・。

執務管として、かなり聡いティアナは彼の反応を見てすぐに理解する。

これから異動するスバルの可愛い後輩は色々と彼女に振り回されている。心を完全に掴まれ、どうしようもないくらいに。

「なら・・・こっちも打ち合わせのために頻繁に顔を合わせることになりそうね。」

「えっ？なんで・・・。」

「ティア、この事件の担当執務管になったから。まあ・・・正確には魔王の担当といったほうがいいかな？」

ティアナは事件の報告の後、シード関連の事件を追いかける事になった。特にその事件でシードを倒して回る魔王を中心に追う事を決めている。

「・・・別に魔王を追っているわけではないわ。でも・・・彼は事件の重要参考人なのは間違いない。だから・・・彼を知る必要があるって思ったわけよ。」

「魔王・・・ですか。」

ティーノはその名を聞いて少し考える。

「その魔王にあった事あるっすよね？」

「ええ。」

「魔王って・・・強いですか。」

ティーノの問いにティアナはしばし考えていった。

それは彼が魔王と対峙する可能性が高いからこそ出た質問。

だからこそ。彼女は彼女が感じたままの魔王を言った。

「圧倒的に強いわ。しかも、まだ実力も底知れない。それに恐ろしい存在だと・・・思う。彼の怒りを見た時、私でさえまったく動けなかった。」

思い出だけでティアナの手は震えだす。先の事件で見た彼の怒りは大気を震わせたと錯覚するくらいに圧倒的な威圧を周りに与えていたのだ。

「でも・・・それと同じくらい・・・深い悲しみを抱えた奴だと思う。そんなに、悪い奴じゃないとも思うし。まあ、これは私の偏見だけどね。」

その言葉を2人は深く、心に刻みつけた。

「ただいま。」

我が家である屋敷に返ってきたバーハルト。

「お帰りなさい。主。」

出迎えるのは魔道書のヘル。

「晩御飯の買い物もしてきた。」

バーハルトが指を鳴らすと、魔方阵とともに大量の食材が召喚される。

「さっそく料理して・・・。」

そこまで言って、彼は言葉を止め、額を抑える。

「・・・まさか主？」

「無粋な・・・。また現れたようだ。」

バンダナをとった彼の額に赤く光を放つ三つ目の眼。

「・・・地下の冷蔵庫と、冷凍庫に食材を転送しておいてくれ。」

角を生やしながらヘルに買ってきた食材の保存を頼む。

「・・・今回は転送できそうですか？」

額の目に意識を集中させるバーハルトは軽く笑う。

「・・・ああ。知っている道だ。問題ない。」

「判りました。私も食材の転送が終わり次第すぐに後を追います。」

「・・・それまでには終わらせるさ。」

そう言いながら、彼の腰に現れるベルト。それと共に足元に白と黒、頭上に赤と青の魔方阵が現れる。

「変身。」

解き放たれたベルトから伸びる鎖で、スライドする魔道陣。その中から魔王ベルゼブブの姿が現れる。

「・・・行ってくる。」

「お早いお帰りを。」

家の中から消えるベルゼブブ。  
そして、今宵――暴食の魔王がまた街に降り立った。

## 暴食の魔王達の日常（後書き）

さて・・・やっちゃいました。彼の日常におけるもう一つの秘密。バンダナをしていたのはこういった理由です。まあ、ミッドチルダはある程度こういった異形には理解ある可能性があるので、何人かにばれているという設定にしていますが。

設定の変更のため11／3に一部改正。

主人公のモデルは言わずもがなですかね。某大魔王です。

関係があるかどうかは・・・お楽しみにということにします。

ちなみに主人公の日常は至ってのんびりでなおかつマイペースです。だからこそ・・・ティアナのような突っ込みがほしいのです！！  
そして、新キャラをついに登場させました。しかし・・・大食いキヤラが多い物語になりそうだ。

暴食の君以外にあの二人にふさわしい大食いの二つ名があればぜひお願いします。

かろうじて今回は一日で投稿できましたが、今度はどうなることやら・・・。

## 魔王の視察 (前書き)

さて・・・今回も魔王ははっちゃけます。

暴食というのはネタとして非常に使いやすい。

バーハルト「何故こんなことに・・・。」

はやて「なんでやあああああああああ!?!」

さて・・・どうして彼と彼女がそんな嘆きを漏らすのでしょうかね？

ちなみにそれぞれ理由は別です。

8／30タイトルを変更しました。

## 魔王の視察

夜の公園で結界を展開させて戦う異形が二体。一体はカエルの異形。全身から粘膜を分泌させて、打撃を滑らせる。

「・・・今度は嫉妬か。」

カエルの口から伸びる棍棒のような舌をかわすもう一体は・・・黒い蟲の異形。

魔王ベブゼブブ。

舌の一撃で粉々に破壊される遊具。

「今回は結界も張ってある故に、被害はそれほど気にしなくてもいいな。」

「・・・なぜ・・・振り向いてくれない。」

カエルの異形は悲しみをこめて、憎しみに苦しみすらも込めて言葉を発する。

「なぜ・・・こっちをみてくれないんだああああああああ！！！」

彼の後ろには変わり果てた姿の一組の男女。

対するカエルの異形は血まみれだ。

それだけでベブゼブブは察した。

彼の嫉妬が何かで、その嫉妬が何をもたらしたのか。

「・・・そうか。お主・・・。」

「うああああああああああ！！！」

嫉妬に狂った異形がベブゼブブに飛びかかる。

「この・・・馬鹿ものがああああああああ！！！」

それをあえて容赦なく殴る。振りかぶるような拳に、飛びかかったカエルは地面にめり込む程に強く地面に叩きつけられる。

「なんで・・・なんで・・・。」

カエルの異形は力なく立ちあがり、変わり果てたものたちを見る。しかし、二人は何も答えない。



「もう、お主は答えを出せぬよ。答えを・・・出せなくしてしまったのだ。お主自らの手で。」

ベブゼブブは異形の方へと歩き出す。

「なぜだあああああああああああああつあああああつあ！！！」

「さあ・・・終焉の時間だ。」

カエルの怪物が全身から粘液の球を飛ばすがそれを怪物ごと鎖で弾き飛ばす。

「解き放つは蒼き炎の斧。」

その言葉と共にベルゼブブの右の鎖が解き放たれ、右の手甲がスライド。右手が斧とкас。

「我が右手に宿る斧は断罪の斧。」

その言葉と共にベブゼブブの足元に発生する蒼い魔方阵。

「ぐあああああああああつあ！！？」

そして、カエルの怪物の全身から炎が噴き出し動けなくなる。

「全てを燃やす蒼き炎、割れぬ、欠けぬ強き刃を持って、運命すらも断つ、これ・・・終焉の一撃。」

魔方阵の力を全て斧にこめ、炎と高熱を纏った右手を振りかぶりながら、ベルゼブブは駆ける。

そして・・・カエルの怪物にその手斧を振り下ろす。

カエルの怪物の全身を止めていた炎が消え、辺りを静寂が支配する。

そしてベルゼブブは振り下ろした手を元に戻し、踵を返してその場から去る。

「バニッシャー・エンド。」

その言葉共にカエルの怪物の身体が中心を境に左右にずれる。しかし、ずれていたのは彼の身体だけではない。

彼の後ろの風景すらも必殺技の切断面を境にずれたのだ。

「・・・後ろの結界ごと空間を断ってしまったか。この技も強力過ぎて使いづらい。」

「があああああああああ！！」

切断面から蒼い炎を吹き出しながら絶叫するカエルの怪物。その体の中央に上がる蒼い魔方陣。

「・・・無駄なあがきなどせず・・・逝け！！」

その言葉と共に、爆散するカエルの怪物。

その光景を一部始終取っているカメラがあった。

「・・・無粋な。」

そのカメラを苛立ち交じりに鎖で瞬時に叩き落される。

そこまでで、映像が途切れていた。

「いっ・・・以上が・・・最新の・・・魔王・・・ベブゼブブの映像です。」  
報告していたはずの人間ですら、言葉を失うほどのものがあった。  
それを始めてみる皆など、言わないでも判ってもらえるだろう。  
「・・・・・・・・・・まさに、生体ロストロギアと言うべき存在だな。」

」  
提督クロノ・ハラオンの言葉に皆は頷かないわけにはいかなかった。

何しろ今回の戦いで彼は空間切断を伴う必殺技を放ったのだ。  
一生命体が単独でそれを行える事自体が脅威なのだ。

「少ないデータですが、推測されるスペックは以下の通りです。」

身体スペック

パンチ力・・・六トン

キック力・・・十二トン

ジャンプ力・・・150メートル

ダッシュ力・・・100メートルを四秒

魔力光・・・未確認。しかし、蒼い炎、赤い水晶体、白い風、黒い雷と言った複数の変換資質を確認。これらは普通の変換資質と違う可能性が高い。

追記

1、全身に纏わせている鎖は彼の意味で自在に動き、怪物すらも簡単に拘束、動きを封じる。他にも移動手段、攻撃手段にも。構成物質は判らないが、高い強度は確実。

2、幻術、結界展開の力も持っている。他にも推定ランクS以上の砲撃魔法も使える事から魔道士としても、一流以上は確実。

3、重力制御、空間切断の能力を確認。

4、極めて高い格闘技能者であること。

5、先の事件で彼の右足から放たれたキックの破壊力は測定・二百トン以上。小型隕石の衝突と同等のエネルギーがあると考えられる。受ければ戦艦一隻は確実に沈む。

「・・・なんだ、これは・・・」

人間大の生命体としてもあまりに異常な戦闘能力。

「これなら単独で次元振を起こしてもおかしくないわね。」

「しかし、先の怪物はこの隕石衝突と同等の威力のキックを受けても自ら爆発するまでは原型と息があったのも異常だな。」

「これが・・・元は人間だったというのが驚きですな。」

議題の中心が、先に巷で騒がしている怪物・・・シールドに向けられる。

最新の映像でカエルの怪物とかした人物はすでに特定されている。  
「未だに・・・どうして人間がシールドになるのか不明です。ですが、彼らは人間の七つの大罪のいずれかに強く反応して怪物になるようです。前回の二体が憤怒。おそらく今回は・・・事件の動機からして嫉妬だと思われます。」

その報告をしているのは執務管・・・ティアナ。

「とりあえず・・・判っている事は二つだ。」

会議の議長――アロン・スコ―ディオンは戸惑う皆を抑える。

「街中に封印すべき第一級の生体ロストロギアがいるということと、このシールドと呼ばれる怪物の対策が必要ということだ。」

その言葉に待ったを入れたのはやて捜査官だった。

「ちょっと待ってください。ベルゼブブを封印対象にするつもりですか？ あれはシールドを退治しています。それに、私達と話をできることなどを考えても・・・あれは・・・」

「だが、あれは危険すぎる。正体不明で行動目的も不明。他にどのような危険な力を秘めているのか判らない。そんな存在を野放しにできるか？」

それに反論できる者はいない。

ただ・・・一人を除いて。

「・・・ヘタに刺激するのはもっと危険だと思います。」

ティアナがその考えに忠告を入れる。

「私はあの存在に二度遭遇しています。そしてその中で・・・彼の怒りを見ました。あれは・・・魔王の怒りです。そして・・・怒りの時のスペック確か測定不能でしたね。」

「えっ・・・ええ。」

眼を赤らめ、鎖を地面に叩きつけた時の破壊力。それは計測できなかった。

その事を分析スタッフも認めている。

「ヘタな事をして・・・彼の怒りを買うようなまねはしないほうがいいと思います。どんなものが飛び出すか・・・判りませんから。」

ティアナの言葉は、現場にいて彼と二度遭遇したからこそ説得力がある。

そして・・・管理局本部での緊急の会議はしばらく議論と持ちあがった対策の了承と協力体制の構築を示されて終幕していく。

その中心となったのが、パラディン計画とエンジェル計画。

しかし、彼らはティアナの警告を無視するか、考慮するかでその明暗が分かることをまだ知らないでいた。

それから一週間後のことだった。

バーハルトはユーノから地上本部のはやて捜査官へ資料を届けるように頼まれていた。

「・・・ここがそうか。」

バーハルトはこの地上本部に来るのは初めてだった。一応無限書

庫司書として働いているのだが、自身の事に対する後ろめたさもあり訪れるのを避けていた。

ロビーで、建物の中の把握と、どこに向かえばいいのかを知り、そこへとエレベーターで向かう。

「さて・・・用事をさっさと終わらせて帰るとしよう。」

入場許可書を下げながら堂々と本部局の中を歩いていくバーハルト。

—————流石に色々な機密が多そうだが・・・。

色々と辺りを見回すバーハルト。本人はさりげなくを装っているので、周りから見ても怪しまれない。

——・好奇心が出てしまうのう。むう・・・早く帰らないと危ないと言うのに・・・。

心が軽く弾むのを止められない。

そんな彼の鼻が捉える。

——あっ・・・いい匂い。この先は・・・食堂か・・・。

おいしそうな匂いに一瞬だけだが気を取られてしまった。

その状態で曲がり角に差し掛かり。

「きゃあ!？」

誰かにぶつかってしまったのだ。

「あっ・・・。」

転びそうになる人の手をとっさに取り、支える。

——私も・・・まだまだだのう。

「すまない。大丈夫・・・か・・・？」

そしてぶつかった女性を見て、彼は不覚にも動揺してしまった。

「まあ・・・なんとか？」

彼がぶつかってしまった女性。

その名は・・・ティアナ・ランスターと言う。

——何故・・・彼女と今一緒に歩いているのだ？

バーハルト・スクライア。今の状況に心の中でだが軽く頭を抱えていた。

「へえ……。ユーノさんの部下なのですね。」

「ああ。この資料をはやてさんに渡すように言われて。初めてなので少し迷ってしまったのですよ。」

ぶつかったティアナは、動揺する彼を見て、不審者だと思って色々聞いた。そして、彼が無限書庫の人間で八神はやてのいるオフィスへ向かっている事を説明。証明書も確認して、せっかくなので案内しますと言ってくれたのだ。

——少し怪しまれたか。しまったな。

どうしてこのような事態になってしまったのかバーハルトも一応把握していた。

一方のティアナもさりげなく彼を観察していた。

——クロスミラージュに頼んで調べてもらったけど、一応シロミたい。でも……。

執務管として優秀な彼女は思いがけない彼の動揺に違和感を覚えていた。

——なんで……思いがけない知り合いに会ってしまったみたいな顔をしたのかしら？

そんな疑問が、彼への興味となって同行につながる。

でも、さすがにティアナも事件の中心人物となっている魔王が自分の隣にいるとは思ってもいないようだ。

「ここですよ。」

目的のオフィスの前まで来た2人。

「ありがとう。お礼にまた……お茶でもごちそうますよ。」

「……まあ……機会があればと言う事で。」

少し固い口調でお茶の誘いを断るティアナ。

もちろんこれはバーハルトは判った上で言ったのだ。

断られるような誘いをしておいて、足早に自分から遠ざかるように仕向けたのだ。

現に、その場を去るティアナの足は心なしか速い。

———やれやれ。何とかなったな。まさか変身していない時に会ってしまったとは。互いの名も知ってしまった事だし・・・、他人から知り合いになってしまったか。

去っていくティアナの後ろ姿を見て、皮肉な笑みを浮かべる。

——ヘイズ達の墓の事・・・聞きたかったが、今回は無理だな。怪しまれる。

彼がドアノブに手をやった瞬間だった。

———緊急放送、第三取り調べ室にいたいた容疑者が逃走。現在第五エリアにいると思われます職員のみなさんは注意を！

「・・・とんでもない事態だな。しかし・第五エリアって確か・・・」

廊下の向こうでナイフを手にした男が彼の方に向かってきた。

「・・・ここだったか。」

ドアノブに手をかけたまま気付いていないふりをしながらため息をつくバ―ハルト。

———なんで・・・こうトラブル続きなのだ。

「そのあなた！逃げなさい！」

犯人に気付いたティアナがクロスミラージュを手を駆けだす。

「くっ・・・まずい。」

犯人を追いかけているのは桃色の髪をした背の高い女性。手には抜き放った片刃の剣。

——犯人は挟み撃ちにされた事をする。そうすると我を人質にするか、我を傷つけた上でこの先のオフィスに逃げ込むか・・・。完全に・・・巻き込まれてしまったか。

どうあがいても興奮した男が危害を加えることは確定的だ。

「はあ・・・カオスだ。」

そうつぶやきながら、いまさらながらに気付いた用に男に向かってゆっくりと振り向く。

———仕方ない。偶然を装う事にしよう。



彼が振り返ると同時に・犯人はナイフを取り落とし、逃げてきていた勢いそのままに顔面から転倒。そして・そのまま気を失った。

「へっ？ なっ・・・何？」

そして、今更にバーハルトは状況を理解しきれていないように装う。

独りでに犯人が転んで気を失ったようにはたから見えた光景で、本部内で起こった騒動はあっけなく幕を下ろした。

「いやゝ悪いな。わざわざ資料を届けてくれた上に身内の恥に付き合う事になるなんてな。」

「いえ。こっちは何とも。」

気さくに話しかけてくる八神はやてにあえて言葉の数を少なく応える。

「しかし・・・結構肝太いんやね。全然驚いていないやん。」

「・・・気づくのが遅れただけで、まだ・・・全然実感していないですよ。」

はやてに資料を渡しながら、彼は足早にその場から去ろうとしていた。

「では・・・私は仕事がありますのでこれで・・・。」

「……………」これ以上のトラブルは御免被る。

「ちょっとまってや。これから面白いもんが見れるんや。私らのお詫びを兼ねて一緒に見ていかないか？」

しかし、その願いとは裏腹に彼は引き止められる。

「お誘いは嬉しいのですが・・・仕事が・・・。」

「安心してや。ちゃんとあんたの上司には許可もろてる。」

「……………」いつの間に根回しを？」

逃げ道を封じられた図のバーハルト。

「……………」ユーノさんにはやてさんがどのように聞いていたが・・・これほどとは。」

聞いた印象は幼馴染らしく判りやすい。

———まさには狸か。うまくはめられた。なんでわざわざ引き止められる？

追い打ちをかけるように彼のお腹が鳴る。

それを見た、はやてが引き止める材料をもう一つ見つけたと笑顔を見せる。

「あらら。まあ・・・今回はお昼はおごってあげるわ。ここの食堂、結構おいしいで。」

いい匂いだとおもっていた場所に行ける。これは彼からしても大変魅力的だった。

乗る価値は・・・十分にあった。

「・・・いくらでも食べていいのか？」

「うん。いいよ。」

———背に・・・腹は代えられんか・・・。

そう思いながらにやりと笑みを浮かべるバーハルト。

「では・・・ヘタな遠慮はむしろ失礼ですので、思う存分いただきに行きます。」

「うん。私も後で食堂にいくさかいに。」

「はい。堪能させてもらいます。」

はやてはしてやったりと笑みを浮かべる。己の最大の過ちに気付かないままに。

部屋をでようとしたところで、ノックと共に桃色の髪の剣士——シグナムが入ってきた。

「お疲れ様です。」

バーハルトの言葉に、シグナムは軽く会釈をする。そして、バーハルトは部屋を出る。

「さて・・・シグナム。あんたの言うとおり、彼を引きとめておいたけど？」

「すみません主。」

シグナムは主であるはやてに取り逃がしていた犯人の経過を一通

り説明したあと、お願いしてまで、バーハルトを引きとめた理由を説明していた。

「・・・そんなにすごいんか？」

「はたから見たら、ただ転んで気絶したようにしかみえないはずです。私でさえ、目を疑いました。」

シグナムは犯人が気絶する一部始終を見切っていた。

振り返りながらナイフを突き立てた手に斜め前へと右手の手刀を叩き込み、犯人がナイフを落としながら、前のめりになる。

そして、それ同時に体勢の崩れた犯人の足を振り返った右足でひっかける。

この二つを同時におこなったために、犯人はナイフを取り落としながらころんでしまったのだ。

そして、追い打ちとして 転ぶ直前に、素早く首筋に手刀を当てて気を失わせた。

あまりに鋭いために、相手は痛みすらもかんじていないだろう。

「・・・偶然では・・・ないな。」

「おそらくあの男の外傷は転んだ時の物以外は見つからないはず。達人でもあんな見事なことできませんよ。」

これは剣に長けたシグナムだからこそ、見切れた。

「・・・ユーノ君にあの男の事色々聞いておかないとな。」

のんびりとバーハルトの事を考えていた二人に、激しいノックと共に部屋に飛び込んできた者がいた。

「どうしたティアアナ騒々しいぞ？」

荒い息のまま入ってきたティアナをたしなめるシグナムだが、今のティアナには余裕がない。

「あっ・・・あの・・・はやてさん？ バーハルトさんに食事をおごっているって本当ですか？」

「そうやけど？」

のんびりと茶をすすめるはやては余裕を持って答える。

「だったら、早く彼を止めてください！！彼・・・食堂の食材を喰い

尽くす勢いで食べまくっています!!」

「・・・なんやて？」

とんでもない事を来たようにはやてはティアナに聞き返す。

「だから・・・バーハルトさん、遠慮無くっていつて、食堂の食材が全部なくなる勢いで食べまくってます!!もう・・・無くなっているかも。」

信じられない出来事に固まってしまったはやての手から・・・湯のみがこぼれおちた。

その頃食堂では・・・混沌が巻き起こっていた。

「すまないが追加注文を頼む。これとこれ・・・これに・・・これ・・・そしてこれとこれだ。」

「はっ・・・はいいいいいいっ!!」

その注文に悲鳴じみた声を上げる食堂のおばちゃん達。

バーハルトはそう言いながら、さらに食べ続ける。

その席の隣には・・・この食堂の食器の大半が置かれていた。

「いや・・・あんた良く食べるよな。」

彼の前には同じくかなりの量を食べているディーノがいた。

「こっちも普段はそんなにはな。今回はやけ食いだ。色々トラブルがあつて疲れているのだ。」

「やけ食い・・・恐ろしいな。」

その量と速度は同じ大食いであるディーノですら戦慄させるものがある。

「料理長!食器がなくなりました!」

「急いであそこから回収して洗え!もう・・・食器は三周目だぞ。」  
あまりの速度の食欲に料理長ですら音をあげている。

それを尻目にバーハルトは食べる、食べる・・・さらに食べる!!  
それを見た皆は流石に引いていた。

「おいおい・・・スバル以上だぞ?ティーノもさすがにあんなに喰わ

ないだろ？おまけに礼儀正しくたべているのに何だあの速度は？」

それを見ていた守護騎士・ヴィータは呆れて何も言えない。

「食材の残りは……。」

「すみません今ので……もう……。」

「嘘だろ！！急いで注文を……！！」

「あの……次はって……食材はもうないのか……。むう、やけ食いは終わりと言うわけか。」

食材がないと言うのを耳にしていた彼はそこで終わりを察する。

「はあ……。はあ……。」

そして、食事終了と共にはやてが食堂にかけつける。

「……。えっ？」

食材が無くなったという現実。

途方もなく積み上げられた食器の数々。

「嘘やろ……。？」

ヴィータからその食器は実際には三倍だという言葉聞き……。はやては膝から崩れ落ちたという。

すべては……。もう手遅れという重い現実に。

後に彼女は語る。

人生でこれ以上絶望した事は……。多分ないと。

追記・食いつくした食事の大半はすでにバーハルトは支払っており、残り十人前程をおごってもらうように最初から計画していたことを知るのは、彼女が色々な葛藤を乗り越え、涙も乾き、悲壮な決意でようやく立ち上がったからのことであった、。

## 魔王の視察（後書き）

魔王に謀をしようとしたら・・・こうなります。

彼の逆襲は・・・少々やりすぎだったのかもしれない。

一応・・・フォロー入れていますのでご安心を。

今回はバーハルトとディアナのある意味初顔合わせです。四人のヒロイン候補の中の一人。ここからガンガン絡ませる予定です。

そして混沌の中ディーノとも顔を合わせています。本格的な絡みはこれからですのでよろしくおねがいしますね。

そろそろ、ライダーのスペックなども書かないといけませんかね。

話の中でスペックはある程度出しましたが、当然ほんの氷山の一角にすぎないですからね。

この話が落ち着いたら人物紹介といっしょに出そうと思います。

## 聖騎士と蒼竜 起（前書き）

かなり苦戦しましたが・・・なんとか出せます。

今回は起承転結の四つでこの事件を書こうと思います。

承編までは終わりそうなのですぐに投稿します。

・・・なかなか・・・重い話になってしまった。

## 聖騎士と蒼竜 起

それは二か月前の話になる。

「おっさん!!」

そこは管理局のとある研究所。

そこにあまりも元気良すぎる声が響き渡る。

「・・・だから、何度おっさん言うなと言えば・・・。」

パソコンを打つ手を止めて、ため息交じりに呼び方の訂正を求めるおっさんと呼ばれた研究者――マルガ。ぼさぼさの髪に無精ひげにメガネとかなり研究所にこもっていたのが判るような状態だが、人のいい優しい顔立ちは変わらない。

彼は元気良すぎる声の発信源――ディーノの方を見る。

「だって・・・おっさんはおっさんだろ？」

「・・・このやりとり、何度かわしたのやら。」

ため息をつきながらマルガはディーノの方を見る。ディーノの目にはパソコンの画面に映っていた二体の強化服の姿があった。

「あれ？それっておっさんが言っていた。」

「・・・ああ。そうだ。まあ・・・そのプロトタイプと言った方がいいがな。」

「完成した量産型とは違うのか？」

「・・・まあ・・・な。」

そんなマルガの元に一人の男の子がやってくる。

「お父さん!!それにディーノ兄ちゃんも？」

彼はマルガの息子――アギア。優しく、整った顔立ち。銀色の髪も長く艶やか。どこからどう見ても快活な美しい女の子にしか見えない十歳の男の子。

「おっ。アギア。」

「今日お仕事休みなの？」

「ああ。可愛い妹分・・・いや弟分に会いに来たぜ。おっさんに親



友にもな。」

アギアがあいさつ代わりに拳を繰り出す。  
それを笑いながらディーノは受け止める。

「コーチ今日もお願いします！」

「ああ。先に軽く身体を鳴らしてストレッチをしておけ。こっちはすでにやっているから。」

「はい！」

元氣そうに研究所の外に出ていくアギア。

「・・・いつも済まないな。こっちが中々かまっていられないのに。」

「文武両道という教育方針に間違わない程度にはな。まあ・・・女の子に見えるのを逆手に取っている節もあるし、女の子の服を平気で着て女装すると言う変な部分もある。可愛い性格もあるから、女の子にしか・・・見えねえな。おっさんのリクエスト通りにそれなりの男らしさも見せてくれと言うリクエストに応えてはいるが・・・。」

「そこまで言いかけてディーノはため息をつく。

「

「・・・強さと美しさを同時に磨いているのか・・・。無きあいつが美人過ぎたのか・・・悔まれる。」

マルガの惚気にも似た深い後悔の念に、ディーノはため息をつきながらフォローをする。

「まあ・・・気にするな。あんたの息子は変わっているし、可愛らしいけど、とってもいい子だ。おっさんも忙しいのに必ず食事は一緒に取ろうとしているし、一緒に時間を作ろうとしているから・・・立派に父親しているぜ。」

「その息子がいつも朝も夜、夜食。そして昼の弁当まで用意してくれるのだから。おまけに・・・家事まで完璧・・・。これだと・・・いつ嫁に行っても心配はないわな。」

「・・・心配ないわりには・・・おもっきり声のトーンが低いぜ。」

いつも忙しいマルガの代わりに休みのたびにアギアの相手をしている。

「ディーノじゃないか。今日もアギアの？」

そこにやってきたのはマルガの部下でディーノの友である男——ジュエル。

二十歳くらいで紫のウェーブのかかった髪を肩まで伸ばし、黄色の瞳を優しげにこっちを見る。

見た目は……かつてミッドを震撼させたジェイル・スカルエツディに瓜二つ。

しかし、職員はもちろん。ディーノもそれを全く気にしていない。「しかし……なんですかこれ？」

ディーノの視線はマルガの作った三体のパラディンの設計図があった。

「量産型とはまた違う……プロトタイプにして……カスタム機。分類で言うのならインテリジェンスデバイスタイプ……いやユニゾンデバイスの近いな。」

マルガの設計した三体のパラディン。

「……扱いが難しいのでは？」

「その通りだ。システムその物に自我があるようにしているから制御は何かなるが、彼らが認めない限り装着はまず無理だ。量産型でも十分と思っていたが……最近の失踪事件があるだろ？ 念の為に……。」

マルガとジュエルの視線がガラス越しに安置されているある物に、向けられる。

ガラスケースに安置されている三つのベルト。蒼、紅、黄。

蒼のベルト——蒼海の龍騎士ガロヴィント。蒼い龍を模したレリーフになっている。

紅のベルト——紅地の戦魔人ベリガル。赤い六手、三顔の鬼を模したレリーフ。

黄のベルト——黄金の守護者アーメイズ。黄金の獅子を模したレリーフ。

「君にだけ教えるけど・・・このシステムの最大の特徴はね・・・。」

2人から聞いたマルガが作った三つのベルトの最大の特長を聞いたディノは呆れるしかなかった。

「・・・すごすぎますよ。でも・・・どうしてそんな強力な物をわざわざ。」

ディノの問い。しかし、その問いをマルガはその問いを聞き直してきた。

「その前にこっちからも一つ聞きたい。どうして・・・君は人を助ける仕事についている？格闘技者としての技能も高いし、武装隊などもっとその力を生かせる場所があったはずなのに。」

その問いに、ディノはため息をつく。

「————。」

その問いに当たり前の用にある答えを告げるディノ。

「すみません。アギアが待っているのです。またお昼の時でも!!」  
研究室から出ていくディノ。当たり前のように応える質問に二人はポカンと呆ける。

「・・・流石・・・ディノ君だ。」

その背を見ていたマルガが何かを決意したかのようにパソコンに向かう。

「・・・それが答えですか？」

ジュエルはそれを見て、呆れた声をあげる。

「希望の種はまいておきたい。いや・・・あれはすでに苗だな。」

「芽吹き、育ちつつある希望ですか。エンジェルシステムの方もそうなればいいのですが。」

ジュエルの言葉に心当たりがあるのか。マルガは視線で問う。  
それにジュエルは沈痛な面持ちで頷く。

「・・・ディオオンもやばい状況だったか。」

「あっちはロストログアが絡んでいますから。エンジェルシステムの元がもと・・・。」

そこまで言いかけてジュエルは言葉をマルガに言葉を止められる。周囲を油断なく見回す2人。どこに耳があるのか判らない状況に彼らは追い込まれていた。

「・・・すみません。」

「気にするな。それより・・・私の身に何かあったら・・・このシステムの運用、改良などを全て君に任せたい。」

「何かって・・・。そんなこと。」

「・・・多分・・・そう遠くないうちに起こる。私が開発してしまったのはそう言う物だからな。それに対する責任は・・・取るつもりだ。」

一人の科学者として、彼は決意していた。

「まあ・・・いくら同じ物を作れと言われても作れないのも事実だが。」

「・・・確かに、あれを作れたのは奇跡に近いものがあります。」

開発に携わったジュエルも、この三つをもう一度作るのは無理だと断言していた。

「私より優秀な君が断言するのなら安心だよ。」

「そんな・・・。私はマルガさんがいなければ・・・今頃・・・実験体として命はありませんでした。あなたは私の命の恩人です。まだ恩すらも返せていないのに!!」

その言葉にマルガはゆっくりと肩をたたく。

「もう一人の息子よ。頼むぞ。私の・・・アギアの事も含めてな・・・。そうだ。ディーノ達と一緒に昼を食べようと誘っておいてくれ。訓練風景録画してくれば・・・嬉しい。」

「・・・わかりました。でも、その何かが起こらない事を・・・切に願っています。」

そう言っつてその場から去るジュエル。

「・・・優しい奴だ。科学者の良心をもっているからこそ・・・託せる。」

そう言って、マルガは再びパソコンと向き合う。

そして、そこから約二カ月後。コンペの一週間前。  
科学者マルガ・スワローネは何者かに殺害される。

開発中の三つのベルトはなくなっており、彼の息子アギア・スワローネも・・・行方不明になっていた。

そして・・・コンペ会場当日に戻る。

コンペ会場に向かうバーハルト達。

「……………こっ・・・この男・・・かなりできる。私がこんなにも弄ばれてしまうなんて。」

はやては眼前にいる男——バーハルトについての評価を改めた。  
根回しをして逃げられなくして、彼がどういった男か見極めようとしたのだが、それに対する返事が・・・強烈過ぎた。

「——相当な役者やねえ。まさに・・・王。手段を考えればまさに  
暴食の魔王やね。・・・追っているあれも暴食を司るって言ってたし・・・  
変な縁や。」

流石のはやてもバーハルトが魔王だとは気付かない。それだけの  
判断材料がないからというのがもっともな理由なのだが。

「・・・へえ。新しいプロジェクトか。」

その頃、バーハルトはディーノと話し込んでいた。  
同じ大食い同士。話のきっかけはそこから始まり、食堂のお勧め

メニューがどんなものなのかを説明し、すっかり意気投合していたのだ。

「そうか。ならまた訪れないといけないな。」

「そうですね、その時は一緒に。」

「ああ。今度は加減して二十人前くらいでやめておこう。」

「でも、・・・バーハルトさんが来たら、料理長卒倒しますよ。」

「それはそれで楽しみだ。」

その言葉にはやて達はぞっとする。

疲労困憊の料理長達の姿。そのうらみがましい視線をはやては一心に受けていた。

バーハルトに向けられないのは・・・あまりの食欲のすごさに畏怖してしまっただからだ。

そんなはやての反応を察したのか、彼は振り返る。

「安心してください。今度訪れる時は前日にお知らせをしてから、予約と言う形で行きますので。・・・そうだ。そのための電話番号も教えてもらえたら・・・。」

「は・・・うつ・・・うん。教える。きちんと教えるさかいに、もうあれは勘忍して・・・。」

はやての可愛らしい反応に満足するバーハルト。

この時点で、二人の力関係が完全に確立してしまった。

「バーハルトさん！はやてさんを弄らないでください。」

それを見かねたティアナがバーハルトを止める。彼女も付いてきたのだ。

バーハルトと言う人間の謎について、興味を持ったのが大きい。

「すまない。私も・・・意地の悪いところがあるようだ。」

怪しいところがあるが、先の騒動でティアナもバーハルトの人となりは何となく判ってきて、容赦がなくなってきた。

「それより・・・どんなものか見せてもらおうぞ。」

「ええ。遠慮なく。見て減る物でないしな。」

会場に入る前にディーノが立ちふさがる。

「俺はここで。そろそろ準備に入りますので。」

「そうか……。楽しみにしているぞ。お前の晴れの時を」

「……はい。」

その言葉に少しトーンの落ちた返事を返す。

「……ん？」

それを目ざとく察するバーハルト。

「派手にやりますので、是非見てくださいね!!」

つぎの瞬間、別れ際の言葉こそ元気だった。

「……あいつ……何があったのか？」

バーハルトはディーノとは今日あったばかりで、人を知っているわけではない。

だが、それでも引っ掛かるものがあった。

「……何かあったん？」

「……いや。何でもない。」

はやての言葉にそう言いながら、バーハルト達はコンペの会場に入る。

そこは巨大な模擬演習場。

上はドームのようになっており開閉が自在にできるようになっている。

中の空間も広く、単独でサッカーの試合なら二試合を同時に行える広さがあった。

その観客席にバーハルト達は座る。

「……流石に……それなりの地位にいる者達も多いな。」

バーハルトの目には地位が高いと思われる者達が次々とあらかじめ用意されている席に座る。

このプロジェクトの期待がうかがえる。

「……偶然とはいえ。見に来て正解だった。」

魔王として、遭遇する可能性が高い彼らを目にできるのはある意味幸運と言えた。

ガラス張りの観客席には管理局の三人の提督を初めとする重鎮が  
ならんでおり、その中に、アーロン・スコーディオンの姿もあった。  
「来てくださったのですか?。」

その隣に座ったのはゲンヤ・ナカジマ。

「そちらのパラディン計画・・楽しみにしていますよ。こっちのエン  
ジェル計画は・・今回はお披露目しないので。」

「まあ・・責任者というわけじゃねえが・・楽しみにしてくれや。」

そこにはそれぞれの計画に携わった二人の男がいた。

――さて。この計画がうまくいけば・・。

アーロンの不敵な笑み。

――これが俺達の希望になればいいんだが。

ゲンヤの期待。

この二つがこのお披露目の席で交差していた。

一方、控室では装着者が各々ストレッチをするなど準備をしている  
中ディーノがバーハルト達には見せなかった沈痛な表情を浮かべ  
ながら座り込んでいた。

「やあ。」

そんな彼に話しかけてきたのはジュエルだった。

「おう。お前がどうして?。」

「パラディン開発者代表代行としてね。」

「・・・・・そうか。」

代行。

その理由は簡単なことで、開発者代表が帰らぬ人になったからだ。  
マルガの事件以降、2人が会うのはこれが初めてだった。

「・・・・・おっさん、この事予期していたのか?。」

「・・ある程度は・・。ごめん。」



狙われている事を黙っていた。それに対してディーノは力なく首を振るう。

「お前があやまることじゃねえよ。俺まで巻き込まれないように・・・だろ？」

だが・・・それでもディーノは憤りが晴れない。

「だが・・・なんでアギアが巻き込まれねえといけない!？」

可愛い弟分であったアギアが行方不明。それはディーノの心を痛める理由としては十分すぎる出来事だった。

捜査は全力で行われているが、行方はまだ判っていない。

「・・・・・」

その言葉に力なく黙っていることしかできないジュエル。

「・・・・・そうか。すまん。」

ジュエルの瞳には涙があふれていたのだ。悔しくて・・・仕方ないと言いたげに。

「おっさんが俺を選んでくれたのは・・・身内の最良ではないのか？」

「それは断じてない。でも、君を高く評価していたのは事実だ。マルガさんの評価に僕もその通りだと思っている。」

「・・・そうか。魔力なんてほとんどねえから、足手まといかもしれねえが。」

「そんなこと・・ないよ。しっかりしてよ!」

ジュエルはそう言って彼の肩を強く叩き激励する。

「ああ。」

そう言っただけ彼は立ち上がる。そして会場に向かおうとして足を止める。

「・・・・・そうだ。言い忘れていたが、お前しかいねえと思うぜ。」

「えっ？」

「おっさんの意思を継ぐのはよ。」

「・・・ディーノ。」

振り返った彼は笑顔だった。

「――――お前は何のために力を欲し、そして戦う？」

「えっ？」

突然ディーノの頭の中に聞こえてきた問い。

立ち止まるがその問いをしてきた相手はいない。

「どうかしたのか？」

「・・・いや、行ってくるぜ。」

ディーノは歩き出す。その背を一匹の蒼い影が見ていた。

そして・・・お披露目が始まる。

それは一斉に地を駆けていた。

全身鎧のような物々しい装甲に覆われ、黒を基調とするボディに虫を思わせる二つの赤い複眼と二本の触角のあるヘルメット。

腰には赤のラインが入ったカプセルのようなベルトが装着されている。

右太ももにジョイントしているのはサブマシンガン程の大きさのある大型の拳銃のような銃器。

足はローラースケートのようになっていてただでなく、足の後ろに自在に稼働する別の車輪が付いており、素早く方向転換、あらゆる地形の走る事を考えられている。

ローラーを駆使した機動はレースに出るような車が出す高速のスピードとローラースケートの様な小回りを両立させていた。

それは壁をそのまま駆けることすらも可能としていた。場を問わ

ない圧倒的な走行性能。

彼らがある地点で一斉に並ぶようにして止まる。

足のローラースケートは折りたたまれるように消え、彼らは一斉に観客席の方を見る・

そして・・・敬礼。

ミッドチルダの科学の粋を集めて作り上げた強化スーツ。  
パラディン。

皆を守る守護者達が最新の鎧を纏った姿だった。

その勇士に、皆が惜しめない拍手を送った。

「・・・・やれやれ。人間共も生意気なことを・・・・」

それを映像越しに見ていたカウターが憤慨する・

「一体でも並のシードなら対抗できる程度の性能はあるな。」

メギスは技術者として、力の程を的確にとらえている。

「クライムを集める邪魔されるのは勘忍してほしい。」

「ほほほっ。・・・だったらこっちから挨拶をすればよい。」

後ろからリッチが現れる。

「・・・仕込みは終わったのですか？」

「ああ。あれはいいゴーストだ。最高のショーになるじゃろう。」

「そうですか。だったら・・・こっちも作品のお披露目と行こうか。

映像を全世界に配信もして、顧客へのデモンストレーション兼ねてな。それと・・・メッセンジャーも用意している。」

メギスの言葉と共に、彼の背後に銀色の人形が現れる。

「2人は存分に楽しんでくれ。こっちは次のシードの仕込みとクラ

イムの回収をしてくる。」

カウナーはそう言って、その場から去る。

『さあ・・・ショーの始まりだ。』

メギスとリッチの声が重なる。それと共に・・・会場でそれは起きた。

会場の中心に突然その人は現れていた。

「————オマエタチノスキニハサセナイ。」

それは血まみれの白衣を着ていた。

それは・・・青白い顔で言葉を発していた。

「————オマエタチガ・・・オマエタチガ・・・。」

男の周りの異様な空気に会場が固まっている。

「おい。どうやってここに入った？」

そんな彼を止めようと局員が駆けよったが、それに対する答えは・局員の身体を貫く男の手だった。

「ぐおっ・・・おお・・・あ・・・。」

糸が切れた様に倒れていく男。その光景に会場から悲鳴が上がる。

「————ハカイスル・・・ハカイ・・・スル・・・ハカイ・・・・。・。」

うつろな彼の目に光が宿る。

それは理性から来るものではなく・・・狂惜しさから来る・・・破滅から来る。

「なんで・・・なんだ・・・？」

それを見ていたディーノがパライディンの待機状態であるベルトを装着した状態で駆けだす。ジュエルの制止は間にあわなかった。

「ディーノ!？」

「なんで・・・おっさんがここにいる!？」

血まみれの白衣の男・・・それは一週間前に殺されたはずのマルガ・スワローネに違いなかった。

「アギアはどうした？ 一体何が？ どうして・・・こんなむづかしいことを・・・」

「アギア？ アギア アギ ア」

その名前に男——マルガが求めるようにアギアの名を口にする。

しかし、彼が求めている息子は・・そこにはいない。血まみれとなつた手が・・虚しく空を切るばかりだった。

「アギアアアアアアアアアアアつアつアアア! ! !」

絶叫するとともに、彼の周りに巨大な転送魔方陣が展開。その中から次々と鋼の色をした機械人形――スレイブが現れる。

「なんで・・・・○」

スレイブ達が手にした火器を一斉に放つ。

会場の脇にいたディーノが腰に付けたベルトのスイッチを起動させる。

駆けだすとともに全身に現れる魔道陣。それにそつて無数のパ  
ツが現れ、ディーノの全身に装着されるとともに組み立てられてい  
く。

「なんで？ おっさん！！」

そして・・彼は聖騎士となった。

## 聖騎士と蒼竜 起（後書き）

新しいライダーの登場のために派手な戦いになるように仕向けました。

・・・管理局、しかも地上本部内部での戦闘は・・・我ながらさすがにいい度胸ですかね。

パラディンは二つを参考にしました。

一つはライダーファンならわかると思いますが・・・もう一つわかる人がいたらCLAMPとサンライズのコラボを楽しんだということになりますね。

聖騎士と蒼竜 承（前書き）

・・・文章大丈夫か不安です。

バーハルト「今回我の出番がないのう・・・。」

THIS「安心してください。そんな心配はしないでください。お願いですから・・・変身して私を鎖で縛らないで・・・。あっ：足元の感覚が・・・ってああああ落ちるうううう！！！」

主人公が誰なのか忘れないようにしないとその主人公に怒られそうです。

それは一週間前の夜のことだった。

「ぐっ・・・はっ・・・。」

マルガの体はバインドで拘束されていた。

身体のあちこちにあざができ、血も流れている。

「いい加減・・・あのベルトのロックを外せよ。」

彼をいたぶっている覆面の男が見下すようにマルガを見る。

「・・・お前ら・・・あのベルトがどれだけの力を秘めているのか・・・判っているのか？ぐっふ！？」

「判っているからこそ・・・欲しがっている。」

その言葉をふさぐように腹に蹴りを入れたのとは別の男がため息をつく。

「おいおい。お前はえげつないな。」

「いたぶるのは趣味なんだ。こうして、他の連中を従えて来たし。」

彼は倒れたままのマルガを胸倉をつかみ上げ、そのまま片手で持ち上げる。

「・・・さあ大人しく渡せ。そうしないとお前の可愛い娘・・・いや息子はどうなってしまうかな？」

その言葉にマルガの目が見開く。

「お前・・・アギアに何を・・・？」

「安心しろ・・・しかるべきところに厳重に保護している。協力しなければ・・・。」

—————緊急事態だ。ルシフェルシステムとミカエルシステムが姿を消した。

「何、ルシフェルとミカエルが？おいおい。せっかくこっちの人質を研究施設にぶち込んだというのに・・・。」

「なん・・・だと？」



「しかるべきところっていったはずだぜ。色々いい素材だったかな。実験体としては申し分ないはずだ。まあ・・しかるべきお上への奉公と思えばいいだろう。」

そこまで言って男は残忍な笑みを浮かべる。

絶望に打ちひしがれるマルガ。

「・・許さない・・よくも・・アギアを。」

深い憎しみを向けるマルガを平然と受け流す男。

「ロック・外れたぞ。」

別の男の言葉。

それと同時にアギアの腹部に殺傷設定の魔力の刃が刺さる。

「ぐほっ・・。」

腹部を貫通するそれは間違いなく致命傷だった。

「へっ・・そうかい。まあ・・もうすぐ部屋のロックは外せそうだし、後はデータももらえればお前には用はなくなった。残念だったな。お前の息子にはもう・・逢えねえぜ。」

男の不敵な笑みにマルガも笑みを返す。

「・・それは・・どうかな？」

その言葉の意味を知る前に彼は言葉を紡ぐ。

――――さあ・・・神獣たちよ・・旅立ちの時だ。

まるで詩のような一節。

その一節とともに、部屋が爆発。

「ぬお!？」

それと共に、部屋から現れる三体の神獣。

炎と雷を携えし蒼い神龍、八本の手と三つの顔を持つ紅の鬼神、そして一角の角を持つ黄金の獅子。

――父上――!

三体の獣は男を吹き飛ばし、瀕死のマルガに駆けよる。

「・・・やっと・・目覚めたか・・。」

――気を確かに!!父上。

――・・・やっと・・・こうやって触れられるっていうのによ!

「……せっかく……みんなと遊べると思っただのに……。  
「……すまないな。やっと自由なのに……こんな事になってしま  
った……。だが……お前達に託した願い……覚えているな。」

「……はい!!!!」

三体の神獣は一致して頷く。

「頼む。それと……もしよければだが……私の息子を……助  
けて……く……れ……。」

「……父上!!!!」

事切れるマルガ。

「くっ……何だあいつらは？」

「あれは……ベルトと関係が？」

覆面をつけた男が剣とカードを手にし、カードを剣の持ち手にあ  
る読み込みにスライドさせる。

「……フアランクス・シフト。」

カードが消え、男の周りに全部で五十以上はあろう、魔力弾が瞬  
時に発生する。

「……こいつらが……父上を!!」

「……よくも……やってくれたな。」

怒りに震える鬼と獅子。

それを止めたのは龍であった。

「……落ち着け。我々はまだ……主がない。この状態では……  
……。」

「……だがよ!!」

「……父上の願いを忘れたわけじゃないだろ!ここで倒れたら……  
……。」

龍の言葉に悔しげに頷く二体。

「何だから知らねえが……こっちから行くぞ……って？」

そう言って、一斉に魔法を放とうとした瞬間だった。

三体はまるで霞のように消えたのだ。

「なっ……何？」

忽然と消えた三体。

——おい。研究室のほうだぞ。

突然の静寂に無数の足音と話声が近付いてくる。

「・・・派手にやり過ぎたようだな。」

「・・・チィ。仕方ねえか。」

展開された魔法を消し、二人は手にした剣にカードを二枚リロードさせる。

——ステルス。ディープダイブ。

カードが消えたと同時に2人はその場から忽然と姿を消す。

そして・・・部屋に入ってくる人達は血まみれで死んでいるマルガを見つけたのだった。。

そして・・・一週間後。

死んだマルガは亡霊となって現れた。

——ローラースピナー

機械の音声と共にベルトから部品が出現、足に追加で装着される形で一瞬で組みあがり、そのままローラースケートのようになる。

足のローラーを起動させ、スレイブに守られたマルガの方へと向かう。

しかし、スレイブがそれに気づき銃をディーノの方へと向ける。

——ワイドシールド。

そのベルトから出た部品が組み合わせ、左手にて盾となって装着される。

盾はスレイブの弾丸を防ぐ。その盾ごとスレイブ達の列に突撃しようとしたのだが。

「やっ・・・やべえ!？」

そのディーノに向けて、身の丈程の砲身と人の頭が入る程の大きさの砲口をした大砲が向けられていた。

放たれる砲撃。あまりの反動に放ったスレイブも後ろに大きく後退する。

そしてその砲撃はディーノの盾に直撃。

あまりの威力に盾は崩壊。そのままディーノは吹き飛ばされる。

「ぐっああああああああ。」

吹き飛ばされたディーノに向けて大砲を向ける。しかし、そのスレイブの大砲に向けて一発の銃弾が撃ち込まれ、大砲が破壊される。

——A班は盾で銃撃を防ぎながら徐々に接近。B班は銃器でA班と共に攻撃。特に盾を破壊できる大砲は優先して破壊してくれ。C，D班は観客席にて撤退の護衛。今は避難を優先しつつ、避難完了とともに反撃に映る。

その指示は・・ジュエルの物だった。片手にライフルを持ちながらパラディン達に的確な指示を出している。

ワイドシールドを構えたパラディン達の後ろ。

——ガトリングユニット。

——バスターユニット。

巨大なガトリング砲や、大砲を手にしたパラディン達が一斉にスレイブに向けて銃撃を放つ。

放っているのは半物質化した魔力素の弾。魔力弾と質量弾の両方の特性を持っており、それを圧縮した魔力が入ったカードリッジから放っている。

少ない魔力消費でAMFフィールドに干渉されない上に質量弾よりも高い威力の銃撃ができ、その上に弾は圧縮された魔力なので弾薬の持ち運びは極めてコンパクトに、そして軽くなったという利点がある。

その威力にスレイブは次々と倒れていく。

——大丈夫か？

「あっ・・ああ。済まない。突っ走ってしまっただけ。」  
聞こえてきた念話はジュエルの物だった。

——いや、結果的にディーノに狙いが全て向いたおかげで観客

に被害はない。助かったよ。

「よかった。だが・あれは？」

「——マルガさんは死んだはずだ。それは・僕がじかに確認している。」

死人が現れた謎に関してはジュエルも動揺しているようだ。だが・それに振り回されずに的確な指示を部隊に出している。

研究者としてだけでなく、彼は司令官としても優秀のようだ。

「——とにかく、君はもとのE班にもどって。E班は高速移動しつつ、白兵戦をしかける。一気に片付ける。」

「オッケイ。」

「——アームブレイド。」

「——シールドナックル。」

ディーノの右手に巨大な刃を持った剣。左手には手の甲が小型のシールドになっているナックルが装着される。

足のローラースピナーを起動させ、突撃班と合流するディーノ。

一つの班は四人から五人。

突撃班はディーノを含めて五人。

「まったく、無茶する新人だな。」

その隊長は合流するディーノを軽くたしなめる。

「気持ちは判るが、今は冷静になれ。・・その熱さは俺達が突撃した後にとっておけ。」

「・・・はい。」

ディーノはスレイブに守られているマルガを見る。

「・・・行くぞ！」

隊長の号令と共に、ローラースピナーを起動させディーノ達五人は突撃する。

飛び交う弾丸の雨を縫うようにしてスレイブに接近するディーノ達。多少弾丸は纏っている装甲と盾で防げる。

「うおおおおおおおお。」

左手のナックルで殴りかかるディーノ。蒼色の魔力の纏った一撃

でスレイブが一撃で碎かれる。

とっさに別の二体が銃器から電気の放つバトンに持ち替え、ディノを上からたたきつぶすように襲いかかる。それを見たディノがとった手段。

それはさらなる加速。

スピードを上げ、一回転させながらスレイブ二体の攻撃が通過する前に通り過ぎる。

通り過ぎる前に身体を回し、剣で二体を斬り払いながら。

「・・・本当にすごい新人だよな。」

数秒で三体のスレイブを倒して見せたディノを見て隊長達や他の班のメンバーも軽く驚く。

「だが・・・突っ走り過ぎるかもしれん。みんなディノのフォローを。」

ディノを先頭に、他の四人が左右、後ろを固める図。ディノの突破力でスレイブを次々となぎ倒しながら、マルガに迫る。

「うおおおおおおお！！」

そして、ディノがマルガへ手を伸ばせば届きそうな距離まで着た瞬間だった。

銀色の影がディノを吹き飛ばした。

その衝撃で装備していたナックルと、ブレードが消える。

「ぐああああ！！？」

「・・・すごい執念だなスレイブどもがこんなにやられるとは。」

「システム・・・侮れんな。」

現れたのは細身で流線型の全身鎧のようなボディに刃で出来たような翼を一对背負ったアーマードと、筋肉をイメージしたような鎧に、雄牛のような角が頭から生えているアーマード。右手には牛の角のようなラムが付いている。

「なんだ・・・こいつら。」

いきなり現れた二体のアーマード。それはスレイブとは明らかに違う。

「俺たちは・・グラディエーター。スレイブの上に立つ者——我の名はエッジ。」

「・・ホーンだ。」

刃の翼をもつアーマード——エッジ。

雄牛の角のアーマード——ホーンがディノ達の前に立ちふさがる。

「・・・そこをどけ!!」

ディノはホーンに殴りかかる。

スーツの力を持って強化された一撃。

「・・・この程度か。」

しかし、その拳をまともに受けてびくともしない。

「ふん!」

ホーンが裏拳で無造作にディノを殴り飛ばす。

腕力だけの無造作な一撃なのにもかかわらず、ディノは大きく吹き飛ばされる。

「ディノ!」

それを見た隊長が二人の部下と一緒にガトリングを展開。

それを一斉に放つ。

「ぐっ・・ぬっ?」

ガトリングの連射される弾丸に怯むホーン。

しかし、それを阻んだのは目にもとまらぬスピードだった。

「させませんよ!」

目にも止まらぬスピードで駆け、隊長達を斬り飛ばす。

火花を上げながら倒れる三人。

そこに剛腕を誇るホーンが迫る。

「隊長!!」

ディノが再びシールドナックルを展開させながら、右拳で殴る。拳ではびくともしなかったホーンが強化された拳に怯む。

「良い一撃。」

ホーンが右手を振るう。

「大ぶりだ!」

その一撃をディノはシールドナックルでうまく滑らせて防ぐ。そしてそのまま左太ももに連結していた銃を左手に持ち、ホーンに向けて、連射する。

「ぐっ・・ぬぬぬ・・。」

火花と衝撃にホーンは怯む。

「これならどうだ。」

しかし、ホーンは左手をディノに向ける。

「!？」

左手から放たれる赤い衝撃波。シールドナックルのシールドで防ごうとするが、防ぎきれずに飲み込まれ、吹き飛ばされる。

「ぐっ・・・。」

火花を上げるディノのパラディン。ダメージが大きいのだ。

「俺もだが、そっちもかなり頑丈だな。」

それを見たホーンが呆れたようにディノを蹴り飛ばす。

ディノを助けるためにかけようとする隊長達をいたぶるエッジ。一撃を加えて素早く空に逃げるので彼らも苦戦を強いられる。

空を駆けるその速さはディノの目にも追いきれない。

「まだ本気のスピードじゃないよ。」

瞬間的に、目にもとまらぬ速度で駆け隊長のスーツに腕から展開させた刃で切り飛ばす。

「だが・・捕まえた!」

しかし、その瞬間を隊長は待っていた。刃を受け止めていたのは展開させていたワイヤーの放つアーム。そのワイヤーがエッジの腕に巻きつく。

「しっ・・しま・・ぐあっ!？」

動きを止めたエッジに殴りかかる隊長。そして、エッジに弾丸を浴びせる部下達。

「おのれ・・。」



ホーンが左手を向けようとして・・・。

「させるか!!」

それをディーノが腕に飛びかかる事で妨害される。

「なっ・・・貴様・・・。」

「今の内・・・一発かませ!!」

「おう!」

ディーノの言葉共にチームの一人が展開させた巨大な大砲から砲弾ホーンに向けて放つ。

「ぐおっ!」

まともに命中したホーンが怯む。

「ぬう・・・。いい加減にあいつらを使えエッジ!!」

ホーンはエッジに向けて撃を飛ばす。

「・・・もう間もなくだ。」

その言葉にいつの間にかエッジが現れる。

「なっ?」

捕まえたはずのエッジがいつの間にかスレイブと入れ替わっていたのだ。

エッジはマルガの傍によると、その額に手を当てる。

「ぐおおおおおおおアギアアアアアアアア!!」

その雄たけびと共にマルガの身体が変わる。身体が骨のような白い外骨格と黒い闇に覆われながら巨大化。

黒い闇に白い骨が包んでいるような格好の高さ四メートルほどの骨の巨人がそこにはいた。

「ようやくゴーストの第二段階ですね。」

巨大な骨の巨人に呼応するかのように追加で出現するスレイブ。その数は百を超えようとしている。

「あいつら・・・まだ・・・。」

避難その物は終わりつつあるが、予想外の増援に数で圧倒的に劣るディーノ達を押されそうになっていた。

その上・・・骨の巨人とかしたマルガの力が半端ではない。

爪が伸び、パラディンの一人がそれに貫かれる。装甲を突き破り中の人体に達する一撃。

その一撃に倒れ伏す。破壊された装甲から血が出ている。

「ぐっ……。」

倒れた仲間をかばうように他のメンバーがマルガに向けて銃撃。弾膜に足を止めるマルガ。その全身から黒い霧が噴き出す。

その霧に触れた地面が溶解しはじめる。それを見てパラディン達も後退を余儀なくされるが、その行く手をスレイブが阻む。

「こいつらだけじゃねえ。いでよ・メガビースト!!」

その言葉と共に地面を突き破って巨大な物が現れる。

それは巨大な鋼の獣。

小学校の水泳用プールよりも大きな甲羅から、頑丈な四つの手足。長い尻尾と長い首、首の先には嘴の様な口がついた頭。

その口が開かれ、光が集束。

集束された光が解放される。

光は地面をとかし。そのまま演習場の壁を粉々に粉碎した。

あまりの破壊力に啞然となる皆。

皆の動揺など気にする様子もなく、巨大な亀は再び口を開け光を集束していく。

しかし、それに対して真っ先に行動をした者がいた。

「うおおおおお!!」

———ジェットナックル! ジェットブーツ。

その亀の頭をブーストが肘のあたりに付いた巨大な拳で殴り上げる。

肘のブーストと両足のブーストを同時に開放させた拳はトータスの頭を大きくのけぞらせる。

その反動で集束された光が上へと解放。ドームの天井に巨大な穴があく。

殴ったのはディーノである。

「……味な真似を……。トータス!」

エッジの命令にトータスの長い尾が、空中に上がり無防備になったディーノを容赦なく叩き落とす。

地面に落ちたディーノをトータスの巨大な足が容赦なく踏みつける。

「ぐっおおおおおぬうう・・・」

重い質量に悲鳴を上げるパラデインの鎧。

全身に日々の入った装甲。

それを用やなくトータスは蹴飛ばした。

「ぐあああああああ！！」

バラバラに破壊されていく装甲。

ヘルメットは完全に破壊され、腕や足も一部露出してしまっている。

ダメージは大きく、ディーノは気を失っていた。

「・・・始末してあげなさい。」

エッジの言葉にトータスは再び口から光を集束。

それをディーノに向けていた。

「ディーノ！！」

「させない。」

ディーノを助けようとする仲間の前に立ちはだかったのはホーン。左手を地面にたたきつけると同時に紅い波動を放つ。

その波動は津波や突風のように彼らに襲いかかり、その足を止める。

「ぐっ・・・」

ようやく気がついたディーノは集束される光を見ていた。

破壊され、機能を失った鎧の重みと身体に受けた怪我が動きを阻害する。

その光を止めようと砲撃も放たれる。

放たれるガトリングの強力な弾に、大砲から放たれる砲弾。

それはすべてトータスの頭に命中している。

「————ディーノ！！しっかりしろ！」

ジュエルも必死に念話を飛ばしながらライフル型のデバイスから高速の魔力弾を放つ。

だが・・・トータスはそれらの攻撃に意に返さない。砲弾の衝撃は受けているようで、軽くのけぞるが、それだけだ。光の集束終わり、今まさにその光をディーノに向けて放とうとしていた。

「無駄ですよ。メガビーストシリーズ・・・トータスの装甲は戦艦を超える厚み。その上に全身をエネルギーでコーティングして、要塞並みの防御力になっています。その程度の攻撃なんてないも同然です。」

エッジが無駄な努力と皆をあざ笑う。

そして・・・光が解放しようと亀が大きくのけぞったその時だった。

凄まじい衝撃と共にトータスの背中に黒い稲妻を纏った何かが落下したのは。

厚い装甲を誇り、エネルギーで覆われて強度が高められたトータスの背中を粉々に打ち砕き、そのまま、その巨体を地面に縫い付けたのだ。

衝撃は巨体を砕きながら地面に伝わり、地面と大気を派手に震わせながら巨大なクレーターを作っていた。

完全に破壊されたトータスの背中には落下してきた異形が立っていた。

「・・・魂無きものに名乗る名はない・・・逝け！」

その言葉と共に爆発を起こすトータス。その爆発はそのまま異形

を飲み込む。

まき散らされる破片と吹き荒れる爆風に、皆は足を止め、思わず堪える。

「・・・我は暴食を司る者。」

爆発の中その異形の声が聞こえる。

「我は冥府を司る者。」

異形は爆炎の中にいた。

「我喰らうはこの世の毒。身勝手な欲と言う名の浅ましくも愚かしい罪と穢れ。」

爆炎の中、紅い目を光らせながら、平然と歩いていた。

「今宵は、亡者の狂おしい怨みを浅ましい穢れ達が彩っているようだ。その罪と怨みを堪能させてもらおう。」

爆炎から出てきた異形の身体を・・・赤いマントが守っていた。

「魔王・・・ベブゼブブ・・・。」

その姿を見たディーノから異形の名が呼ばれる。それと共に異形は紅いマントを消しながら、応じる。

「そう。我は魔王ベブゼブブ。暴食と冥府を司る魔王なり。」

彼の言葉に場が支配されていた。

「さあ・・・お前達に魔王と言う名の恐怖を味あわせてやろう。」

魔王の手に現れる一丁の銃。それをスレイブに向ける。

「冥土の土産にな。」

その言葉と共に引き金。

亡者と鉄の怪物が蹂躪しようとしていた戦場に今・・・魔王が降り立つ。

## 聖騎士と蒼竜 承（後書き）

魔王様には想定していた以上の派手な登場をさせてしまいました。今回は・・・かなり苦戦しています。少しかなと思っていました。が、新しいライダーを書くに至って苦戦をしています。

魔王に関してはこちらの願望もあるので書きやすいのですが、こっちが考えている関係上新しいライダーを出すのは必然なので・・・もっとしっかりイメージしないと。

あと・・・書いて見て思ったのですが、黒に赤いマントは合わないかもしれませんね。イメージしてみると・・・少し違和感が。

皆さんはどう思いますか？

意見次第では・・・訂正してみたいと思いますが？

またの意見、感想をお待ちしております。

小説をさらに面白くしたいのでよろしくお願いします。

聖騎士と蒼龍 転(前書き)

タイトル変更をしました。

やっとできた。

かなり長くなってしまったし、展開が唐突かもしれません。

この話を書くに至って、竜騎を思い浮かんだのはなぜでしょうかね？

では・・・よければお楽しみください。

??? 「俺は・・・お前の心を救って見せる！」

??? 「さあ・・・裁きの時間だ。」



## 聖騎士と蒼龍 転

魔王の乱入に二つの陣営は咄然としていた。

何しろディーノ達からしたら最大の脅威で、エッジ達アーマードからしたら止めの兵器となるトータスが唐突に倒されてしまったのだ。

「あれが・・・魔王。」

ディーノ達を初めとする管理局員の多くもその姿をみて畏怖の念を隠せない。

魔王ベルゼブブ。管理局上層部が、第一級封印指定の生体ロストロギアと認定して排除に乗り出そうとしている危険な存在。

報告だけで管理局員たちは実際に彼を見たわけではないので、しっくりとこなかった者も多かった。

だが・・・彼の登場で皆はそろって納得していた。

確かにあれは・・・危険な存在だと。

鋼鉄すら貫通するパラディンの弾丸による攻撃をものもしなかった程の装甲とパワーを誇るトータス。

彼はそれを問答無用の一撃で完全に破壊したのだ。その余波で地面には巨大なクレーターと共に地面も空気も大きく震えた。・

放たれたのは黒の電撃と超重力を纏わせた右足のキック。

技の名前はミヨルミル・クラッシュ。ある神話で最強と言われた戦神の武器であった鎚の名を使った蹴り。

古きベルカの時代にあった多くの質量兵器にも、一撃でこれだけの破壊を可能とする物はそうはないはずだ。

その一撃を放ち、爆発の中から名乗りを上げながら出てきた魔王。その魔王が手にした銃から放たれる弾丸。その一撃でスレイブの

一体がバラバラになる。

それに反応し、スレイブ達が一斉に手にした火器を向ける。

「・・・もうお前らの戦いは見切っておる。」

そして、彼は放たれた弾丸や砲撃の雨の中を舞うようによつてきたのだ。

ある時は一回転し、ある時は飛び、ある時は細かい足さばきを見せながら。

そして、たまに華麗なステップを踏みながらから手にした銃や手で弾丸をまるで飛んできた蟲をはたき落とすかのように払う。

そして、弾丸を放ち、スレイブを確実に仕留めていた。

「おいおい・・・何で当たらない？」

意思のないスレイブ達に変わり、ホーンが思わずうめく。弾幕を張っているのに、まったく当たらないのだ。無理もない。

まるで実体のない幽霊に向けて弾丸を放っている気分になるだろう。

その言葉と共にベルゼブブは手にした銃から弾丸を放つ。

「穿つ牙。」

放たれた弾丸は空気を轟音と共に穿つ。そして、弾丸は轟音とともに軌道上にいたスレイブをまとめて破壊したのだ。

「散る飛沫。」

その言葉と共に再び弾丸が放たれる。

その弾丸は大きな砲弾のようなものだったが、スレイブ達の前でバラバラに拡散。

弾丸の雨をスレイブ達に降らせる。

凄まじい火力を誇る二つの弾丸に、スレイブ達の弾幕が弱まる。

その隙にベルゼブブはスレイブ達に肉薄。

手始めに一体を回し蹴りで頭を吹き飛ばす。

それを見てベルゼブブの傍にいるスレイブが十体ほど銃を投げ捨て、小型の剣と盾を取り出して、瞬時に構える。

「ほう・・・。接近戦に対応できるようになったか。」

スレイブ達は互いに顔を見合せずに、ベルゼブブに向けて盾と剣を構える。

「集団戦法……。強敵にはいい戦法だ。」

一斉に、しかも逃げ場をなくすように斬りかかるスレイブ達。

「だが……。我には無意味だ。」

しかし、それらを一斉にベルゼブブの肩や腰から飛び出した鉄球がついた鎖が吹き飛ばした。

「広範囲を一度に攻撃できる相手。それも自分中心に行える相手を取り囲むのは逆に悪手。それを学習させてやる。」

そう言いながら、腕から鋭い二股槍の先端を持つ鎖を飛びだし。一体のスレイブを貫く。そしてすぐに二股の槍が展開し、貫いたスレイブの身体に引っ掛かる。

それを見て好機と思ったのか、スレイブ達が銃の引き金を引く。

ベルゼブブは後ろに身体を翻しながら飛ぶ。そして、飛びながら鎖でひっつけたスレイブを入れ替わるように引っ張り、銃を向けているスレイブ達に突っ込ませる。轟音とともにスレイブ同士がぶつかり、吹き飛ばされていく。

鎖を引き、今度は後ろから斬りかかろうとしたスレイブにぶつける。

弾丸を上へと舞うように交わしながら右、左と鎖を操り、スレイブ同士の激突を起こす。

そして、鎖を振り回し、周囲にいたスレイブをまとめて薙ぎ払う。一回りしたところで、鎖で貫いていたスレイブのボディが限界を迎え、粉々になる。

「……。意外と作りは頑丈なのだ。いい鈍器になった。」

ベルゼブブのコメントと共に、ベルゼブブの周囲にいたスレイブはすべて全滅していた。

残ったスレイブは既に四分の一程度に減っている。

彼らは一斉に火器をベルゼブブに向ける。

放たれる火器をマフラーが動き、全て弾き飛ばす。

「さて・・終わりにしようか。」

その言葉と共に銃に収束されていく黒い稲妻。

「解き放つ黒き雷と闇。」

その言葉と共に放たれる黒い巨大な球体。

それが残ったスレイブ達の群れの真ん中にて炸裂し、全てを飲み込み、破壊する。

放ったベルゼブブはエッジ達の方を見て、ゆっくりと歩き出す。

その歩みを止める者は誰もいない。

「嘘だろ？おい・・。」

ホーンは思わず後ろに下がってしまう。

「寒気すら・・感じますよ。」

ベルゼブブの歩みの後には物言わぬ残骸とかしたスレイブ達がい

た。  
ディーンはベルゼブブの強さに対する考えをすぐに変える事になった。

「——強い・・。魔力もそうだけど・・。純粹に実力がけた違いだ。」

ディーン達によって撃退できたが苦戦を免れなかったスレイブ達。新たに召喚された数はそれより多い。

それをベルゼブブはたった一人で、楽に倒してしまった。

しかも本人は無傷で、余裕もある。

「大丈夫か？」

倒れていたディーンを助ける隊長達。

「ありがとう・・ございま・・。隊長！」

そこまで言いかけてディーンは隊長の後ろから迫る影に気付く。  
隊長を押し飛ばすディーンの手を・・。異形と化したマルガの一撃が吹き飛ばす。

「ディーン！！」

マルガの一撃は纏っていた鎧をさらに壊しながら吹き飛ばされる。  
「デイナー！逃げろ！」

そのデイナーに迫るマルガをかばおうと隊長達が立ちあがる。

——ガトリングユニット。

班の二人が手にしたガトリングから放たれる弾丸に怯むマルガ。

——バスターユニット。

腕と一体化した大砲を出した隊長が止めにエネルギーを充電させ、それを叩き込む。

マルガの異形と化した身体が大きく吹き飛ばされ、身に纏っていた骨と闇をすべて破壊する。

「・・・やったか？」

中から出てきたマルガ。だが・・・その眼が赤く輝きを放っていた。

「・・・パラティン・・・！！」

マルガがさらに激昂。それとともにマルガの身体を黒い闇が覆う。そして中から現れたのは・・・人間大の異形と化したマルガ。

全身を覆う紅い血のような甲冑。その姿は・・・紅いパラティンのような姿だった。

足のローラーを駆使して、突進してくるマルガ。

右手にはアームブレイドが装着され・・・それを突き立てて突進。隊長の身体を貫いた。

「・・・がっ・・・ぐっ。」

『隊長！！』

血まみれのブレイドを引き抜かれ、力なく倒れる隊長。

その隊長に駆け寄る2人の聖騎士。だが・・・その二人を紅いパラティンの左手に装着された大砲が襲いかかる。

通常より高い攻撃力に鎧を破壊され、倒れる二人。

「くそ・・・。」

それを見ながらも、立ち上がろうとするデイナー。

そのデイナーに向けてマルガが大砲を構える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ディーンに大砲を向けたまま固まるマルガ。

「？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ディーン・・・・・・・・ノ・・・・・・・・。」

名前を口にするマルガ。

「・・・・・・・・おっさん？」

「ヤメ・・・・・・・・ロ・・・・・・・・ヤメロ・・・・・・・・！！！」

光を蓄えながら震える大砲。それは照準を合わせようと言うよりは・・・勝手に定まる狙いを逸らそうとしているように見えた。

「ヤメテクレエエエエエエ！！！」

「解き放ちは黒き稲妻の鎚！」

光が放たれようとした時、マルガの身体を黒い電撃を纏わせた右足の蹴りが吹き飛ばす。

派手な打撃音と共に会場の壁の向こうに消えるマルガ。

「・・・・・・・・まさか、こんなにも早くゴーストの第三段階に出くわすとはな。」

蹴りを放った本人――ベルゼブブは立ち上がるマルガを見ながら深いため息をつく。

「ゴースト？おっさんに何があった？」

ディーン言葉に、魔王は振り向く。・

「お前・・・・・・・・あいつの縁者が？」

頷くディーンに魔王は深いため息をつく。

「・・・・・・・・簡単でいいから、ゴーストの元になった人のことを教えて欲しい。」

ディーンは簡単にだが、マルガの事を説明する。彼がこのコンペであるパラディンの設計者であり、その彼の息子と交流があった事。その彼が一週間前に殺され、息子も行方不明になっている事もだ。  
「・・・・・・・・ゴーストってなんだ？こっちも質問に応えたから、教えてくれ。」

魔王に対して、質問を返してくるディーン。彼の圧倒的なプレッ

シャーはよくわかってはいたが、今はマルガが目の前にいる意味を知るのが勝っていた。

「・・・こちらの問いの対価か。いいだろう。」

ベルゼブブもその対価の為に応える。

「ゴースト。それは誰が知らんが死者の魂の名残・・・残留思念と死体をもとにして生み出された一種の魔法生命体だ。判りやすい魔法で言うなら・・・完全自立型の使い魔を作ったと思えばいいか。」

「残留思念？」

「ああ・・・。死に間際・・・酷い目にあつた。そう言った魂をゴーストとして利用するケースが多い。」

「流石に博識ですね。」

ベブゼブブの言葉に応えるのはエッジだった。ホーンとともに壁から出てきたマルガの隣に並ぶ。

「・・・お前達のような存在は初めてだがな。ゴーストと・・・シードも関係あるのか？」

「私の主と主の同士達が。このコンペに大きな危惧を抱いておりましてね。ゴーストを一体賜って、ぶち壊しに来たのですよ。全く・・・シードに対抗できる故に厄介な物を作って・・・。」

エッジの言葉はそこで止まってしまった。

その口をベルゼブブの弾丸を避けるために止まってしまったのだ。大きく避けるエッジ。彼がいた場所の空気が地面ごと抉れ、後ろの壁が粉々になっている。それを見てエッジもホーンも固まっている。

「こっちもわざわざ説明した甲斐がある。・・・やっと・・・見つけたぞ。」

放った本人は怒りを隠そうともしていない。

「ずっと探しておったのだ。あんなふざけた事をしでかした奴らにな・・・。」

怒りに目を紅く光らせるベルゼブブ。

「待ち通しかつたぞ。加害者。今まで・・・ずっと被害者ばかりに

あってきたからな!!」

ゆつくりと逃げ場を奪うようプレッシャーを放ちながら歩くベルゼブ。

「くっ・・・切り札をもう一体だすぞ!」

ホーンはそう言ってベルゼブの前に巨大な魔方陣を展開。

そこから浮かび上がるように現れるのはメガビースト――トータスだった。

「必殺技さえなれば・・・こいつで十分!」

トータスが口を開き、光をベブゼブブに向ける。

しかし、その口をベブゼブブの腰から発射された鎖が巻きつき塞ぐ。

そして鎖が高速で巻き取られ、それに乗ってベブゼブブが高速で接近。

トータスの巨体を蒼い炎を纏わせた右拳で殴り飛ばしたのだ。一撃で宙に吹き飛ばされるトータスの巨体。

「我解き放つは赤き魔剣。」

その言葉と共に左腕の鎖が解き放たれ、手に紅い魔剣が現れる。彼の足元には紅く輝く魔方陣が展開されていた。

「我が左手に宿る剣は蝕みの魔剣。」

トータスの上昇が終わり、重力に引かれて落下していく。

「すべてを蝕む赤き呪い。神すらも殺し、無に帰す。これ・・・神殺しの一撃。」



剣が紅く輝くとともにトータスの周りに紅い水晶が囲むように現れる。

ベブゼブブは紅い落下するトータスの身体に突きあげるように剣を繰り出す。

トータスの装甲を打ち破る剣。ベルゼブブはその巨体を突き上げた左手一本で支える。

「邪魔だ・・・逝け！」

その言葉と共に・・・紅い剣が輝きが消え、それと反比例するかのようにトータスの身体が光になって分解されて消えてしまった。爆発も無く、トータスの身体は光となって消えてしまったのだ。

『・・・・・・・・・・。』

切り札をあっさりと倒されたことに啞然となるエッジとホーン。

「・・・知っている事・・・すべておしえてもらうぞ。」

ゆっくりとエッジとホーンに迫るベブゼブブを押し返したのは・・・マルガだった。

足のローラーを全開にして突進し、ベブゼブブを弾き飛ばしたのだ。

「・・・苦い味だな。ゴーストと戦うのはいつも・・・。」

目の紅い光を修め、マルガと対峙するベブゼブブ。

「・・・今・・・楽にしてやる。」

そう言って銃を向けた瞬間だった。

——————サークル・バインド

複数の電子音声とともにベブゼブブの足元に展開される魔道陣。そこから伸びる無数の魔力の縄がベブゼブブの全身を拘束したのだ。

「・・・これは？」

軽くもがくが、魔力を高濃度に圧縮したバインドらしく簡単に引きちぎる事が出来ないようだ。

「第一級封印指定生体ロストログア・・・通称暴食と冥府の魔王ベブゼブブ。」

拘束されたベブゼブブの元に現れたのは五体の天使。

身体を纏う黒のスキンに、白の装甲を纏った姿。

腰に巻かれているのは天使の翼を模したベルト。

フルフェイスの兜には白い翼を模した耳飾りと蒼い複眼の様な眼がついている。

背中には光輝く金属の翼。降り立つとマントのようになる。

「お前・・・封印しにきたぜ。」

手にしているのは剣が二人。杖が2人。ボーガンを手になっているのが一人。

剣を持った天使が拘束されたベブゼブブに向けて宣言しながら、腰のホルダーからカードを一枚取り出す。

それを剣の側面にある溝にスライド。データを読み込ませる。

——————シール。

それに習い他の四人も手にした武器に同じカードをスライドさせる。

読み込んだカードが光となって消え、発動される封印の魔法。無数の魔方阵が複雑に展開され、ベルゼブブを囲む。

「解き放つは・・・黒雷の鎚！」

しかし、地面にあったその方阵を黒い稲妻を纏った足で踏みつけて壊してしまった。

その衝撃で地面がへこみ、小さな亀裂が走り、軽く地面が揺れるほどの衝撃が来る。

「なっ？」

「・・・いきなり封印とは物騒だな。」

ベルゼブブはいきなり襲いかかってきた者達と対峙する。

「・・・さすがにでたらめだな。Sランクの魔道士でさえも簡単に封印できるのに、それを簡単に・・・」

油断なく武器を構える天使達。

「・・・カードに複雑な術式と大量の魔力が込められているようだな。それを読みこませることで、通常なら発動に時間と魔力がかかる強力な魔法を瞬時に使えるようにしているか。斬新なシステムだな。」

「・・・エンジェルシステムを一発で理解しやがったよ。」

その言葉に剣を肩に担いだ天使が軽く呆れる。

「お前ら・・・もしかしてパラディンと対になっていたもう一つの計画――エンジェルなのか？」

「・・・そこまで理解しているのか。だったら話は早い。」

そう言っ、剣を向けるエンジェル。だが・・・それに対してベルゼブブは背を向けた。

「悪いがそれは後にしてくれ。別の奴を相手にしないと・・・。」

そこまで言いかけて、ベルゼブブは素早く振り向き、腕をかざす。

「そんなの・・・関係ねえな。」

鎖を巻かれた腕に食い込むのはエンジェルの剣。

「その声・・・聞き覚えがあるな。」

「ああ・・・。覚えてくれていたのか。それは光栄だ。」

剣を弾き飛ばすベルゼブブ。しかし・・・彼は驚かずに拳を構える。

「あの時はよくも俺に恥をかかせてくれたな。その礼を今・・・してやるぜ!!」

――ナックル!

拳に突然強大な魔力が発生。肘からロケットのように噴射した魔力の勢いと共に拳がベルゼブブの顔面を捉える。

「ぐっ!?!」

突然の強力な一撃に後ろに吹き飛ばされるベルゼブブ。

痛みに顔をしかめながら、ベルゼブブは思い出していた。

かつての事件でシードの犠牲者となったヘルス。そのヘルスがシ

ードを得てしまう原因を作った男——名前はガイ。

「なるほど・・・あの時の男か・・・」

拳を繰り出した左腕の小手から輩出されるカード。それが光となつて消えていく。

——・・・小技だな。他の手足にも同じような機構が付いていると考えるべきか。

ガイは思い出してくれた事を嬉しく思いつつ剣を向ける。

「思い出してもらったようだな。」

「ああ。故に納得もしている。」

「なっ？」

そう言うガイに向けて立ち上がりつつも素早く接近し、拳を振り上げるベルゼブブ。あまりの速さにガイも気付くのが遅れる。

「もつと・・・反省してこい！」

その拳がガイに向けられる。

「ぐっ？」

——ピンポイントシールド！

左腕のカードを装填させ、超圧縮された盾を展開させた別のエンジェルが間に割り込みをかける。

盾で受け止められるベルゼブブの拳。

しかし・・・そのまま押し切られ、二体まとめて吹き飛ばされた。「ぐううううう・・・でたらめな奴だ。」

地面を足で削りながら、辛うじて堪えるガイともう一体のエンジェル。

「・・・思ったよりやるな。」

ベルゼブブは一步後ろに下がる。

彼が下がったと同時に、彼のいた場所に光の矢が通り過ぎていた。「・・・連携もそれなりにか。」

——ファランクスシフト。

杖を持つ二体のエンジェルが杖に直接カードを読み込ませて発動させる魔法。

それは・・・合計三ケタはくだらない大量の魔力スフィアが発生する。

「…………特性は見抜いていたが・・・さすがに厄介だな。」

エンジェルシステム。

カードと言う外部大容量のプログラム端末とカードリッジの数倍の魔力を内包した特殊なカードリッジシステムと言い換えた方がいいかもしれない。

プログラムの容量と処理速度は一流魔道士が長い詠唱をしないと発動できない大規模魔法を瞬時に発動、自在に操作できる。内包されている魔力もそれを十分に可能するだけの量がある。

弱点があるとしたら、それはカードを読み込ませないと発動的でできないという手間だ。

だが、それを彼らは十分に補う手段を有していた。

一つが手や足などにあらかじめ任意のカードを数枚装填。アクショントリガーなど、任意にそれを発動するというものだ。

もう一つが連携。一人ではなく、常に複数で行動することによって、カードを読み込ませる時間を作ると言う事だ。

「…………ゴーストや他の連中もまだだと言うのに…………」

ベルゼブブは五体のエンジェルに苦戦を強いられていた。

マルガはその隙に残っていたパラディンに向かっていた。

大けがを負った隊長を必死に助け出そうとしている彼らに向かつて剣を突き立ててきたのだ。

「うおおおおおおおおお！！」

しかし、その剣をディーノが止める。

落ちていたパラディンのシールドを持って。

『ディーノ！？』

「ぐうううううう…………！！」

パラディンの強化された腕力で使用する盾は生身の人間が肉体強化無しで持つにはあまりにも重すぎる。

だが、彼はそれを両手で持ち、凄まじい突進に押されながらもマルガの狂剣を止めていた。ボロボロの身体から上がる悲鳴を雄叫びで押し殺した上で。

「早く……隊長を!!」

「……すまない!」

必死にディーノは盾で応戦する。

———何故お前は戦う? 何故……皆を守ろうとする?

その彼の頭の中に再び聞こえてきた問い。

「ウガアアアアアアアア!」

マルガが左腕の大砲を盾に向け、放つ。

「ぐああああああ!!」

盾が粉々に砕け散りなりながら、吹き飛ばされるディーノ。

「ぐっ……うう……」

そのディーノに目もくれず、パラディン達に向かうマルガ。

しかし、その足が止まる。

「やめて……くれ……。おっさん!!」

その足をつかむディーノがいたからだ。

「ディー……ノ?」

「もう……こんなこと……やめてくれ!! あんたが……作ったパラディンだろ? あんたがみんなを守るために……必死になって作った物だろ? あんたが……こんなこと……望んでいないはずだ」

ボロボロで涙を流しながら、必死に彼を止める。

「ディー……ノ……うううううう……」

「このゴーストの縁者が。」

必死に止めようとするディーノを容赦なく踏みつけるホーン。

「がっは!」

「……へえ。まだこいつにも知り合いを思う心が残っていたとはねえ。あの方がそう言うように設定していたとはいえ……中々面白

い。」

エッジは苦しむゴーストを見て楽しんでいる。

「おま・・・えら・・・いい加減にしろ・・・！」

ディーノは傍にあった銃を手にとり、ホーンの顔面に放つ。

「ぐっ!？」

一発が彼の目に命中し、火花と爆発が起こる。そして、足が緩んだ隙に脱出。

「お前ら・・・おっさんの魂をなんだと思っている!? 一生懸命に生きたおっさんを踏みにじるようなことを・・・平気でしやがって!」

「貴様・・・ぐっ?」

エッジがディーノに向けて斬りかかろうとした時だった。

彼らに向けて一斉に魔力弾が放たれ、その衝撃でエッジがよろめく。

「一体なに・・・が?」

そこには杖を構えた武装局員たちの姿。

「応援が来たか。」

「生意気な。」

魔力弾を受けたエッジが背中の中の翼から無数の刃を射出。それを局員達に向けて放った。

彼らはそれをプロテクションで防ごうとする。

「その程度では・・・足止めにもなりませんよ。」

しかし、放たれた刃はその盾を貫き、中の局員達に襲いかかる。

悲鳴すら上げる暇もなく切り刻まれる局員達。

「よくもやってくれたな。」

片目を破壊されたホーンがディーノに迫る。

「ぐっ・・・。」

そのディーノに向けても一人の武装局員が走り出す。手にした槍のような杖で突撃し、ホーンの腕に激突。ホーンはその勢いで倒れる。

「ぐおっ・・・」

「大丈夫ですか？」

その局員は緑の髪をしたまだあどけなさの残る少女。その少女の顔が苦く歪む。

あまりにもディイーノが負った怪我が酷かったのだ。生きているのは不思議なくらいにあちこちボロボロになっている。

「うう・・・くっ・・・」

それでも彼は立ち上がりとしている。

「無っ・・・無理はしないでください。」

「そう言っている場合じゃねえぞ。」

ディイーノの視線の先には立ち上がり、二人を睨みつけるホーンの姿。隣にはマルガもいる。

「逃げる・・・」

「ええ。」

そう言いながら彼女はディイーノを担ぎあげる。

「おい？」

「あなたも一緒です。私じゃ・・・勝てないけど、助けることならできそうです。」

「逃がすと思いましたか？」

行く手を阻むエッジ。ホーンと対峙する格好となる。

「・・・いい加減に倒れろ。」

そんな二人を助けようと局員やパラディン達が向かおうとするが、その行く手を阻んだのは・・・マルガだった。

手にした大砲に集まった魔力を砲撃として辺りを薙ぐように放ち、駆け寄ろうとする者たちを一斉に吹き飛ばす。

「覚悟しなさい。」

「さらばだ。」

エッジが腕の刃で切りかかり、ホーンが右手の角を突き付けながら突進。

それを見てディイーノはとっさに彼女を庇うように弾き飛ばす。



「えっ？」

吸い込まれるようにディーノの身体に食い込むエッジの刃とホーンの角。

それが身体を切り裂き、血しぶきを上げながら彼は倒れようとしていた。

——それがお主の答えなのか？身を呈してまで……誰かを救うことが。

彼の行為に声の主は問う。

今際の際ディーノは当たり前のように応える。

「だってよお……。嫌じゃねえか。」

——嫌だと？

「人の笑顔が……。目の前で消えていくんだぜ？救えなかっただけで、その人だけじゃねえ、笑顔を奪った人もその人の周りからも笑顔が消える。そんなの……。嫌にきまっているだろ？」

人を救う現場で彼は人の命の重みをよく知っていた。

そして、人一人がいなくなると言う喪失の深さを……。マルガの死で思い知っていた。

——それが……。答えだと言うのか？笑顔の為に前は戦っている？

「……。そう言えば……。おっさんにも聞かれたよな。なんで人を救う仕事をしているのかってよ。」

それは二か月前にマルガに聞かれた問い。

格闘技者として高い実力を持つのにレスキュー隊にいた理由だ。それに対してディーノは応える。

「俺は……。少しでもみんなが心の底から笑顔になれるために……。命だけじゃなくて心も救って……。笑顔になるためにやっているんだ。」

マルガに対しての答え。それはマルガがいなくても変わらない。

むしろ強くなった彼の応え。

「だがよ・・・死んでしまったら・・・意味・・・ないよな。情けないぜ。こんなことでしか人を救えなかった。」

—————

ディーンノの答えに声の主は言葉を失っていた。

「ちくしょう・・・。おっさんを止めらなかったし・・・まだ・・・まだしたい事がたくさん・・・。」

————— 死なせない。あなたを・・・絶対に死なさせません。

ディーンノの言葉に声の主ははつきりと断言した。

————— あなたが・・・父上の言った希望の苗だと言った理由がよく判りました。あなたは希望。もっと大きくなり、皆を手を差し伸べる事ができる大きな希望です。

ディーンノの目の前に現れる蒼い小さな龍。

「蒼い・・・龍？」

————— 私は決めました・・・。あなたを・・・私の主に！！

それは突然のことだった。

『ぐあ！？』

蒼い一撃に薙ぎ払われ吹き飛ばされるエッジとホーン。

そして、エッジとホーンの致命的と言える一撃を受けたはずのディーンノはたっていた。

血まみれのディーンノを守るようにして空中でとぐろを巻くようにしてあらわ得たのは蒼い龍。

それを見たガイ達が動揺を示す。

「なっ・・・あの龍は研究所の？」

「———なんだ？あれは・・・。かなりの力を・・・感じる。  
ベブゼブブもその龍を注視している。」

蒼い龍の出現に、場は静まり返っていた。

「我が名は・・・ガロヴィンド。」

蒼い龍は頭をディーンノに向けて名を告げる。

「汝・・・我と契約し、力を得るか？」

突然の事に驚きながらも、ディーンノは頷く。

「汝の名を告げよ。」

「俺の名はディーンノ。ディーンノ・グローディアス」

そう言いながらディーンノは右手を蒼龍ガロヴィントに向ける。

その右手に触れたガロヴィントは瞳を光らせる。

それとともに二人の間に紅の小さな宝玉が現れ、それがディーンノの中に吸い込まれて消える。

「契約は成った。今より私は主の盾であり、矛であり、そして・・・  
鎧となろう！！」

その言葉と共に蒼い龍が光に包まれる。

それとともに周りにあったパラディンの鎧や数々の武器が蒼い龍に引き寄せられ、身体に吸い込まれていく。

そして光が晴れると、蒼い金属製の殻のような物に覆われたガロヴィンドの姿がいた。まるでロボットのような龍。腹や爪、角は銀色に輝いている。

蒼い龍が姿を消し、小さな箱のような物に変わる。蒼い龍の頭部を模したその箱をガロヴィン度は手にして腰に当てる。

腰に巻かれるベルト。そしてディーノの手に現れる紅い宝玉。

「変身！」

そう叫びながら、ディーノは紅い宝玉をベルトの龍の口にくわえさせる。

それと共に、ディーノの全身に現れる無数の魔道陣。

現れる無数の部品。それが組み合わせり、ディーノの身体に装着されていく。

黒いスーツの上から到着されていく蒼と銀の鎧。

頭は龍の頭を模した物になっており。龍の口に当たる部分がバイザーになっており、そこから紅い目が光を放っている。

左手は銀の盾が腕に装着され、銀の装甲に肩まで覆われ、右手には紅い宝玉の付いた小手が付いていた。

彼と助けた少女の武装局員の周りを守るように先ほど現れたガロヴィンドが現れる。

「……俺は……お前の心を救って見せる。」

救世の蒼い竜騎士の誕生であつた。

「……オリジナルパラディンが覚醒したというのか？」

蒼い龍騎士となったディーノの登場に、辺りは騒然としている。

「こっちもそろそろ動くでしょう。オリジナルエンジェルの力・見せてもらうぜ。」

その様子を壊れた屋根の穴の中から見下ろす男。手にしているのは紅い翼の天使を模したベルト。

「—————使い方は説明したとおりだ。お前なら……使いこなせるだろう。」

それを腰に装着する。

「プレッシャーを与えるのがうまいなミカエル。」

男はベルトに対して苦笑いを浮かべながらカードを手にする。

「変身！」

腰に装着したベルトにカードを読み込ませる。

それと共に赤き翼が舞った。

蒼い竜騎士の覚醒共にそれは紅い羽とともに舞い降りた。

身に纏っているのは黒のインナーに赤と金の鎧を纏った天使。

肩の装甲は翼のように。手甲も足も翼を模し、足は鳥の足をイメージしている。

頭は炎の鳥と天使をイメージしており炎の鳥をイメージした兜に、天使の羽飾りが左右に付いた格好となっている。

彼の左腕には炎の鳥が描かれている円形の盾。右手にはナックルガードの付いた長剣を手に行っていた。

背負った紅と金の色の付いた翼からは光の粒子と共に紅い羽が降り注ぎ、ベブゼブブを囲んでいたエンジェル達に触れた途端に爆発を起こす。

「ぐあっ?」

次々と起こる爆発に翻弄されるガイ達はとっさにベルゼブブから離れる。

ベルゼブブはマフラーを翻し、降り注ぐ羽をすべて吹き飛ばす。

そして、彼は静かに、そして優雅に降り立つ。

「私の名はミカエル。」

紅い翼の天使ミカエルはホーンとエッジに向かって指をさしていた。

「さあ・・・裁きの時間だ。」

裁きを司る紅い天使が降臨。

二体の出現が。闘いが終結に向かうきっかけとなる。

## 聖騎士と蒼龍 転（後書き）

オリジナルライダー。ようやく形にできました。色々な物を参考にして、こっちが妄想していたものを組み合わせてようやく完成です。

話の流れも難しく、転の話では事態があっちこちに二転三転してしまうというので、もしかしたら読みにくいかもしれません。

次で終結させます。

新しくあらわれた二体の仮面ライダーをよろしくお願いします。

ちなみに二体の大本は龍はもちろん竜騎、紅翼はブレイドです。

ヒロインがまったく出ていないというものの疑問かもしれませんが、終結編で出そうと思います。

この話のあと・・・新しい話に変わっていきます。



## 聖騎士と蒼龍 結（前書き）

エクシリアを買いました！！

やってみて・主人公二人のやばさを知りましたよ。

しっかりしたかわいい弟君と美人で格好いいけど天然のお姉さん。  
いい感じです。

うまく小説の執筆と並行して進めていききたいですね。

## 聖騎士と蒼龍 結

蒼い龍騎士となったデイーノは己の身体を見て驚きを隠せないでいた。

「なんだ・・・これ？」

「あの・・・。」

そのデイーノの背中に話しかけるのは先ほど助けた武装局員の少女。

振り返り、デイーノはその安否を確認する。

「大丈夫だったか？えと・・・。」

「わっ・・・私はヒルデ・ブリュースター三等空尉であります。」

「そっ・・・そうか。俺は・・・デイーノ。デイーノ・クロードィアス三等陸士。」

そう言いながら、彼は後ろを見る。

「パラディイイイン！！」

魔力が充電された大砲を向けたマルガの姿がそこにはあった。彼に向けてそれ放たれる。

かなり長く集束されていたのだろう。オーバーSランクの威力の集束砲撃が広範囲でしかも、殺傷設定でデイーノ達に向けて放たれる。

彼は後ろにいるヒルデを見る。ヒルデだけではない。倒れている武装局員達にもそれはむかっている。

——逃げるわけにはいかない。

デイーノはそう決意し、左手を見る。

「・・・いくよ。ガロ。」

その言葉にどこからともなく声が聞こえてくる。

「それは我の愛称か？」

「ああ。今決めた。」

「さようか。まあ・・・悪くはないか。なら・・・力を貸そう。」

その言葉と共に具現化する蒼い龍——ガロヴィンド。

「ドラゴン・・・ウオオオオオオール!!」

彼の言葉と共に。かざした左手から巨大な竜鱗の壁が展開。それがマルガの放った砲撃を受け止める。

「ぐぐううううううううううう!!」

左手にかかる強い圧力。しかし、それをディノは堪えていた。

「うおおおおおおおおおおおおおお!! 跳ね返せえええええ!!」  
雄叫びと共に盾がさらに強化され、膨大な圧力を跳ね飛ばす。

その瞬間、強大な魔力の波が全て吸い込まれ、まるで濁流の様に蓄えられ、そして・・・その濁流がそのままマルガに向けて返された。

「あああああああぁあぁあぁ!!!!」

跳ね返される集束砲撃に飲み込まれるマルガ。

『・・・・・・・・・・啞然。』

その光景にディノ本人を含めた皆が驚いていた。

「なんで集束魔力砲撃を受け止めるだけじゃなくて跳ね返せるの?」

膨大な魔力を伴う集束砲撃。まるで濁流や津波のように、その大量の魔力の奔流は防御しても、防御の上から相手を落とす事が出来る程の圧倒的な破壊力を持っている。

それを彼は防ぎきっただけでなく、受け止めて跳ね返して見せたのだ。

無茶苦茶な防御力である。

——さすが我もこれほどとは思わなかった。だが・・・これくらいでは父上の怨念は晴らせぬようだ。

「父上って・・・なっ?」

集束砲撃を受けたマルガの身体はボロボロだった。纏っていたパラディンの鎧はあちこちにひびが入り、一部のパーツは落ちている。壊れた部分から出てくる黒い闇のような霧。

——どうする? 父上はあの程度ではやられてはくれないようだぞ?

マルガを父上と呼ぶ理由。

デイナーはマルガが二か月前に作っていた三本のベルトの事を思い出し、その中の一つと、今身につけているベルトが同じ事に気づき、その理由を察する。

「・・・そうか、お前・・・。おっさんが作っていた三本のベルトの内の・・・。」

ガロヴィンドがマルガを父上と呼ぶ理由。

それはマルガが彼らを生み出したから。

「――察しがいいな。我らは創造主たるあの方を父と呼んで今でも尊敬している。」

「・・・いいのか？おっさんを倒す事になるぞ？」

「――父上の死なら・・・すでに看取っている。あれはその魂を穢れた操り人形にされているだけだ。そんなのを・・・ほっておけるか？  
「・・・そうだな。俺もそう思う。」

そこまで言ってデイナーは気を改める。

「いくよ。おっさんの魂と意思でこれ以上笑顔を奪わせない！！」  
「――ああ・・・我が主！」

デイナーの纏っている足にローラーが出現する。そして、それが高速で回転し、デイナーはマルガへと突進していく。

マルガはそれに対して手にした大砲を再びデイナーに向けた。

「派手だねえ。」

それと見ていたミカエル。

「おい。なんでお前がそのベルトを持っている？」

そのミカエルに剣を付きつけながら問うガイ。

「何故と言われても・・・こいつに選ばれたとしか応えようがねえな。」

それに特にビビりもしないミカエル。

「ふざけやがって。まあいい・・・そのベルト回収させて・・・。」

———アクセル。

電子音声とともに剣から展開された光のカードそれをぐりぬけるようにミカエルは動き、動きを加速させガイを剣で斬り飛ばす。

「ぐああ!？くそ・・・。」

「・・・まったく我を忘れるな。」

斬り飛ばされた先にいたのは魔王だった。

その頭を右手でのアイアンクローにてつかむ。

———なっ・・・何だこいつ・・・バカげた握力を・・・!？

ガイのヘルメットに食い込み爪。ひびが入っていき、ヘルメットが悲鳴を上げる。

「ぐっ・・・。」

とっさに足のカードホルダーを起動。

———キック×2

地面をけり両足の蹴りで魔王と蹴り飛ばそうとする。

「甘い。」

しかし発動の前に、ベルゼブブはガイの身体を振り回し、それを片手で投げ飛ばす。

「ぐああああっ!？」

「強力な一撃が来ると言うのが判りやす過ぎる。もっと相手の動きを封じるなど工夫しないと我には当たらんぞ。」

他の二体のエンジェルが杖を手にはベルゼブブに向かおうとする。

「悪いが俺が相手になってやる。」

その行く手を阻むミカエル。手にした剣で二人を切りつける。

———トライデントキャノン×2

翼を展開させ、とっさに間合い取りながら杖に装填されていたカードが起動。合計六本の魔力砲をミカエルに向かって放たれる。

———ショートジャンプ。

しかし、ミカエルの足に装填されていたカードが起動。彼の姿は一瞬にして二人のエンジェルの後ろにいた。

———パンチ、フレア。

「爆炎翼」

手に装填された二枚のカードが起動。強化され、翼を模した爆炎を纏った拳。それが一体のエンジェルを爆発と共に吹き飛ばす。

もう一体のエンジェルがそれに気づき。杖から魔力刃を発生させて切りつけようとする。

——チャージ、アロー

「紅槍！」

しかし、左腕の盾から放たれる巨大な魔力の矢が阻む。巨大化した魔力の矢をエンジェルは魔力の刃で防ぐがそのまま押し切られて、爆発と共に倒れる。

「ぐっ……。そっ……」

ガイはあっさりやられた2人を見て危機を覚えていた。そんな彼に迫る魔王。

「さがれガイ！」

——チャージ、ペネトレイト、スプリット。

立ち上がるガイを庇うように手にしたボウガンに三枚のカードを読み込ませたエンジェルがいた。

「スターダスト・レイン。」

三枚の効果が合わさり、ボウガンに急速に集まっていく魔力。

それを上空に向けて放った。

上空で炸裂し、降り注ぐ光の矢。まるで豪雨のように隙間なく圧倒的な量で光の矢が降り注ぐ。

「ぬっ？」

それをとっさに後ろに避けてかわす魔王。

彼がいた場所には貫通性を高められた矢が地面に深い穴を作っていたのだ。素早く後ろにかわすベルゼブブ。

「うまい使いかただな。あれはさすがに防げんし、かわしきれなかった。」

数発当たってしまったのか、彼の身体を覆う黒い殻に所々に傷が付いている。

魔力を急速に集めるチャージにてスプリット似て拡散できる弾丸の量を増やし、その弾丸の威力を貫通力の強化の効果があるペネトレイトで上げる。

その結果生まれたのは小さいな貫通力に特化した魔力弾の雨。防ごうにも貫通力の高さが防御を貫き、回避にも豪雨のような弾幕がそれを不可能に近い状態にする。

「・・・そう言う使い方があるのか。」

ミカエルもそれを見て驚いている。

「・・・フェイズ。助かったぜ。」

「思ったより全然効果なかったが・・・お前から礼を聞ける日が来るとは思わなかったから良しとする。それより撤退だ。」

ボーガンを手にしたエンジェル―フェイズはガイを助け起こす。「このシステムの改良の必要な点が判ったからな。」

三枚のカードを読み込み同時に発動させたボウガンに亀裂が入り、小さな爆発と煙を上げている。

それ以外の二人のエンジェルも鎧にダメージを受けており。亀裂が走っている。

「・・・チィ。実戦テストは終わりかい。あわよくば封印したかったのによ。」

ガイは毒づきながらカードを剣にスライドさせる。

――リターンポイント。

それと共にガイの足元に魔道陣が展開。

そこに三体のエンジェルが集結する。

「まだ本番じゃねえ。首を洗ってまってやがれ。」

ガイの捨て台詞と共に五人の姿は消える。

突撃するディーノは放たれる砲弾を交わしながらマルガに肉薄しようとしていた。

「させませんよ！」

そのディーノの突進を止めたのは、エッジ。空中から素早く接近。エネルギーを纏った状態で突進してきたのだ。

「ぐっ。」

真正面から左腕の盾で受け止めるディーノだが、あまりの突進に押される。

「ぐううう・・・。」

足のローラーが空回りをしながら、その拮抗し始める。

「邪魔・・・するなあああああ！！！」

「なっ・・・なんてパワー！？」

その拮抗はやがて押し返す方へとシフトしていく。

「させん！」

拮抗の中に割り込んでくるのはホーン。

横から突進して角を付きつけようとする。

しかし、そのホーンを吹き飛ばしたのは・・・黒い鉄球だった。

「・・・ようやく、こいつらを喰らえるな。」

腕から鎖につながった黒い鉄球を飛ばした魔王がゆっくりと歩いてくる。

「なっ・・・くそ・・・あの天使どもはいないから・・・。ぐあ！？」

それを見て焦りを見せるエッジにも横からミカエルの蹴りを受けて吹き飛ばされる。

「・・・余計な事をしたか？」

「いえ。ありがとうございます。」

「あっ・・・ああ。」

ディーノのストレートな礼に面を喰らう格好となったミカエル。

「魔王さんも先ほどの事も含めて・・・本当に助かりました。」

「・・・魔王にも礼とは・・・罰があたってもしらんぞ。」

その礼を受けつつも、あまり言わない方がいいとくぎを刺すベルゼブブ。

「魔王であっても人の好意に礼を言って罰を与えるような、心の狭い神様ってこっちはいやですよ。」



「なら・・・一応受け取っておく。災いになればいいのだが？」  
三人は立ち上がっていくホーンとエッジ、そして砲撃を放つてきたマルガと対峙する。

「・・・すみません。おっさんは俺とガロで止めさせてくれ。」

その言葉に首をかしげるミカエル。

それに対してベルゼブブは納得したように頷く。

「とても苦い味になるぞ？それでもいいのだな。」

「・・・でないと、おっさんの子であるガロも・・・納得しないし、俺も納得しない！」

迷いのない一言に、ベルゼブブは軽く驚く。

すぐに驚きを改め、少しまぶしそうにディーノを見る。

「・・・余が魔王なら・・・お主はまさに・・・勇者か。」

「えっ？」

「いいだろう。お主の勇氣と・・・温かく真っ直ぐな心は我にも響いた。露払いは任せてもらおうか。」

魔王傍にいたミカエルにも話しかける。

「お主も無粋なことはいらないよな？変身も今回が初めて故に無茶はしないと思うが・・・。」

「・・・気づいていたのか？」

「まだ、その剣も改良が必要であろう。一度に使えるカードは二枚。三枚一度にはまだ器が耐えられぬようだしな。」

ミカエルは魔王の見解に、動きを止め、やがて諦めたようにため息をついた。

「・・・恐ろしい洞察力だな。確かに・・・この剣は未完成だ。だが・・・決め技自体は一応用意している。」

一枚のカードを腰のホルダーから取り出して見せるミカエル。

「・・・凄まじい魔力がこめられておるな。なら・・・あのデカイのを相手にしてもらえぬか？良的になる。」

「・・・お前にあいつが倒せるのか？」

ミカエルは速度に特化したエッジを指す。

「大丈夫だ問題ない。ただ・・・そこそこ速いだけだ。」

「来るか・・・。」

ホーンは左手に紅い波動をためながら駆けだすミカエルを睨みつける。

「だが・・・堂々正面からとはいいい度胸だ・・・な？」

余裕を持ったホーンは次の瞬間言葉を失った。

————シャドーコピー。

駆けだしながらミカエルが手にしたカードをスライドさせると同時に発動したのは分身の魔法。

駆けるミカエルが一気に十人に増える。

「おっ・・・おのれ！こうなったらまとめて・・・。」

左の波動を放とうとしたが、その前に一体のミカエルが斬りかかる。

それを皮切りに、一気に他の分身も斬りかかってきたのだ。

「ぐっ・・・はっ・・・なっ・・・これは幻影ではなく・・・実体だというのか？」

縦横無人に斬りかかるミカエル達に翻弄されるホーン。三体同時に斬りかかれ、大きく後ろに下がったところで、カードの効果が切れてミカエルは一体だけになる。

「・・・審判の終わりがやってきたようだな。」

腰のホルダーからとりだしたのは、天使の羽とリングの意匠が描かれたカード。

それを剣にスライド。データを読み込ませる。

————ファイナル・バニッシュ

カードの効力が発動すると同時に翼が光輝き、背中に天使の輪のようなリングが二重に展開される。

カードから展開された魔方陣が炎となり剣に収束されていく。集ま  
っていく炎の量は尋常ではなく、漏れ出る力だけで、軽く地面を削  
り取っている。

「ぐっ……。。」

とっさにホーンが左手の波動放ち、ミカエルを止めようとする。

しかし、ミカエルは手にした剣でその波動を切り払う。

そして、剣を右肩に担ぎ左手で十字を切ると、目の前に十字の紋  
章が洗わる。

「終焉の十字加。」

十字の紋章がミカエルの身体に宿り、全身を黄金の光が包み込む。  
翼を広げ、背負ったリングから力が放たれ、高速で突進するミカエ  
ル。

そして、剣を振りかぶりすれ違いざまに切り裂く。

「があああああああああ。」

十字に切り裂かれたホーンは切り口から炎を吹き出しながら絶叫。

ミカエルは後ろを振り向きもせず罪状と・・・判決を告げる。

「人の希望を踏みにじり、あまつさえ死者の心を弄びし者。お前に  
下る判決は・・・これだ！」

ミカエルが指を鳴らす。それと共に十字の切り口が光を放ち、ホーンは爆散した。

「しかし・・・これも負荷がすごいようだな。」

必殺技を放った後の剣を見る。刀身がボロボロになっており、所々亀裂も走っている。

「――要改良ですね。」

「・・・面倒くさいがしかたないか。」

「――リターンポイント」

その言葉を残し、ミカエルはカードをセット、その場から姿を消した。

後に残った紅い羽は地面に舞い落ちたと同時に紅い光となって淡雪のように消えた。

ホーンが倒れたのをエッジは見ていた。

「ぐっ・・・まさかこんなにあっさりと。」

動揺を示したいエッジだが、それを許さない相手が彼の目の前にいた。

「・・・強力だが、剣がまだ持たないようだな。」

それは魔王ベルゼブブ。

エッジと対峙しつつもミカエルとホーンの戦いを見る余裕すらある。

おそらくホーンと一緒にでも確実に敵わない。

「――撤退ですね。」

エッジは翼を広げ、この場からの離脱を試みる。

だが、その彼を不可視の壁が阻む。

「なっ・・・これは結界？いつの間に・・・。」

「お前を逃がすつもりはない。」

足元に紅い黒の魔方陣を展開させたベルゼブブが冷徹に銃口を向

ける。

「穿て。」

「くっ……。」

とっさに避けるエッジ。その速度は瞬間移動したかのような速い。「その程度の攻撃、当たるわけないでしょう。」

そう言うてはいるが、焦って必要よりはるかに長い距離を飛んだ事からしても彼に余裕は全然ないようだった。

「……速いな。だが……お前の強みは我には意味がない。」

「言って……くれますね。」

エッジは余裕がない状態で挑発を受け。高速でベルゼブブに斬りかかる。

ベルゼブブの殻に浅い傷が入る。

「ふん。意味がないって言っても、私の速さには……なっ？」

エッジが言葉を失ったのはベルゼブブの身体に傷を入れた腕の刃が粉々になったからだ。

「この程度の傷を与えるのに獲物を失うと言うのでは話にならない。」

「

「こっ……この……。」

格の違い。実力だけでなく、存在その物に大きな差があるように思えた。

「……今回は特別だ。我の切り札をもう一つ見せてやる。」

「解き放つは白き神槍。」

呪文と共に左足が白い風と共に戒めが解放される。

「我が左足に宿る槍は必中必貫の神槍。」

左足先が槍のように鋭くなり、スライドした脛の殻は白い電撃と風が吹き荒れ、左足全体を纏う。

「ひとたび放たてば稲妻のごとく相手に喰らいつき、貫く……これ……神々の切り札。」

「ぐっ……。」

飛び上がるベルゼブブ。

エッジは姿が消えるほどの動きでランダムに動きまわり、それかわそうと試みる。

しかし、それは無駄な試みだった。

左足が向けられた瞬間、動きまわっていたはずのエッジの身体に刺さるようにして固定される白い光の槍。

刺さった槍は展開され、円錐状になる。

「なっ……に？」

エッジに固定された槍に向けられる左足。

ベルゼブブの全身が高速で回転し、左足を穂先とした白い槍と化していた。

その足がエッジの身体に刺さった槍に吸い込まれるように刺さ、その体をぶちぬいた。

白い光の残光を纏わせながら、地面に降り立つベルゼブブ。

空中では身体に大穴があいたエッジが空中に固定されていた。

「こっ……これが魔王の力……だとおおおお？」

全く歯が立たなかったベルゼブブの実力に絶望の声をあげるエッジ。

「その断末魔……お前達の主へ轟かせながら……逝け！」

「ああああああああ……！！！」

白い残光を振り払うように空を切ったと同時にエッジは爆散した。

マルガの全身から放つ黒い闇が触手のように伸ばされる。それをローラーによる高速移動をかわしながら、ディーノはマルガの頬を殴りつけた。

「ぐううううう……」

高速の突進からの拳によるめくマルガだが、堪えてディーノに大砲で殴りかかる。

「ぐっ!？」

そして、マルガは手にしていたアームブレードでディーノに斬りかかる。

それをディーノは左腕の盾で受け止める。

「おっさん……」

「ディーノオオオオオオオ!!」

———父上……

雄叫びと……纏っている甲冑の目の部分から漏れる涙。

それを……二人の心に突き刺さる。

「うおおおおおおお！！」

右拳に蒼い炎と稲妻が纏われる。

そして、それをディーノは雄叫びと共にマルガの胸に容赦なく叩きつけた。

碎かれる胸部の装甲。そして吹き飛ばされるマルガ。

「パラディイイイイン！！」

胸の装甲を破壊されながらも、マルガは拳銃を構え、それをディーノに向けて放つ。

放たれる半実体の魔力弾にディーノは受けた部分に衝撃を受けるが、ずっとその場に立ち続ける。

拳はただ・強く握りしめられていた。

弾丸を受けながら彼は歩き出す。

弾丸を受けながらも歩みを止めないディーノに狂ったように弾丸を撃ち込み続けるマルガ。

そんな彼に接近し。ディーノは拳を振り下ろす。

「グアアアアアアアアア！！」

それに負けじと殴りかえるマルガ。

しかし、いくら殴られてもディーノはその拳を身体で受け、そしてそのまま相手を殴る。

細かく震えるほど強く握りしめられた右拳でマルガを殴り返したのだ。

「ぐおっ・・・。」

マルガがよろめくたびに、その右拳は振り下ろされる。

何度も受けマルガの足が震えだす。

「ぐおおおおおおお！！」

雄叫びとともに地面を踏み碎き、最も力を込めた右拳を叩きつけるディーノ。

その一撃にマルガの仮面が破壊され、倒れる。

仮面の下にあったのは・マルガの素顔。

理性のない瞳から涙を流しながら虚空へと手をのびながら、



「アギア・・・アギア・・・。」

「・・・くっ・・・。」

———ディーン！目をそむけてはならぬ。

ガロの叱咤はディーンノの背けていた目をマルガに再び向ける。

「アギアアアアアアアアア」

マルガは絶叫しながら手にた大砲に魔力に急速に集めていた。

———終わらせてやってほしい。父上の気高き願いと誓い、そして息子への愛をこれ以上汚したくない！

「・・・わかった。」

ディーンノの右腕から光の剣が伸びる。

———やり方は・・・判るか？

「やり方は・・・頭の中に思い浮かぶから・・・大丈夫。」

ディーンノはベルトの龍頭の部分を押す。

それはまるで龍が口にくわえた宝玉を飲み込むような仕草だった。

———イグニッション・ファイナル

それと共に右手の光の剣が大きくなり。腕全体を飲み込みながら、巨大なランスとなる。

背中から膨大な蒼い魔力の奔流が翼のように噴き出す。脚にはスピナーが展開。そこにも蒼い光が羽のように噴き出している。

彼は巨大な槍となった右腕を引く。

反対に左手は前にかざし、そこから龍鱗の盾が展開される。

「うがああああああああああ！！！」

そのディーンノに向って放たれる集束された放射型の砲撃。

それに向かって蓄えたバネを開放、右手を突き出しつつ。ディーノが駆ける。

通常をはるかに超える速度で駆けるロードスピナー。その突進をさらに背中から噴き出した魔力の翼が加速させる。

その加速は一瞬にて、音速を突破するまでに高められる。

次の瞬間・彼の右手はマルガの胸を貫き、そのまま壁にめり込みながら縫い付けられていた。

「がっ・・・はっ・・・？」

あまりにも速い突進は、砲撃を一瞬似てぶちぬき、そのままマルガを貫いたのだ。

はたから見たら、消えたと認識した時には轟音とともにマルガが壁に縫い付けられていたとしか見えなかった。

闇が光へと分解され始める。

光となってマルガは消え始めていた。

「・・・ようやく・・・解放されたよ・・・」

そのマルガの瞳には理性の光が戻っている。

「多くの人を・・・殺してしまったようだな。これでは地獄行きはまぬがれぬよ。」

「おっさん・・・。」

「しかし・・・可能性として考えてはいたが・・・お前がガロヴィンドの相棒になるのを見て・・・驚いたよ。」

その彼を看取るように蒼い龍もその姿を具現化させる。

——父上……。約束……。必ず果たします。

「ああ。俺たちはアギアを助ける。ガロに託したおっさんの願いも・  
・必ず遂げて見せる。だから・安心してくれ。」

ディーノの言葉にマルガは安堵の笑みを浮かべる。

「しかし・二度・ガロに看取ってもらえると言うのも変な物だな。そう思うだろ？ ジュエル。」

振り向くとボロボロの白衣をライフルを持ったジュエルがマルガの傍に来ていた。彼だけではない。他のパラディンや無事な魔道士達もそこにはいた。

「……マルガさん……。」

ジュエルはマルガの手をとる。

「……ふふ。今度は多くの人達に看取られると言うのか。」

それを見て、マルガは泣きそうな笑みを浮かべる。

「ジュエル……うまくやれているようだな。この調子で・頼むぞ。」

「はい！」

「ディーノ……。ガロと一緒に頑張ってくれ。お前たちなら……この力の意味はわかっているはずだからな。」

「はい。」

——父上も・安らかに……。

それに満足したマルガの視線が黒き魔王を捉える。

彼は何も言わず手で十字を切り、異形の姿なのにもかかわらず、不思議と優しさが伝わる頷きをする。

——みんなを……よろしく願います。

彼がどういった存在か、先の戦いとその仕草だけで直感的にマルガは理解する。

だからこそ・視線と念話で彼に託した。

それを受け取った魔王は少し固まり、小さく頷く。

マルガはそれに満足したのか、天を見上げる。

「本当なら・・・まだ・・・したい事はたくさんあった。しないといけない事はまだ・・・たくさんあった。アギアも・・・助けないといけないのに・・・私はもう・・・終わりだ。」

消えていく光の中、彼は最後に無念を語る。

「だが・・・今それを託せた。それだけでも、私にとって救いだ。」  
完全に光となって消えるマルガ。

―――ありがとう・・・みんな・・・頼んだよ。

その言葉を残して・・・。

それを見て・・・ジュエルは堪えていた涙を爆発させるように流す。  
デイーノも仮面の下で嗚咽を堪えていた。

嗚咽が聞こえるのを見て、ベルゼブブは意心地の悪さを感じていた。

彼はマルガの事をしらない。

だが、彼がどれだけ慕われていたのかだけは判っていた。

涙を流す義理はないが・・・ゴーストとなったマルガと言う男に  
対して、彼は尊敬の念を込めて簡略な祈りをささげる。

―――この場にいるのは・・・無粋だな。

背を向け・・・何事もなかったかのように魔王はその場を去る事にする。

「・・・待てよ。」

しかし、その足を止めたのはデイーノだった。

マスクをとり、涙をぬぐいながら魔王と対峙する。

「あんた・・・なんで助けてくれた？俺達管理局は・・・お前を第一級封印指定のロストログアとして敵対する形になっている。それを・・・どうして？」

「・・・。。。。。」

魔王――ベルゼブブはその問いにしばし黙り、そして短く応えた。

「魔王の気まぐれだ。それ以上も・・・それ以下もない。」

突き放すような言葉。それでもディーノは言葉をかけようとする。だが、それを阻むようにベルゼブブは言葉が続ける。

「故に・・・礼をされるようなことは何もしていない。」

魔王は皆に背を向ける。

「でも・・・。」

「我は魔王だ。正義の組織が魔王に制裁を下しても、感謝を送ることとはあつてはならない。間違つた事は何も言っていないはずだ。」

魔王はそのままその場を去ろうとする。

魔王の言葉に場にいた皆は何も言葉を発することはできない。

「それでもよう・・・。」

ただ一人・・・ディーノを除いて。

「あんたが俺たちを助けてくれた事実は変わらない。それに対して礼を言わないのは筋が通らない！だから・・・ありがとうな。」

「・・・。」

再び立ち止まることになるベルゼブブ。

「————コヤツには驚かされるな。」

「・・・私の足を二度も止めるか。さすがだ。勇者よ。」

「・・・勇者？」

ベルゼブブは振り返りつつ、ディーノを指さす。

「お主のことだ。蒼き龍の勇者「ブレイブ」よ。」

「・・・へっ？俺？「ブレイブ」って？」

啞然となるディーノ。

「礼が言いたいのなら、代わりにこっちが即席で考えた二つ名とその姿の名を送ってやる。この魔王が直々に付けた名だ。使うがいい。」

驚き戸惑うディーノを見て満足したベルゼブブはマフラーを蟲の羽に変化させて空を飛ぶ。

「————・・・我としたことが・・・らしくないことを・・・。」

飛び立つベルゼブブの背に向けて、やけくそ気味の叫び声をあげ

たのはディーノだった。

「ああ・・もう上等だ！今度会った時、そのまま名乗ってやるから覚悟しとけよ！！」

「……………面白い奴だ・。次会う時の楽しみが出来てしまったよ。

ディーノと言う男を気に行った彼はどこか満足した様子で姿を消した。

これはのちに地上本部襲撃テロとされ、大きな事件として扱われ、大きな犠牲と被害を出した痛ましい事件として管理局全体を震撼させることになる。

この事件で覚醒した蒼き龍の勇者の名は畏怖され始めた魔王の直々に付けた名ということですぐに浸透してしまったという。

## 聖騎士と蒼龍 結（後書き）

なんとか形にできました。

あと・・・この事件の後日談を書いて次のステージに進みたいと思います。

バーハルト・・・実ははやてに目をつけられている。

デイナーとの接点とバーハルトと表、裏の顔でも接点ができたという点が次のステージのキーとなります、

**結成、特務六課―凶悪犯罪特殊捜査班。 (前書き)**

バーハルト「うむ・・確かにカオスだ。」

長いトンネルを抜けてやっとできました。新しい話。

新しいステージに入ります。

新しいキャラが出てきます。

ここから



## 結成、特務六課―凶悪犯罪特殊捜査班。

聖王教会にて一人の青年がカリムに呼び出されていた・

「……一体なんのようだ？」

都市の頃は十代後半。おそらく二十歳前。真面目とは縁遠いなれなれしい口調。黒を基調とする騎士の衣装も着崩し、その上から紅い革のロングコートを羽織っている。ぼさぼさの銀髪。赤い瞳の顔は野生みを帯びているが、どこかニヒルな笑みが似合う青年だった。左腕は大きなガンドレッドのような物で覆われており、フィンガーグローブをしている右腕とは違って、一切肌は見えない。

「まったく、相変わらずですね。」

それを見てシスター・シャッハは呆れていた。それを見ていたカリムはくすくすと笑っていた。

「本当にアコースと仲が良い理由がよく判ります。いつも弟が迷惑をかけているみたいですし？」

何しろ彼は幼馴染で年上で、兄貴分であるアコースと教会内で色々といったずらをしており、今でも色々悪い遊びをやっている仲だ。そんな彼らを鉄拳で教育したのがシャッハ。

そして言葉と無言の威圧で逆らえないようにしたのが・・カリムだった。

「わりい。でっ……俺を呼び出したのはなんでだ？」

「……あなたに出向をお願いしようと思つて。」

「出向？騎士団のはみ出し者の俺を？」

「……はみ出し者っている自覚はあるのですね。」

彼は騎士団の中ではみ出し者で有名だった。規則は守らない、協調性がないなど・・騎士らしくない青年。

「まあ・・実力の高さは折り紙つき。捜査能力も極めて高い……ただ・・協調性がないのがねえ……」

「ほんとう・・に。やんちゃが過ぎるところがあるというのでしょ

うか？人当たりはいいけど、騎士の規則や礼義がねえ……。」

「……本人を前にそんなこと言うんじゃない。」

言いたい放題の姉代わりの二人に彼は深いため息をつく。

「それより……何で異動なんだ？一体どこに？」

男の問いに二人は表情を改めて問う。

「地上本部で起きた事件はしっているわね？」

「……知らねえわけねえだろ？」

地上本部で起きたテロ。そこには聖王教会の人間も多数巻き込まれていた。そして……その中にはパラディンの装着者として選ばれ、その事件で命を失った男の友もいた。

その上シードに関係する事件でも男は身内を失っていたのだ。

それを思い出したのか……怒りを微かだがあらわにする男。

それは獰猛な獣、または悪魔を思わせる激しく、恐ろしいものだった。

「すみません。配慮が足りなかったわね。」

「……いや。こっちもをわりい。しかし、その話しが出るっていう事は……あの事件を追えるのか？」

「ええ。お願いできないかしら？私達の妹分が結成させる部署なんだけど？」

その部署についての説明を受け、男は……めんどくさそうな表情をする。

「はやて……さんの部署か……。あの人……少し苦手なんだよな。」

はやての部署と言う事を知り、表情をひきつらせる男。

「苦手？それって……照れているの間違いじゃないの？結構気があっているように見えるけど？」

「……って、なんであの狸女と気なんてあっていねえよ。」

カリムのからかい交じりの言葉に、少しだがむきになって否定する男。その顔は少し赤いのをカリムは見逃していない。

それをシャツハすらも笑みを浮かべるが、すぐに表情を改める。

「それで、この話を受けるの？」

男はその問いに關してはとつくに答えは出ていた。

「はい。騎士・・・ハイル・ネ・レッドフアング。このたびの異動・  
・謹んで受けさせていただきます！！」

ハイルの言葉に、二人は安堵した様子を見せる。

「はやてによりしく伝えておいてね。」

「・・・・・・出来れば、伝えないでくれ。俺は俺で勝手に・・・・」

「だめよ。あなたを指名したのは、彼女だもの。」

その言葉にハイルは顔を真っ赤にしながら、顔をひきつらせる。

「・・・・・・やっぱり今のは無しに・・・・。」

「音声了承はすでにとっています。それに書類や引越し準備も、  
実は手配済み。もう決定は覆せないわよ。」

「・・・・・・。」「

ハイルは天を仰ぎながら思っていた。

カリムとはやてが仲が良い理由。それは相手の逃げ道を封じて、  
自身の思い通りの道へ向ける事に長けている事がとても似ているか  
らなのかもしれないと。

その目的は善意だろうが、やり方が少々えげつない。

「・・・・わかったよ。」

それ故に、ハイルはカリムには頭が上がらない。そして・・・・は  
やてにも。

そんな形で半ば強制的にはぐれ騎士が参戦することになった。

そして次の日。

ティアナが新しく創設される部署に向かっているところから再会  
と出会いが始まった。

「・・・・今度はどんな人達と組むことになるのやら。」

彼女は魔王と直接の接触を持った事のある数少ない人間。

それに優秀な執務管であることと、過去に機動六課にいたということから彼女も新しく設立された部署に招かれた。

「・・・特務六課・・・」

シード事件の解決のために八神はやてによって設立された組織。過去に機動六課にいた人物たちも召集し始めている。

ティアナと後で来る事になるがフェイトも合流する予定になっている。

「捜査アドバイザーに外部から人を呼んでいると聞いているけど・・・どんな人なんだろ？」

「あれ？ティアナさん？」

廊下を歩いている彼女に話しかけてきたのは、本部内で有名になってしまった青年だった。

「ディーノ君？」

茶色の制服を着たディーノが肩に御供のガロヴィンドを乗せてながらティアナの傍にやってくる。

「久しぶりね・・・。えっと・・・。」

ディーノの肩の上にいるガロヴィンドの方に視線が向けられる。ガロヴィンドもティアナの視線に気付き、宙に浮きながら挨拶をする。

「お初にお目にかかります。ティアナ執務管。名前は・・・名乗らなくていいですか？」

「ええ。もう有名人だからね。あんたらは・・・。」

2人は歩きながら、近況を報告しあっていた。

ディーノの方はゲンヤを初めとする多くの人達のおかげで、何とか地上勤務にとどまる事ができ、その過程でこの機動六課の主戦力として配属される事になった。

ガロヴィンドは準ロストログア扱いで、その力はマスター登録されたディーノしか発揮できないことなどだ。

ティアナは、シード事件がミッドだけでなく、他の次元でもひそかにだが発生していること。

そして・・・その解決を謎の黒の怪人が行っている事。

「それって・・・あの魔王ですか？」

シードと戦っている黒の怪人、それに該当する相手は一人しかない。

「・・・それ以外に考えられない。どうやってか知らないけど、シードの活動を感じできるみたいで、彼がいつも先に事件を処理している様子があるわ。昨日も第二世界でシードの活動と、あいつがそれを倒したのを確認したわ。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・シードは何かしらの手段で人間を怪物化させられた存在。それを自ら進んで狩っている理由がまだ判らないのよね・・・。」

ティアナの言葉に思うところがあるのか、ディーノは思案する表情を浮かべている。

「・・・魔王と会った感想はどうだった？」

「・・・ティアナさんが言っていた印象が良く判るような気がします。問答無用で畏怖してしまうくらいの底知れなさをもっていました。でも・・・悪ではないと思います。」

「悪じゃない？」

「・・・シードになっていた人を・・・被害者って言っていました。ずっと加害者を探していたと・・・彼は言っていました。」

「・・・・・・・・。」

シードになった人をベルゼブブは被害者として扱っている。それを倒すのは決して愉快なものではないはずだ。

「・・・多分、おっさんをこの手で倒した俺と同じ気持ちなんじゃないかと思います。程度までは判りませんが、決して小さくない痛みをこらえて・・・犠牲者であるシードを倒していると。出ないと・・・あの二体のロボットに対して見せた怒りが・・・説明付きません。」

「・・・・・・・・そう・・・かもしれないわね。」

ベルゼブブの尊大な態度とそれに見合う畏怖するような気の中から見え隠れする深い悲しみ。

その一端を、ディーノは推察していたのだ。

「……凄まじい実力と変わっているが空気を読める性格を持った存在と思っていたが、主はそこまで考えていたのか？」

ガロヴィンドの方もディーノの意見に軽く驚いている様子だ。

「考えていたというよりは……直感に近いよ。まあ……直感次いでだけど、あの魔王は少なくともその力を身勝手な事に使うことはないと思っている。ガロも気付いていると思うけど、すごく気高いみたいだし。」

「……。」

——前あった時と別人みたいね。

ティアナは以前にスバルに紹介してもらった時よりもディーノは精神的に強く、そして鋭く成長していた。

——蒼龍の勇者「ブレイブ」か……。

ベルゼブブがディーノとガロヴィンドに送った二つ名。それも地上を中心に有名になりつつある。

あの事件の唯一の希望は……勇者が生まれた事だという人達も少くない。

あのベルゼブブが認め、名前を送った初めての相手。第一級封印指定生体ロストログアとして危険とされている魔王ベルゼブブの存在が大きいだけに、その二つ名の重みも大きい。

「あべし!？」

だが、その勇者が突然開いたドアに鼻柱をぶつけて悶絶しているディーノだと知る者はあまりいない。

「……本当に勇者なのかな？」

先ほど見せた鋭い洞察とあまりに間が抜けている光景のギャップに真面目に考えているのが馬鹿らしくなったティアナ。

「すまん。大丈夫か……って……。」

開けた相手にティアナはさらに驚く事になる。

「……なんで……あんたがここにいるのよ？」

「……あの事件以来か。それほど時は立っていないが久しいな。」

ドアを開けて出てきたのは、捜査員の茶色の制服を着たバーハルトであった。

「・・・はあ！？なんで、民間人のあなたもスカウトされたの？」  
これは捜査員の制服を着ている事に対するバーハルトの答えに対するティアナの反応であった。

「・・・八神殿に目をつけられてしまったようだ。」

「目を付けられたって・・・一体あんた何をしたの？」  
バーハルトは深いため息をつきながら・・・その一部始終を話すことになった。

「・・・さて・・・説明をしてもらいたい。」

地上本部襲撃という前代未問のテロが起こってから一週間後。  
バーハルトは地上本部にいた。

「唐突やな・・・」

ついでにいえば・・・そこにいるはやてを問い詰めていた。

やや面倒くさそうなため息と共に一枚の書類を持って。

書類に書かれていたのは司書であるバーハルトの地上管理局の嘱託署員として捜査員として登録することであった。

「何故・・・我がここの職員になっておる？司書のはずの自分が何故？」

「事件のあとな。あんさんに解いてもらった問題あったやん。」

——あの簡単な問題か。簡単すぎて五分で終わったぞ。

「あれ・・・実は試験なんよ。」

「・・・なんだと？あんな簡単な奴がか？」

その言葉を聞いて言葉を詰まらせるはやて。

「・・・いや、簡単っていうけどあれ・・・地球で言うところの東大入試並の難しさがあったんやけどな・・・」

「・・・。。。」

——我とした事がぬかった・・・。

簡単に解ける。しかし、誰もがそうであるとは限らない。バーハルトの失敗はそれを失念していたところであろう。

しかし・・・それにしても能力があまりにも高く、そしてうっかり過ぎである。

「それに・・・ある推理小説の話で、犯人やその手口を聞いたやん。」

「ああ。聞かれたな。」

「あれな・・・実は半年前に起こって迷宮入り寸前だった事件やったんよ。」

「・・・なんだと？」

「助かったわ。バーハルトさんの推理のおかげで迷宮入りにならずにすんだわ。犯人も証拠も全部みつかったし・・・。」

「・・・。。。。。」

バーハルトは頭を抱えてしまう。

——こやつ・・・試しおったな。

そこでバーハルトはもう一つ思い出す。

「まさか・・・推理小説といって、他にも色々意見を言ったと思うが・・・あれもまさか？」

バーハルトの顔を伝う汗。

にっこりと笑顔のはやて。

「おかげで地上本部を悩ませていた難事件の大半が解決へ向かってるわ。」

「。。。。。。。」

思わず天を仰ぐバーハルト。

何気ない会話の中にあったいくつもの難事件。それを簡単に推理して見せたバーハルトは己の優秀な能力とうっかりさをこれほど呪った事はなかった。

「あんさんの優秀な能力は出会った時からうすうす感じていたんや。うまく発掘されたと思って諦めてな。」



「……そのようだのう。」

観念するしかなかった。

「もちろん司書としての仕事もそのまま続けえもらっていいよ。無限書庫からのこちらの転送ポーターも申請済みやから移動時間はゼロに近くなる。どちらにいても私達もすぐこれるさかいに。まあ……給料は今の三倍以上にはなる上に解決次第ではさらに上がるし……食堂……ただになるで？」

「……恐ろしいまでの良い待遇だな。どの部署に所属させるつもりだ？」

転送テレポーターをわざわざ設置してくれる上に収入を三倍。おまけに司書としての仕事を続けながらの上に、暴食の君に食堂無料と言う無謀な計らいというのだから、待遇は過度に破格と言えよう。それだけ熱心にバーハルトを引き抜きにかかった理由があるはずだ。

「……あんさんもまきこまれたあの一週間前の事件。あの事件をきっかけに、ミッドチルダで強行捜査、および事件の対処をするための部署が設置されることになったんや。」

「……伝説の機動六課の様な部署のことか？」

機動六課。J・S事件を解決させたという伝説の部署。試用期間ということもあり、一年で解散してが、そこで発掘された人材は今でも管理局で活躍しているという。

バーハルトの目の前にいるはやてがそのトップを務めていたのだ。「……一応、それに近い形でな。シードの事件、魔王の出現などの厄介で危険すぎる事件を追う事になる。そのためにできる限り優秀な人材を組織の内外から探していたんよ。」

「……私はその目になつたと？」

「そういうこと。あんさんには捜査アドバイザーとして現場検証や、捜査の方針のアドバイスをお願いしたい。まあ……資格なら安心して、この前暇つぶし代わりに解いてもらった問題は全部……そのための資格の試験やったし……。」

事件の後、事情聴取の待ち時間の間にはやてが暇つぶしに解いてもらった問題の数々。

「……あんな簡単な物で資格が取れるのか？」

暇つぶしにはなつたとバーハルトは思っている。十枚程の試験を彼は暇つぶしの二時間で全部解いて見せたのだ。

「……もう一度言っておくけど、それはあんただけやし。それに・何も勉強していない状態で執務管試験を全問正解って……フェイトちゃんやティアナがものすごく苦労したというのに……」

彼が解いた試験の中にははやてがふざけて入れた執務管試験も入っていた。勉強をせずに一発合格することは不可能と言われた執務管試験。恐ろしく高い倍率で、頑張って勉強しても……何度も落ち続け、努力が報われなかった人間も数多い試験だ。

だが……その努力を意識してもいないのに、彼は簡単に踏みこじる結果を出してしまったのだ。天才と言うのもおこがましい程の異常な知能だ。

「……」

判っているだけでも破格のスペックを持つバーハルトの獲得に、はやても満足そうだ。

——こちらとして情報は集まると言う利点はある。……だが、正体がばれると言うリスクを考えると……。

メリット・デメリット、それにリスクも合わせて検討したバーハルト。

その思考時間その物は一瞬だったが、その間に普通の人間なら一時間は熟考している程の内容の思考を彼はしていた。

その上での結論。

「……幾つか条件がある。」

『……』

そして、それを聞いたティアナと復帰したディーノの反応が無言

であった。

「・・・お前たちもユーノさんと同じ反応をするのだな。そんなに変か？」

彼はユーノにもスカウトされるにいたった経緯を話していた。そして、その最初の反応が無言だったのだ。

「・・・ユーノさんもきつとどこから突っ込めばいいのか判らないだけだと思うわよ。」

ティアナも突っ込む気が無くなったのか投げやりに応える。

「バーハルトさんって・・・すごいのが判ったけど・・・同時にかなりの天然。」

ディーノに至ってはバーハルトに対する新たな認識が加わったようだ。

「・・・はあ・・・でも・・・本当のことなの？」

「・・・大したことはしていないのだがな・・・。」

「でも・・・一緒に働けるなんて・・・楽しそう!!」

何がすごいのか全く分かっていないバーハルト。その凄さに対して色々な意味で疑心暗鬼のティアナ。気の合うバーハルトが来たことにテンションを上げるディーノ。

三人はそろって歩き始めた。

「————やれやれ。見知った顔が増えたな。」

昨日の出来事を思い返すバーハルト。

最初に出した条件。

「あくまでも非戦闘員として参加すること。戦いはあまり好きではない。」

まずはベルゼブブとして参加しやすい状況を作る事ために、戦闘を極力避ける条件を出した。

はやての視線は竹刀を構え、バーハルトの後ろにいたシグナムに向けられる。

「・・・まあいいやろ。でも・・・結構できると私は見てるんやけ

ど？」

その言葉と合図にシグナムが逃げ場ない鋭く、深い踏み込みとともに竹刀を振り下ろそうとする。

「冗談を……。そんな大したものではない。」

だが、その竹刀は振り向きもしないバーハルトに触れる直前で止まる。

それが己の意思ではないのか、驚きを隠せないシグナム。その彼女に今頃気付いたかのようにバーハルトは振り向く。

「……………」

「おや？シグナムさんですか？何をしているのですか？」

「……………」

驚きを無理やり押し込め、平然を装うシグナム。それはまるで驚いたら負けだと意地になっているかのようだった。

「それより……。他の条件だが……」

幾つかの条件を提示して、それをすべて了承されていく。

「よし。なら……。ここに世話になる。よろしく頼む。」

「こちらこそ。」

すんなりと交渉が進み、満面の笑みで握手をするはやて。

「よろしく。」

「ああ……」

シグナムとも握手。

「では……。明日また来てな。その時、試験の面接と、それ以外に他のみんなとも顔合わせしておくし。」

「わかった。」

——不意打ちで実力を測られたな……。

バーハルトは二人と新たな部署に向かいながら昨日のシグナムの一撃を思い出していた。

——不意打ちとはいえ・・・いい一撃だったな。  
何もしないふりを装うことはできた。

だが、バーハルトの実力の片鱗を彼女達が察している様子があったので、バーハルトはあえて反撃をしておいたのだ。

彼としては、本気はまだ出していない。

盟約として非戦闘員となっているはずなので実力は隠し通すことはできるだろう。

——「エデン」の動きが活性化している。こちらも一人では限界がくるだろう。

バーハルトははやて達の提案をうけたのは、これからの戦いを見越してのことだ。

地上本部を襲うという暴挙をやってきた相手。

そして、それを皮切りにシードだけでなくアーマードも暴れるようになったのだ。

アーマードは売却され、色々な犯罪組織に僕として使われている。  
——自ら虎の穴に入ったというわけだ。さて・・・虎兇を得らえるが勝負だ。

そこまで考えていたところで、バーハルトは足を止めた。

——主様。シードの反応が出ました。

ヘルの通信を受け魔王は軽いため息をつく。

「すまぬ。トイレに行ってくる。2人は先に行ってもらいたい。」  
そう言って彼はトイレに向かう。

——お前の通信と言う事は・・・昨日と同じ別世界か。座標を教えてくれ。

——わかりましたが・・・今から向われるのですか？

——何・・・トイレに行くくらいの時間ですべて終わらせる。  
念話で話しをしながら、彼はトイレの個室へと姿を消していった。

ティアナとディーノが事務室に入ってきて、まず目に入っただのは開いた窓枠にひっかけられた縄つきのかぎづめだった。

どうしてそれが窓枠にひかかっているのか？

それは誰かがそこから縄を使って降りたか、登ろうとしたからだ。そして・・・今回は登ってくるようだ。

「・・・あら？」

上ってきたのは銀髪をした男。騎士団の制服の上から赤いコートは音ている

『・・・。。。。』

三人はそろって見つめ合う。

「・・・まあ・・・邪魔します。」

『っておい!!』

気まずい均衡をわざわざぶち壊して入っていく変な男にそろって突っ込みを入れる二人。

「入ってはいけねえ理由はないはずだぜ。何しろここに世話になる身だしよ。」

「世話につて・・・。」

「これを見せれば文句ねえだろ？」

懷からカードを取り出し、二人に見せる。

男の名前は・・・ハイル・

「・・・本物のようね？でもどうして・・・。」

「騎士なのにロープを上るのがうまいねえ。こっちもレスキューの訓練でよくやっていたけど、現役のみんなにも負けなくらいにすごいと思うよ？何か訓練でも」

ティアナの質問の前に先手を打って色々と聞きに来るディーノ。あまりの唐突さにハイルも怯んでしまっていた。

「そっ、そうか・・・？それは・・・まあ悪い気がしねえな。っていうかな・・・最初に聞くのがそれか？他に聞くべき事があるはずだが？」

「・・・まったくよ。どうして、窓から入ったの？ここが一階にあ

るのならともかく？」

ティアナがボケた事を聞くディーノに呆れながらも、本来聞くべきところを聞く。・

「……見つかったら面倒臭い連中がこの建物の中にいるからだ。」

「面倒くさい連中？それって一体……。」

ハイルがぼやいていた面倒臭い連中は誰か2人が思案しかけていた時、その正解達がすでに行動を起こしていた。

「やべっ？」

何かにきづき、飛び退くハイル。彼のいた処にハンマーが振り下ろされる。その一撃は容赦なく床にめり込んでいる。

「……ちい……相変わらず勘のいいやつだな。」

ハンマーを振り下ろしていたのは一見すると赤髪の少女に見えるベルカの騎士・ヴィータであった。

「……もう見つかったの……？」

「ああ……。よくも……私が楽しみにしていた定食のプリンを食べたな？」

『……』

「……そんなしょうも無い理由で!？」

「喰い物の恨みは怖いんじゃボケ!!」

手にしたハンマー――グラーファイゼンの薙ぎ払いを必死になつてかわす

「やっと思つけたぞ……。」

そして……部屋にピンクの長い髪をした一人の修羅が入ってくる。

「貴様……また私達のシャワーを覗いたな？」

レヴァンディンを抜き放ったシグナムは殺気全開でハイルを睨みつける。

「……」

そして、それを知ったヴィータを含めた三人が向ける視線は……  
軽蔑以外何物でもない。

これで罪状は盗み食いに加え、覗きが加わった。

「だから！それは事故だって。前もそうだっただろ！！どうしてかわからんが、これはこういう星の下で生まれているみたいでどうしようもないって！！」

「最低……」

「私刑も仕方ないかも……」

ディーノとティアナのその言葉でハイルは場に己の味方がいなくなった事を知る。

「しかたない。こうなれば……明日への逃亡を……ぶへっ!?」  
窓から飛び降りて逃走を図ろうとする彼。だが、全身を黄緑色のバインドで縛られ転倒してしまう。そのバインドは強力で、彼の足元に大きな魔方阵が展開されている程の物。故に。強引に抵抗してもちぎれない。

「……逃がすと思っていますか？この……変態さん？」

そこにはとても素敵な黒い笑みを浮かべながら窓の外で浮いているシャマルの姿があった。

『……チェックメイト……』

修羅とかした三人に追いつめられたハイル。

「……あわわわわわ……」

絶体絶命の状況で、さらに一人、追加がはいった。

「おお……ここでよかったか。」

トイレを済ませたという事になっているバーハルト。

「ん……?」

全身を魔方阵が展開されるくらいに強力なバインドで拘束されたハイルと武器を持って追いつめる三人の怖い顔をした女性。

それをどうでもいいように見るティアナと、どうしたものかと慌てているディーノ。

その光景が見たバーハルトはどのように理解した物かと考える。

「……」

頭の中にある数ある書物と今の光景で合致する物を思い出してい



く。

そして・・・答えが出る。

「・・・この人を生贄に・・・何の儀式をやるつもりだ？」

あまりも・・・見当違いの答えが。

『・・・はい？』

「・・・むう。書物で生贄を伴う儀式を色々と知ってはいるが・・・人間を生贄にする儀式は初めて見る。うん・・・興味深いな・・・。」

バインドされたハイルを含めた皆が啞然としている中、興味深々で生贄と勘違いしているハイルの方へ駆け寄り、まじまじと観察するバーハルト。

「・・・拘束されているという事は・・・本人の意識とは無関係。なるほど、罪人の処刑を兼ねた儀式ということなのか？そうすると・・・罪人の命を神に該当する存在にささげることになるのか？拘束し・・・鈍器で気を失わせて・・・剣で首を断つというわけか・・・なるほどなあ・・・。」

凶器を持つディータとシグナムを見て、勝手に処刑方法まで作ってしまっている。

「ちよっ・・・何？なんで俺・・・死刑執行されることになってんだ？いきなりのカオスに混乱するハイル。」

「おや？何も罪がないとでもいうのか？」

「そっ・・・それは・・・。」

罪はあった。ゆえに彼は拘束されているのだ。

バーハルトの思考の中には勘違いからとはいえ、中途半端に正解まで含まれているので実に厄介。

「主の罪状は後で聞くとして・・・。」

彼は椅子と共に紙とペンを用意。座り込んでじっくりと彼が儀式と認識した出来事を観察する体勢に入る。

「中断してしまつてすまなかった。さあ・・・儀式の再現を続けてくれ。安心しろ野暮なことはいらない。まあ・・・後で色々と思うから覚悟はして・・・。」

『いや・・・だから儀式でもなければ、死刑執行でもないから!!』  
勘違いが酷い方向へ向かいそうなので、ハイル以外の皆が一斉につつまみを入れて止めにかかる。

「あんたの言うとおりにしてしまったら俺は死んでしまうかもしれないわああああ!!」

そして、勘違いのままでは死んでしまうかもしれない罪人ハイルは魂の底から・・・突つまみと救済と言う名の叫びをあげていた。

「・・・なんなの？このカオス過ぎる状況は？」

そして遅れてやってきたジュエルが訳のわからない状況になっている場に言葉をうしなっていた。

「なっ・・・なんでスカルエッティがここに!？」

色々な意味でいやな顔とそっくりなジュエルを見たティアナの悲鳴。

その悲鳴を聞いて一斉に武器を構えるシグナムとヴィーダ。

「ちよっ・・・この人は違う。」

「そうそう。この人は・・・」

それを見て必死に止めようとするシャマルとディータ。

「・・・ああ。まだ自己紹介がまだだったね。私は・・・。」

「どうでもいいから、これを解いてくれ。」

さらなるカオスが降臨する形になる。

こうして特務六課・・・凶悪犯罪特殊捜査課に四人の男が集った。

バーハルト、ディーノ、ハイル、ジュエル。この四人のチームが事件解決に大きな貢献をもたらす事になるとは本人達を含め、このカオスな場にいた皆は誰も思わなかっただろう。

「うむ・・・確かにカオスだ。」

『いや!そうなのはあんたのせいだから!!』

バーハルトのぼやきに、ジュエル以外の皆が一斉につつまんだのは言うまでも無い。

「なんや騒がしいな？」

はやてはため息をつきながら、書類整理を進める。

「・・・何があったのかな？」

その傍ではフェイトも首をかしげる。そこははやての執務室。

その隣の部屋に特務六課・・・凶悪犯罪特別捜査室を置いている。壁のドアを開ければすぐにそこに行ける。

「・・・さあ？結構な暴れ馬も投入したからそのせいかな。」

「・・・？」

暴れ馬と言う言葉に心当たりのないフェイトは首をかしげ、その彼をよく知っているはやては苦笑する。

「それで・・・例の彼・・・バーハルトさんを口説くことができたのですね。」

「・・・うん。」

バーハルトの名を聞き、浮かない表情のはやて。

「どうしたの？」

「・・・我ながらとんでもない人物を発掘してしまったなと思ってな。」

はやては昨日のこの部屋で起きた出来事をフェイトに話す。

交渉が終わり、部屋を出るバーハルト。

そのあと、はやてはシグナムの方見る。

「さて・・・どうして肝心の實力はどうやった？」

「・・・。。。」

その言葉と共に・・・破裂音。

見れば・・・シグナムが手にしていた竹刀が粉々に砕けていた。

「・・・えっ？」

突然の出来事に啞然となるはやて。

一方のシグナムの方は苦い顔をしている。

「これが答えです。」

根元から粉々になった竹刀を見てはやては深いため息をつく。

「・・・何が大了したことないや・・・。どう少なく見積もっても・・・近接技能は達人級なのは間違いないやん・・・。」

ユーノからもらった書類を見るはやて。内容はバーハルトの仕事内容だ。

「それに・・・この書類を見ても魔道士ランクはオーバーSランクの可能性が極めて高い。」

四ヶタ以上の同時多数の検索を無限書庫のそれこそ限り無しと言わしめるほどの膨大な書物の中から短時間で、しかもデバイス無しで行える実力。

それは膨大な魔力とその繊細な制御能力、そして異常なまでの情報処理能力がなければまずできない異常な実力だと言えた。

その実力を隠すように彼は魔道士ランク試験を受けていない。

「本気のあいつと戦ってみたいか？」

バトルマニアであるシグナムにバーハルトの戦いを望むか聞いてみる。

「・・・そう言う気持ちはもちろんあります・・・。」

だが、シグナムの返答は少し意外なものだった。

「でも・・・勝負になるかどうかと言われれば・・・自信がありません。」

異常なまでに、底知れない実力。戦ってみたい気持ちと・・・言いしれない畏怖をシグナムは同時にかんじていた。

「・・・シグナムにそう言わしめるか・・・。これはとんでもない相手を発掘してしまったみたいやな。」

「————あの条件。先手を打たれたになるか・・・。駆け引きに関してはやはり私よりも一枚上手のようやな。」

「・・・それはとんでもないわね。」

フェイトの評価も同じだった。

「戦いたくないっていうのは・・・己の実力を隠しておきたいということなのかな？」

「戦闘員としては使えんけど、それ以外でも十分な期待があるのは違いないけどな。」

「・・・でも執務管試験を一発で合格か・・・はは・・・なんだかばからしくなってくる。」

フェイトは優秀な執務管だったが、何度かその試験を落とした上でようやく試験に受かった経緯がある。

その努力をあざ笑うバーハルトの頭に少し憂鬱になってしまうのは無理ない。

「・・・本当・・・未知数の奴を入れてしまったと、少し後悔している節はあるわ。」

そういうつつもはやてはバーハルトの加入に大きな手ごたえを感じている。

後方支援、捜査だけでなく、もしかしたらいざという時でも切り札になるかもしれない。

機動六課時代に、公開意見陳述会のスカルエッティ一味の事件の際に六課の本部も襲撃されて、多くの負傷者と当時保護していたヴィオをさらわれたという苦い過去があった。

その非常時の守りに・・・彼は期待できた。

————切り札は多いほうがいいしな。

この時はやてはまだ知らなかった。彼女の想像をはるか斜め上を行き、恐ろしいまでに強力な魔王という名の切り札を得ていたことに。

そんな二人の元に通信がモニターの展開とともに来る。緊急の案件のようだ。

「突然失礼します。第一管理世界にシード出現。」

「・・・なんやて？被害は？そして・・・対応できる部署は？」

「それなんです・・・謎の黒い怪物が現れ、犠牲者が出る前に終わりました。戦闘時間にして・・・一分もかからなかったそうです。」

「・・・・・・・・・・。」

シード出現と、素早すぎる解決。それにめまいのような感覚を覚えるはやて。

「なら・・・現場検証にいくで。さっそく集まった四人を呼んできて。」

凶悪犯罪特別捜査班―顔合わせの日。大変カオスな状況で出くわした連中に出動がかかることになった。

**結成、特務六課―凶悪犯罪特殊捜査班。 (後書き)**

新キャラ・・・ハイルの登場です!! モチーフは二人のキャラを合成してみたつもりなんですがね・・・うまくいけるかどうか?

おまけ・・・別世界へ向かっている最中の会話。

ハイル「・・・はあ・・・。」

ディーノ「どうしたの? いきなりため息について。」

ハイル「・・・おれ・・・この部署でうまくやっていけるのかな?」

ディーノ「あったばかりなのに鬱になるのが早いって。なんで・・・。」

先ほどの出来事を思い出すディーノ。ハイルの自業自得とはいえ、彼は悲惨な目にあっていて。あまりのカオスなことに恐怖すらも体験したのだ。」

それを察し、ハイルの肩をたたくのはジュエル。」

ハイル「・・・あんた・・・いい人だな。」

カオスな中で・・・一つの友情が生まれた瞬間であった。

こんなかんじて一つの友情が生まれた状態で次の話を進めていきます。

## 次回「チームの形」

バーハルト「うむ。こう動けば皆の力は発揮できそうだな。」

ハイル「本当にそう動いていいのか？」

バーハルト「そのほうがお主は動きやすいのдар？ ひとつ条件はつけるがな？」

動き出した新しいチーム。アドバイザーのバーハルトはその力をさっそく発揮する。その動きにはやては満足そうな笑みをうかべるのであった。

バーハルト「しかし・・・私の事件の後始末というのも・・・変な気分だ。」

もちろん、その事件の当事者が捜査に加わっていることなど・・・誰も知らない。

9／22 訂正しました。



## 主人公紹介（前書き）

ここにて主人公の設定を載せたい共います。  
またいろいろとか改正すると思いますがよろしく願います。

## 主人公紹介

### 人物紹介

バーハルト・スクライア 年齢（戸籍状では20歳）実際は不詳。  
誕生日も判らず。

見た目のイメージ・・・漫画、ドラゴンクエスト、ダイの大冒険  
の大魔王バーン。角と目は封印の術式が書いてあるバンダナにて隠  
している。

身長 190センチ

体重 150キロ

体格 やせてるように見えてかなり筋肉が付いている。他の人い  
わく・・・脱いだらすごいです。

また体格の割に体重が異様に重いのは・・・彼は普通の人間ではな  
いからです。

現在の獲得資格・・・無限書庫司書。管理局員嘱託・・・ランク陸  
戦A扱い

捜査官、監察官、執務管補佐、看護師免許。医師資格。教師免許。  
自動車免許、飛行機免許、調理師免許、衛生士免許、建物建築免許、  
SPライセンス・・・など

他にも持たせたら面白い資格を募集中。大抵の資格は彼は一日で獲  
得するスペックを持っていますよ。

性格・・マイペースかつ、冷静。どこか淡々としており、それが尊大に見えてしまうところはあるが、鋭い観察眼と大きな器量をもっている。だが、ずれているところあり、特に日常は天然気味。

基本的に彼は・・優しいが、ずれているところが本当にたまに傷。

技能・・高速思考と膨大な知識と経験「神域の図書館」

恐ろしいまでの知能を誇り、難関と言われた執務管試験を何も勉強せずに一発で、しかも十分で解いてしまうほど。また、記憶喪失でもあるのだが、彼の頭の中にはあり得ない程の多くの知識や経験が入っており、問題を解く際も一役買っている。ある事がきっかけでそれを認識するようになり、これと無限書庫を合わせれば、大抵の事は判ってしまう。

格闘技能・・少なくとも達人級。流派は・・「魔王流」デモン・アーツ。

大食い・・・暴食の君にフードファイトを挑む無謀な者は誰もいない。

魔道士ランク・・オーバーSランクは確実。

肉体・・彼とその相棒であるヘルしか知らないことだが・・彼の身体には心臓が三つ付いており、腕を斬り落とされてもすぐに生えてくるほどの極めて高い再生能力を持っている。額の目は千里眼と解析、周囲の探索に加え、催眠術やマインドショックを与えるなどの色々な力を秘めている。そして・・・かなりの怪力で、車くらいなら魔力強化せずとも持ち上げる。

設定・・本編の主人公にして、作者もすべてを把握できない最強のカオスな存在（笑）

十年前、第二世界にある古代ベルカの魔王の遺跡にあった冷凍カプセルに入っていたところをユーノに見え、保護される。

当時は十歳くらいの子供で、記憶もなく、頭に角、額に三つ目の目、それに加え銀色の目という特徴に加え、赤と青というオッドアイであったことから（普段はバンダナで目の色も普通の黒い目にしている。）ユーノは古代ベルカにて世界を滅ぼそうとした魔王にゆかりがあると推測しているが、まだ推測の域でしかない。

話し方こそ、ユーモラスだが、大きく感情を出すことはしないで、落ち着いており、どこか冷めている部分もあって、ユーノは心配していたが、彼を司書として招待し、他の人とうまくやっているところをみて安堵している。

彼がベルゼブブへの変身能力に目覚めたのは五年前。相棒であるヘルの覚醒と共に彼は一部の記憶と共に変身するようになった。

戻った記憶は倒すべき存在であるシード。暗躍する謎の存在がいる事。

故に本人はこの力を得た理由は全く知らない。

それでも、彼が戦っているのは記憶の手がかりを追うためと、シードのもたらず悲劇を見過ごせなかったからだ。

高い戦闘能力は失われた記憶の中にあった圧倒的な経験と変身時の能力の開発に熱心に取り組んだ彼の努力から来るもの。

そして彼は変身能力から、自身が人間ではない別の存在ということを確認している。故に人と距離を置く部分もある。（恩人であるユーノに心配掛けないよううまく折り合いはつけている）

そして変身して戦う際も魔王を名乗り、恐怖の対象と自らなることで、事件に誰も深くかかわらせないようにして、影でシールドと戦ってきた。

故に管理局も彼の存在をシールドの活動が活発になった最近まで知る事ができなかった。

魔王・・・仮面ライダーベルゼブブ。

|             |         |
|-------------|---------|
| スベック・・・パンチ力 | 6トン     |
| キック力        | 10トン    |
| ジャンプ力       | 100メートル |
| ダッシュ        | 不明      |

ベルゼブブの基本フォーム。腰にある封印された赤い災いの石の封印を解くことで変身する。

それぞれの四肢に神具を持っており、それを発揮させて必殺技を放つ。

右腕・・・蒼炎の大斧。（真名は不明。）

必殺技はバニッシャー・エンド。斧とかした右手による手刀で空間ごと相手を断つ。

左腕・・・紅氷の魔剣

必殺技はカラミティ・クライシス。左腕から伸びる剣を相手に突き刺し、その呪いで中から消滅させる。

右足・・・黒雷の鉄槌。

必殺技はミッショミルクラッシュ。重力と黒い電撃による全てを

打ち砕く必殺キック。その威力は小型の隕石衝突と同規模だと言われている。

左足・・必中の神槍

必殺技はグングニル・スラッシュ。二段構えで足から放たれる一の槍は必ず相手を貫き、固定し、足その物を槍とかす二の槍にて相手を防御の上から貫く。

銃・・名前不明。いまだに力を完全に発揮しきれていない謎の神具。

鎖・・・名前不明、四つの武具や変身ベルトを拘束、封印している鎖で、それを相手の拘束する事が出来る。全身から放たれ、両手の指からの鎖は特別で、対象人物の記憶の書き換え、データの改ざんや読み取りの力を持っている。サイコメトリーの力も備えており、この力は変身まえも使用可能で彼自身の肉体の秘密を隠すのに一役買っている。

## 主人公紹介（後書き）

書いていて・・・かなりめっちゃかな主人公になってしまいましたね。完璧すぎる能力とずれている部分。

これだけでは・・・あまり親しみはわきませんねえ。

それだけではいけないと思い主人公が抱えているものを少しだけですぐ書かせてもらいました。

これを題材とした話も考えていますので・・・楽しみにしてください。

## チームの形。(前書き)

ベルゼブブ「OHANASIしうか？」

さて・・・管理局の白い魔王と同じセリフをついに言わせてしまいました。

誰に対して・・・OHANASIをしうとしたのか・・・読んでみてください。



## チームの形。

そこは第二世界の街中だった。

しかも裏路地ではなく繁華街の真ん中。

そこに虫型のシードが現れたのだ。

巨大なカマキリと人間の融合体のようなシードは人を喰らい始め、出現と同時に二人をその鎌の餌食にした。そして、三人目を喰らおうと、鎌を振り下ろした瞬間に、黒い怪人が現れ、その鎌を鎖でがんじがらめにして受け止めていたそうさ。

「……長時間の戦闘ではなかったみたいだからそんなに荒れていないと思っていたが……間違いだったようだな。」

「……」

カマキリのような怪物と黒い怪人との戦闘時間はわずか一、二分程。

終始……黒い怪人が圧倒して終わったようなのだ。爆発の余波を抑えるためにとっさに展開された結果。

だが、爆発は防いでも人的被害をなかった事にはできなかった。

「……」

泣き崩れるのはシードの犠牲になった人の遺族なのだろう。

その人の肩に手を置き、もう一人涙を流している。

「……また防げなかったか。」

その光景を見て、言いしれぬ苦みを感じるバーハルト。

「……如何しても……犠牲はでてしまうな。」

「……私もセンサーを改良し続けているのですが……中々。」

主の憤慨に応えるヘル。

バーハルトは崩れ落ちた人を見て考え込んでいる様子だった。

「……身近な誰かを失う痛みか……。我もその痛みを感じた事があったのかな？犠牲が出た事に対する認識はできても……心の痛みというのがわからん。」

無表情ではったのだが、どこか悲しみをたたえた目をしている。

――・主？

――・いや、ひとりごとだ。引き続き警戒を頼むぞ。

――御意。

ヘルとの会話を終え、バーハルトは現場へと向き合う。

「・・・ひでえな。」

「うん。」

事件現場を訪れたハイルとディーノ第1声がこれだ。

ボロボロになった道路や車、建物をみればそういいたくもなるだろう。

ジュエルは現場をしばし観察してみる。

「でも・・・考えて戦ってくれたみたいだね。あの必殺技・・・使っていないみたいだし。」

「破壊も、多分シードによるものが大半か・・・」

ディーノが爆発後の焦げた地面と血まみれの地面の間を見て観察を始める。

「なるほど・・・人を庇ってからあまり人のいない処へと吹き飛ばし、そこでダメージを与えたんだ。」

「・・・判るのか？」

「こう見えてレスキュー隊にたから。簡単な現場検証ならしたことあるんだ。」

そう言いながら、どのような戦いが行われたのか検証していた。

「・・・。。。」

――流石に驚いたぞ。

ディーノが簡単にだが、出した事件の検証結果にバーハルトは驚きを隠せない。

まるで当事者のようにその状況を的確に再現して見せたのだ。

「・・・そうなると大体・・・戦闘時間は40秒ですね。」

「はや!？」

「・・・信憑性はたかそうね。」

ティアナもその検証に立ち会っており、その正確さにおどろきながらも同意する。

「最後の必殺技は多分・・・左足の槍を簡易的に放って相手をけり上げる形で倒したと思う。まあ・・・データが正しいのならばだけど。」  
「――・・・まったくもってその通りだ。」

止めの技が間違っていないのも、戦闘時間も、当事者であるバーハルト本人がよく知っている。

「・・・鑑識はまかせてよ。色々と気なるデータもあるし。」  
ジュエルはあちこちに落ちている血痕や破片をチェックし始める。  
その中ハイルは野次馬の中でそそくさと立ち去ろうとする男を見つける。

「・・・さて俺は・・・。」

それを見てふらりとどこかへ行こうとするハイル。

「ちよつと・・・どこへ行くつもりなの?」

それを止めようとするティアナ。

「別にどこだっていいだろ?」

「あのね・・・。」

ティアナの追及を振り切り出ようとするハイルにティアナが声を荒げようとした時だった。

「いいだろう。たのむぞ。」

『へっ?』

ハイルの行動を後押ししたのはバーハルトだった。

「気になるところがあったのだろ?色々と探ってみろ。」

「なっ・・・あんた・・・何を?」

「時間は二時間程なら取れる。それ以降は向うに戻るから一端戻ってこい。一時間後と集合時間直前に連絡を入れる。捜査の状況はそ

れで報告。最終的には戻ってから詳しい報告をもらうぞ。」

「・・・ああ。」

「ティアナ殿。それでいいか？」

「えっ・・・でも・・・。」

納得しきれしていない部分はあるティアナだったが、反論するにもとっさに思い浮かばない。そこにバーハルトは続けた。

「・・・ここならそんなに危険もなからう。それにハイル殿の実力も測りたいのだ。何を見つけ、そこから何を見つけてくるか興味もあるしのう。ハイル殿もそれでいいか？」

「・・・。。。。。。。」

それはハイルの好きに動く許可を出す代わりに、それなりの成果を求めるという物。

ハイルは頭をかきながらため息をつく。

「——これは・・・参ったな。バーハルトと言う人・・・ボケた人と思っていたが、その認識・・・改めておいかないといけないようだな。」

バーハルトの指示は過去のハイルの活躍を見たうえでのものだ。

普通の上司なら強引にでも同じ枠にはめようとするところを反発してきたハイルだったが、それ故にバーハルトの指示は新鮮であった。締めるところはきっちり締めており、放置していないという点もバーハルトのやり手な部分を感じさせる。

「——俺の実力を見越したうえでかよ。プレッシャーに発破までかけやがって・・・個の人もはやてさんと同じか・・・それ以上だな。」「ああ。そうさせてもらう。」

「なら・・・これは受け取ってくれ。拝借してきたものだ。急げよ。」ハイルに投げてよこされたのは小型で特殊な念話での通信機。念話を妨害される中でも長距離通信ができる優れ物だ。

「・・・わかった。逆に何かあったら連絡入れるぜ。」

それはハイルからしたら最大級の返事ともいえる。

「楽しみにしている。いそげよ、とっさに追跡をかけているのはい

いが、効果範囲があるだろうに。」

——そこまでお見通しですかい。

ハイルは恐ろしい物を感じながら、男の後を追う。

「さて・・・我も聞きこみに入ろうか。」

「私も行くわ。」

バーハルトの聞き込みにティアナが同行する。

——この人・・・変わった人の使い方をするわね。

彼女自身がバーハルトと言う人間を見定めるために。

2人は事件の目撃者からの証言をとっていた。

「・・・今回、魔王名物の名乗りは短縮したみたいね。」

ティアナは証言の中から、ベルゼブブが現れた時の名乗りを短縮していたという証言を得ていた。

「今回は時間にあまり余裕がなかったのかしら？」

「その可能性が高そうだな。」

——実際・・・戦闘時間はトイレに行くという時間しかなかったかな。

バーハルトとしては恐怖を植え付けるための名乗りはしたかったのだが、実を取らないといけない場合もわきまえている。

「今回のシードの犠牲者・・・大体推察は付いたぞ。」

「えっ？ そうなの？」

「ああ・・・過去のデータから見て蟲と言うのは暴食を司るということだ。そして・・・無差別に人を食ったのは・・・人その物の何かに飢えていたと推察できる。」

「飢えていた何か？」

「・・・愛か・・・きずなだ。」

その推理を聞いたティアナの顔から血の気が失せる。

「・・・なんでそうなるの？」

「・・・被害者の証言でもあっただろ、〔私を見て・・・私を知って・・・私を・・・一人にしないで・・・〕ってな。」

聞きこみに回った証言をティアナも思い出していた。

「見せてもらったシードの資料から推察した結果だが・・・疑問も残るな。」

「それって・・・魔方陣から唐突に転送されてきたという話のことね。」

今回現れたカマキリ型のシードは人が街中で変身したのではなく、転送魔法で送られてきたという目撃証言がある。

「・・・転送魔法の痕跡はあったよ。」

その二人の会話に割り込むようにジュエルから念話での通信が入る。

「――距離は短距離型・・・おそらくこの街全域から転送できる程の物だと考えられる。詳しく調べないと正確な距離は判らないけど・・・。」

「・・・そうか。そうなる・・・このシードは第三者が送り込んだ可能性が高いのだな？」

「――・・・うん。そうなる。少なくともあのシード、まともに魔法を使えるほどの理性は残っていなかったみたいだし。」

「・・・。。。」

その事実に関してはバーハルトは痛いほど判っていた。

「――嫌な予感が当たっていたな・・・。」

付きつけられた事実に苛立ちがこめられ、手にしていた報告書のバインダーに亀裂が入り、すぐに割れてしまった。

「!？」

簡単に割れない強化プラスチック製のバインダーを握力だけで割ってしまったことにティアナは軽く驚く。

「・・・これは・・・テロだ。」

「・・・テロって・・・。」

「どういった手段か判らないが・・・シードを使って無差別にテロを

仕掛けた連中がいる。おあつらえ向きなシードをあらかじめ作ったのだろうな。暴走したシードの力はヘタな魔道士よりもよっぽど強力で凶悪……。使い捨てもでき、インパクトも被害の大きさも、長引く時間もかなり長い。まさに……。最悪の手段だ。」

「……。なるほど。でも……。あくまでも推測だけよね？」

「ああ。だが……。そろそろ重大な証拠がやってくるころだと思う。」  
「？」

「……こちらハイル。その推測……。当たっているぜ。」

「やはりか。お前が追っていたのは……。。」

「……そこまで気付いていたんかい。まあ……。きっちり捕まえた。」  
「こちらに連れてきてくれ。丁重におもてなししてやる。」

「……。」

ハイルを単独行動させた意図にようやく気付いたティアナ。

「あなたは……。すべてわかっていたというの？ 判っていて……。それを抑えるために先手を打ったと？」

バーハルトはその問いに関して、淡々と応える。

「……。そうであってほしくない予測が当たっただけだ。考えうる中で、最悪の部類に入る予測だったのだから。」

「……。。」

ティアナはそこで、バーハルトがこの現場についた時点である程度の方針を立てていた事を知る。

幾つかの可能性を考慮し、集まってくる証言、証拠などをもとに……。それをさらに固めていき、そして……。確信できる答えを短時間で出したのだ。

「……この人……。すごい。あの時の天然カオスに全然見えないくらいに。」

捜査アドバイザーとしてチームに入ったバーハルト。

彼ははやての期待を超える実力を発揮し始めていた。

四人はハイルと街にある管理局の支部で落ちあっていた。

「しかし・・・想像以上の成果を上げてくれるな。」

「いっ・・・いや・・・そう褒めるな。俺としては・・・こんなこと・・・当然で・・・。」

「―――くそ・・・騎士団では叱られて当然だったのに。・・・褒められるというのは・・・慣れねえ・・・むズかゆい!!」

「って・・・ジュエル。何だ其のほほ笑みは？」

「いい上司が見つかってよかったなと思っただけだ。気にしないでくれ。」

褒められて照れているハイルを見てジュエルは正直な感想を言うのける。

「てめな・・・あってまだ一日も立っていないのに、何だ其の言葉づかいは？」

「遠慮なく言った方が良いのは間違いないみたいだからね。そっちはそういうタイプだし、合しているのだよ。」

すっかり心安い仲となったジュエルとハイル。

「やれやれ・・・今更だけどジュエルも結構毒を吐くね。」

「そうだな。穏やかそうな物腰にだまされたぜ。」

「・・・ふふふ。だまされる方が悪い。」

自然とディーノもその輪の中にいた。

「・・・。」

それを見て満足そうなバーハルト。

「・・・いい感じだと思っているの？」

「ああ。まあ・・・衝突も覚悟していたのだが・・・三人の相性が想定外に良かったみたいだ。いい意味で外れてよかったと思っている。」

「・・・その言葉から見ると。捜査前に三人の履歴は閲覧済みみたいね。」

「当然だ。どう言った性格なのかも、大体把握した。その上、どんな実力を持っているのかも判ったしな。」



当然と言ったのけた彼にティアナは内心ため息をついていた。

——当然って・・それだけであれだけの確な指示を出せるあんたがすごいわ。

すごいと思わせたバーハルトは鼻をひくひくさせながら、視線を食堂へと向ける。

「・・うむ。いい匂いを嗅いだら腹が減ったのう。少し食堂で食事でも・・・。」

「またんかいこの腹ペコ大王！」

——でも・・やっぱズレてる・・・。天然だわこの人・・。

「腹が減ったら戦できぬであろう？」

「あんたの食欲見てら、戦始まる前に食料が尽きるわ！！第一満腹まで食べたら逆に本末転倒じゃないの！」

ティアナは彼の評価をどう見ようか四苦八苦しているのであった。

「安心しろ・・この食料を全て食べ尽くしても・・満腹にはならんぞ。満足はしてもな。」

「・・・あんたどういう胃袋してんのよ？」

「解剖して見てみるか？案外普通だと思うが。」

「・・・そこまでして見た無いわ！！っていうかあんたどこまでボケれば気がすむの？」

「・・ボケているのか？そう言うつもりはないのだが？」

「・・・・・ああ・・・もう・・馬鹿に付ける薬がほしい。」

そして、彼女は気付いていない。

いつの間にか遠慮なく、バーハルトに突っ込みを入れている自分に。

そんなやりとりをしながら、取り調べ室に入ろうとした時だった。バーハルトの表情がいつもの淡々としたものではなく、鋭い物へと変わっていた。

「・・・・伏せろ！！」

「きゃあ!？」

バーハルトがそういうしながら、隣のティアナを地面に伏せさせる。それと共に巻き起こる爆発。取調室が吹っ飛んでしまった。

「うああああああ!？」

崩壊に巻き込まれ、姿を消す三人。

「……間抜けな奴……処分つと。」

爆発と崩壊の中から現れたのはキノコのような姿と人としての四肢を備えた異形。

目はないように見えるが、きのこのような頭は、バーハルトの方を見る。

「あれは……シード?しかししゃべるなんて……。」

「……おやおや。こんなところに目撃者がいたのね……仕方ない。」

キノコとなった頭。その傘に当たる部分から黄色の胞子が放射される。

「ぐっ……。」

とっさにクロスミラージュを起動させたティアナがスフィアを放つ。

しかし、彼が全身から放出する胞子に触れた途端、拡散してきえてしまった。

「無駄だよ。魔道殺しの技なんだから……。」

「チィ……仕方ない。魔法がだめなら……これは……どうだ!？」  
胞子に向かって掌底を放つバーハルト。その掌圧で……胞子が吹き飛ばされる。

「えっ?何……それ?」

驚くキノコシード。その隙を見逃すティアナではなかった。

「油断したわね!」

キノコシードの顔面に命中するオレンジのスフィア。魔法に対しても高い防御力を誇るシードも流石に顔面に攻撃を喰らって平気な訳がなかった。

「ぐあっ？・・・ぐっ・・・この！？」

キノコシードが指を鳴らす同時に、胞子は一斉に爆発する。

壁や床が崩落し、凄まじい轟音が辺りに響き渡る。

しかし・・・爆発が収まっても、彼は殺気を修める事はしなかった。

「・・・逃げさない。」

それはその爆発で二人を仕留められなかった事をよく知っているからだ。

「・・・時間は稼げそうだな。」

バーハルトはティアナを抱えながら上を見上げていた。

「・・・あんた、出鱈目で結構大胆なのね。」

爆発が起ると同時に、バーハルトは思い切り床を踏み碎いて、ティアナごと自ら下に落ちたのだ。

「今はその称賛を喜んではいられないのが残念だな。急いでここを離れる。」

「・・・相手は追いかけてくると？」

「少なくとも、今のでごまかせる程度の相手ではない。しかし・・・意思を持つシードとはな。」

バーハルトはともかくとして、ティアナもまともな人間としての理性と変身能力を残したシード遭遇した事がある。

「・・・逃げ回って応援を待つのが吉ね。でも・・・あの三人は・・・」

「・・・少なくとも一人は無事だろう。あいつがいるから対応はできているはずだ。それに他の二人も程度や種類は違うが、それなりの修羅場をくぐりぬけている・・・。あの程度で死ぬとは考えにくい。」

三人の安否に関して、生きていると断言して見せるバーハルト。

「それに、この程度で死んでは・・・おそらくこれからは無理になる。」

「……どういうこと？」

「……我々セカンドに盾突くなんて面倒臭いな……」  
キノコのシードが二人を見つけて降りてくる。

「面倒臭がらずにとっとやれ。流石に応援が来たら厄介だぞ？」

その隣にはカメレオンの姿をしたシードの姿がある。かれもキノコと同じく言葉を話している。

「くっ……二体に……」

「もう一人いる……」

そして、そこに鼻を模したシードまで登場する。音も立てずにいつの間にか現れた事にティアナは寒気を覚えた。

「……セカンドと言うのか？お前達のような存在のことを……」

「……面倒臭いな。説明……。だが……大体正解とだけいつてやる。冥土の土産代りにもっていきな……」

キノコシードが面倒臭そうに手からキノコを出現。それを投げつけようとした時だった。

バーハルトは不敵な笑みを浮かべて、ティアナに目配せをする。

それが何を意味するのか……ティアナはすぐに察し密かに魔法を発動させる。

「……冥土に土産を持っていく必要はなくなったな。」

「どりゃあああああ！！」

その場にローラーで突進してくる蒼い人型が一体。

派手な音と共に傍にいたカメレオンシードを殴り飛ばした。

「ぐあ！？」

「大丈夫ですか？」

蒼い人型は蒼龍の勇者……ブレイブ。デイナーが変身した姿だった。

「……くっ……この……」

キノコシードは手にしていたキノコをデイナーに投げつける。だが……デイナーに届く前にそのキノコは打ち抜かれて爆発。

「・・・備えあれば憂いなしってね。」

銃弾が撃ち込まれた廊下の奥から現れたのは黒と銀色のパラディンが立っていた。手にしているのは銃剣型のデバイス。

「念のために専用のパラディンを制作しておいてよかったよ。」

それを着こんでいるのは・・・どうやらジュエルのようなだった。

「くっ・・・いいのか？お前達の仲間がここに・・・って？」

キノコシードがバーハルト達を人質にしようとするが、彼らの姿が靄のように消える。

「・・・しまった・・・幻影だと？」

「・・・入れ替える時、こっちの突撃に合わせたというわけか？派手な音に足音をかき消すといい・・・。」

カメレオンシードはバーハルトの機転に舌を巻いていた。ティアナに簡単な念話で幻術で二人を入れ替えたのだ。ステルスとなった二人の足音を派手な登場をしたディーノがかき消してくれるのも計算したのだ。

「・・・はえ・・・すごいなあの人・・・。」

「おかげで遠慮なく戦闘に持ちこめる。」

銃剣を構えるジュエルに、オウルシードが羽を模した手裏剣型のデバイスを投げつける。

「ぐっ？」

「なめないでもらいたいな。ファーストの暴走体とは違って・・・こちらは魔法やデバイスも使いこなせる。常人よりもはるかに強力な力をもっていてな。」

カメレオンシードがヨーヨー型のデバイスを手にする。

そして。キノコシードはキノコを模した杖を手にしていた。

「・・・不味いな・・・。」

「————こいつら・・・勝手が違うようだな。」

デバイスを手にした三体のシードが攻撃しようとした瞬間、紅い羽が舞い落ち、それが次々と爆発。三体を足止めした。

「この羽は・・・ミカエルか？」

崩壊した取調室のあった穴から現れたのは紅い翼の天使・ミカエルだった。その腕には取り調べるはずだった男を抱えている。ミカエルはディーノ達の傍に降り立ち、そしてゆっくりと男を下ろす。

「怪我をしている。手当はしているが・・・早く病院に連れて行っただ方がいい。」

そう言いながら彼は剣を抜き放ち、シード達へ向かおうとする。しかし、それを止めたのはディーノだった。

「・・・ハイルは？・・・取り調べ室には俺達の仲間がいたはずだ。あいつは・・・大丈夫なのか？」

ハイルと言う名前にミカエルは軽いため息をつく。

「・・・彼かどうかは判らないが紅い髪をした奴なら、下で伸びている。酷い怪我はしていないようすだったか？」

「そうか・・・ありがとう。」

それだけ聞き、ディーノはミカエルの隣に立つ。

「一応・・・味方でいいみたいだね。」

その後ろからジュエルも銃剣を構える。

「・・・これで数は互角・・・。」

いきなりの乱入にシード達は戸惑う。

そして・・・そこにさらなる乱入がやってくる。

突如床を突き破って現れる無数の鎖。

「なっ・・・うあああああああああああ！」

それはキノコシードを縛り上げ、床の下に引きずり込む。

『えっ？』

そして、引きずり込まれてから少しして・・・。

床をぶちぬきながらキノコシードがボロボロになった状態で上がってくる。

「がっ・・・あっ・・・。」

「・・・毒は流石に喰らいなくなかったので、吐き出せてもらった。我はそんなに悪食ではないのでな。」

キノコシードが出てきた穴から飛び上がってきたのは・・・魔王だった。

「・・・忙しい故に・・・今回も名乗りは省略させてもらおう。」

「————『名乗り省略するんだ！？それ今回もって？』

彼の名乗りを聞いたことがあるディーノ達は一斉に心の中で突っ込む。

「ぐっ・・・てめえ・・・。」

「・・・なるほど。お前らはエデンとつながりのある組織・・・アレNSTのメンバーか。」

『なっ・・・。』

「・・・まさかシードを制御する術を身につけていたとは思わなかったぞ。自らそれを取り込むためとは言えな・・・。」

どうして情報を持っているのか？

他のシード達は一斉にキノコシードの方を見る。

彼は・・・メンバーの中で一番動揺しているようだった。

「なぜだ・・・？俺は喋っていないのに・・・？」

「・・・まあ・・・もう少し他のメンバーにも・・・OHANAS

Iしようか？」

暗い声と共ににじり寄る魔王。暗いオーラを纏い、殺気と重圧を三人のシードに向ける。

それは・・・管理局で密かに有名になっている白い魔王と同じか、それ以上の恐怖。

あまりの迫力に三人のシードは後退を余儀なくされる。

『うう・・・。。。』

明らかに三人は怯えている。

「安心しろ・・・今から、ちよっとお前達に魔王と言う名の恐怖を・・・たっぷり味あわせてやるだけだ・・・。」

「————『いや・・・全然安心できませんよ。というか・・・ちよっとなの？たっぷりなの？一体どっちなの？』

その場の皆が一斉に心の中で突っ込みを入れる。

そして・・・同時に皆は彼が魔王と名乗り、それがあっているのか納得する。

恐怖を彼はうまく操っているのだ。

訳が判らないというのも、相手から見て未知と言う形で恐怖を加速させている。

それが本人のボケだとしてもだ。

「さあ・・・ん？」

ゆっくりと迫る魔王。その眼前に唐突にそれは現れる。

「・・・何者だ？」

装飾のないがスマートで、其れなりの厚みも兼ね備えた黒い鎧。

兜はV字の見開きがあり、そこがほんのり赤く輝きをはなち、ガゼルのような細く縦にまっすぐ伸びた二本の角を持っていた。

右手には無骨な大剣。左手には巨大なカイトシールド。そして鎧の隙間からは黒い瘴気が漏れ出していた。

「・・・黒騎士様？」

「・・・ニゲロ・・・。」

片言でシード達にそう言うと、黒騎士は目の前にいた魔王に唐突に斬りかかる。

それをベルゼブブは左手から伸ばした紅い魔剣で受け止める。

「・・・ほう・・・。いい太刀筋だな。」

「・・・サスガ二魔王トナノルダケノコトハアル。」

「・・・その様子だと・・・ゴーストか？だが・・・その体は・・・？」  
黒騎士の身体から聞こえてくる駆動音。それは機械の作動音であった。

「・・・中々ややこしいのを生み出したようだ・・・な！」

右手を大斧に変えて、ベルゼブブは黒騎士に斬りかかる。

それを盾でいなしつつ、黒騎士は下がる。

「・・・騎士なら名を名乗れ・・・。余は暴力と冥府の魔王・・・。ベ  
ブゼブブ・・・。」

「・・・ワレハ・・・亡霊の鋼鉄騎士団・・・双角ノ剣・・・グリーズ。」



「・・・亡霊になっても・・・騎士道精神は・・・忘れていないと見える。」

正々堂々としたグリーズに、敬意を見せる魔王。

他のシード達はディーノ達と対峙しながら、撤退の機会をうかがう。

「・・・今回ハ・・・挨拶だけだ・・・。手合ワセハ・・・マタノ機会・・・。」

その言葉が合図だった。

彼らのいる方に向けて砲撃が放たれたのだ。

「・・・手配がうまい。仕方ない、便乗させてもらうか。」

不意を突かれた砲撃は魔王とグリーズの間に着弾し、爆発を起す。

その爆風に紛れてグリーズと襲撃してきた三人のシードは姿を消す。

そして・・・魔王とミカエルも去っていた。

「・・・どうやら・・・嵐は去ったみたいだね。」

しばしの静寂をえて、ジュエルは変身を解除する。

「それよりも手当てをしないと・・・。」

———傷は浅いわけではないみたいだな。速く搬送したほうがいい。

変身を解かないままディーノは男の手当てをし、ガロは容体をみている。

「それは僕がやる。ディーノとガロはそのまま救助活動を。」

「ああ・・・。」

「俺も・・・手伝うぜ。」

そんな彼らに向かってきたのは服がボロボロになったハイルの姿。

「・・・無事でよかった・・・。いいたいけど、そっちも休んで！

むしろ怪我人だから。」

「だがよ・・・。」

「怪我人は足手まといになる。良いから俺に任せて！」

ボロボロで助けようとするハイルを強引に止め、ディーノは救助活動にはいる。

「・・・治癒はまかせろ。」

いつの間にか戻ってきていたバーハルトはハイルに治癒を施す。

「すまねえ。」

「いや・・・無事でなによりだ。」

こうして・・・彼ら四人の初めての出勤は終わりを迎える。

この程度はまだ序の口だとそろって皆は知っている。

「・・・・・・・・これはとんでもない事件を追う事になりそうね。」

ティアナは被害状況の確認をしながら、相手となる敵の恐ろしさを実感し始めていた。

「私もパラディンを着る必要があるそうね。このままじゃあ・・・どちらにしても戦力不足。」

たった数人で、管理局の支部を襲撃してくる相手。まともに彼らと戦うには強力な魔法か、パラディンによる強化が必要不可欠だった。

魔王の介入がなかったら・・・激しい戦闘が行われ、さらに被害が増していたはずだ。

「でも・・・また魔王の介入？ どうして・・・あんなに早く介入を？」

ティアナの疑問は魔王の介入の速さと的確さに軽い疑問を覚えていた。

彼女はこの先魔王と何度も遭遇することになる。

そして、その中で彼女は疑問を深めていくことになる。

## チームの形。(後書き)

四人の初仕事・・・シリアスな意味で混沌としてしまいました。

バーハルト「・・・さすがに気疲れしたぞ。」

ヘル「大変ですね。新しいお仕事。」

バーハルト「明日は普通に司書として働きたいのだが・・・気になるからこまめによることにはなりそうだな。」

そう言いながらバーハルトは家で大量の食事を平らげていた。

特務六課に入ったバーハルト。フォースにも介入させまようか？色々と反則になるとは思いますが。

そして次回・・・新キャラ登場です。

???「・・・私は・・・誰だ？」

その登場人物は色々な意味で迷子です。ついでに言えば・・・人ではない。

タイトル「魔王、首なし騎士と出会う。」

バーハルト「・・・どこのホラーだお主？」

???「ホラーって誰のこと？」

バーハルト「お主のことだ・・・あ・・・また首取れたぞ？」

???「・・・ああ・・・視界が回るゝ!!」

お楽しみに!!

**魔王、首なし騎士を拾う。(前書き)**

やっと・・・温めてきた新キャラの登場です。なかなか濃いキャラを作ってみたつもりですのでよろしくお願いします。

??? 「そんなことないです。私はそんな変なやつでは・・・うわあ  
あああ!?! また首があああああっ!?!」

バーハルト 「・・・意外とドジっ子なのだな。にぎやかになる。」

ヘル 「そうですねえ。」

## 魔王、首なし騎士を拾う。

暗がりの中、カウターは軽くため息をついていた。

「お前達の合作もすごいものだな。」

その褒め言葉にリッチとメギスはハイタッチしながら喜びをかみしめている。

老人と髭の中年オヤジのハイタッチと言うのも、変な感じがするのだが。

「強いボディを作っても、熟練の技をプログラミングするには時間がかかったからな。」

メギスはボディの制作はできても、それを生かす自我を作るのに時間がかかった。複雑な戦闘技能は長年の経験に依存する者も多く、時間がかかったのだ。

「こちらは、優れた霊を呼び出しても、そいつらが実力を発揮できる器を作るのに手間がかかっていたのだ。」

リッチはゴーストを作る際に、優れた実力を持っていた霊を使用することが中々できなかった。強い怨みを持っている霊はパワーこそ大きい、それだけだった。まともな使役が中々できず、確実に暴走する。

暴走しないように作ることも可能だったのだが、そうなるとパワーが劣ってしまうので肉体を作り直す必要がでてくる。

だが、その生かすための器を作るのが手間だったのだ。

そしてある日、二人は互いの利害が一致している事をしった。

フルメタルファントムナイツ  
『亡霊の鋼鉄騎士団』

これが優れた英霊を鋼鉄の肉体に宿した暗黒騎士団の結成のいきさつなのだ。

「・・・まあ、アーマードと違って、商品として売り出せないのが欠点だな。」

「それでも、我々のエージェントとしては大変有能だ。ゴーストも

テロや暗殺用に調節して広めようと思っておるからのう。」

ゴーストは制御こそは難しいが、使い捨ての暗殺やテロとしては大変有用だ。

「・・・札に使い捨てで封じておけば・・・じゃが・・・これもなかなかのリスクがともなっておるからのう。面白い事になるぞ。」

「・・・そうなるなら・・・クライムが集まるか。中々えげつない事を考える物よ。」

カウターが指を鳴らすと、背後には十回伊達のビルほどの大きさを誇る砂時計がある。

「・・・放置していても、集まる。人は多かれ少なかれ、罪は犯し続けるからな。だが。この世界には浄化作用がある。クライムは時間と共に消えていく。故に回収する必要がある。面倒なものなのだが・・・。」

砂時計の砂の容器からこぼれおちていく砂。

それはこの世界の罪を現していた。落ちていく砂。しかし、落ちていく砂に対し、残っている砂は一向に減らない。それどころか増えている。

——失礼シマス。

彼らの元に一体の黒騎士が帰還する。

「グリーズ・・・タダ今・・・帰還シマシタ。」

「おお。ナンバー7の騎士が帰ってきおった。どうじゃった？」

「無事二・・・三人ノセカンドヲタスケタ。支援砲撃ノ御陰ダ。」

「そりゃどうも。こっちも撃った甲斐がある。」

片言なグリーズに対して流暢な言葉を話すのは、水色の鎧を纏った騎士。トンボをイメージした軽い鎧の手にはトンボを模したボウガンがあった。

亡霊の鋼鉄騎士団のナンバー10の騎士——バドラという。

「しかし、お前の声・・・なんとかならないのか？」

グリーズの声が片言なのは、ボディの音声機能に問題があるからだそうだ。

「我ハ・・コレデイイ。」

「そうかい。まあ・・口数少ないもんな。」

バトラハ呆れながらも、主に向く。

「支援砲撃ならお主の右に出る者はおらんか。流石だな」

「いえ・・・。流石と言う言葉はあの魔王にこそくれてやりたいですよ・・。」

バトラは直接見た魔王と言う存在について素直な感想を述べていた。

「私の砲撃を呼んで・・。自身の撤退に利用する猛者ですからね。」

「・・。実力モ・・気高サモ申シ分無イ。我モ一人デハ・・。勝テヌ。」

「・・・。世界屈指の剣豪だったお主がそう言わしめるか。スペックでは互角だとおもうのだが・・。」

グリーズの言葉に、三人の幹部はあきれ果てる。元々メキスが騎士団ように作ったボディはすべて魔王ベルゼブブに対抗するために、彼のスペックを調べ上げてそれに対抗できるように作ったのだ。

それを使うのは、強力な実力を持つ霊。

不足はないはずだった。それどころか強力なボディのスペックを120パーセント使いこなしている。

それなのに・・勝てないといわれているのだ。

「・・・。底知れない実力。恐ろしい物だな。」

「そうなるト・・こちらも援軍の召喚を完了させねばな。もうつくにできているはずだが？」

リッチが指を鳴らすと、魔方阵が展開された部屋が映し出される。

「いよいよ・・。十四人目なのか？」

「・・。しかし時間かかっているようだな。」

メキスとカウターの言葉通り、優秀な霊とはいえ、召喚に時間がかかっていた。

完了していたのなら、魔方阵の中央で光っている球体が安定して光が収まるはずだったのだ。



「そうじゃのう。どうなって・・・ん!？」

リッチが状況を確認すると・・・彼は驚愕の表情を浮かべていた。召喚の魔法陣が暴走を始めていたのだ。

「なっ・・・なんじゃ？召喚予定の霊ではなく、別の・・・複数の霊が集まっておる・・・。これでは・・・じゃが・・・なぜ安定を？」

リッチが状況の把握をしようとしていた矢先だった。

暴走していた魔法陣が強大なエネルギーを発散。爆発してしたのだ。

「なっ・・・なななな!？」

その衝撃はモニターと突き抜け、閃光と爆音をあたりに轟かせていた。

その光景をリッチは咄然として見ていた。

「・・・見テクル。」

グリーズはその場から姿を消す。

「しゃあねえ。俺も行くぜ。」

バトラもそのあとに続く。

「・・・何があった？」

「判らぬ。詳しくデータを見てみないと・・・。」

メギスとリッチは事態の把握に必死になっている。

その中、直感的にカウターは察していた。

「・・・嫌な予感がする。何か・・・とんでもない存在が生まれたような・・・。」

その直感が当たっていた事を直接知るのは大分あとのことになる。だが、その影響を彼らは少し後から徐々にうけていくことになった。

そこにそれはいた。

————あれ・・・ここは・・・どこ？

瓦礫に覆われた暗い空間。立ちこめる煙と埃。

——私は・・・だれ？

そして、それはお決まりのセリフを言っていた

その声は少年、または青年のような若い声。

——・・・参った。何も判らない。・・・判らないけど、考  
える事が出来る頭脳はあるみたい。でも・・・手も足もない・・・なん  
だろ？

それは光の集合体のような物。

「・・・召喚ハ成功シテイタノカ？」

そこに現れる黒騎士グリーズ。

「でもよお。なんで人の姿じゃねえんだ？霊なら人の姿をとってで  
てくるはずだろ？どうして不定形に・・・。」

——・・・逃げた方がいい・・・な。あっ・・・移動もで  
きるんだ。

二体の存在にいやな物を感じたのかそれは、ゆっくりと動き出す。  
だが、それを阻むように一本の光の矢がその前に刺さる。

「悪いが・・・逃がしはしねえよ。」

——・・・えっ・・・。

それは言いしれない恐怖を覚えていた。動ける事はわかったが、  
自身の存在が害される事を知り、彼は固まってしまっていたのだ。

だが、彼は必死で考えていた。

——どうしよう。あの人達に捕まったらいけない・・・。そんな・

・記憶がある？でもどうして・・・。まあいい。今はそれより、  
この危機をどうやってしのぐげばいいのか・・・あれ？なんだろあれ？  
それは見えない何かをする。

——・・・なるほど、ならこれをこっちに変換させて・・・そ  
のあとこっちにこの部分を逆転させて使えば・・・。そうだ・・・  
これも利用して・・・ん・・・なんだ？この壊れかけ？・・・うゝ  
ん。そういうことか。じゃあ・・・こうやって使ってみると・・・。  
良いよりしろにもなりそうだし。

「さて・・・おとなしく。」

それに近づこうとするバトラ。

「待テ！様子ガオカシイ！！」

しかし、それを止めたグリーズ。止めた理由は爆発して壊れたはずの召喚の魔方陣が光を放っていたからだ。

召喚陣の中に嚴重に封印されていたはずのそれが現れる。

それは刃ののような翼が閉じたような部分の中央に宝玉。そこから金属の触手のようなものが伸びている異形の杖。あちこちひび割れ、かけており、宝玉の点滅も不安定になっていた。

「・・・なんで光魔の杖が出てくるのだ？」

召喚の魔方陣が光り、その中から現れたのは・・・巨大なドラゴンだった。

「・・・おい。こんな物が十五人目とは聞いていないぜ？」

いきり立ちながら炎を吐くドラゴン。炎の吐息を交わしながらバトラは呆れ果てていた。

その隙に再び起動する魔方陣。その光に吸い込まれるようにして光を放っていたそれは杖と共に姿を消していた。

おまけとしてもう一体ドラゴン型を呼び出しておいて。

「なんなんだあのゴースト？召喚陣を・・・書き換えて使用したのか？」

二人の亡霊騎士は呼び出された謎の存在に、戦慄を覚えていた。

逃がしてはいけない。そう思っていたのだが、彼らは完全に動けなくなっていた。

「・・・なんで部屋がロックされている？転送装置も壊れているぞ？」

逃げる事を完全に封じられてしまった二人。強引に破ろうにも、二体のドラゴンがそれを許さない。

「・・・厄介ナモノヲ・・・」

「くそ・・・。完全にしてやられた。おまけにあの杖を・・・」  
2人はもはやドラゴンと戦う以外の選択肢は無くなっていた。

それは必死になって逃げていた。

召喚魔法を利用して転送した場所はどこかの倉庫。杖が光に包まれながら浮いているが、力なく床にころがってしまふ。

そして、そこでそれは己の身体に迫る危機を察していた。

——力が・・抜ける・・。まずい。この杖じゃあ・・無理だったか。

それが放つ光が弱々しくなっていく。

——力が・・無尽蔵にでていつている。

その理由をそれはすぐに理解していた。

——器・・何か身体が・・別の身体があれば・・いいのかな？

その場所は無残に壊れた人型の兵器が散らばっていた・

——よし。これにしよう。

その中のある物に・・・それは入り込んだ。

「・・・ようやく終わったか。」

ベルゼブブはスクラップの山と化したアーマード達を見てため息をついていた。

「色々と細かいことをしたからのう。少し疲れたわ。」

——最近・・アーマードを利用した犯罪が多いですね。

「エデンがそれだけ災いを撒きにかかっている。ゴーストを売り出しているのもその一環だろうな。」

あの事件以降。質量兵器——特にアーマードを使つてのテロや凶悪犯罪が大幅に増えていた。

それに加え、ゴーストによる暗殺や無差別犯罪も増えている。

ベルゼブブはエデンが商品として売り出そうとしていたアーマードの保管施設をミッドで発見し、魔王としての力を発揮して破壊し

ていたのだ。

「……本拠地を叩けば一番速いが……。流石にそこまでの手がかりはなかったしのう。」

——速く見つけ出さないと、ジリ貧ですからね。

破壊し尽くされた辺りを見回し、手がかりがない事を確認するベルゼブブ。

だが、その動きが止まる。

「……転送魔法？」

彼の感覚が捉える転送魔法の発動。

——はい。何かを送られてきたみたいです。

「……そのようだな。行くぞ。」

ベルゼブブが転送魔法の反応を追ってきたのは、物言わぬスクラップの山と化した倉庫の一室だった。大量のスレイブがいたが、それらをすべて彼が直々に叩きつぶしたのだ。

その後ろにはメガビースト級の巨大なアーマードもいたが、すでにただの金属の塊になっている。

ベルゼブブは足音を立てずに、気配を消した状態であたりを見回す。

そして……

「ふああああああ……」

スクラップとかしたスレイブ達の山から間抜けな声と共に其れは現れた。

「!？」

「なんとか……体は手に入った。」

それは……ボロボロですでに稼働していないはずの一体のスレイブ。右腕は肩からなくなっており、左足も足首から下がうまく動かないように引きずるように動いている。首も辛うじてつながっている状態で、いつ落ちてもおかしくない。

「うゝん。でもこれなんでこんなにボロボロなの？まったく首なんて・・・あら？」

ぎこちない動きであたりを見回そうとしたら、

「うああああ・・・視界が・・・って首が取れたの！？」

頭が外れ、転がってしまったのだ。」

「えっと・・・あっ・・・頭とれても、体は動くんだ。うゝん。客観的に自分の胴体が動くのを見るというのは変な感覚だけど・・・。」

胴体を必死に首の方まで誘導するそれ。そして何とか首までたどり着き、ぎこちなくそれは首を拾って、頭につく。

「うん・・・これで元通り・・・てっえええええええ！？」

頭を胴体の上にくっつけ、満足そうに声をあげようとして・・・それは視界に魔王の姿をようやく捉えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「なっ・・・なんなんあんなあなん？あんただれ？って・・・あああ、また頭が取れた！今度はどこに！？あああああああああああああ転がる！転がって目が回る！！！」

ベルゼブブにおどろき、後ずさりしてしまったら、スクラップ引っ掛かってしまい、尻餅をついたそれ。その勢いのせいでせっかくくっついた首がまた取れてしまう。しかも今、度は勢いよく首が転がり、目が回りながらパニックになっていた。

あまりにもシュールで間が抜けた光景に、魔王の方は完全に毒気が抜かれてしまっていた。

「・・・同じセリフを・・・お前にききたいものだ。」

ベルゼブブはパニックになった其れの首を拾い上げ、それに渡す。自然とそうしたのは、彼と言う存在に悪意を感じなかったからだ。感じるのには生まれたての赤子のような無垢さ。

「ありがとうございます。見かけは怖いですが、良い人ですね。」

「・・・・・・・・あっ・・・ああ。」

見かけが怖いが良い人とベルゼブブの異形をその一言で済ますの

に、ベルゼブブは言葉を失っている。

「・・・とりあえず、事情を聞かせてくれるか？お前が何者で・・・そして・・・」

そこまで言いかけた処でヘルから通信が入る。

——主。管理局がそちらに向かっています。急ぎ退去を。

「・・・タイミング悪いな。」

「？」

ベルゼブブは考える。

目の前の訳のわからない存在をどうしたものか。

このまま放置して管理局に保護してもらうという選択肢もある。

だが・・・。

そう言っただけでベルゼブブに手を伸ばす。

「よければ、ここから出してやろうか？」

「・・・それは取引・・・なの？一体私はどうなって・・・。」

「・・・来てみれば判る。いやなら連れて行かないが？」

「・・・。。。」

ベルゼブブは一応其れの確認する。

「あてもありません。だから・・・お願いしてもいいですか？あなたは良い人みたいですから安心できます。」

「一応・・・我は魔王なのだがな。いい人と言われてしまったては・・・。」

良い人と言われてしまった事に、呆れたため息をつきながらヘルに通信を入れる。

——ヘル。今回は第三地下室に転送する。おまけもいるからつもりしてくれ。

——おまけ・・・ですか？

——ああ・・・。珍しい奴だ。楽しみにしてくれ。

「・・・すげえ。」

ベルゼブブ達が消え、数分してから到着した管理局員は、ディーノだった。

アーマードを売り出している組織のアジトを発見し、パラディン部隊を初めとして十分な戦力を持って彼らはそこに突入したのだ。

だが、そこにあったのは、ガラクタの山とかした数多くのアーマード達と、気を失った組織の構成員達の姿だった。

「これをやったのってもしかして・・・。」

「多分・・・いえ、まちがいはなく魔王ベルゼブブね。」

ティアナは壊れたアーマードに爪で引き裂かれたような後、それと鎖で締め壊された後をみて断言する。

爪と鎖を使った戦いをして、大量のアーマードを短時間で破壊できる猛者は今のところ魔王しかないのだ。

「・・・でもよう。手がかりがたくさん残されているぜ。」

「うん。データはすべてのこっているし、防衛装置・・・えっ・・・自爆装置も破壊されているよ・・・。データのにも、物理的にも・・・。」

ハイルとジュエルは施設をほぼ無傷で残してある事にあきれ果ている。

「バーハルトさんは司書室から帰宅していましたからねえ。後で現場見てもらった方がいいでしょうか？」

「・・・そうね。」

「————何これ？まるで私達がこっちで色々調べた事や上で行っていたような・・・。」

調べる上で万が一にも危険がないように、危険な物はデータのにも物理的にもわざわざ破壊してくれているのだ。

親切と聞こえがいいのだが、それでは納得できない部分もある。ティアナは首をかしげている。

「まさか・・・魔王は私達を・・・あてにしているというの？判らないけど・・・とりあえず現場保存を優先させるしかないわね。一応バーハルトさんにも連絡してあげて。」



ティアナはそこまで言って現場の保存と検証作業に入っていく。

「・・・厄介な事になった。」

その倉庫を遠目に見ているのはバトラ。逃げだした謎のゴーストを追って来たのだが、そこには先客がいたのだ。

「・・・施設が襲撃されている上に、そこからの足取りがまったくわからん。」

「・・・退クゾ。ココニイテモ意味ガ無イ」

グリーズはそう言ってその場から去る。心なしか疲れた声だ。

「ああ。ドラゴン二体戦って疲れた。その上にそれよりも強力なドラゴンと戦うなんてごめんだぜ。だがよう、光魔の杖は同報告すればいいのやら・・・。」

二体の亡霊騎士は搜索を中断させる。あの場には強力な蒼い龍を従えた戦士もいる。無駄な戦いで消耗は避けるべきなのはわかっていたからだ。

「・・・おかえりなさいませ。それで・・・これは一体何ですか？ヘルは転送して帰ってきた主に思わず問いかけてしまう。

「あっ・・・どうも。」

そこにいたのは壊れかけで動くアーマード、しかも言葉をしゃべっている。

「ゴーストの変異体と言った方がいいかな？一応・・・調べてみたが。」

ベルゼブブはため息をつきながら右指から伸ばした鎖をしまう。

「その鎖・・・対象をスキャンする力でもあるのですか？」

「・・・鋭いな。ああ。それだけでなく書き換えもできる。」

「便利ですねえ。それで私を検索した結果はどうでしたか？」

その質問にベルゼブブはしばし黙ってため息をつく。

「解析しないと何とも言えぬ。ヘル。お前にもデータを送っておく

から解析しておいてくれ。仮に変異体といったが、どうも・・・な。」

ヘルは鎖に触れ、データを受け取って其れをさっそく見てみる。

「・・・たしかに・・・これって。真っ白なのに・・・高度すぎる思考ロジックが・・・それにブラックボックスの中のデータも解析したのですか？でも・・・読めてもその意味を正しく理解できる物に変換しないと・・・。」

ヘルは軽く混乱しながら、ディスプレイを見る。

「へえ・・・。こっちが知らないことが色々と・・・。これから見ると私・・・ゴーストという死んだ人間の情報体というよりも、複数の人間の情報が入り混じってまったく新しい存在として生まれたということになりますねえ。そうなれば私が真っ白なものも納得できますし、妙に色々と頭がさえるのも・・・？」

其れを同じように見ていたそれは、自身の存在をそのように推察してみせる。

『・・・。。。。』

その話を聞いたベルゼブブとヘルは驚きに声を失っている。

「どうしたのですか？」

「いえ・・・。その・・・すごいですね。」

「ああ。余も其れなりの頭脳をしていると自負していたのだが・・・お主はそれを簡単に超えておる。」

そのの仮説に、ベルゼブブは変身を解きながら、ディスプレイを再び見る。

「えっ？」

変身を解いた姿にそれは驚きをあらわにする。その驚きにベルゼブブは軽く笑む。

「ふふふ。これが余のもう一つの姿。重大な秘密なのだよ。」

「そうでしたか。なら・・・あれは戦闘形態と考えればいいわけですね。」

「うむ。理解が速いのう。」

「あの・・・主様。いいのですか？あんな見せたがらなかった自身の

正体を？」

ヘルは変身を解いた事に驚きを見せる。

「なんだかのう。こやつは、我の元に来るべくしてきたような気がするのだ。どうしてかわからぬがな。そうになると、それなりの誠意をもつて迎え入れる必要があると思っただけだ。」

「……えっ？あの……それって。」

「縁を感じたのだ。お主、ここに住まないか？もちろん秘密は厳重に守ってもらうが、それさえしてくればある程度の自由は保障する。まあ……自由に関しては段階的になる故、最初は窮屈な思いをすと思うが……。」

その言葉に、それは改まった状態で激しくお辞儀をしようとする。「そっ……そんな。私が言うのも難ですが、このような意味不明な存在を置いてもらうだけで……あっ！また首が！？」

お辞儀して、思い切り首を飛ばしてしまった光景。

其れを見て、バーハルトは軽く笑い、ヘルも警戒をしていたはずなのに、いつの間にか毒気が抜かれてしまい、呆れた様子を見せる。バーハルトは首を拾い。それを胴体に付けてやる。

「自己紹介が遅れたのう。余はバーハルト・スクライア。変身している時は暴食と冥界の魔王……ベルゼブブと名乗っておる。」

「……私はそのパートナー。ヘルと申します。」

一人と一冊の魔道書は壊れかけのアーマードに向かってあいさつをする。

「……よろしく願います。私は……あっ……私生まれただけでまだ名前がありませんでした。」

「安心しろ。名前は今決めた。」

「えっ？」

「デュラハン。とある世界で、死を司る黒い首なし騎士の姿をした精霊の名だ。今の主を姿と、ゴーストであることから考えて、この名が浮かんだ。この家にやってきたお主にこの名を送ろう。」

「……………」

生まれて初めの贈り物。それが自身の名前。

「愛称は・・・デュラでお願いします。素敵な名前を・・・ありがとうございます！」

名前を送られた事に心から嬉しそうなデュラ。嬉しさのあまりにお辞儀をする。

「あああ・・・また首がああああああああ！？」

「お主。それは一発芸なのか？」

「一発芸は短いですからねえ。」

わざとではないと判っていても、一人と一冊はそう聞かずにはいられない。だが、其れなりに二人も楽しんでいる様子だった。

バーハルトの館にこうして新しい家族が転がり込んできた。

この時一人と一冊はデュラの生まれた本当の理由を知らないでいた。そして、その存在が彼らの大きな手助けになろうとはこの時だれも思ってもいなかったのである。

**魔王、首なし騎士を拾う。（後書き）**

はい。ドジっ子でもう一つ属性を加えた謎の存在デュラハン。彼が新キャラです。

それとともに出してしまったキーアイテム。光魔の杖。

これも重要な役割を果たしますので楽しみにしてください。

次回「首なし騎士の実力」

デュラ「こんなものでいいですか？」

バーハルト「・・・・・・・・・・。」

ヘル「・・・・・・・・。」

デュラ「あれ？あの・・・ご不満でしたか？」

バーハルト「・・・お主には・・・驚かされてばかりだのう。」

ヘル「はい・・・・。まったくです。」

一人と一冊が驚愕する彼の實力とは何なのか？察している人もいるかもしれませんが。楽しみにしてください。

## 首なし騎士の實力。(前書き)

最初に・・・私k iさんのm o v i e大戦に参加することになりました。

一人でこつこつ小説を書いてきた私が、他の作家さんと、ましてや仮面ライダーの小説でコラボするなんて・・・初めてすぎて少し緊張しております。

まだ募集しておりますのでk iさんのほうへ連絡をお願いします。

アイテム・・・シードとロストロギアしかないよな。

そして今回のお話をどうぞ！

## 首なし騎士の実力。

暗い空間の中リッチは二人の騎士の報告とデータを見て軽く唸っていた。

「・・・完全にしてやられたのう。」

出てきたデータではやはり複数の思念体が一斉に集まり、その奔流の中でそれは生まれた。

複数のゴーストの情報がより合わさって生まれた新たな思考する生命体。召喚陣が破壊されたのは、あまりにもその情報の量が多すぎて、耐えられなかったからだ。

「ゴーストの中から生まれた・・・情報生命体と言うべきじゃな。その力のおかげで召喚陣を転送用として応用させたみたいじゃ・・・そのためにあの光魔の杖を盗み追ったし。」

「・・・申し訳ございません。あれは・・・至高にして最強の矛と言われしロストログアでしたのに・・・我らがふがないせいで・・・」

「気にする出ない。たしかにあれは最強のロストログアじゃったよ。壊れていなければのう。あれは自己修復機能すらも働かないくらいに壊れておる。修復不可能と断言してもいい。形だけある程度残っているだけじゃよ。それを元々あれはお主たちみたいな強力な英霊を呼ぶために最強出会ったという事実をカギとして使っていただけじゃ。故に問題はない。」

リッチはデータを見て、奪われた杖は問題ないと断言してみせる。

「それよりも、この出現した謎の生命体を捕獲することを優先した方がいいじゃのう。」

「捕獲・・・ですか？」

「最悪の場合は処分したほうがいいじゃろう。データを見る限りどのように進化するかまったく読めん。」

生まれた情報生命体。それはどのような危険を秘めているのか全く分からない代物。その危機をリッチは察していた。

「簡単に見つかるとは思ってはおらん。じゃが・・・。」

その情報生命体の知能の高さの時点ですでに脅威といってもいい。天才、鬼才という言葉すら生ぬるい。

「わかりました。」

「・・・出来ル限りノ事ハシテオク。」

しかし・・・二人に、そしてリッチに彼を見つけることは結局できなかった。

彼らが魔王の僕となったデュラの事を知るのにかなりの時間を要することになる。



デュラがやってきて次の朝。バーハルト家には、いつも通り朝食を作ろうとしていた。

「ぬう……。」「

しかし、そこで、問題が起こっている。

「どうしたのですか？主。」「

「オーブンが壊れたようだ。熱くならん。その影響かコンロもダメになっておる。」「

バーハルト家のキッチンが不具合を起こしていたのだ。

「まいったのう。これでは朝食が作れぬ。」「

「あれ？どうかしたのですか？」「

悩んでいた二人に声をかけてきたのはデュラである。

「地下室から出てこれたのか？それより……。身体……。直したのか？」「

デュラの身体は以前のボロボロのアーマードの身体から劇的に変わっていた。

ちぎれていた腕や、破損していた足も治り、その上に胴体まで傷一つない状態になっていた。

「はい。一緒にたくさんのパーツを転送してくれたおかげで材料に

はこまりませんでした。あらら？」

首をかしげたデュラの首が外れ、転がり落ちる。

「おい・・・どうせなら首も直しておけ・・・っ？」

其れを見たバーハルトは呆れた声を上げるが、その言葉が途中で止まってしまう。

何しろ転がった首が独りでに浮き上がったのだ。よく見ると首の断面も綺麗に整えられており、元から外れるように設計してあった。

「・・・ただくつつけるだけだとつまらないと思いました。」

「お願いだから、驚かせないでよ。」

「ふっ・・・驚かされるとは思ひもなかったぞ。一晩でここまでの改良をするとはもう。」

ヘルはもちろん、その光景にバーハルトすら軽く驚かされていた。

何しろ彼はたった一晩で首だけ独立して自在に飛べるように改良していたのだから。

「いえいえ。それで・・・キッチンが壊れたのですか？」

デュラはバーハルトとヘルがいるキッチンを見た途端、壊れたと言ったのけた。

「判るのか？」

「ええ。目視でスキャンしただけでも回路の焼き切れがありましたから。この程度ならすぐに治りますが・・・ちよつと触らせてください。」

デュラはオーブンやキッチンのあちこちを触る。そして・・・

「なるほど・・・ここに改良箇所がありますね。ちよつとすみません。幾つか質問が。」

そうしてデュラはバーハルトとヘルに幾つか質問をする。

「よし・・・では少し弄らせてもらいます。十分ほど時間をくださいね。」

デュラの右手が様々な道具に変形する。左手も同じように変形。そして肩からもそれぞれ二対のマジックハンドが現れる。

その変化に、元の器であったアーマードの雑魚――スレイブの原型はまったくない。

「では・・・始めます。」

それから十分後。

「はい。終わりました。」

キッチンは生まれ変わっていた。少しボロボロだった見た目も新品同様になっており、オーブンも大きくなっている。

『・・・・・・・・・・』

「あの・・・一応、不満な点と無くしたくない点を両立させた状態でやったのですが？」

仕事を見て黙っていた一人と一冊に鎧騎士は慌てて話しかける。  
自分の仕事が駄目だったのかと思っていた。

バーハルトは吸い込まれるようにオーブンを触る。しっかりと熱が伝わる上に、さらにその精度も使いやすさも向上している。

ヘルはコンロを見てみる。念力で火を入れると、火力を自在に調整できるようになっていた上に、最大火力も大幅に上がっていた。おまけに元々三つあったのをでかい鍋を四つ一度におけるように四つに改良して見せている。

「本当に・・・これだけの仕事を十分で終わらせるとは・・・。」

「はい。私も内部構造を今詳しくスキャンしましたが・・・仕事は完璧です。」

「?」

驚きすぎて淡々としてしまっているバーハルトとヘルに、首を飛ばしてどうした物か考えている。

「お主には出会ったときから散々驚かされてきたが・・・。」

「あの・・・何かご不満でも?」

「本当に・・・お主には驚かされてばかりだ。」

「はい。・・・まったくです。」

バーハルトとヘルはデュラの恐るべき才能にただ・・・ため息を漏らす。

「一つききたい。どうして・・・ここまでしてくれたのだ。」

そして、少し考え、彼はデュラに話しかける。

「・・・まあ・・・単純に、お世話になる皆さんが喜んでくれるかなと思って。でもどのようにしたら喜ぶのか判らなくて、色々ときいてみました。」

その言葉はとても無邪気な物だ。それを見抜き、バーハルトは言葉続ける。

「その気持ちを忘れないでほしい。」

「えっ？」

「喜ぶ顔が見たいから作るという気持ち・・・忘れないでほしい。」

それは聡明なバーハルトだからこそわかる彼の才能の危険性。

「お主の才は素晴らしい。だが、同時に一歩だけでも歩みを間違えてしまえば取り返しのつかない災いになる。それだけの危険なものでもある。」

「・・・・・・・・。」

バーハルトの言葉にヘルも気付く。彼の才能はヘタしたら一瞬で世界を滅ぼしかねないほどの恐ろしいものだということに。

「言いたい事は・・・判るな。」

「はっ・・・・・・・・はい。」

優しい問いにデュラも慌てて頷く。

「だからこそ・・・個人的な想いで申し訳ないが・・・お主の才は皆の笑顔のために発揮してほしい。その力なら・・・世界で抱えているあらゆる困難や問題を解決する大きな助けになると思っておるからう。」

「・・・・・・・・。」

その言葉にデュラは言葉を失う。

「それほど・・・なのですか？」

「ああ。それくらいの実力はある。そう見ているぞ。」

バーハルトの目は確かだとヘルもその時考えていた。デュラの実力は現時点でも、凄まじい。

そして、その実力は時と共に確実に、しかも急速に伸びるのは確実だ。

「逆に質問していいですか？バーハルトさんはどうして魔王として戦っているのですか？しかもわざと怖がられるようにしているみたいですし。」

デュラの周りにディスプレイが出現。そこには魔王ベブゼブブと  
なって戦うバーハルトの姿がいくつも映し出されていた。

「大体・・・調べたのだな。ネットはつなげていないはずなのに・・・。」

「そんなの、簡単につながりましたよ。」

バーハルト邸はミッドチルダの郊外、山の中にある。他に家も無く、車で一時間以上はかかる距離があり、転送魔法を使わないと不便だ。

ネットなどつなげておらず、テレビとデバイスによる通信のみで満足していたわけだが、デュラはそこにネットをつなげてしまったらしい。

「人工衛星みたいなものを使いましてね。転送魔法って便利です。指定した座標に瞬時に送れるからコストも全く・・・って話がつながっていましたね。」

ネットつなげるためだけに人工衛星を作って、転送する。おまけにそのあとで魔王の情報を集めてくる。その中には管理局のサーバーに厳重に保管されている物もたくさんあり、ハッキングをしかけたことも判る。

本当に驚くべきはそれをボディの修理と改良に並行して一晩で全

部終わらせるといふ点だろう。

その荒業に内心では驚きながらバーハルトは問いに応える。

「怪物だからのう。我は・・・。」

バーハルトは己の姿をデュラに見せる。変身しない状態でも二本の角と額にある第三の目と言う異形だったのだ。

「この姿を受け入れてくれる物は少なからずいる。だが・・・我はこれだけではない。あの恐ろしい異形も我のもう一つの姿なのだ。それにのう・・・。」

バーハルトは右手に魔力を込めて、右手を魔力の刃で覆う。そしてそれで自身の左腕を肘から下を・・・一瞬で切り落として見せたのだ。

「なっ・・・えっ？」

斬り口から激しく噴き出すはずの血が出てこないという事実でデュラは驚く。

そして、斬り落としたはずの左腕がすぐに傷口から生えてきたのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「このような異常な再生能力をもつ生命体は原生生物にもなかなかいない。ましてや高等生物になると、まったく言っていないほどいない。いくら調べても・・・いないのだ。」



当たり前のように生きてきた自身の左腕を見て悲しそうな笑みを浮かべるバーハルト。

「これを・・・怪物と言わずして、何と言う。」

「・・・・・・・・・・。」

デュラはバーハルトの言葉を聞き、しばし考えたうえで問う。

「でも・・・それと魔王として戦う理由に何がつながるのですか？  
ましてや、見ず知らずの人のために何故・・・戦うのですか？」

ヘルもその問いに口を一切はさまない。

「・・・うらやましいからだな。人間達が。」

あえて人間達というのは、彼が人間じゃないという自覚から来るものだ。

「我は・・・あやつらのように笑ったり怒ったりすることが判らぬところがある。涙を流すという意味

もな。記憶がないせいなのか・・・もともと人間ではないからと違っているせいなのか判らぬが・・・感情がないのだ。どんなにうれしい事があっても、悲しい事があっても涙など・・・記憶がある中で一度も流したことも無い。」

魔王の独白。デュラはそれを興味深そうに聞く。

「でも・・・その大切さはよく判るのだ。皆を見てみるとな。感情・・・

・いやこの場合は気持ちといったほうがいいのだろう。それがあるから人は人でいられる。人の正も負もそこから来ている。普通ならその人の愚かな負の感情に絶望して人を憎むべきだったのだから。記憶失った状態で我を見つけてくれた者たちのおかげなのだろうか。な。」

バーハルトはスクライア一族に発見された経緯がある。子供のころから天才を誇っていたが、それとは逆に感情には乏しく、歳に不相応なくらいに淡々としていたのだ。

「互いに大切に思って生きている。もちろん、それだけではうまくいかに喧嘩もトラブルもあった。怒り・・・悲しみ・・・安心し互いに喜び、それを分かち合っておった。分かち合って・・・一生懸命になっておった。それが・・・ただそれがうらやましいと思ったのだ。それがまさか・・・忌まわしき姿への覚醒のきっかけになるとはおもわなかったがな。」

バーハルトは一息つきながら、デュラを見る。

「もしかして・・・魔王と名乗っているのは、周りを巻き込ませないように、恐怖の対象と自らなるためなのっているのですね。」

「・・・・・・・・。」

デュラの考えに対して、バーハルトはあえて何も答えない。

「さて・・・どの程度か使わせてもらおうぞ。」

まるでこの話はこれでおしまいと言わんばかりだった。

その背中をデュラは黙って見つめ、そのデュラをヘルは警戒する

ように見ていた。

「以上が魔王の出現パターンの推測になります。」

管理局本部では度重なる魔王の出現に対して対策会議が開かれていた。

「アーマードや、シード、ゴースト関連が主だけど、それ以外にも色々な犯罪に介入していますねえ。そ

れもこっちよりも早く察知してこちらが到着する前に終わる場合が大多数か。」

「明らかに、何らかの転送をつかっている。でも、リーダーに察知できない事からしても私達が使っている転送魔法とはまた違う方法と使っている。」

「それよりも、どうやって私達よりも早く察知して、向う事が出来るのが問題。情報が漏れているおそれもあるかも。」

本格的に動き出した魔王の出鱈目な出現パターンに、皆はそろって頭を抱える。

「だが・・・間違いないことがある。」

混乱する会議の中で、一人の男――アロン・スコートイオンは一つの事実に気付いていた。

「あいつはシードやアーマードなどに関係する事件は必ず介入する。

他の次元で起きても例外はなくな。」

彼はエンジェルシステムの責任者だった。

「我々はエンジェルシステムの改良に成功した。以前の戦闘データからしても十分に通用すると考えられる。故に魔王ベルゼブブの封印作戦を提案します。」

「ちょっと待ってください。いきなり封印するのですか？これまでの接触で話が判る相手だという事は確認できています。事件解決にも多大な貢献もしていることから考えても交渉してみる価値は十分あると……。」

アローンの提案に反対をして見せたのは八神はやて。シードやアイマードの事件を追う特務六課の指揮官として、魔王ベルゼブブの存在を慎重に捉えていた。彼女はいきなり信用するわけではないが、ただちに封印が必要だという危険で害を与える存在とは考えていなかったのだ。

「魔王ベルゼブブからシードと同じ反応が出ている。」

「えっ？」

「全く同じとは言えないが、あいつとシードには深い因果関係があるのは明白だろう。」

シードの発する固有のエネルギー波動。それをベブゼブブも発しているという事実。

「しかも、彼が危険なロストログアを保有しているのも確認してい

る。」

「なんですか？それ……」

「……古代ベルカで有名な「紅の神殺しの魔剣」はご存じですか？」

「おとぎ話にも出てくる有名な魔剣やね。確か……その力は一晩で国一つを呪い殺し、神すらも殺し、その力故に自身すらも呪い、滅んだといわれる魔剣やね。」

「あれ……実在するってみなさん知っていましたかね？」

「実在って……」

紅の神殺しの魔剣。それは古代ベルカにて一つの国を一夜にして滅ぼしたとされる有名な呪いの剣。一説によるとその呪いは血のように赤く光をした、禍々しい物だったとされている。

「滅ぼされた国の存在が実際に確認とれたのです。そこは今でも不毛の土地となっており、そこにあるエネルギーの痕跡がありました。建物ありませんでしたが、この魔剣を生み出した祭壇は残っていました。魔剣……「パラサイオン」と言う名とそれを表す病をイメージした印とともにね」

魔剣パラサイオン。それが紅の神殺しの魔剣の名前。

「そして……魔王ベルゼブブの左腕に宿る魔剣。その刀身を見てください。」

前の地上本部の事件の際に左手の魔剣を開放した時の映像が出される。その魔剣に裁断と同じ印が蒼い光と共に刻まれている。

「まさか・・・そんな・・・。」

その事実には皆の動揺は隠せない、

しかも、古代ベルカ語でもその剣に『パラサイオン』と書かれている。

そこからアロンは様々な事実をデータとして付きつける。それはいずれも皆を震えあがらせるのに十分な物だった。

そして最後の説明。

「あの魔剣が発した波動は魔剣に滅ぼされた地から放たれている物と同じか・・・それ超えおるレベルの未知のエネルギーが観測されています。」

その証拠が止めとなってしまった。

おとぎ話にも出てくる紅の神殺しの魔剣「パラサイオン」。暴走したら世界全体を滅ぼしてしまうだけでなく、次元震すらも起こしかねない危険なロストログアとして実在している事が確定してしまったのだ。

「・・・あの存在は危険なロストログアを内包しています。しかも、まだ確認できていませんが、他の四肢に宿っている残り三つも、推測ですがこの魔剣と同等かそれ以上の可能性が高いと考えられます。そんな力を放置していいのですか？」

ベルゼブブが放つ四つの必殺技。それはいずれも彼の身体に何かしらの武器を召喚して行う物だった。いずれもその威力は脅威といえるものだったが、それでもセーブしていたという可能性もあるのだ。

「よって・・・私達が封印させてもらいます。異論はありませんね。」

アーロンの言葉に、反論できるものはいなかった。

「ただ一つだけ・・・。反論しておきたいことはある。」

ただ一人だけ、それは八神はやて。

「下手な刺激を与えない方がいいと私は考えている。放置するのも危険やけど、ヘタな事をして暴走する危険もある。」

彼女がそう言うのは、直感に近いものがある。

「ご忠告・・・感謝しますよ。」

アーロンはその反論を忠告として受け流してしまった。

こうして・・・ベブゼブブの封印は覆ることはなくなった。

その力と身に秘めた力と新たな謎、それらがすべて危険なのは間違いないからだ。

「なお。これは結構時期や方法は我々の部隊のみの極秘とさせていただきます。どこで魔王の目が光っていい

るのか判らないのでね。」

そう言ってアーンは部屋を後にする。

その背中をはやては睨みつけるようにして見続けていた。

管理局本部。その中にある個室にアーンは座り、大きく息を吐く。

「・・・さて。これでお前たちの邪魔者は消えるぞ。」

誰もいないはずの部屋に向けて、まるで誰かに語りかけるような言葉。

—————上出来だよ。アーン君。

それに虚空から応えてくる者がいた。

「全く・・・いくらお前がはるかに歳上だからと言って、いつまでも君は止めてもらえないかな？」

—————しかたないじゃん。でも・・・

いないはずの虚空から姿を現したのは美しい女性だった。ただ美しいのではなく、愛らしさと可憐さなども備えたこの世の物とは思えぬ凄まじく美しく、そして・・・妖しかった。

「歳上と言われると・・・なんだか落ち込んでしまうな。」



現れたのはエデンの幹部の一人・・・リリス。

「気持ちはいつまでも十代・・・か。全く複雑な乙女心はいつまでも持っているのだ。だが・・・策略は老練でえげつねえぜ。」

2人はそう言って笑う。

「ベブゼブブは危険なのだろ？我々にとっては。」

「ええ。危険よ。あなたにとっても、私達にとっても。何しろあれは・・・神殺しの力をもっているからねえ。」

リリスの言葉の意味をすでに大切な事実を知っているアーロンは納得したように笑う・

「・・・なるほど、神にとって最大の猛毒と言うわけか。魔王と言うのもあながち嘘ではないな。」

アーロンの背中から一對の灰色の翼が現れる。

「お前の使徒として・・・この地位を、そして力を得た。今度はお前や、エデンに貢献する番と言うわけか。」

納得しながらリリスに覆いかぶさる。アーロン。

「存分に貢献してねえん。」

ソファアーに押し倒されたリリスは無邪気さと妖艶さを兼ねた笑みを浮かべる。

「まかせろ。上層部の大半は我々の意のままだからな。」

「あら？それは頼もしいわん・・・ん！？」

そう言って二人は口付けを交わすのだった。

## 首なし騎士の実力。(後書き)

さて・・・デュラの実力いかがだったでしょうか？あれはある意味では最強の力と言ってもいいです。

それを見抜くバーハルトが言った言葉は、彼の実力を意味のあるものとして、ある選択をすることになります。

そして、管理局。そこでも動きがありました。

次回は・・・魔王と管理局員の壮絶な戦いが始まります。(壮絶になるかどうか・・・本当は自信ありませんが、がんばってみます。

そして・・・魔王の危険性を知り、動き始める始める管理局。

改良されたエンジェル隊を中心に、彼らは本格的に魔王の封印に乗り出します。

次回「魔王封印作戦。」

デュラ「ヘルさん、あなたはあの方が知らないことを・・・知っていますね。」

ヘル「・・・・・・・・・・。」

デュラの言葉に押しだまるヘル。

デュラ「私は・・・どうしてここに来たのか分かった気がします。導かれたのですね、私を生み出した人たちに。」

デュラの手元には壊れた杖があった。

???「お前に永遠の眠りを与える日がきたぜ。」

ベルゼブブ「・・・これはしてやられたのう。」

魔王を取り囲む数多くの魔導師。その中心には改良されたエンジェル達。

???「あれが・・・魔王なの？」

その魔導師の中に不屈の心を持つ女性がいた。

不屈は魔王と始めて出会うことになる。

乞うご期待

十月十二日 一部訂正しました。

**魔法封印作戦 前篇（魔王の恐怖）（前書き）**

時間がかかってしまいました。おまけに恐ろしく長くなってしまったので二つに分けておきます。

いや：年末が近づくと仕事も忙しくて・・・。

後タイトル・・・若干変わってしまったすみません。

## 魔法封印作戦 前篇（魔王の恐怖）

そこはとある研究施設

その一角に一人の少女が手足、胴体、首を金属の輪で壁に縫い付けられるように拘束されていた。

「おい。例のサードのなりそこないのシード・・・処分されたんだってな。」

その少女の耳に入ってきたのは、研究者達の話声。

「ああ。例の魔王・・・まあ、俺達からしたら最強のシードをおびき寄せるためにつかっているだよ。セカンドでもなく、サードでもない。中途半端な劣悪な失敗作。それを痛めつけているだよ。」

「・・・お父さん？」

少女の耳に聞こえてきた話声。それと・・・頭の中に聞こえてきた声。

――娘・・・を・・・くそ・・・くそ・・・。

「お父さん!？」

その言葉がきつかけだった。

「・・・ん？サード01が覚醒しているぞ。」

「本当だ。」

「お父さん!! お父さん!!」

父の危機をさっしたのだろう。少女は暴れまわる。

「なっ?なんだ?」

暴れる彼女の拘束していた金属の拘束具に亀裂が入る。

「うあ・・・ああ・・・あああああ・・・!!」

——おい。速く麻酔ガスを注入しろ!

念話で通信したが、それも遅かった。

「うああああああああああああああああ!!」

そして少女の身体が光り、それと共に背中から翼が出現。凄まじい衝撃と共に、何もかもが吹き飛ばされる。

それに、傍にいた研究員達も吹き飛ばされる。

「・・・一体・・・何が?」

辛うじて、シールドを張っていたために、気絶することは避けられた研究員。

「・・・・・・・・やっ・・ヤバイ！実験体が脱走したぞ！！」

破壊された後には少女の姿はない。

あるのは破壊され、天井に空いた大穴からのぞく夜空だけだった。

デュラは夢を見ていた。

「・・・・・・・・ここは・・どこ？」

いや、正確には夢と言うべきではない。

——起きてくれたのか？

そこにいるのは一人の男だった。その顔をデュラは知っていた。

「・・なるほど、ここは死んだ人間の情報が集まる世界・・。いうなればあの世といってもいいのか？」

そうですよね？マルガ博士。」

——もう私の事を調べ上げたのか？

「魔王の参加した事件にあなたがゴーストとして使われたというのを見て、覚えていたのです。死んだ人がこうして私の前に現れる。それは・・死んだ人が何らかの形でこっちに介入してきたと考えてみても面白いかなと。」



——・・・・ふふふ。真実を的確に見抜くか。妙な偏見も無い分、素直に

突拍子もない発想にマルガは笑う。

「それに・・・ゴーストとして生まれるはずだったのに、誰でもない全く新しい生命体として生まれた理由をずっと考えていたんだ。そして・・・その理由をやっとわかりました。」

マルガは笑いを止める。

「あなた・・・いや正確にはあなた達が私を生み出したのですか？マルガ博士、そして・・・ディオソ博士。他にも大勢いるみたいですが？」

デュラの言葉に応じるように、マルガの隣に現れるぼさぼさの白髪が特徴の青年の博士が現れる。

その隣には白いローブを纏い、まるいメガネに禿げあがった髪、そして白い髭を蓄えた小柄な老人がいた。

「流石・・・我らの子だけはある。デュラハン。素敵な名前をもらっている。はじめまして、ワシの名はゼメイス。彼らと共に主を生み出した者の一人じゃよ。」

その言葉に応じるように数多くの人間がその場に現れていた。

「・・・・・・・・・・。」

黙ったまま動かないデュラ。

そつと地下室へとやってきたヘルが驚くように見ている。

「・・・・・・・・なんなの？まったく動かないけど・・・・。」

「・・・・・・・・ふう。夢が覚めたか。寝てただけだよ。」

「ファ・・・・おっ・・・・起きていたの？っていうか・・・・あなた寝るの？」

本を激しくはばたかせながら驚いた事をアピールして見せるヘル。

「一応。情報の整頓と、摩耗した情報の再生、エネルギーの循環の点検などのために3日に一度、一時

間程の睡眠を強制的に取る仕組みになっているみたいだ。まあ・・・・情報の整頓には意義があったみたいけどね。まあ・・・・細かい作業ができないだけで、外の情報が入ってこないわけではないよ。眠るっていいよね。身体がリフレッシュして、生まれ変わった気分になれる。」

「・・・・私もスリープモードに入るけど、それと似ているみたいね。」

「そういうこと・・・・。さて・・・・ちょどよかったよ。」

デュラはそう言いながら、ヘルに向き直る。

「ヘルに聞きたい事がある。まあ・・・正確には確認なんだけどね。」

デュラはそう言いながら、頭だけ飛ばしてヘルと向き合う。

「なっ・・・何よ？」

「バーハルトさんに何を隠しているの？この世のあらゆる知識を無限に蓄え。死者すら生き返す力を持つ奇跡と生死を司る禁断の書・・・「冥界の書」——ヘル・ハデスさん？」

その言葉にヘルは驚き、デュラから離れる。

「なんで・・・あなたが私の真名を知っているの？主様しか知らないはずの・・・。」

デュラはその質問に対して、当たり前用の用に応える。

「何って・・・あなたの製作者——ゼメイス・アルハザードと言う人から聞いたただだよ。知っている人、もう一人いることになるよね。」

その頃、ベルゼブブは郊外にある空き地に降り立っていた。

「・・・シードの反応があったようだが・・・。」

あたりを見回し、その反応を示す相手を見つける。

「・・・・・・・・・・ぐあ・・・・あ・・・・ああ・・・・・・・・。」

そこにいたのは、頑丈な鎖で拘束され・・もがき苦しんでいる獅子頭のシールドがいた。全身が血まみれで、片腕がちぎれ、両足はいびつに歪み曲がっている。いつ死んでもおかしくない状態だった。

「・・・・・・・・むごいことを・・・・・・・・。」

倒すべき相手であるはずだが、それを見たベブゼブブの最初の言葉がそれであった。

「・・・・・・・・お前・・涙を流しているのか？」

「ぐっ・・おおおおお・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・身に余る憤怒を果たせず・・死んで楽になることもできず・・苦しんだのだな。死ねぬというのも苦しいものだ。」

「・・・・・・・・かえせ・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・ん？」

「私の娘を・・・・・・・・かえせ・・・・・・・・。」

「何？お主・・・・・・・・。」

ベルゼブブがシールドに向けて手を伸ばそうとした瞬間だった。

シードの身体を一本の光の矢がつかぬいたのだ。

「……がああああああ……。」

その光景を見て手を止めるベルゼブブ。

シードの方は苦痛で悲鳴を上げ、全身から力が抜けていく。

「おいおい。倒しまくっている相手に対して同情とは……人のいい魔王様だな。」

矢を放った先にいたのは……エンジェルに変身したガイ・スコ―デイオンと彼が率いる六人のエンジェル達であった。

「……………」

身体を貫かれ、苦しむシード。それをベルゼブブは黙って見ている。

「……永遠にお前に眠りを与える日が来たぜ。」

宣言をするガイの隣には彼の相方となっているフェイズが指を鳴らす。

その音と共にベブゼブブのあちこちで一斉に転送魔法が発動。地面、建物の上だけでなく、空中にも魔法陣が一斉に展開。

「これは……してやられたのう。」

転送魔法の数は三ケタはくだらないだろう。

その一つ一つから十人以上もの魔道士が現れる。

魔道士だけではない。

地上ではパラディン部隊の姿もあったのだ。

彼らが一斉に現れ、ベブゼブブを取り囲む。

そして、彼を逃がさないように専門の魔道士が百人程で結界を展開してその中に閉じ込めていた。

「・・・一つ聞く。お主ら・・・我をおびき出すためだけにこれだけの事をしたのか？」

ベブゼブブの問いに、ガイは呆れたように応える。

「お前・・・自分がどれだけ危険な存在なのか判っていないのか？体内に凶悪なロストログアを最低でも四つ持っているという事実をな。」

「・・・・・・・・・・。」

「———そうか。あれらの危険性も加味されたのか。」

ベブゼブブ自身も自分の身体の中にあった四つの武具の危険性は認識していた。

「・・・あれだけの数の召喚陣と結界の展開。そして・・・こやつをわざわざ囚にするために色々したものか・・・。」

「そうだ。結構きつい抵抗を受けたが、改良した俺達の力を知るのにちょうどいい相手だったぜ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ガイが手を挙げると同時に、出現した魔道士達は一斉にデバイスを構え、魔力を集束させていく。

「いくらお前が強くても・・・これだけの数に勝てるかな？」

その言葉と共に、放たれる無数の砲撃や魔力弾の雨。

すべてがベブゼブブに降り注ぎ、閃光と爆炎、そして轟音が彼を包んだ。

見えなくなっでは本末転倒なので、すぐにそれは収まる。

皆は息をのんで結果を見る。

「・・・・・・・・・・さて・・・この程度でくたばるとは思えねえが、無傷なわけ・・・ないわな・・・。」

ガイのその問いに対して、答えは向うから帰ってきた。

「・・・・・・・・我は暴食を司る者。」

大量の魔法を受けたはずなのに、それは平然とそこに立っていた。

「おいおい。何で無傷なんだよ？」

「我は冥府を司る者。」

マフラーが爆風でなびかせながら、彼は無傷だった。

「我喰らうはこの世の毒。身勝手な欲と言う名の浅ましくも愚かしい罪と穢れ。」

無傷で立っている魔王を見て、辺りから軽い動揺が走る。

「今宵は・・・いささか不愉快な味だ。愛から来る哀しみは・・・いつも苦いものだな。」

彼の隣にはようやく息絶えることができたすシードだった人間の姿があった。

「う・・・くそ・・・くそ・・・。」

その言葉が末期のものとなった。

魔法自体は喰らっていないが、すでに致命傷を受けていた彼はそのまま息を引き取った。

———無念・・・だろうな。

彼がどんな目に会って来たのか、魔王にもすべては判らない。だが・・・人としての理性は残っていた様子と、ただ・・・誰かの事を思っている言葉から察することはできる。

無念の死を遂げた彼を横目で一瞬だけ見て、彼は大勢の魔道士達



の前で名乗りの締めくくりに入る。

「我は魔王ベブゼブ・・・・暴食と冥府を司る蠅の魔王なり。」

魔王と言う名と、そこから来る問答無用のプレッシャーに怯む者が少なからずいた。

その者たち全員に向けて指をさし、魔王は宣言する。

「さあ・・・お前達に魔王と言う名の恐怖を味あわせてやる。」

その言葉にさらなる彼の怒気が込められる。

「今回は罪なき者が多い故、冥土の土産だけは止めておいてやる。  
だが・・・。」

魔王の視線が辺りに向けられる。

「・・・冥界送り以外はいっさい手を抜くつもりはない。特に  
前・・・。」

魔王の視線と指先がガイにむけられる。それに気付いたガイが軽く身体を震わせる。

「そうお前だ。こんな下らん事を計画したお前には地獄も味あわせてやろう。他の者も我に挑みかかるというのなら、相応の覚悟してもらおうか。」

その言葉と共に魔王はゆっくりと歩き出す。

それや油断も、そして隙も無い。あるのは余裕という王者の歩み。

「ぐっ・・・・・・・・。」

たった一歩。

音もまったくなく、地面に足跡がつくかつかないかくらいの軽い一歩。

それに皆は動揺する。そして・・後ろに下がってしまう。

その一歩の重さを感じてしまった故。

それで皆は無意識の内に確信する。

彼が魔王にふさわしい実力をもっているのだと。

魔王にふさわしい実力。それが・・とてつもない物だという事を。

「・・・・・・・・どうした？攻撃してこぬのか？なら・・・・・・・・我から向かわせてもらおうか。」

挑発に似た一言がきっかけだった。

前線のパラディンの一人が雄叫びをあげて、突っ込む。

それがきっかけで他の皆も奮い立つように一斉に攻撃を仕掛ける。

そして、余裕を持って魔王はそれらを迎え撃ったのだった。

ヘルは全身の震えが止まらないのを感じていた。

何しろ主にも教えていない、自身の製作者の名前を知っている者が目の前にいたからだ。

「・・・なんで・・・あなたが我が創造主を知っているの？」

わざわざ彼女が創造主と言うあたりに、その人物に対する敬意がうかがえる。

「さっき、会ってきたんだ。まあ・・・人間で言う夢に近いけど、それよりもはっきりとした記憶が残っているのだけだね。」

「夢？そんな馬鹿な、あの方はもう死んでいて・・・・・・。私の力が未熟だったせいで・・・助ける事が出来なくて・・・・。」

ヘルの言葉に苦い悔いがにじむ。

「それは私の生まれた理由に原因している。さっきの夢の中でようやくわかったんだけど。」

「・・・・？」

「あの人は私の創造主の一人だ。」

「・・・・へっ？」

「あの人だけじゃないね。たくさんの人達が私を生み出してくれた。」

「・・・どうということ？あなた・・・最近生まれたのよね？」

「はあ・・・。まあ、判らない事が多い状態のままでは悪いから、こっちの秘密を教える。そっちの事情も判っているしね。」

ヘルの疑問にデュラは先ほど判った己の生まれに関して説明を始める。

「私が生まれた・・・冥界ってどんな世界だと思う？」

出動した皆は魔王の戦いを映像などの資料でよみ、簡単にいかない相手だと覚悟はしていた。オーバーと言える程の戦力を集めたのも納得していた。

だが、それでも彼はその予想の斜め上をいつている。

平然立ち続けるベブゼブブ。彼の周りには倒れたまま動かない無数の魔道士達の姿。

その数は軽く三ケタは超え、明らかに四ケタに迫ろうとしていた。

「こんな物か？主らの実力は？」

魔王にはまだ余裕がある。

「・・・これが魔王なの？」

その光景を上空から見ている者たちがいた。栗色の髪をサイドポニーにまとめた白いバリアジャケットを纏っている女性——高町なのは

その隣にはヴィーダの姿もある。

「話には聞いていたが・・・ギガ強ええ。」

彼女達、武装教導隊も本部からの指令により今回の作戦に参加していた。

危険な生体ロストログアである魔王ベブゼブブの封印。

そのために地上や空、海、聖王教会から戦力を集め、その中にはAAAランク以上の高ランクの魔道士を五十人ほど集めた。

だが・・・戦況は一方的だった。

地上の武装隊が一斉に魔法弾を放つ。

しかし。それらはすべて魔王の全身から伸びた鎖が弾き飛ばす。

その隙に周囲から一斉に魔王に向けて斬りかかる騎士達。

だがそれらを両手から伸ばした鎖を鞭のように振う。

風を切り、まるで無数に現れたかのような素早くも複雑な動きを見せる鎖。

それが斬りかかろうとした騎士たちをすべて打ちすえたのだ。

「・・・・・・・・・・。」

打ちすえられた騎士たちはそのまま倒れ沈黙する。

魔道士達はその隙に用意していた砲撃を放つ。

無数の砲撃。しかし、魔王はその間を舞うようにすり抜けながら、銃を手にし、引き金を引く。

「・・散れ。」

その言葉と共に放たれた巨大な魔力の砲弾。

その砲弾が魔道士達の上で壊れ、そして細かい無数の魔力弾をあたりに撒き散らす。

「あああああああああっあ!？」

そして、彼らはすぐに沈黙する。

その間も他の魔道士達による魔力弾が魔王に襲いかかってくるが、それらを避け、誘導してくる物もマフラーが叩き落とす。

それをしかけながら、再び銃に魔力を集中させる。

「・・・薙ぎ払え。」

そして砲撃を放ちながら、銃を横に薙いだのだ。

結果、砲撃魔法で地上にいた者たちが一斉に薙ぎ払われ、吹き飛ばされる。

そのはずだった。

「ほう……。良いディフェンスだ。前の攻撃もそのようにカバーできればいいことないのだがな。」

砲撃魔法を防いだのは、巨大なタワーシールドを展開させたパラディン隊。

「……。あなたと戦う事になるとは……。」

その隊を率いる隊長は魔王ベブゼブと面識があった。何しろ地上本部の襲撃の際重傷を負い、そこにベブゼブと相対したのだ。

彼の戦いとその姿勢に彼らパラディン隊は一種の敬意すらいたいでいたくらいだ。

「……。息災だったか。まさかお主がこれだけのパラディンを率いているとはな。」

「……。覚えていたのか？」

「お主ほど素晴らしい隊長はそうはいないのでな。折角だ名を聞かせてもらおう。」

「……。パラディン隊、総隊長……。ガレリア・アンペイス。本当

はこのような地位と肩書は不相応だと思うのだがな。」

彼は以前の戦いの功績もありパラディンを率いる総隊長になっていた。

だが、彼自身は犠牲になった仲間のこともあり、辞意をしようとしていたのだが、周りから押し上げられた形で、しぶしぶだがやっている形だ。

「ふっ……お主ほどふさわしい者はそうはおらぬ。犠牲になった者も分も……背負っていく覚悟さえあれば……な。」

「……!?!」

心を見透かされたガレリアは、魔王を見る。

そして彼は確信する。魔王の気高き魂を。そして……その奥にある本質的な優しさを。

「すまない。気高いあなたとこうして戦う事を……。」

「……………フツ、気にするな。お主らのやるべきことなのだろう？  
まあ……軽く病院送りにはなるがその程度に抑えておいてやる。」

魔王の全身から闘気が漏れ出す。

「今はただ、お主たち力……我に示してみよ。」

その言葉にプレッシャーが上がる。



「・・・みんな。威圧に負けるな。あの人に全力を出す。それが最大の礼儀だと思え!!」

『おう!!』

その言葉は隊の皆を奮い立たせる。

「・・・本当に良い部隊だ。時に勇者の姿はないようだが？」

ベブゼブブは蒼い龍の勇者の姿がこの場にはない事を疑問に思っていた。どこかに伏せている共か考えたが、彼の性格からしてその可能性は低いと考えている。

「今回は別世界に行っている。召集はかかっていたが間に合わないとのことだ。」

「・・・ふっ、我も運がいい。我が認めているものもあるが、あやつは本当に強い。実力だけではなく、心もな。できれば敵に回したくないくらいだよ。」

勇者と呼ばれしで蒼い龍の勇者——ディノ。

彼がこの場にいない事に内心安堵している魔王に対して、ガレリアは当然のように言い放った。

「同感です。あいつは我らの誇りです。」

迷いのないその言葉に、魔王は戦いの場であるのにもかかわらず笑う。小さく、でも心から楽しそうに。

「ふふふ……。流石は勇者。いなくてもその存在だけでも我に脅威を与えるとか。ふふふふ……。」

すぐに笑みは収まる。

「では……。いくぞ。」

その言葉と共に手にした銃から弾丸が放たれる。

それを合図に、彼らは一斉に駆ける。

———ジェットローラー！

彼らの足に装着されたのは踵にブースターの付いたローラースケート。

そして、ブースターと共に高速で彼らは地上を駆ける。

「改良されているな。スピードも速いし……。小回りも損なわれていない……。。」

彼らのスピードは速く、普通の人間なら目で追うのがやっとなくらいだ、

それが複数同時なのだ。

彼らは攪乱させながら、手にした銃を打ち払いに来る。

それを鎖で弾きながら魔王も手にした銃から散弾を放ち応戦する。

だが、それを彼らが最初から手にしていた盾で受け止める。

「良い盾だ。あの砲撃をふせぐだけのことはあるか……。」

攪乱しているパラディン達の後ろから大砲を構える他の部隊。

「ふっ……このまま防御の上から落とす算段か。だが……余をなめてもらっては困るな。」

魔王はため息をつきながらある事を行う。

一つは……重力操作。

もう一つは遠隔魔法の発動。

そして……

『なっ?』

重力を失った魔王の周囲で浮き上がるパラディン達。元々ついていた勢いが止められず、そのまま周囲の壁に激突。

それと同時に遠隔魔法を発動。

地面から走る無数の鎖が遠距離から狙おうとしていたパラディン達の大砲を破壊。

————チャージ、ペネトレイト、スプライス

「スターダストレイン!!」

動かない魔王に向けてファイズ他、二人のエンジェルがボウガンに三つのカードをリロードした射撃を放つ。

ボウガンに魔力が瞬時に集束され、放たれる球体。それが魔王の上で破裂。

無数の鋭い槍状の雨を降り注ぐ。

以前はそれを受けた魔王は防ぐこともできず、避けようにもよけきれずにダメージを受けていた、

だが、それを阻むように魔王の上空には紅い結界を展開されていた。

その結界に触れた槍の雨は次々と消滅していく。

「狙いはよかったのだが・・・同じ技とは芸がないぞ。」

「ぐっ・・・いつの間に・・・それに何だあの結界は？貫かれる前に消滅するなんて・・・」

——————ワープ！スラッシュ！サンダー！

ガイが無防備に見える魔王の後ろをワープで瞬間跳躍。

「ワープサンダーブレイク！」

雷を纏った剣をベブゼブブの背後にくらわそうとする。

「・・・及第点をやろう。いい狙いだ。」

だが、剣がベブゼブブに届く前に地面から伸びた鎖が絡みついていた。

腕が縛られ、剣が動かない。

「なっ？」

「……だが、いらん部分だけ反省して、肝心の部分は全く反省していないようだな。」

ベブゼブブがゆっくりと振り返る。

「よく反省し、ちったあ強くなってから出直してこい!!」

振り向きざまに放つ蒼い炎を纏った右の拳をガイの顔面に叩きつける。

「ぐぶっ!?!」

それをまともに受け、吹き飛ばされるガイ。

それを見て槍を手に瞬時にワープして上から斬りかかってくるエンジェル二体。

地上からはアームブレイドを手にした二体のパラデインが突進してくる。

エンジェルの武器にはそれぞれ紅い炎が纏われている。

囲まれるようにやってくる四人に対して、魔王は慌てる様子はない。

軽く飛ぶと同時に左足に白い風が纏う。

その状態で加速して、上のエンジェルを真っ先にまとめてけりで薙ぎ払い、そのまま空中でもう一度跳躍。

「えっ？」

空中をもう一度跳ぶという行為に二人のパラディンは完全に不意を突かれる。

右足に黒い稲妻を纏わせ、そのまま落下。

下の二体のパラディンの間に直撃し、その余波だけで吹き飛ばす。

着地しながら、悠然と立ち上がる

「・・・まだ誰も余に攻撃どころか、触れることすらできておらんではないか。」

悠然と立つ魔王の周りには数えきれないほどの魔道士、騎士たちが倒れている。

「ああ・・・ああ・・・ああ・・・。」

魔王の傍で腰を抜かして動けなくなっている女性騎士がいた。

「・・・・・・・・。」

その騎士に視線を向ける魔王。・

紅い複眼に睨まれ、騎士は恐怖のあまりに声すらも出せなくなっていた。

その騎士を庇うように一人の男の騎士が槍をもって、彼女の前に立つ。

「・・・ほう。」

「・・・ぐっ。」

魔王の一撃を受けていたのだろう、バリアジャケットはボロボロで見るからに満身創痍の状態。

それでも立っている彼を見て魔王は軽く関心をする。そして、もう一つ関心したのは、恐怖で腰を抜かしていたはずの女性がたちあがって、逆に男性を庇いだしたのだ。

「・・・いいコンビだな。それが・・・人間か・・・。」

それを見た魔王は攻撃を裁きながらも、二人を褒める。

『へっ?』

「・・・他に倒れている者たち・・・さっさと回収しておけ。巻き添えにしないようには善処しておくが、保証は流石に出来かねる故。」

そう言って魔王は二人に背を向けて去る。

「どうする？」

あまりにそれは圧倒的すぎる戦い。数だけで倒せる相手ではないのは明白だった。

「瞬時に三手の行動をとっている。あれじゃあ・・・どんな攻撃も捌かれるし、手痛い反撃もうけるわね。視野も異常なまでに広いから・・・」

魔王は一度に三つの魔法、または攻撃や防御を行って見せる。

みなが一の動作をおこなう間に彼は三回の行動がとれる。

しかも、その三回の中のたった一回で、複数の魔道士が詠唱をしないと使えない規模の魔法やそれに準する強力な攻撃や防御を行える。

それは圧倒的なアドバンテージと言える。

その上自分の周りの全ての状況を把握しているのか、その行動の選択に無駄は一切なく、状況に応じて最適な行動をとっている。

「・・・一つ作戦はある。シスターシヤッハも来ているよね？」

「——はい。シグナムも隣に。でも・・・しかけるタイミングが・・・」



念話に応じたシャツハも魔王の戦いにしかけるタイミングをうかがっているようだったが、まるで隙がないのでしかけられない状態なのだ。

すでに魔王はやってきた半数以上の魔道士を蹴散らしてしまっている。

「……隙がないなら……強引に作り出すまで。まだ戦えるパラディンやエンジェルの皆さんにも協力をお願い。」

なのははその言葉と共に皆に作戦を提案した、

## 魔法封印作戦 前篇（魔王の恐怖）（後書き）

今回の話の中、後とわかれます。

魔王の圧倒的な實力を書いてみましたが・・・いかがだったでしょうか？

さて・・・ここから中編です。

次回〔魔王封印作戦 中編（反撃と冥界の真実。）〕

魔王に対してなのはたちは反撃に映るが、そこに予想外の乱入が入る。

そしてデュラは真実をヘルに語る。自身と彼女にまつわる真実を。

バーハルト（余を・・・この魔王ベブゼブブをなめる出ないわあああ！！！）

??? 「お父さん！！」

なのは「これはさすがに予想外だったな。」

デュラ「私は自身の対となる存在をした・・・それが・・・。」

ヘル「それが・・・私だというの！？」

「???  
「チェックメイトだ・魔王ベブゼブ。」

**魔王封印作戦 中編 (反撃と魔王の二人のしもべ) (前書き)**

さて今日は一度に二話投稿。後半もがんばって書きますのでよろしくです。

## 魔王封印作戦 中編 （反撃と魔王の二人のしもべ）

魔王は悠然と立ちながら、周りで倒れている武装局員達を全身から伸びる鎖で運び、周囲にいる残りの局員に渡していた。

周りの皆は手を出せない。

開始してからすでに十分だが、並も魔道士では全く歯が立たない。

「一斉に襲いかかるならせめて三ヶタでこい。」

その言葉にもかかわらず、皆はかかってこれない。

「チイ・・・強すぎるな。こんなにあっさりと。」

ガイは殴られた衝撃にふらふらしながら立ち上がる。

「数だけで役に立たねえ。」

そして傍で倒れていた魔道士達を足蹴りにする。

それを見て・・・一発の銃声が響き渡る。

「・・・・・・・・・・。」

離れた場所から銃を打ってきたのは魔王。

銃弾はガイの足を止めるようにその手前の地面に穴をあけていた。

「我が地獄耳なのだ。ついでに目は千里眼。そうでないと冥界は管理できぬ。」

その言葉と共に、彼の周りにいた魔道士達がすべて運び終わる。

「・・・さて、第二ラウンドという。お互いに思い切り戦える。」

その言葉に、武装隊は後退する。短時間で半数以上の仲間がやられて、戦意を失っているためもあるようだが、それにしても後退がスムーズだ。

それに怪訝に思っていた矢先だった。

2人の騎士が素早く魔王に斬りかかってきたのだ。

その一撃を入れてきたのは、一人はよく知っている人物だった。

炎を纏った剣を手にした烈火の騎士シグナム。

トンファーのような双剣を手にしたシャツハ。

二人の剣撃を魔王は鎖を巻いた腕で受け止めている。

「・・・いい一撃だ。」

二人の攻撃を受け止めて満足そうな笑みを漏らす魔王。

「・・・判ってはいたが・・・。」

「こうもあっさりと受け止められるなんてね。」

二人の必殺の一撃をあっさりと受け止めた事実にくしくショックで済んだのは、仕方ないと判っていたからだ。

「でも・・・今回はここから・・・。」

「そういう・・・ことだ!!」

2人は力を抜き、受け止めていた魔王との力の拮抗を技を崩し、そのまま吹き飛ばされるように後ろに飛び退く。

あらかじめ示し合わせたいたかのような二人の突然の引きに少し体勢を崩す魔王。

それと絶妙なタイミングで突進してきたのはガレリアを初めとする三人のパラディン。

————ロケットナックル。

彼らの右手に召喚されたのはブーストの付いた巨大な拳。

「うおおおおおおおおお。」

ジェットによる加速に加え拳のブーストの勢いの乗った重い拳が魔王に繰り出される。

とっさに左手に結界を展開し、三つの拳を受け止めるが、その勢いに流石の魔王も後ろに引きずられる。

「ぬう……。おっ・重い……。。」

「ロケット・・・パアアアンチ!!」

ガレリアの雄叫びと共に巨大な拳が凄まじいブーストと共に飛ばされる。

「ぐおおおおお!？」

勢いが乗った拳に吹き飛ばされるように引きずられる魔王。

「ぬうう・・・。」

すぐに押しとどめ、開いた右手でロケットナックルを叩き落とそうとする。

そして、それに合わせるかのように彼の上にかかる黒い影。

「どりゃああああああああ・・・!!」

それはヴィーダの巨大化したギガントハンマーによる一撃だった。

「ぬうううううう!!」

圧倒的な質量による一撃を開いていた右手で受け止める魔王。

「やってれるな。おかげで避けられなかった。」

「・・・片手で受け止められるのは正直ショックだけでしょう。」

ヴィーダもまたあらかじめつもりしていたので、実は言葉ほどシ



ヨックは受けていない。

「でも・・・これでお前の動きは封じたぜ。」

「!!?」

足が地面にめり込むようにして吸い込まれる。

「こっ・・・これは・・・。」

「うまく行きましたね。」

しかけたのはシャツハであった。

彼女の物質透過ができる移動魔法の応用。

それを利用して、ベブゼブブの膝から下を地面にめり込ませたのだ。

流石のベブゼブブも完全に下半身の動きが封じられる。

「ぐっ・・・う・・・。」

もう片方の手はロケットナックルが止めている。その上、残っていた魔道士が一斉にバインドをしかけたのだ。

一つ一つは弱くても・・・集まった場合は流石に容易にほどけるものではない。

「おまけ・・・だ！」

グラーフアイゼンからカードドリッジが排出され、巨大なドリルに巨大なブースターの付いたツェアシユテールングスフォルムに変化する。

「ぬう・・・うううううううううう！！！」

ブースターの勢いとドリルの回転。それを片手で受け止めるのは流石に限界があった。

「ぐおおおおおおおおおおお！！！」

雄叫びをあげたベブゼブブが右手に力を込める。そして、グラールアイゼンの力をそのままにねじり上げるようにいなしただ。

「なっ？」。

無理やり方向を変えられ、ヴィーダの体勢は崩れハンマーはあらぬ方へと避けられる。

しかし、あまりの勢いに、魔王もさらに体制を崩す。

それを見たヴィーダが口元に笑みを浮かべる。

「――まさか・・・これは本命ではないのか？」

その言葉と共に魔王の右手にもバインドが駆けられる。

「・・・なのは!」

その言葉とともに魔王は上空を見上げる。

そこになのはを初めとする数人の武装教導隊の高ランク魔道士達が魔力を集束し終えた姿。

————チャージ・チャージ・バスター!!

そこにはカードをリロードさせた三体のエンジェル達もいる

「ぐっ・・・おのれ・・・。」

魔王が鎖を展開させて撃ち落とそうとするが。

「今だ! 放てえええ!!」

————フアランクスシフト、チャージ、ペネトレイト。

「アローフアランクス!!」

ファイズの合図と共にノ事多エンジェル隊が周囲に瞬時に発生させた無数のスフィア。そこから放立  
てる先端が鋭く上がった魔力弾の嵐。

「ぐっうううううおおおおおっ・・・!？」

全身から伸びだ鎖が、魔力弾の嵐の盾となり防ぐが、さすがに完全には防げずダメージを受け続ける。

そこに追い打ちのように入る魔道士達の攻撃。

魔王は苦しいながら、見え上げる。

「・・・全力・・・全開!!」

目に入ったのは放たれるのは集束された魔力をすべて解放する集束砲撃。

「スターライト・・・ブレイカアアア!!」

解き放たれた津波のごとく圧倒的な魔力の奔流。それは彼女だけでなく、他の魔道士も一斉に解き放っていた

————・・・見事な手だ。確かにこれではよけれぬ。おまけに・・・紅の結界で防ごうにも消滅しきれずに、これでは防御の上から押しつぶされてしまうわ。

迫りくる魔力の奔流に関心していた魔王。

彼の防御として使っている紅の壁は攻撃を消滅させて防ぐ結界。左手の魔剣の力を使った呪いの壁なのだが、流石に一度に消滅できる攻撃も限度はある。

そして、彼に迫る集束砲はその限度を圧倒的に超えていた。

————だが・・・まだ甘い!!

右手に蒼い炎がふきあがり、それがバインドを燃やしつくす。

それはまるで不死鳥の翼を思わせる光景。

「余を・・・この魔王ベブゼブを・・・舐めるでないわあああああああああ！！」

そして、その翼がはたくようにして、魔王はその魔力の奔流を叩いた。

「・・・冥界。アルハザードの記録にあったわね。たしか・・・多数の意識の集合体。意識・・・まあ魂と言ひ換えた方がいいわね。それが集まり、そして循環を経て、新たな命に向けて戻る場所。」

冥界。アルハザードという失われた古代の異常なまでに発展した文明がその末期にようやくその存在

と定義を知る事が出来た超次元の世界。そこはあらゆる世界からの魂の情報が返ってくる。魂とは一種の情報生命体みたいなもので、生命体の意思をその物といったほうがいいだろう。

魂とは元々超次元の中で流れる情報と言う名の大きく、深い海の中の一滴の水と同じなのだ。

その流れにある人はアシックレコードと呼んでおり、起こった事がその流れの中で記録されているのだ、

魂は命を持つ生命体に一滴の飛沫として宿り、肉体という器の中で色々な体験を経て、色々と思慮することで成長していく。肉体と言う器が死ぬと。その魂が冥界へと帰り、初期化され、魂の海と呼ばれる魂の元の所へ戻る。

そして、そのまま命の誕生と共に一滴の魂が宿る。

これが魂の循環と呼ばれる。命を超えた魂と言う名の情報が多数の次元にて循環しているのだ。

「なら・・・その冥界に、英雄や天才などの世界を変革させた人達の意味や記憶を情報として保管している場所があるって知っていた？それを管理させ、やってきた魂をそのまま転生させている存在も。」

「・・・・・・・・えっ？」

「さすがのアルハザードもそこまでは判らなかったが。」

デュラは流石に苦笑している。

「人はそれを神と呼んでいる。まあ・・・神と呼ばれる私達より高い次元の存在は他にもいるけど・・・

冥界の主として確認できたのは初めてだね。」

「・・・・・・・・・・。」

「でも、その冥界で異変が起こっている。ある組織が可能性の種に加えて、過ぎた人形、そして英霊を使って罪を集めている。」

デュラが何を言いたいのか、ヘルは何となく察していた。

「まさか・・・シードとアーマード。そして・・・ゴーストのこと？」

ヘルの問いにうなづくデュラ。

「彼らはかつて天界と呼ばれし、冥界を管理していた存在の使徒だった。でも彼らは知ってしまった。冥界に触れてはいけない者が存在していたことに・・。」

デュラが何を言いたいのか、いまいち判っていないヘル。

「管理者は急いでそれを止めようとしたが・・遅かったです。その存在は冥界の封印を解かれ、降りてしまった。封印を解くのにかわった使徒と共に辛うじて封印しましたが、冥界の主もその際に存在その物に致命傷を負い、冥界の管理を別の使徒に託して消えました。」

「・・・・・・・・・・。」

何を言いたいのかヘルはおぼろげながらに理解し始めていた。それはバーハルトが戦っている敵の正体。

彼らが何を目的にしているのか？

「今、その存在は次元の狭間に封印されている。でも・・使徒は蘇り、その主を蘇らせようとしている。それをした冥界の使徒は、無くなった主である神を復活させることにした。でも・・彼らでは元に戻すことはできず。彼らは二つに分かれて復活することになった。」

真実を語るデュラ。

「一つはあまたの科学者の知識と発想に必要な複雑な多くの思考ロジックを受け継いだ存在。数多くの天才の才をさらに凝縮して生まれた精霊……。神の知識を司る存在。」

「まさか……。それがあなたなの？」

ヘルの問いに頷くデュラ。

「さきほど冥界と通信が繋がったんだ。そこで自分の真実をしつた。そして……。同時に私の対となる存在を知ることができたんだ。」

「……。対になる存在。」

「それは太古、今では伝説となった古の文明アルハザード。そのある科学者が天啓を受けて一冊の書物を作った。冥界の力を込めた書物を……。」

「えっ……。それって……。」

デュラはヘルの動揺をさっし、苦笑しながら応える。

「そう……。ヘル・ハデス・アルハザード。あなたは冥界の神の力を引き継いでもう一つの存在。私と対になる存在なのです。」

『えっ！？』



音速すら超える掌撃は集束砲をそのまま上空へと弾き飛ばした。

その光景はまるで河に押し寄せる濁流が突然、しかも無理やりあらぬ方向へと変わってしまったといえбайいのだろうか。

信じられない光景に、放った皆は啞然としている。

「嘘……だろ？」

ガイですらも啞然としている。

驚愕を一身に受けながら魔王は大きく、そして深いため息をつく。

「……褒めてやるぞ。フェニックスウイング……余の奥義を一つを出してしまったのだからな。この技はアルカンシエルと言ったか、それすら弾き飛ばす事が出来るぞ。」

魔王は地面を吹き飛ばし、大地の戒めを解く。

魔王が放ったのはフェニックスウイングと呼ばれる奥義。

それはあらゆる攻撃を弾き飛ばす究極の守りの魔技。高速の掌撃だけでなく、その際に纏った蒼い炎の空間歪曲の力を利用して、完全に相手の力を捻じ曲げて弾き飛ばすという理屈だ。それは複数の集束砲ですら例外ではなかったようだ。

「……流石にこれは予測できなかったな。」

なのはは魔王の切り札の多さに苦い顔をしていた。逃がさないよ

うに、攻撃で相殺できないようにしたうえで守りの上からたたきつぶすために放った砲撃。それをまさか片手で弾き飛ばす術を持っているとは誰が予想できただろうか？

「お主がこの作戦を思い付いたのか？」

魔王の視線が上空にいるのはに向けられる。

「見事だ。さすがに余も本気で焦ったぞ。お主の名を・・・聞かせてもらおうか。」

魔王は作戦を立てたなのはに称賛を惜しまない。実際は動きを封じられ、少なくないダメージを受け、奥義を出さないといけないところまで追いつめられたのだ。

容赦のない力技と連携のある作戦だったと言える。

そんな魔王直々の指名に、なのはは軽い震えを感じながらも気丈にふるまう。

「管理局、武装教導隊・・・高町なのは。」

——高町・・・なのは。ああ・・・フェイト殿と同じ・・・ヴィヴィオの母上だったのか。

ヴィヴィオとユーノから話だけは聞いていた管理局のトップオブエースである彼女。

エースの名は伊達ではない事を彼は思い知る。

「見事だ・・・褒美に余から主に二つ名を送ってやる。そうだな・・・。」

そこまで考えた処で、魔王は言葉を止める。

魔王と対峙するのはシグナム、シャツハを初めとする高ランク魔道士と騎士。

それとパラディン、エンジェルたちだった。

皆の瞳や態度から闘志は消えていない。

「強者のみが残ったか。流石に簡単にやられてくれないな。」

セリフからも、相応の苦戦を彼は覚悟していた。

——流石に今のは効いたのう。あまり長引かせるのは・・・よくないか・・・。

多大なダメージを先の攻撃で受けていたベブゼブブ。戦えなくはないが、あまり長引かせたくないくらしいになっている。

——この場に勇者がいなくてよかったわ。いたら、奥義を放った瞬間に間違いなく必殺の突進をしかけてくるはずだからのう。

幸か不幸かこの場に蒼い龍の勇者はいない。

勇者だけあって彼の剣は魔王に対する切り札になりえる。それを認めているために彼も勇者の名をお

くったわけなのだが。

「……参ったな。これだけの数の高ランク魔道士達がそろって  
いるのに勝てる気がしない。」

苦戦を覚悟していたのは彼だけではない。

「……ああ。ティアナの言った通り、とんでもねえ奴だな。」

なのはとヴィーダは彼が魔王と名乗り、その名がそのまま通っているのかの理由を嫌と言うほど理解させられていた。

相対する一人と多数。

しかし、その決壊を破ったのは誰もが予測しなかったものだった。

「……ん!？」

最初に気付いたのはベブゼブブだった。

上空の空間に亀裂が入り、そこから何かが飛び出してくる。

それは金色の光輝く鳥。全身に焰のきらめきを纏いながら急降下してきたのだ。

「あの結界を無理やり突破しただと？」

その速度は速く、瞬く間に金色の鳥は父と呼ぶ男の傍に降り立ち、纏っていた光が消える。

光の中から現れたのは一人の少女。歳の頃は七、八歳くらいだろうか。

「お父さん!!」

彼女は物言わぬ姿となったシードの男に駆け寄る

「お父さん・!! お父さん!!」

彼女は必死に物言わぬ父を揺する。その声には涙が混じっている。

「お父さん・・・目を・開けてよ・・・おとうさああああああああああん!!」

激情と共に・・、彼女の泣き叫ぶ声と共に少女の身体が変化を見せる。

白鳥のような美しい白い翼をもつ猛禽類型のシード。甲高い悲鳴が辺りに木霊する。

その木霊は辺りの空間を振るわせ、軽度の次元震すら起こす、

その衝撃に皆は押される。

——こっ・・これは・・・我と同じシードのサード? かし・・それにしても力が強すぎる・・・。まさかキメラでもあるのか?

激情に振るわせる少女。

その少女の体を一発の無慈悲な矢が貫く。

「がっ・・は・・・。」

矢は腹部を貫通し、彼女は腹部からおびただしい出血をしながら

倒れたのだ。

「ぐっ・・・なんてシールドだ・・・」

ガイは隣で矢を放ったエンジェルによくやったという。

「処分・・・させてもらうぜ！」

——サンダー、スラッシュ・アクセル！

そう言ってエンジェルは瞬時に身体を貫かれて動かない少女に向かう。目にもとまらぬ加速と斬撃強化、雷が付加された一撃。

「ソニック・ブレイク！！」

それが倒れた少女に向けて振り下ろされた瞬間だった。

剣は捉える。黒い身体をした魔王の身体を。

「なっ・・・何。」

加速が乗ったタイミングをずらされ、威力が落ちているが、それでもその斬撃は魔王の身体を袈裟に斬っていた。

噴き出していた紅い血がガイの身体を赤く染める。

「・・・貴様・・・正気か？」

「・・・お主のせいだろうが・・・」

噴き出した血はすぐにとまる。痛みを感じさせずに魔王はガイに向けて拳を振り上げる。

「あの子が泣いているのは・・・お前の・・・せいだろうが!!」

その怒りの乗ったただの拳はガイのほほにめり込み、容赦なく吹き飛ばす。

「がっ？」

「ぐう・・・。」

まともに必殺技を受けたせいかわ魔王も膝をつく。

だが、視線を後ろにやり、血を流して倒れている少女の方へと向かう。

「余は・・・お主の父を助けられなかった。その悲しみを我にぶつけてもらってもかまわん。」

「う・・・うう・・・。」

「まっっている・・・。お主だけでも助ける。それが・・・奴の望みのだからな。」

苦しむ少女に駆け寄った瞬間だった。

—————今だ!!! 封印を開始しろ!!!

魔王のいた地点を中心に展開される巨大な魔方阵。

「これは……………」

魔方阵から伸びる無数の鎖状のバインドが魔王の身体を拘束する。

「ぐっ…………おのれ……………」

魔王の視線は上空に向けられる。

そこには三隻の戦艦がやってきており、戦艦から魔方阵の発動がされている。

「ここで…………お前を封印してやる。永久にな。」

その戦艦に乗っていたのはアロン。彼は策が成功したと勝ち誇った笑みを浮かべていた。

「チェックメイトだ…………魔王ベブゼブブ。」



## 魔王封印作戦 中編 (反撃と魔王の二人のしもべ) (後書き)

はあ・・・とっても長かったです。あとがきのキャラ達の会話が  
できないくらいに・・・。

今回はあと一話でこの事件は終わらせます。

長く書きすぎてしまうという欠点は何とかなないと。

あと最近からですが読みやすいように行間をあけてみました。

不評でしたら、直しますのでまた意見をお願いします。

次回 魔王封印作戦 後半(魔王の二人の僕と鉄馬)

封印されそうになる魔王ベブゼブ。二人の僕が現れる。

??? 「我々がいる限り。」

??? 「主に手出しはさせない!!」

バーハルト「・・・あとでゆっくりと話は聞かせてもらいたいが、  
こ奴らが言っていることは本当だ。この二人は我が僕だ。」

そして魔王は新たな力を得て、管理局は新たな脅威を知ることになる。

バーハルト「そうだった。お主に送る名・・・決めたぞそれは・・・



**次回 魔王封印作戦 後半（魔王の二人の僕と鉄馬）（前書き）**

時間かかりましたができました。

しかし・・・ある意味では僕が余計にふえてしまったかも・・・。

## 次回 魔王封印作戦 後半（魔王の二人の僕と鉄馬）

「……あなたの説明……本当なの？」

ヘルは確認するように、デュラに尋ねる。

「うん。ゼメイスさんに直接確認とったから間違いないよ。君が未完成と言う事を含めてね。」

「……やっぱりそれも知っていたのね。」

ヘルは本の状態なのにもかかわらずため息を共に落ち込む仕草をする。

冥界の書。それは間違いなくロストログアに分類されるアルハザードの禁断の技術の結晶と言えるデバイス。

「……でも、ゼメイスさんは言っていたよ。よくやったって。いい主を見つけたと。」

「褒めてくれているのね。それは嬉しいわ。でも……肝心の私の力は……。」

ヘルは魔道陣を発動。

その中から一つの項目を発動させようとする。だが、そこに出ているのはたった一つのエラーだ。

それを見たヘルが悲しそうに声を沈める。

「・・・生と死を司る書物なんて・・・私には荷が重い。だって・死ばかり運んで肝心の生はまったく・・・。」

それは死者蘇生の力。アルハザードの全ての技術を集め、理論上も問題ないとされながらも何か・致命的なある要素が欠けて、うまくいかなかった禁断の力。

「その問いに関しては・・・もう答えが出ています。何のために私がゼメイスさんをはじめとする数多くの科学者とあってきたと思うのですか？」

「へっ？」

「あなたの死者蘇生で欠けていた、ソウルコードの召喚。それはすでに冥界でゼメイスさんをはじめとする多くの科学者が協力して確立させました。まあ・・・一万年程の時間はかかってしまいましたか・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

デュラの説明に。ヘルは言葉が出ない。

「その技術・・・今からあなたに組み込めますが・・・どうし（お願いします）・・・即答だね。」

「私はそのように作られましたから。それは私の悲願なのです。それに・・・私は主の役に立てたいのです。戦闘はできませんから・・・。」

「ああ・・・それに関して・・・これは私・・・いや・・・もう僕

にしようと思うけど、提案があるんだ。」

「?？」

デュラの提案。

それにヘルは驚きはしたがすぐに頷く。

「なら・・・やってもらえる? あなた自身もやるのでしょ?」

「本当に迷いないね?」

「主様の幸せの為ですもの。それに・・・あなたの事も信頼したから。」

その言葉に、しばし呆けてしまうデュラ。

そして、すぐに気を改める。

「・・・あっ／＼／＼もう・・・仕方ない。こうなったらデザインはこっちでやってもいい!？」

「あなたのセンスに任せるわ・・・ってそれじゃあ不公平よね。あなたのデザインは私にやらせてもらえないから?」

「・・・まあいいよ。不細工にしないでね。」

そうして、一時間後。

二人の改良は終わる。

『・・・・・・・・・・。』

改良された結果に二人はそろって驚き・・。

／＼／＼／

そろって何故か照れていた。

「うっ・・うまくいったわね。（なっ・・なななこんなことに！？）」

「そっ・・そうだね・・。（これは・・予想以上だ。）」

そろって内心では別に理由で焦っていた。

「まっ・・まあ・・とりあえず新しい力を試して・・・・・・・・。」

「

「ちょっとまって・・主様の反応がおかしい。改良中に出ているのは判っていたけど・・って大変！！」

「・・・・・・・・力は実戦で試してみる？」

「そうね。でも結界が厄介。」

「それは任せてよ。面白いのが完成しているし。」

デュラの視線の先には修復された光魔の杖。そして、黒く鈍い光を放つ鉄の馬がいた。

———やられた……。

封印陣の中にいるベブゼブブ。

「ははははっ……さすがのお前も消耗はさけられなかったようだな。」

其の声と共にベブゼブブの通信モニターに現れるのはアーロン。彼は勝ち誇った笑みをベブゼブブに向けている。

魔道陣に拘束され身動きの取れないベブゼブブ。

「末期の言葉くらい聞いてみようか？」

「……我一人を封印するためだけに戦艦を三隻とは過大な評価を受けたものだ。」

「ふっ……それだけのあいてだということだよ。ついでに言えば衛星軌道上にはさらに五隻も待機させている。流石に八隻分の戦艦にはかなわないだろうな。」

ベブゼブブの周囲で素早く完成していく封印術式。徐々に彼の身体は石化してうごかなくなる。

アーロンが建てた作戦は実に巧妙なものであった。



ベブゼブブをシードでおびき寄せ、集めた戦力をぶつけてダメージを与える。

そして弱ったところで戦艦八隻を利用した大規模な封印をしかけるという物だ。

戦艦一隻で真竜と呼ばれる巨大な竜を封印できるほどの力を持っている。

それを戦艦八隻で行っているのだ。

だが・・・それにベブゼブブはあがっていた。

「・・・予想以上に抵抗が強いようですね。一斉に砲撃を放ちなさい、最悪倒しても問題はない。」

アローンの指示で放たれる無数の砲撃。周りの魔道士からも砲撃を受け身動きできないベブゼブブに直撃する、

それ受けて、膝をつくベブゼブブ。

「全く・・・あらがえるとは予想外だな。」

「・・・この作戦は全てお主が立てたのか？」

「そうだ。ガイに指示を飛ばし、ある程度任せだが・・・立案者はこの私だ・・・。流石にイレギュラーが入ることは想定外だったが・・・。」

イレギュラーと呼ばれたシードの少女は腹を貫かれた状態で、地面を這う。

「と……さん……………」

弱々しい声で物言わぬ父に声をかける。

「……………限りなく不味く……そして、苦い味だな。」

「……………ん？シードを狩っているお前がそんなことを……………シードの天敵と言える魔王がそんな甘い事を言うなんて……………傑作ですね。」

弱々しい少女を見てアーロンは笑う。

「せめて……楽にしてあげましょう。」

笑いながら少女を討てと指示を出そうとする。

「……………お主……勘違いしていないか？」

だが、それを止めたのは封印されつつある魔王の言葉と……………いい知れぬ怒気であった。

「あれは……人間だぞ？罪におぼれた怪物ではない……ただ……誰かの事を思ってここまで来て……」

瀕死の怪我負ってまで父親に声をかける……無垢な子供だぞ……」

「……………それがどうした？」

「・・・まだ・・・人間なら・・・助ける・・・。」

「助ける？化け物だぞ？あれは・・・。」

その一言が・・・きっかけだった。

魔王の紅い瞳が輝く。他でもない怒りによって。

「訂正しろ・・・あの子は化け物ではない・・・。」

ベブゼブブの右手に巻かれた封印の鎖が一部はじけ飛ぶ。

「貴様・・・何を言っている。我らの正義にあれば害なのだ。せいぜい我々のために有効に利用されるだけでも・・・。」

「・・・そうか・・・それがお前の正義なのか・・・。意思など、魂の在り方等関係なく、自分たちに有害なら・・・即座に消すというのが・・・。」

わなわなと体を震わせるベブゼブブ。

右腕に巻かれていた鎖に亀裂が入り、あちこちはじけ飛び始める。

「訂正しろ。あの子も・・・あの父親も守られるべき存在だ。」

「何言っている。同じ化け物に同情しているのか？魔王なのに傑作だな。もういい、抵抗を弱めるために皆一斉に攻撃・・・。」

「もう一度だけ・・・いう。訂正しろ。」

「化け物の言葉に耳など・・・。」

鎖がはじけ飛ぶ。

「訂正しろと・・・言っておるだろうがああああああ！！！」

その言葉と共に右腕から噴き出す蒼い炎。・

「えっ・・・なっ・・・これは!?!」

その言葉と共にモニターが突然燃え上がった。

モニターだけではない。アーロンのいた戦艦の一部の壁に灯る蒼い炎。それは瞬く間に金属の壁を融かした。

それをきっかけとして艦隊のあちこちから炎が上がっていた。

「戦艦のあちこちで高温のエネルギー発生を確認、装甲が融解、火災が起こっています！」

——— なっ・・・なんだ？これは？

その現象に本人も驚いてもいた。

内から湧いてくるような凄まじい力の奔流。

今まで何かにせきとめられていたのか、高ぶった感情と共に溢れだしていた。

———こっ・・・コントロールができん。何と言う力だ!?

あまりの力に、それをコントロールできない。

そして、その力は別の事態を引き起こしていた。

「封印対象のエネルギー急上昇中!! 空間が・・・歪み始めています。」

魔王を取り囲んでいた封印の魔法に影響が出始めていたのだ。

「ぐっ、隔壁閉鎖。消火を急げ。・・・演算速度をあげろ!! 魔王の封印を急げ!!」

その指示と共に封印の速度は上がるはずだった。だが・・・

「だっ・・・駄目です。封印式が浸食。その上抵抗が・・・強まって・・・。」

「なんだと!？」

魔王の左手の鎖もあちこちはじけ飛び・・・こっちらは紅い霧のような物を纏いだしたのだ。

その霧は封印術式を赤く染め、侵食しつつある。

封印陣の中・・・魔王の封印が止まる。

魔王を拘束しつつあった無数の魔道陣の動きがとまり、破壊されてしまったのだ。

「う・ううおおおおおおおお・・・！！」

魔王の右足、左足の鎖もはじけ飛びつつあり、右足からは黒い稲妻。左足からは白い風が吹き出している。

———手足が・・・熱い……。あの力が・・・暴走を・・・！？

「魔王の体内にある四つのロストログアが・・・暴走しつつあります！！すごいエネルギーで・・・このままじゃ封印術式が崩壊、大規模な次元震が起こる恐れが・・・。」

その言葉と共に封印の為の術式に亀裂が入る。

その亀裂は大きくなっていき、そこから凄まじい魔力が漏れ出している。

「まっ・・・まずい。このままでは・・・！！急いで魔王に全力の砲撃を撃て！この場で魔王を倒すのだ！！地上にも退避を！！」

魔王に向けられる無数の砲門。

アンカンシエルは流石に放たないが、それでも人間大の相手に向けるには明らかに過剰すぎる火力があるのか確実だった。

連絡を受けた地上にいた局員たちは一斉に退避。

「うおおおおおおおおおお！！」

魔王は理性を失っているのか、怒りの雄叫びと共に力を放出しつづけるのみである。

そして・・・魔王に向けて無数の砲門が解放。

艦隊戦で使われるような砲撃の雨を受け・・・魔王がいた当たり爆炎が舞った。

「魔力反応・・・収まっていきます。次元震も同様です。」

アーロンはその言葉に安堵する。

「・・・さすがは魔王。最後の最後まで・・・油断できない・・・。被害状況を確認し、問題なければそのまま封印を続行しろ。」

なんだかんだいって、彼も優秀な指揮官ではあった。

—————お疲れ様。さすがに私もひやりとしたわん。

リリスからの念話にアーロンは呆れながらも応える。

—————シードのサードでもあり、神殺しの魔王、そして神殺しの力を持つロストロギアを複数持っていることはあるな。

——でも、所詮は独り。数で攻めれば何とかなったでしょ？

——ああ。何とか・・・な。だが・・・危なかったぞ。

一人である魔王に、管理局の精鋭を投入した戦い。

でも・・・実際には魔王一人に彼らは苦戦させられ、戦いに至っては拮抗しているか、押されていたと言ってもいいものだった。

シード出会った少女の乱入により、結果として大ダメージを受けなければ、そして暴走しかかった力を押し込めなければ、管理局側は艦隊を含めて全滅していた。

「被害の方はどうだ？」

「・・・艦隊の方は動力室まではいかずとも、あちこちで火災が発生。消火は始まっています。装甲も一部が融解。地上方も七割程が戦闘不能になっています。高ランク魔道士達も疲労しており・・・」

実際に大小被害を被っている。

——でも、これで魔王を抑えることができるわね。

——これでお前達の主の復活を阻む者はいないな。

アーロンは勝ち誇った笑みを浮かべながら爆発のあった場所を見ていた。



「封印術式の修復開始。並行して封印と拘束作業を進めます……」

落ち着いた音を払った船内。

だが……。

すぐに警報が鳴る。

「どうした!？」

「……………」

アーロンの言葉にオペレーターは声を失っている。

「……信じられませんが……ハッキングを受けています。」

「どの程度のハッキングだ？」

「……すみません。艦隊……および、結界すべて……です。」

「……………」

あまりの事態にアーロンを初めとする皆が言葉を失う。

「すまん。もう一度いつてくれないか？」

知りたくない事実。それを受け止めきれないアーロンはもう一度報告を聞く。

「艦隊・・および結界にハッキングです。全ての機能を掌握されています。」

「・・・なん・・・だど？」

――・・・一体何が起きているの？

そして、彼らはモニター越しでもう一つ・・信じられない現実を見ることになる。

「・・・ん？」

暴走のあまりに曖昧になっていた五感。

取り戻していった五感にて、最初に感じたのは触覚。

肌が感じたのは身体中に巻きつく冷たい鉄の感触だった。

「あぶなかったですね。」

明確になった聴覚で感じたのは聞きなれた女性の声。

そして・・・目が徐々に見えてくる。

魔王はようやくどのような事になっているのか、事態を認識する。

「ヘルズ・・チェーンだど？」

身体に巻きついていたのはすべてを縛りつける冥府の鎖。

それが魔王の身体に巻きつき、そして・・・暴走を沈めていた。

これを使えるのは魔王を覗いて・・・ただ一人しかない。

爆発の余波で噴煙が舞う中、一人の女性が魔王に背を向けて立っていた。

纏っている衣装は白のインナーの上に蒼い革のドレス。ロングスカートの裾は札のようになっていた。腕にはドレスの上から鎖が巻かれていた。

そして・・・彼女が手にしているのは・・・冥界の書。

「・・・・お主・・・まさか・・・・？」

彼女の前には巨大な本が盾となって出現していた。

「暴走ですか。貴方様と出会った時と同じ事が起こるとは思いませんでしたよ。」

振り替えた彼女は端正なものだった。人形を思わせるほどきれいな顔立ち。歳の頃は・・・二十歳にならないかだろうか？淡々として、あまり表情を変えないが、逆にそれが神秘的な雰囲気さえ醸し出している。

「ヘル・・・なのか？」

名前を呼ばれた女性――ヘルは淡々としていた表情に笑みを作る。

柔らかでお淑やかな温かい微笑みだった。

「はい。主様。」

「・・・だれだ？あいつ・・・。」

退避していたなのは達も魔王を守る形で突然あらわれた女性の出現に驚きを隠せないでいた。

「判らない・・・でも、並の相手じゃないのは確かだよ。」

ヴィーダの疑念になのはの分析を交えて的確に応える。

何しろ戦艦の主砲を単独で簡単に受け止めた上に、魔王の暴走を静めたのだ。とても人間業とは思えない。

判るのはすくなくとも、なのは達以上の高ランク魔道士としての実力は間違いなくあることだけだろうか？

「魔王の封印・・・失敗だよね。」

魔王の周囲にあった封印の式が消えていく。

「しかたねえ。まだ魔王は弱っている。今の内に・・・。」

————— 済みませんが・・・それはご遠慮願えませんかね？

魔道士達の脳裏に同時に届いた念話。

それと共に、彼らの纏っていたバリアジャケットと騎士甲冑が強制的に解除されしまった。

「なっ……。」

「これは……？」

皆各自のデバイスを見るが、そこにはエラー表示が出ている。

——すみませんが、簡単なハッキングをかけさせてもらいました。魔法の大半は使えないようにしていますのであしからず。

そんなことをしでかした相手は丁寧な謝罪しつつ、手出ししないように言ってくる。

「誰だ！？てめえ……。姿を見せやがれ！！」

ヴィーダの言葉にその存在は軽くため息をつく。

—————そうですね。私も仮にも騎士の名を持つ者。いいでしょう。

そう言いながら、その存在は魔王の傍に姿を現す。

それは全身を黒のプレートアーマーで覆われた黒い騎士の姿。両肩には紅い粒子を発するコーンのような突起が付いている。胸部には紅く輝く炉のような物が灯っており、右手には紅い光を放つ剣を手にしている。しかし……その騎士の頭には何もなかった。

兜だけではない、首が・全くなかったのだ。

「・・・・・・・・・・。」

鎧がこすれ合う音と共に歩いてくる黒と赤の騎士。首がないその姿は恐怖を通り越して、異常だった。

明らかに・まともな相手ではない。人間ですらないとその場の皆は一斉に思った。

「いやゝそんなに驚かなくてもいいですよ。」

ヴィーダの傍に突然聞こえてくる声。

それは比較的陽気な声だった。

「なっ・・・・・・・・っ!!!!!!」

其の声がした方を見て、ヴィーダは固まってしまった。

彼女だけではない。他の皆も一斉に固まってしまった。

何しろ・そこにいたのは・・。

「・・・・・・・・だから・驚かなくてもいいと・・・・・・・・。」

それは黒い兜。馬の鬣を思わせる紅い装飾と、悪魔の様な二本の角を額から生やした兜。それが・・彼女達の傍で浮いて紅い一つ目を輝かせながら、喋りかけ

てきたのだ。

「なっ・・・なんあななんあななんあ・・・。」

「ヴィーダーちゃん、おっ・・・落ちついて。」

驚き慌てふためるヴィーダをフォローするのはだが、流石に表情は引きつっている。

「誰だ・・・貴様？」

シグナムは警戒をあらわにしながら、首だけの存在に警戒をする。

「うう・・・そんなに怖いのか・・・。格好良くしたつもりなのに・・・。」

存在の異常さに、いや、この場合は恐怖に自覚していないのは本人だけのようだ。

「フザケけるな!!」

シグナムは手にしたレヴァイティンで宙に浮いていた兜に斬りかかる。

しかし、兜はまるで幽霊のように、ぼやけながら消え、剣は空振りする羽目になる。

「・・・すみません。ふざけた存在かもしれませんが、私自身は本気ですよ。」

消えた首は、先ほどの首なし騎士の傍にあった。

その首は吸い寄せられるように首なし騎士に装着。

「……さて……改めて自己紹介といきましょうかね。」

——…詳しい事情を聞きたいものだな。デュラ。

首なし騎士——デュラに向けて念話で話しかけるバーハルト。

——…事情…結構長くなりますので、できればこれを切り抜けた後にでも…。

——…わかった。ヘルも見たことのない姿になっておるし、じっくりと聴きたい者のだ…。

バーハルトは魔王となっている姿で軽くよろめく。

——大丈夫ですか？主様。その傷……あつ…。

ヘルはどうして主が酷い怪我をしているのか、すぐにその理由を知ってしまった。

彼の後ろにいる瀕死の少女と息絶えている男。

——この方々…。



———親子だ。父親の方は・・・間に合わなかった・・・。せめて娘だけでも・・・

バーハルトの言葉に力はなかった。それだけの悔いをもっているのだろう。

助けることができる相手なら、助ける。

そんな主だと、ヘルは誰よりも理解しているのだ。

故に、彼女は決断する。

自身に備わった完成したある力を使うことを。

———・・・主さま。この二人・・・私に助けさせてください。

男は自身の死を自覚していた。

意識がぼやけて・・・かすれて消えていくのを自覚していた。

自身が溶けて消えていく。

これが・・・存在の死なのかと・・・。

———あなたに問います。

そんな彼に女性の声が聞こえてくる。

——あなたは・・・まだ生を望みますか？

その問いは厳しくも、凜とした物。

——あなたはシードです。しかも・・・実験体として悲惨な目にアイ・・・娘まで・・・。

そしてあなたは失敗作とされ、あなたは生け贄にされた。

——・・・そう・・・だったな。おれは・・・。

男は自身の人生を思い返していた。最愛の人との形見となってしまった娘。その娘ともども、シードに感染。

——娘は・・・？

——あなたの傍にいます。あなたの死を知って、力を・・・覚醒させてきました。でも・・・その際に攻撃を受けて・・・瀕死の重体です。

——・・・なっ？

瀕死の重体と言う言葉を聞いて、男はいても立ってもいられない状態になっていた。

それ見て、彼女はクスリと笑ってあげる。

——安心ください。我が主の意向で、その子は私が必ず助けます。傷一つ残さないで・・・。

———そっ・・・そうか・・・。安心した・・・。

男はそっと胸をなでおろす。

———娘の名前を出して正解ですね。あなたの魂がはっきりしています。

———あっ・・・そう言えば・・・。

男の魂はぼやけて、情報の海に消えていこうとしていた。

———私としては主様の為にあなたも蘇生させようと思います。  
そして・・・助ける娘さんの為にも・・・あなたは生きるべきかと・・・。

男は信じられない事を聞いていた。

死んだはずの自分が生き返るということに。

———頼む・・・娘を・・・。リコッタを一人にはできない。

その迷いのない言葉に彼女は微笑みながら頷く。

———わかりました。では・・・二度目の生を・・・楽しんで下さいね。アーバインさん。ついでに・・・あなたに私が知るある力をサービスしておきます。娘さんにも・・・。これは主も使っている物です。あなた達の力になるはずですから・・・。

そう言って彼女は蒼い光を二つと白い光の塊と金色の光の塊を一つずつ出現させる。そして・・・蒼い光一つと金色の光の塊をアーバ

インの魂の中に入れたのだ。

そして、それを入れた瞬間、男の魂がその流れから姿を消した。

―――ソウルコード・回収完了。

その言葉と共に蘇生は始まった。

ヘルのと死んだ男――アーバインの周りに現れる複数の本。

それと共に彼女の足元に複雑魔方陣が現れる。

その内三冊がアーバインの身体を取り囲む。

――蘇生作業と並行して、負傷の治癒も開始。

その本は一冊ずつ、少女――リコッタとバーハルトの前に現れる。

瞬く間に傷が癒えていくリコッタとバーハルト。

―――肉体、および遺伝情報の修復作業開始。

激しく破損していたアーバインの肉体も瞬時に修復。

―――続いて生体機能の再開。

修復された身体から鼓動が聞こえ、血が・命が巡る。

―――そして・ソウルコードを入力。

その言葉と共にアーバインの身体を光が包む。

「うっ……うう……。」

アーバインの、二度と開く事がなかったはずの瞼。それが眩い光に苦しみながらも開かれる。

「あっ……ここ……は……？」

開かれた瞳には確かな意思の光が宿っている。

「生きている？ しかも……身体が？」

「ハッピーバースデイ。あなたの……二度目の生の始まりよ。」

驚く彼に向けて、誕生の祝いの言葉を欠けるヘルだった。

当然……この光景を見た者はデュラを覗いて皆揃って驚いていた。

「……死者を……蘇らせた？」

この世界でも不可能とされていた死者蘇生。

それを行った存在に驚きを向けない方がおかしいだろう。

「なっ・・・何がどうなって・・・。」

動揺している皆に向けてヘルは悠然と振り返る。

「・・・さて・・・名乗りが遅れたわね。」

彼女は名乗りを上げる。

「私の名はヘル・ハデス・アルハザード。アルハザードの最高にして最後の遺産、冥界の書の化身にして、魂と命を司る女王。冥界の主たる魔王ベブゼブブの二の僕なり。」

名乗りを上げた彼女の隣にデュラも並ぶ。

「僕の名はデュラハン。冥界の魂の淀みより生れし、知と死を司る精霊騎士。失われし太古の遺産の作

り手であり、守り手。そして・・・冥界の主たる魔王ベブゼブブの二の僕なり。」

2人はそろって皆に向けて宣言する。

「我が主、古代ベルカの伝説の大魔王である主様には私達がいる。」

「それを忘れるな!!」

—————お主ら・・・いつの間に余の僕になったのだ？おまけに余の血統が古代ベルカの魔王だと？

バーハルトは呆れながらも立ち上がる。

しかし・・・内心ではどこか嬉しそうだ。

――すみません。ですが・・・我々も・・・。

――そうです。僕も日が浅いですが、あなたになら仕えていいと思いました故。

観測しかなかったヘルの戦闘への参加の決意。いつの間にか一人称が私から僕に変わっているデュラ。

自分が気付かない間に大きな変化があったと察していたバーハルトは2人を優しく見る。

――全く・・・頼もしすぎて・・・怖いくらいだぞ。

バーハルトは完全復活した状態で対峙する。

対峙している皆は驚きのあまりに固まってしまっている。

「どうした？何を驚いておる？我の秘臓の僕達がそれほど凄いか・・・それは重畳というものだのう。魔王と名乗る以上僕がいてもおかしくないというのに・・・。」

本人が一番驚いていたのだが、嬉しさと、魔王としての意地で皆にはまったく諭させない。

「今後は我らで活動する。力押しで戦いたければ好きにすればいい。丁重にもてなしてやるぞ。」

アーロンは啞然とする意外、何もできなかった。

「魔王に・・・僕だと？そんなの聞いていないぞ。」

——私も・・・。あんな切り札がいたなんて・・・。

リリースまでもが動揺している。

そして・・・リリースはさらに動揺をすることになる。

デュラがある物を出現させたからだ。

——なっ・・・なんであれが・・・？

「なんだ・・・あれは？」

デュラが目の前に召喚したのは一本の杖であった。

——あれは・・・最強の矛と言われたロストロギア・・・。

それは彼女達の組織・・・エデン似てリッチが英霊召喚の為に使っていた壊れたロストロギア。

使い物にならないはずだったはずで、修復は不可能とされていたもの。それが・・・完璧に修復された状態で出現していた。

——あなたもおとぎ話で聞いたことくらいはあるはずよ。天と地



すら切り裂く伝説の剣となった最強の杖のことを・・・。

「・・・・・・・・おいおい。まじかよ。」

おとぎ話で世界を滅ぼそうとする巨大な次元震を一振りですべて薙ぎ払ったとされ、ある時は一つの世界を両断して滅ぼしたとされる救世と破滅の二つの側面を持つロストロギア。

「・・・じゃあ・・・あれが光魔の杖？」

「————リッチのうそつき。何が修復不可能よ！！完璧に治っているじゃない！！」

「・・・我が主。貴方様に二つ・・・献上したいものがありまして・・・」

そう言って出現させたのは一本の杖だった。

「これは・・・お主が持っていた杖ではないか？修復・・・できたのだな。」

「この杖の名前・・・まだ言っていないませんでしたね。これは最強の矛と唄われし、救世と破滅のロストロギア・・・光魔の杖です。」

その言葉を聞いたハルバードが固まる。

「・・・・・・・・なんだと？」

何しろ彼も無限書庫の司書を務めているだけあって、歴史で大き

な事件やそれにまつわるロストログアは知っている。

その中で光魔の杖はあまりにも有名過ぎるのだ。

「これはあなた様が持つのにふさわしい。故に……。」

「……………」

目の前にそんな伝説級のロストログアがあるのなど信じられない  
バーハルトは恐る恐る手を伸ばす。

そして、バーハルトの右手が光魔の杖をつかんだ瞬間。

光魔の杖が光となって消え、バーハルトの中に消えていったのだ。

「…………どうやら、あの子もあなたを主としてふさわしいと認め  
たようです。貴方の身体の一部とな  
り、大きな力になります。」

「……………」

その言葉にバーハルトが光魔の杖を手と呼ぶ。

すると、右手に光と共に瞬時に光魔の杖が現れる。

「少し試させてもらおうぞ。」

バーハルトの言葉と主に光魔の杖の先端が開き、そこから魔力の  
刃が噴出。

その大きさはまるで大剣。バーハルトの身体が隠れるほどの幅広で長い刃が出ていたのだ。

それを上空に向けて軽く振るうバーハルト。

ただ・・それだけだった。

それだけで、バーハルトを閉じ込めていた結界が粉々に碎け散ったのだ。

「ほう・・・。威力が高すぎるな。」

魔力の刃を収めながら、バーハルトは光魔の杖を見る。

「色々と訓練を積まないといけないようだ。まあ・・よろしく頼むぞ。」

光魔の杖を消したところで、再びデュラを向き合う。

「さて・・もう一つはなんだ？」

バーハルトの問いと共にそれは派手に現れていた。

空中を失踪する黒い影。

粉々に碎け散る結界の中にそれはバーハルトの前に降り立つ。

「・・・これは・・・バイクだど？」

それは漆黒のバイクだった。

全身をバーハルトと同じ黒い甲冑に覆われたハーレータイプのバイク。マフラーからは吹きあがる噴煙は特殊な魔力なのか、光が混じっている

前面は突撃できるように、巨大な衝突角が付いており。その左右に昆虫の複眼のようにライトがつき、バッタの触角のようなレーダーが二本伸びていた。

前輪はバッタの前足のような物で覆い、後輪はバッタの後ろ脚のような物が付いている。

「あなた様の鉄の馬でございます。」

その言葉に應えるようにエンジンをうならすバイク。

「・・・ほう。これはすごいもの。本当にバイクなのか？水陸空中だけでなく、宇宙、そして転送機能まであるとは・・・。」

それに手を当てたバーハルトはそれだけでアバドンの性能を知る。

「私の全ての技術の粋を集めて作った生きた鉄のバイク。自己修復はもちろん、自己進化もします。おそらく、私が作った最高傑作のロストロギアになるかと・・・。」

その言葉と聞きながらバーハルトは少し考えてから応える。・

「うむ。それなら名を与えてやらんとな。お主の名は・・・アバドン。イナゴの大悪魔の名を主に与えてやる。」

————イエス。マイロード。

その言葉と共にアバドンは後輪を急速に回しながらその機体を持ち上げつつ、横に払う。

「ぐああ!?!」

そして、ワープと共に斬りかかろうとしたエンジェル達をまとめて薙ぐ。

————我がマスターには指一本触れさせません。

「・・・お主が余の第三の僕ということか。」

満足そうに魔王はアバドンに乗り込む。

そしてそこで・・・蘇生したアーバインがようやく声を上げていた。

アーバインはあまりにも訳が判らない状況に啞然としていた。

死んだはずの自分が無傷でいること。

その傍で娘が眠っていること。

「・・・そういえばあなたのことを忘れていましたね。」

そこで聞こえてきたのは沈みゆく意識の中で聞こえていた女性の

声。

「あなた達に私は一つの使命を託しました。その証がそこにあります。」

その言葉と共にアーバインの右拳に光が灯る。

同時にリコッタの左足にもだ。

「主様。この二人を安全な異世界へと送ります……。よろしいですか？」

主と呼ばれたのは魔王ベブゼブ。

紅い複眼が向けてくる視線は優しいものだった。

「ああ。頼む。」

その言葉と共に。転送魔方陣が発動。

「あっ……あの……？」

「……幸せになれ。折角再びつかめた命だからな。」

ベブゼブの言葉と共に、二人の親子はその場から姿を消した。

「……………さて……どうしようか？」

あまりの状況に唾然としていたのはは對抗策を練ろうとする。

「どうしようもねえだろ。魔王のダメージは癒えている上にこっちはボロボロ。しかもめちゃくちゃな奴らまで魔王の傍にいる・・・。」

明らかにこのまま戦って負けるのは管理局側なのは間違いなかった。

せつかくボロボロに追い込んだはずの魔王のダメージは瞬時に癒え、その上でとんでもないロストログアを手に入れている状態。

その上、彼の配下で詳しい能力は判っていないが、明らかに常識外れの力を有している三体の僕が現れたのだ。

その内一体は強制的にバリアジャケットを解除させてしまう力を持っている。

この状態だと・・・あいてに蹂躪されるのは明らか。

しかし・・・魔王はその予想に反して三体目の僕にまたがった。

「さて・・・今夜はこれで帰るとしようか。」

バーハルトは今なら簡単にこの場をされる事を知っていた。圧倒的な戦力がこの場に揃っている。

一方の相手側はボロボロだ。戦艦もデュラが使いものにならない

ようにしてしまっている。

「今宵はこの新たな僕に乗って試運転と行きたいのだ。追ってくる度胸のある者がおるのなら・・・追ってくるがいい。」

そう言いながらエンジンを吹かす。

その瞬間をねらっている者もいた。

高町なのはだ。

放たれる桃色の砲撃。

カードリッジも使っているのか、そこ数は七本ある。

「ぬう!？」

その一撃に軽く驚きながら、アバドンに意識を送る。

「アバドン!！」

——イエス、マイロード!!

その言葉と共に後輪にあったバッタの足が地面をける。

それとともにアバドンと魔王は空中に飛び上がったのだ。

『・・・・・・・・・・バイクが・・・飛び跳ねた?』

桃色の砲撃が虚しく空を切る。



「危なかったのう。追ってくるがいいとは言ったが、いきなり砲撃がやってくるとは思わなかったぞ。」

アバドンは空中に浮いている。その状態で魔王は砲撃を放った高町なのはを見る。

「褒めてやる。余を一度ならず、二度も驚かせるとはな。」

「うう・やっぱり無理だったか。」

悔しそうな彼女に向けて魔王は良い放つ。

「さすがだのう・・・・・白き魔王よ!!」

『・・・・・。』

その言葉に管理局一同、なのはを含めて皆が一斉に固まる。

「・・・・・へっ?」

そして、なのはがすぐに復帰する。

「なっ・・まっ・魔王って・・わっ・・私のこと!?!」

「そうだ。お主の容赦のない攻撃、魔王である余も見なわないといけないほど凄まじいものがあったぞ。そんなお主に余の魔王の名を送ってやる!!」

「ええええっ・・・ちよっと!!」

「これは余の最大の敬意だと思ってほしい。」

魔王が最大の敬意を持って送ってくれる魔王の名。

しかしそんな者・・・彼女が喜ぶはずなどない。

「そっ・・・そんな・・・そんなのいらない・・・。」

「謙遜するな。お主ほどふさわしいものはいない。遠慮なく受け取ってくれ。」

魔王はそう言いながらアバドンを吹かす。

「さて帰るぞ。」

「・・・・・・はっ・・・はい。」

「わっ・・・わかりました。」

何故かなのはに同情の眼差しを送っていたヘルとデュラは魔王の言葉に慌ててアバドンの後ろに出現した戦車に乗る。

「さらばだ・・・また会うかもしれないのう!!」

その言葉を残し、高速で空中をかける魔王。

「ちよっと・・・・・・待ちなさいなの・・・。」

そんな魔王に怒りと羞恥で震えながら、レイジングハートを向けるのは。

「おっ・・・落ち着けなのは!!」

ヴィーダが止めようとするが、すでに遅い。

「今の言葉・・・訂正しろおおおおおおおおおおおおお  
おおお!!」

放ったのはディバインバスター。

遠距離まで届く高速砲撃。

高速で走っていた魔王はそれを横にかわし、すぐに姿が見えなくなっていた。

「はあ・・・はあ・・・。逃がした・・・。」

そんな彼女を周りの管理局員一同・・・畏怖の念で見失っている。

それになのは気付く。

「ちょっと待って・・・私は魔王じゃない。」

しかし・・・今回は説得力があまりにもなかった。

そんな非常な事実打ちのめされながら、白い魔王となったの

はは涙目で皆に訴える。

「だから・・・私は魔王じゃないよ!!」

なのはにとって不幸だったのは、その名を送った相手があまりに魔王らしく圧倒的な強さを誇っていたこと。

そして、そんな相手を追い詰めたという事実が魔王と言う名をあまりにも説得力がある者にしてしまっていることだった。

「あの魔王・・・今度あったら絶対にOHANASIしてやるんだから!!」

底知れない高町なのはの怒りの叫びは皆を震え上がらせたという。

同時に皆も思った。

なるほど・・・確かに魔王だと。

これをきっかけに管理局全体の彼女の二つ名が瞬く間に広がったのは言うまでもない。

一方のバーハルトの方はというと。

「良い砲撃だったな。祝砲代わりに受け止めてやるわ。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

――・・・・・・・・。

何やら勘違いしている主に対して、僕三体はそろって思っていた。

『絶対にそれは違う。むしろ・・・嫌がってましたよ!!』

そして納得もしていた。

『でも、失礼だけど・・・魔王と言う表現はある意味ではまちがっていないかったです。』

三体とも高町なのはの怒気に内心では軽く震えあがっていたのは内緒にしていたという。

## 次回 魔王封印作戦 後半（魔王の二人の僕と鉄馬）（後書き）

・・・この時点で魔王単独ではなく、魔王サイドということになります。魔王に一気に三体の僕が現れます。

しかもますますチートになっていくような・・・。

そして、なのはの魔王襲名。さて・・・これに関してはどうでしょうか？

結構な駄文になってしまいましたが、また感想をお願いします。

さて次は、バーハルト家の大きな変化とともに、とんでもない事件が起こります。

次回「魔王と聖王、ビギンズ・ナイト第一話。」

ある事件がきっかけでヴィヴィオは禁断の真実を知ることになる。

ヴィヴィオ「なんで・・・バーハルトさんが・・・魔王？」

ヘル「あら・・・正体がばれてしまったのですね。どうしましうか？」

そしてヴィヴィオは事件に巻き込まれさらわれる。

なのは「ヴィヴィオ！？ヴィヴィオ！？どこなの？」

バーハルト「・・・仕方ない。ヘル・・・ヘル？応答しろ？」

ヘル「聖王なら・・・知る権利はありますね。」  
そして、ヘルはヴィヴィオに語り始める。  
魔王誕生の秘密を・・・。

聖王と魔王（誘拐編）（前書き）

年末になると仕事が大変忙しいです。

その中で何とか書けましたが・・・短めですね。

バーハルト「・・・やれやれ。もっと集中せんか。」

THIS「・・・返す言葉はないわ。ㇿ



## 聖王と魔王（誘拐編）

+

その日バーハルトは休日、大変ご機嫌な様子で買い物をしていた。

「うん……。これはいい。」

彼が今いる場所は市場。夜も明けない時間から始まり、陽が明ける場所に終わりを迎えるので、かなり早起きしないとそこにはいけない。

だが、バーハルトにとってはそれくらいの苦労など在于てないものだった。

何しろ彼は食事を作るのが何よりも楽しみになっていたのだから。

「……………デュラよ。余もお主には驚かされてばかりで、大抵の事はもう驚かぬと思っていたが……………いい加減に驚かされる事に慣れさせてくれ。」

魔王の前に三体の僕が現れた事件の後、事の顛末を三体から聞いていた時の一言である。

何しろバーハルトの目の前には本を持った長い白髪のちっちゃな妖精のような女性と、黒の騎士甲冑を纏った黒髪の妖精くらいの大きさの青年。

そして……バツタがいたからだ。

「お主が生まれた理由・我を主としてくれたのはよく判った。それで・・・ヘルも本来の力を持つ事が出来たのもな・・・。だが・・・なんだその可愛い姿は？」

その言葉に苦笑する三体。

「まあ・・・簡単にいえば新しいステージに進化してみたのです。ただの道具ではなく、我々には魂がある。そしてその魂があるのなら命を持たせてみようかなと・・・。」

「では・・・お主ら生命体というのか？」

「はい。管理局にあった融合騎のデータを元にしています。まあ・・・精霊と言う言葉がしっくりくると。」

そう言う三人から聞こえてきたのはお腹がすく音。

「ほう・・・本当に生きているのだな。」

少し驚いている三人に対して、嬉しそうなバーハルト。

「そのようですね。基本的に人間と同じ生理機能も一通り備えている故お腹もすきます。」

「・・・これが空腹なのですね。」

「うむ。私は生まれてまだ一日ですが何かを欲しているという欲を感じます。」

三人とも初めての空腹に感想を言いつつ、物欲しそうな表情を見せる。

「よしよし。なら誕生の記念と初めての食事の記念になるのだな。少し待っておれ。」

あらかじめ仕込みはしていたバーハルトなので、それを利用して、バーハルトは三人分を加えた夕食を素早く用意する。

今回はチャーハン。

大の大人が簡単に入りそうなくらいの大きさの中華鍋に、それを簡単に乗せることができる巨大なコ

ンロの上で、大火力で具と飯を調味料と絡めた状態で素早く炒める。

普通のキッチンだったはずなのだが、恐ろしい程巨大に改良されていたのだ。もちろんそれをやらしたのはデユラ。

でも、その巨大な中華鍋を片手で軽々と扱って見せるバーハルトも大抵普通ではない。

その脇では寸胴鍋にてスープが煮込まれていた。

野菜をふんだんに使ったスープ。

そのいい匂いに、落ち着かない間隔を覚えながら三人はじっと待っていた。

ほんの五分、

三人としては限りなく長く感じたが、その時間で食事は出来上がっていた。

「さあ・・・初めての食事にしては簡素だが、食べてみてくれ。」

チャーハンに野菜のスープ。そしてあらかじめ作っていたポテトサラダ。それにオレンジの入ったヨーグルトのデザート。

三人はいただきますをしつつ、主と共にそれを食べる。

バッタのアバドンが四本の前足を器用に使って箸を持つのはとても奇妙だったが。

恐る恐る食事を口にした三人。

しばし動きが止まり、ゆっくりと噛み、飲み込む。

しばしの余韻。

そこから速かった。

まるで憑かれたように食事のペースが上がっていったのだ。

無言、いや喋る余裕も無いくらいに三人は食事に夢中になる。

そんな三人を微笑ましく見ながらバーハルトも食べていた。

——共に食事を取るのがこれほど楽しいこととはな。

バーハルトにとって彼らが食事が必要としたのは想像外の幸せをもたらしてくれた。

基本的に一人で食事をとっていた彼なのだが、共に食事をとるとその喜びは別物になってしまう。

色々と騒ぎなら、楽しく食事。

食べる量自体は増えていないが、満足度は大きな物になっていた。

——家族が増えた。そう認識していいのかもしれん。まあ・  
・私の起こし方がさらに凶悪になったのは・・なんとかしてもらいたい。

寝起きが非常に悪く、そして弱いバーハルト。それを今まで色々な手段でたたき起こしてきたヘルだが、そこに厄介なことにデュラとアバドンも加わってしまったのだ。

デュラの発明した叩き起こしマシン。そしてアバドンは秘められた機能による凄まじい力技を使っている。

毎朝その実験台になっている。

——今朝は・・いきなり海中に転送だからのう。溺れると思ったわ。

起きるたびに「このたわけ者どもがあああああああ！！」

と怒声をあげるのはお約束である。

——まあ面白い要素があるのは違いないが・・・。

妖精のようになってしまったヘルとデュラがとっても仲睦まじいのだ。

互いの手に触れてしまっただけになってしまったりと・・・。

そんな二人に市場に出かける前に聞いたのだ。

——人間に極めて近い構造をしておるの难道？ なら性交や繁殖も同じなのか？

その質問にデュラは頷く。

——そうか。なら将来新しい家族が増えるかもしれないのう。

そう言っただけ、バーハルトはでかけたのだ。

意味が判らないデュラに対してヘルは湯気が出そうなくらいに真っ赤になっていた。その光景を横目

で微笑ましく見つつ彼は市場に繰り出したのだ。

——少しでもおいしく作りたいのだな。

新しい家族が増えていらいバーハルトにとって料理より楽しい物になっていた。自分以外の別の者たちに食べてもらうというのがこれほどうれしい物とは彼はしなかったのだ。

そしてそれと同じくらい、それを一緒に食べるという事が本当にうれしいのだ。

「しかし・・・便利だのう。」

彼が手に持っているのは一見するとスマートフォン。しかし、その実態はそれよりもはるかに高性能の端末になっていた。

もちろん、製作者はデュラ。

彼はロストログアの修復だけではなく、それに値するかそれ以上の物を簡単に作り出してしまいう存在。

そんな彼が主に生半可な物を渡すわけがない。

機能その一。

それは物の収納と自在に出し入れできるという物。

彼はそれで仕入れた物に小さなスマートフォンにて写真を撮る要領で納めると物が瞬時に消え、収納されているというのだ。

ただ入れるだけでなく整頓もされ、適切な保管状況も維持。温度はもちろん衝撃も全く伝わらない。場合によっては時間凍結と言う形で時間を止めた状態で保存もできる。

「面白い。この機能だけで商品価値があるかもしれぬ。」

本人は知らないが、彼は後にこの機能を商品として売り出し、物流を初めとするあらゆる産業界に大きな革命をもたらすことになる。

しかも彼はその恩恵を等しく分け与え、社会的な敗者を一切出さないようにしたゆえに、「奇跡の革命」と呼ばれ、後の歴史に多大な功績を残すことになる。

「色々使ってデータを・・・ぬ？」

満足のいく買い物と便利な機能を堪能した彼が転送で帰ろうとした時だった。

「・・・無粋とは言わぬが・・・すぐそばか。」

彼は転送をやめ、歩き出す。その足は・・・住宅街に向けられていた。

早朝ランニング。

それは高町ヴィヴィオの大切な一日の始まりだった。

母であるなのはこの誓いのために、彼女は今日も走る。

調子がいいと思った彼女は少し遠出をして市場の近くまで来ていた。

朝から活気あふれるここを彼女は好きでもあった。



「ん？」

そんな彼女が市場からバーハルトが出てくるのを見たのだ。

———今日も買い物をしに来ていたんだ。

バーハルトに市場の事を教えたのは他でもないヴィヴィオだった。新鮮な食材が手に入る場所はどこかと聞かれ、ヴィヴィオがランニングでたまに通っているこの市場をいったのだ。

相当気に行ったらしく、何かの形でまたお礼をしたいと言っていたのをヴィヴィオは覚えていた。

———しかし・・・なんだか様子が変わる？

あたりを軽く見回し、彼は走り出したのだ。

来ている私服は明らかにランニング用には見えない。

そんな彼を見てヴィヴィオは後を追う事になった。

———足速い！？歩いているだけなのに？

速めに歩いているように見えて、かなり早いバーハルトに必死に食らいついて。

そのため、後ろを不自然についてきている一台の車の存在に彼女は気付いていない。

そして彼女は見てしまう。

「さわやかな朝だというのに。見事にぶち壊してくれるな。」

路地裏に入ったバーハルトが相対していたのは巨大なバラのようなシード。

棘の付いた弦にはおびただしい血が付いており、あちらこちらに血や肉片が飛び散っている。

「……止めてくれ……。」

バラの花の中央にある顔からおびただしい涙がこぼれていた。

苦痛すらも消えてしまつて涙を流すことしか・悲しみと苦しみを表わせなくなっていた。

「……暴走しているタイプか……。自身も相手にもむごいな。」

バーハルトは憐れみを感じていた。

「エデン……いや、下部組織のあれがかかわっているのかもしれないな。」

「もう……こんなこと……したくないんだああああ!!」

絶叫とともに放たれる無数の蔦。鋭い棘が付いたそれがバーハル

トに向かう。

「・・・判った。」

バーハルトの腰から紅い宝玉を抱いたベルトが現れる。

そして、それと共に彼は鎖で囲った紅い檻に閉じ込められ、鳶は全て弾き飛ばされる。

「おそらく・・・アレクスト・・・まったくもって、不快なことをしてくれる。」

鳶を弾き飛ばされた植物のシードの動揺をよそに、バーハルトは叫ぶ。

「変身。」

その言葉と共に、檻の上下に会った魔法陣がスライドし、その中から魔王ベブゼブブが姿を現す。

魔王は爪の一振りで檻を破壊。その余波によるめくシードに向けていった。

「さあ・・・お前に魔王と言う名の恐怖を味あわせてやる・・・冥土の土産にな。」

その彼を見てシードの顔は恐怖に歪む。

「・・・せめて一撃でおわらせてやる。お主の罪と命・・・余が喰らわせてもらう。」

シールドが全身から棘を発射。それをバーハルトはゆっくりと歩きながら全て避ける。

「我解き放つは・・・紅の魔剣。」

その言葉と共に解放される左腕の魔剣。

「ぐがやああああああああ!!」

地面の下から魔王を囲むように現れる鳶。

先端が槍のように鋭くなり、一斉に魔王に突き立てられようとしていた。

「・・・無粋な。」

それを魔王は左腕の魔剣の一薙ぎですべて・・・消滅させてしま  
う。

そして・・・瞬時にシールドに接近し、左腕の魔剣を突き刺したのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

突き刺された瞬間、身体の動きを止めるシールド。

その顔には最初は驚愕・・・しかし紅い光となって分解していく光景を見て安堵の表情を浮かべていた。

その表情を・・・魔王はしっかりと見ている。

その上で告げる。

「・・・・苦しまずに・・・・逝け!!」

魔王のその言葉と共に、シードは紅い光となって消えていった。

「・・・・墓すら作れぬ事をした事を許せ。せめて・・・・来生を幸多きことを・・・・。」

消えていく光の中、変身を解きながらバーハルトは十字を切って、相手の冥福を祈っていた。

「・・・・・・。」

ほぼ・・・すべてだった。

「あっ・・・・ああ・・・・・・。」

見てはいけない物をヴィヴィオは見て・・・そして知ってしまった。

声を出してはいけない。幼いが聡明な彼女は必死に声を抑え、慎重に音を立てないようにその場から離れる。

――――魔王・・・・ベブゼブブ？バーハルトさんが？

魔王ベブゼブブ。この存在は実はミッドチルダでも有名になっていた。

地上本部の襲撃の際に介入した際も、先の封印作戦で大暴れして退けたという事実もあらゆる次元世

界にトップニュースとして報道されていたのだ。

管理局からしたら恥でしかない封印作戦の失敗。隠ぺいしようとしたのだが、魔王が派手なことをしていたので、隠ぺいすることができずに漏えいという形で報道されたのだ。

強力な生体ロストログアの名は今やミッドで恐怖の代名詞となつて浸透していた、

ヴィヴィオも母であるのはが戦った相手として、強くその存在を意識していた矢先。

その正体を見てしまったのだ。

———どっ……どうしょ……でも………。

混乱するヴィヴィオ。

そんな彼女の背後から二人の男が近づき……

「えっ？」

彼女を強引にはかい締めにながら口と鼻に薬剤を含ませた布を押当てたのだ。

「ん？んんっ！！」

暴れて抵抗しようとするヴィヴィオだったが、その薬によりやがて意識を失う。

それを確認した男たちはヴィヴィオを捕まえ。そして車の中に連れて行こうとする。

「・・・よし。ターゲットを確保。ただちに・・・」

男の一人が通信を入れていた時だった。

「おい・・・何をしている。」

彼らに怒気を含んだ声をあげていたのはバーハルトだった。

冥福の祈りを済ませたバーハルトは耳に聞きなれた者の声を聞き取り、路地裏から出てみると、そこには気絶したヴィヴィオとそれを車の中に運び込んでいた二人の男の姿だった。

何をしようとしているのか明白だった。

「ぐっ・・・」

ヴィヴィオを連れ去ろうとした男の一人が車の前に立ちふさがり、とっさにデバイスを起動。素早く魔力弾を放つ。

飛んできた三つの魔力弾。殺傷設定になっている。

だが、バーハルトにとってそれすらも取るに足らない。

「ぬん！」

魔力弾を軽く身体をひねる程度の動きで交わすバーハルト。そしてそのバーハルトの姿は地面を踏み碎

く音と共にすでに魔力弾を放った男の目の前にいて、男はすぐに吹き飛ばされ、車にぶつかる。

「がはっ!？」

「・・・魔力など一切つかっていないぞ。」

その光景を見た男たちは固まっている。

「知らぬ仲ではないのでな。コヤツを返してもらうぞ。もちろん・・・お主たちがなんでそんな真似をしたのかと言うのもじっくりと教えてもらうつもりだがな。」

『・・・・・・・・・・。』

バーハルトと対峙した男達は逃げなかった。嫌・・逃げられなかったといった方が正しい。

魔法を一切に使っていないのにもかかわらず相手の実力と自分たちの実力が圧倒的に違うのを悟ってしまったのだ。



逃げようと背後を見せた瞬間、バーハルトは間違いなく運転手をしている三人目を含める彼らを制圧するだろう。動かないのは・ヴィヴィオの身を案じているためだけだったのだ。

「さて・・・覚悟してもらおうか。」

バーハルトがそう言ってしかけようとした時だった。

何かに気付いたバーハルトが後ろに飛ぶ。

そして、先ほど彼がいた場所上空から無数の羽を模した刃が突き刺さっていたのだ。

「何をもたもたしているのだと思ったら・・・。」

上空に飛んでいたのはオウルシード。人としての理性を持つシードのセカンドだ。

「・・・まさかあの時の男と出くわしていたのか。」

羽音を立てずにバーハルトに立ちふさがるように降り立つオウルシード。

「私の奇襲に気付いたとは・・・人間にしてはかなりの実力者のよう・・・だ？」

「・・・邪魔だ。」

オウルシードを容赦なく殴り飛ばすバーハルト。

「ぐっ・・・ぬう・・・。」

信じられないというばかりのオウルシードと男達。シードは並大抵の魔道士では全く齒が立たない強敵。

それを・・・何も魔力を付与させていない素手で殴り飛ばしたのだ。

殴り飛ばした上でダメージを与えてきたのだ。

——— なっ・・・なんだこいつ？

オウルシードが羽手裏剣を両手に展開させる。

「さっさと・・・ヴィヴィオをかえしてもらうか。」

——— コヤツ・・・只者ではない・・・！！

まさか目の前にいる男が話題の魔王とは思わないオウルシードだったが、彼の身から放たれる気に圧されつつあった。まともに戦う危険をすぐに察知する。

——— しかねえ・・・念の為に伏せていた・・・

「ちなみに・・・ビルの上にいる光学迷彩をした仲間の狙撃・・・撃つても見切って避けれるから無駄だぞ。」

そこでオウルシードは固まってしまった。

「・・・・・・・・・・さあ・・・大人しく観念・・・・・・・・。」

しかし、オウルシード自身が想定してなかったもう一枚の切り札がすぐに発動する。

バーハルトのいた場所が突然爆炎に包まれたのだ。

「なっ？えっ・・・・・・・・。」

「情けない・・・それでもセカンドか？」

爆発に驚くオウルシードの隣に現れたのはスーツを着た人間だった。顔全体を白い陶器のような仮面で隠している。その姿をみたオウルシードは慌てて最敬礼をする。

「すみません。サードであるあなたさまが出てくるとは・・・。」

「言い訳はいい。速く聖王を例の施設に・・・？」

男は爆炎の中から所々焼き焦げて入るが無事に立っているバーハルトの姿を見る。

「ほう・・・人間にしてはよく・・・？お主・・・姿を・・・？」

男はバーハルトにかかっていた幻術が解けたのを見る。第三の目に二本の角のある異形の姿・

「・・・なるほど・・・こ奴も我か近い存在・・・か・・・。お主では荷が重いわけよ。」

男は納得した様子。

「・・・強いな。お主。」

「それはこっちのセリフだ。ふふ・・・だが、今回はよしておこう。戦うのは次の機会に。」

「・・・ん？」

男の話している最中にバーハルトは見てしまった。

小さな妖精形態になったヘルがこっそりと車の中に入り込んでいくのを。

「――何故あいつが？」

「待て・・・!!」

「さらばだ!」

その言葉と共に男とオウルシードはヴィヴィオが乗った車ごと消える。もちろん・・・ヘルも一緒に。

「空間転移・・・我としたことが・・・。」

バーハルトは目の前で逃がしてしまった事に悔しさを覚えつつ冷静になる。

——とりあえず・・両面からやるしかないか。

バーハルトはすぐに連絡を取る。

一つはなのはと管理局の上司ではある八神はやてと言う彼の仕事関係へ。

もう一つは彼の身内へだ。

——待っておれ・・。ヴィヴィオ。そして・・あ奴らに誰を敵に回したのか・・思い知らせてやる。

ヴィヴィオをさらった男達・・その命運はすでに尽きていたというのは・・過言ではない。

そしてどうしてヘルが車に乗り込む羽目になったのか説明をする。

「・・シードの反応。主様が直接向っているみたいですが・・。」

シードの反応を察知したヘルは精霊の姿で自宅から現場に転送してきたのだ。

彼女の役割は主のサポート。当然のことである・

転送したのは現場の上空。時はちょうどバーハルトがシードと対

峙、そして変身を始めたところだった。

そして・・・バーハルトの変身でヘルは見てしまった。

物陰から・・・それをバツチリ目撃してしまっている一人の少女の存在を・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・主様・・・しっかりしてくださいよ。」

ヘルは深いため息をつきながら己の役割である主のサポートをしようとする。

そう・・・記憶を消すために。

彼女も持っているヘルズチェーンがあれば簡単なのだ。

だが・・・彼女がおり立とうとする前に事態が急変する。その少女がさらわれたからだ。

「・・・・・・・・ぐっ・・・参ったですね。これは・・・・・・・・。」

しかも、それに気付いたバーハルトが助けようとするが、邪魔が入る。

「・・・セカンドに入ったシードだけではなく・・・主様と同じサードまで・・・・・・・・。しかもあのサード・・・かなり強い。」

ヘルはサードの実力を簡潔に見抜きつつ、自分はどうか考

えていた。

そして、こっそりと車の中に侵入し、攫われた少女——ヴィヴィオと共に転送しようとしたのだ。だが・・

————えっ・・しっ・・しまっ・・うっ・・。

車が急激な転送と共に移動。車の中に入っていたヘルは車の中の荷物に押しつぶされ、そのまま伸びてしまった。

## 聖王と魔王（誘拐編）（後書き）

さて・・・大分間が空きましたが、魔王も苦戦するクラスの敵をそろそろ出していくように話を進めてきました。

シードにあるファースト、セカンド、そしてサード。その秘密もこの話の流れの中で明らかにしていこうと思います。

もちろん・・・バーハルトもシードと言って過言ではないです。ただ・・・色々と普通ではありませんがね。

敵を強くしていく理由・・・もちろんそれは魔王にあることをしたいからです。前々からの構想を・・・ついに書けるというものです。まあ・・・それでもあと・・・十話ほどはかかりそうですね。

### 次回「聖王と魔王 回想へ」

さらわれたヴィヴィオは目覚めるとある施設の中にいた。ヴィヴィオに手を出そうとした男たちを助けたのは・・・ヘル。

ヘル「・・・あなたは知ってしまった。主様の秘密を・・・だから・・・」

ヴィヴィオ「・・・どうせなら・・・教えて。バーハルトさんが魔王になった理由と戦っているわけを。」

ヘル「どうして・・・知りたいと思うの？」

ヴィヴィオ「だって・・・」



一方、ヘルが行方不明になったせいである男がメルトダウン寸前になっていた。

デュラ「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

バーハルト「おっ・おい落ち着け。ヘルなら何とか大丈夫だろう？だから・な。戦艦を持ち出そうとするのは・・・・・・・・。」

デュラ「何を言っているのですか・・・戦艦なんて当たり前です。もし彼女に何かあったら衛星からの軌道兵器も使いますから・・・ほかに色々と・・・。」

バーハルト「だから冷静になれといっておろおおがああああああああ！って言うか・いつの間に戦艦や衛星兵器という物騒なものを用意した？それにほかに色々って!？」

アバドン「・・・姉上・・・どうか・・・どうか・・・無事でいてください。そうでないと・・・世界が滅びそうです。」

普段あわてないバーハルトが本気で焦っている程の暴走。どうなる・・・犯人達？

はやて「やっとでばんやな・・・。」

ティアナ「一応私・・・ヒロインなのに・・・でもどうしてバーハルトさん・・・疲れた表情をしているのかしら？」

バーハルト「・・・何も聞かなくてくれると助かる。」

聖王と魔王（聖王と冥界の女王編）（前書き）

もともとこの話は書こうとおもっていました。魔王の正体にいち早く気づいてしまうのはヴィヴィオがいいのではと思ってしまい。彼女にとっては無限書庫にいる変わっているがとってもいいお兄さんの存在である彼の真実を知る。

そこから彼女がどのような答えを出すのか？

バーハルト「・・・おい。一人ばれると・・・また一人ばれてしまうことなんてないだろうな？」

THIS「さっ・・・さあ。当分ない・・・と思いますが？」

バーハルト「当分？なら・・・ばれる予定があるということか！？」

THIS「さっ・・・さあ、二十一話・・・始まるよ！！今回は少し短めです！！」

## 聖王と魔王（聖王と冥界の女王編）

ヴィヴィオが目を覚めたのは薄暗い牢屋のような場所だった。

「・・・ん？ここは・・・どこ？」

彼女はぼやける頭で状況を思い出し・・・固まってしまった。

朝ランニングしたら、バーハルトを見つけ、彼が魔王べづべづだという秘密を知ってしまった事。

それに動揺していたら変な男に取り押さえられ布を口元に押しつけられ・・・そこで記憶が途切れたのだ。

でも、それだけではここがどこでだれが誘拐したのか判らない。

「・・・まさかバーハルトさんの仲間が？」

「失礼な。我が主はそんなことをしませんわ。」

どこからともなく聞こえてくる声に、ヴィヴィオはあちこち見まわす。

「今姿を見せますわ。」

その言葉と共にヴィヴィオの目の前に現れたのは白い髪をした小さな女性。

ヴィヴィオの知り合いであるリィンやアギトを思わせる存在であ

った。

「あっ・・・あなたは？」

「・・・この姿より、テレビでも報道されたもう一つの姿の方がいいかしら？」

そう言って彼女は姿を変える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

それはテレビで出ていた魔王ベブゼブブの三人の僕の一人だった。

「冥界の女王・・・ヘル。」

「はい。お初にお目にかかります。聖王の末裔・・・ヴィヴィオ様。」

それが聖王と冥界の女王の交わした初めての言葉だった。

バーハルトの緊急連絡を受けたはやてが対策本部を設置したのは一時間後のことだ。

「・・・・・・・・すまない。我が気付いていながら・・・・・・・・。」

「いやそれは・・・・・・・・。」

バーハルトの痛恨の表情にはやてはもちろん、保護者であるなのはとフェイトも責めたりはしない。

「むしろ・・シードと戦って無傷に近い状態なのはすごいわ。おまけに・・発信機までとりつけている  
のやから・・・。いい仕事しているよ。」

バーハルトは転んでもただではおかない男なのは間違いないようだ。

転送して彼らが逃げる瞬間、とっさに転送魔法でカプセル状の発信機を車の中に送り込んでおいたのだ。転送最中に転送で送り込むことで相手の魔力察知までごまかした格好。

恐ろしい機転と言えた。

「本当のいい仕事は・・・連れ去られる前に助けることだ。褒めた物ではないよ。」

バーハルトはそう言って気持ちを切り替える・

「・・・さて、作戦を立てようか。できればわびとこの前のお礼も兼ねてヴィヴィオには今日、私が昼ごはんをおごりたいのでな。」

バーハルトのその言葉に集まった皆が一斉に頷く。

「さらわれた場所は第十三次元世界の廃棄された研究施設。そこは最近になって稼働している事が確認されてます。数日前よりコンテナで貨物が運ばれているのも証言があがってます。」

ハイルの報告が始まる。

「やけに報告がはやいな。」

「前に追っていたヤマで可笑しい報告があつて気になって個人的に調べていました。」

ハイルの気になったヤマを調べる癖は一見すると脱線する危険があるようだが、彼の場合はそれが結果的に良い方向へ転ぶ。今回の件もその一つだ。

「良い仕事だ。おかげで閣下を助けだせるの早まりそうだ。」

「ホンマやな。」

「続いて現場検証ですが、やはり相手はシードで間違いないです。しかしデバイスを使うシードなんて・・・」

「それがセカンドと言う話だ。ファーストが己の肉体と特殊能力しか使わないのなら・・・セカンドはおそらく・・・魔力とデヴァイスを使う・・・」

「なら・・・サードは？確か・・・ベブゼブブも同じやろ？」

「・・・・・・・・・・」

シードのサードについての特性。それはそのサードであるベブゼブブがよく判っていた。だからどう答えたらいい物か考えるが。あくまでも予測と言う形で言う事にする。

「多分、答えは単純だと思う。ファーストが己の肉体。セカンドが

魔力とデヴァイス、それを使いこなせるだけの理性と高い知能を保っている。おそらく人間に戻る事できるだろうな。そこから察するにおそらくサードは・・・。」

その言葉を聞いた皆は絶句することになる。

「より高度な道具・・・例えばロストログアがいい例だな。・・・その力を引き出し、自在に操れる・・・ということになる。」

「あの・・・。」

その頃ヴィヴィオはヘルに話しかけていた。

「何かしら？」

「あなたが魔王・・・いえ・・・バーハルトさんの仲間なのですか？」

「・・・ええ。そして私はあなたの記憶を消しました。あなたは・・・見てはならない物をみてしまったから。」

その言葉を聞いてヴィヴィオは確信する。魔王ベブゼブブの正体がバーハルトだ問う事に。

「まあ、あなたは主様と知り合い。手荒なまねはしませんわ。それについてと言う形になりますが、私がこれから助けだしますのです。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

記憶を消される。当然のことだとヴィヴィオは思っていた。魔王の正体。それを知ってしまったのだ。むしろ存在を抹消されないだけまだ良心的ではある。

「あの……。」

でも、それでヴィヴィオは聞きたかった。

「どうせ記憶がなくなるのなら・聞きたい事があるの。」

「……何をです？」

「どうして・バーハルトさんは魔王になったの？あの人はとてもいい人だよ。魔王として戦っている時も・哀しそうな背中をして戦っていた。どうして・魔王と言う仮面をつけてまで・戦っているの？」

ヴィヴィオにとってバーハルトが魔王ベブゼブズだという事実は大きなショックだった。

しかし、そのショックと共に彼女は知りたかった。

バーハルトという人が魔王になっている理由。

ヴィヴィオのその真っ直ぐな想いにヘルは思うところがあるのか、少し考えそして笑みを漏らす。

「……そうですね。ちょうどいい。私もあの出来事をまとめたかと思っていましたの。それに・あの事を他の人が聞いたらどう



思うのか・・・知ってみたいと思ってましたし。」

ヘルからの意外な返事。ヴィヴィオはいいのかと言いたげな視線を送る。

「もしも、聞きたくもなかったと思ったら私がこのヘルズチェーンの力でその部分もまとめて記憶を消しておきますから安心してください。それに時間もまだあります。他の人もこっちには絶対きませんから。」

「?どうして・・・あれ?」

その言葉でようやくヴィヴィオは見張りの人達がこっちに全く意識を向けていない事に気付く。

「安心してください。アジトの人達には今は私達の会話はもちろん姿もみえていません。実際は耳や目がそのようにとらえているのですが、脳がそれを認識するのを妨害していますので、私はいないも同然になっているのです。まあ・・・今はあなたが気絶したままだと見えているはずですよ。」

「・・・・・・・・・・。」

とんでもないことをさらりと言ったのけるヘルにヴィヴィオは冷や汗が止まらない。目の前の存在がとんでもない相手だという事を改めて思い知らされる。

「こんなの、死んだ人を生き返らせる事に比べたら指一本で簡単に出来る程度ですわ。それに、もうすぐ主様達も来るはずですから、気楽にいきましょう。」

発信機のカプセルを手にながら笑顔で言っただけのけるヘル。まさに彼女は・・・冥界の女王だった。

「しかし・・・すごい発信機ですね。別次元越しに居場所を特定できるなんて・・・。」

ディーノとハイルは現場に向かうための準備をしながら、バーハルトの発信機の波動をキャッチしていた。

「まあ・・・こっちのつてでな。実験用にもらっておいて正解だったよ。」

発信機の製作者はもちろんデュラだったりする。

「すごい人脈ですね。」

「うむ・・・ん？」

――主様！！

そんなバーハルトの脳裏に聞こえて来たのはアバドンの声。とても焦っている様子だ。

――どうした？

――あつ・・・兄上が・・・暴走寸前です！！

――・・・はあ？暴走って・・・。

――姉上がさらわれたと知って……自ら出撃を!!

――……………。

バーハルトはしばし無言の後ディーノ達の方を見る。

「すまない、少し外す。戻らなかったら先に現場に向かってほしい。こっちも後で必ず合流する。」

「外すって?」

「……身内のトラブルだ。個の発信機を作ってくれた相手が……少々ヤバイ状況のようだな。」

バーハルトが自宅に帰宅して……啞然としていた。

何しろ自宅の庭が大きく開き、巨大な格納庫が展開されていたのだ。

「……いつの間にこんなものを……んあそこには。」

中に張り込んでみれば……恐ろしいまでに広いスペースがあった。それこそ巨大な戦艦を何隻も留め、修理や建造まで簡単にできる港と言ってもいいほどの空間。

そんな広い空間の中、バーハルトは額の第三の目でデュラを見つ  
け、その傍に転送する。

「おい・・・デュ・・・ラ？」

しかし、流石のバーハルトも声をかけて・・・言葉を失ってしまった・

何しろデュラは全身から黒いオーラのような物が立ち上った状態でスクリーンで作業をしている。

「あれ・・・主様。どうかしたのですか？」

黒いオーラを漂わせながらデュラがバーハルトに気付いたのか声をかける。

「おっ・・・お主・・・まともな状態ではないな？」

「まともな状態ではない・・・そうですね。なんででしょう。ヘルさんが巻き込まれ、危険な目に在っているかもしれないと思ったら・・・そんな事をさせている連中がいると思ったら・・・なんだか・・・ゆるせなくなってしまうて。」

冷静な自己解析の言葉のはずだった。そのはずなのに、だんだんとその言葉が暗く重くなってくるのはなぜだろうか？

「————こやつ・・・己の想いに自覚しておらんのか？まあ・・・生まれてからまだ日が浅い故に仕方のないことだが・・・。」

「主様・・・なんとかしてください。兄上が怖すぎて・・・。」

アバドンはバイク形態で悲鳴を上げている。アバドンの悲鳴も無理もないとバーハルトは判っていた。何しろ・・・バーハルトですら冷や汗を流しているくらいの迫力だからだ。

「とりあえず落ち着け。相手の場所は判っておるし、ヘルの力は知っておるだろ？」

「はい・・・。」

冷静さを取りもとしつつあるデュラに安堵を息をつくバーハルト。

だが・・・そこでとっても悪い間で知らせが入る。

——あっ・・・主様？

それはヘルからの通信。妨害がかかっているのかノイズが酷い。

——オオ・・・無事だったか？

——ええ・・・無事というのは・・・まあ・・・。

「ヘルさん？大丈夫なの？怪我はない？何か酷いことは？」

——へっ・・・デュラなの？まあ・・・なんと・・・ん？きゃああ！？

「ヘルさん？ヘルさん？」

——このおとおおお！きゃあああああああ！？

そこで・・・通信が切れてしまう。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

非常にまずいタイミングで最悪の知らせが入ってしまった。

デュラの全身から立ち上る黒いオーラ。前よりもはるかに強い。

まさに・・・メルtdown寸前の核融合炉のような感じだ。

デュラが指を鳴らすと彼の背後から巨大な船が現れる。

「————なんだ・・・あの船は？これもいつの間にか建造していたというのか？」

デュラが建造していた戦艦。彼が作った者故管理局使っているただの戦艦とは一線を画している代物なのだろうと・・・バーハルトは直感で理解していた。

「おっ・・・おい。デュラ、落ち着け。ヘルなら大丈夫だろう。だから・・・な、戦艦を持ち出そうとするのは・・・。」

「何を言っているのですか？」

その言葉をデュラが焦点の合わない目で応える。

「戦艦位当たり前です。もし・・・彼女に何かがあったら衛星兵器も用意してます。他にも色々・・・ね。ふふふふふ・・・ふふふふふふふふふ・・・。」

それを聞いたバーハルトは血の気が引く思いがした。故に・・・

「落ち付けっといっとるだろうがこの馬鹿ものがあああああああああああ！！！！」

強制的に、なおかつに速やかに事態を収束させる。怒号と一発の拳で。

魂と気迫のこもった一撃に、デュラの瞳に理性が戻る。

「痛たたた・・・あれ？僕・・・。」

「全く・・・お主は・・・。いつの間に戦艦や衛星兵器何度物騒な物を用意しているのだ？」

デュラの才は恐ろしい。

「と言うより・・・他にも色々といったな？他に・・・何を用意した？この機会にキチンを把握させてもらおうぞ。」

正氣に戻ったデュラに良い機会だと制作した物をすべて問いただす事にしたバーハルト。

それを聞きながら・・・アバドンは表情を青ざめながら思った。

「姉上・・・どうか無事でいてください。いえ・・・是非無事で・・・そうでないと・・・兄上が・・・世界を滅ぼしそうです。」

魔王の傍にいた精霊騎士。彼もある意味立派な魔王の一人のようだ。

ちなみに・・・通信の悲鳴の原因。

「もう・・・ゴキブリなんて・・・。」

「……ヘルさん、女の子なんですね。」

ヴィヴィオに話す前に無事を伝えようとしたヘルだが・・足元にゴキブリがいた事に気付き、悲鳴をあげてしまったのだ。そのゴキブリはすでに・・命は狩り取られている。

それを見てヴィヴィオは微笑ましくも・・少し恐ろしく感じていたりする。

何しろ手に触れず、ゴキブリを視界に入れただけでゴキブリは死んでしまったのだから。

「致死の魔眼・・こんなゴキブリ相手に使う事になるとは・・・。」

「ははは・・・。」

「変に通信を切ってしまったわ。まあ私が無事なのを知らせることができたし・・大丈夫でしょ。」

ヘルは知らない。先ほどの不用意な通信のせいで、世界が一時滅亡の危機にあった事を。

「さて・・遅れましたが・・話しましょうか。」

「はっ・・はい。」

「・・安心して。致死の魔眼はこのような蟲ならともかく。人間相手なら本格的に魔力を込めないと絶命できないから。」



「・・・・・・・・。」

逆にいえば加減さえしなければヘルは視線だけで命を奪えるという事になる。

ヴィヴィオがその事実背筋の寒い思いをしているのを気にせず、彼女は話を始める。

「・・・・・・・・バーハルト様と私があったのは・・スクライア一族のテントの中でした。ある遺跡で眠っていた私の封印を解いてくださったのが始まりです。」

「・・・・・・・・シード？」

「神々が昔から進化の為に使った因子。神域にある一本の木より取れる禁断の果実から取れる進化の種です。原生動物を人間にする際にこのシードを使っています。最近のシード事件は・・エデンの連中が

禁断の果実からシードと足りえる因子を抽出して使用しています。」

「じゃあ・・バーハルトさんのシードも？」

「いえ・・主の場合は違います。主は直接禁断の果実を口にしています。」

「直接？」

「これは・・主様自身も知らない・・いえ、正しく言いなおすな

ら覚えていないことです。主様は太古の昔、その命が尽きる寸前に・  
・。禁断の果実を食べたのです。」

「太古の昔?・・・えっ?それって・・・・。」

「はい。あの方は古代ベルカでも皆に絶対の恐怖を与え、そして聖王、霸王達により打ち倒された恐怖の大魔王・バーン本人なのです。これはあの方と盟約を結ぶ際・ヘルズチェーンにより得られた是事実です。」

「・・・・・・。」

管理局一同の前で確かにベルカの大魔王と名乗った彼らだったが、それが本当の事だとヘルは告白している。

「そして・命尽きる寸前のバーン本人に禁断の実を渡したのは・  
・。」

彼女はその上で重大な告白をする。

「この私・冥界の書であるヘル・ハデス・アルハザードです。」

出撃直前の機動六課に、バーハルトはぎりぎりで合流できた。

「すまない・おくれた。」

「遅れたじゃないわよ。一体どうし・たの?」

ティアナが疲れ切ったバーハルトを見て思わず声を止めてしまった。

「何・・・身内の暴走を止めるのに苦労しただけだ。」

彼はべつに嘘は言っていない。しかし、その暴走が世界を滅ぼしかねない危険なものなただけだ。

「……………まったく・・・戦艦、衛星だけでなく・・・戦闘機、多機能万能戦車だけでなく宇宙ステーションの類まで計画とは・・・。おまけに館の防犯機能が防犯という単語を使うのが明らかに間違っているくらいに恐ろしいことになっておるし。地下には未だ増築中の巨大基地。まったく、余の館が・・・難攻不落の要塞になってきておる。資材の調達といい、建造時間と言い出鱈目すぎるぞ。」

バーハルトの深いため息の理由をティアナは知らない。でも・・・相当苦労した事だけは判ったのか珍しく同情する。

「・・・まあ・・・頑張ってね。何かあったら相談にのるから。」

「・・・かたじけない。」

バーハルトにとって彼女の優しさは心にしみる。そのために安堵した自然な笑顔をティアナに向けたのだ。

「……………／／／／。」

不敵で、底知れない笑みを浮かべることの多いバーハルトの無防備で純粋な笑顔。元々端正な顔立ちな彼の笑顔にティアナは不意に顔を赤らめてしまう。

——なっ・・なな・・何この笑顔・・反則・・じゃないの。

「どうした？」

「なっ・・なんでもない!!それより速くいくわよ!!」

「ああ。速く助けて昼ご飯をおごらねばな。」

そう言いつつバーハルトは立ち上がる。

————デュラ、アバドン、手はず通りに頼むぞ。

その念話を送り、二体から『御意』という返事をもらいつつ、彼は現場へと向かった。

## 聖王と魔王（聖王と冥界の女王編）（後書き）

さて・・・デュラを暴走させすぎました。彼が作っている数々の発明品・・・もちろんロストロギアの技術がふんだんに使われています。ロストロギアを作り出せる才能が恐ろしい意味で開花させてしまったことに・・・いっさい後悔はありません。でも彼のおかげで魔王陣営がまさに魔王軍と言っても差支えない規模になりつつあります。あとは人さえ足りればですが。

ヘルとヴィヴィオの対話。これも後々の展開に大きな影響を与えます。

ヘルだけが知っている事実をヴィヴィオが知る。これがどのような結果になるのか？

### 次回 聖王と魔王（大魔王の真実）

ヴィヴィオを狙った誘拐事件は急速に解決に向かう。

ベブゼブブ「・・・さすがと言うべきだな。」

???「いえいえ。私もさすがに苦戦しますよ。」

魔王は自身と同じ条件にある強敵と対峙する。

ヘル「・・・私は・・・許されないことを・・・してしまった。」

胸の内に秘めた後悔を露呈するヘル。

ヴィヴィオ「・・・そんなことないよ!!」

しかし、ヴィヴィオはそれを強く否定する。

そしてアジトに突入するディーノ達だったが、彼らはすぐに啞然とすることになる。

ディーノ「なんだ・・・？あれ？」

ハイル「船・・・いや戦艦だよな？」

ティアナ「・・・明らかに、やばいことになっているわね。」

デュラ「ヘルさん！今助けにいきます。」

アバドン「・・・主様にストップパーになってくれと承ったが・・・創造主を止める事が私にはできるのだろうか？」

明らかに誘拐事件の解決には過剰と言える戦力がアジトに向けられていた。

## 聖王と魔王（大魔王の真実編）

ヘルの独白は続く。

「私は・・古代ベルカにアルハザードの遺産として発掘されました。アルハザードは古代ベルカからしても未知のテクノロジーだったみたいで、私はマスター認証こそありませんが、聖王達の陣営として戦っていました。もちろん、歴史に私の存在はありませんよ。私はあの時はただの道具でしたから。リンカーコアを内蔵し、自立稼働する生と死を振りまく禁談の魔道書としてね。それ故・・あなたの祖である聖王や覇王達とは顔見知りなのです。」

滅亡したアルハザードの最後にして全ての遺産である冥界の書。その存在は発掘と同時に戦場にあった。

死者蘇生ことはできなかったが、重体の人間、例え四肢が欠損した状態でも、脳の破損すらも瞬時に直せるというレベル。おまけにそれを攻撃に変えた時・・ヘタな質量兵器よりも恐ろしい結果を敵にもたらすことになった。

不可視の死の力を操るというのは、相手に絶対の恐怖を与える。

強力な癒しの生の力は・・味方に絶対の安心を与える。

それに加え、膨大な知識を無限に蓄える書庫としての機能と大規模な質量兵器ですら防ぎきる絶対の防御、そのほか搜索などの補助など・・規格外の性能を有していた。

まさに・・・生と死を司る魔道書として彼女はベルカにいたのだ。

「・・・・・・・・・・。」

ヴィヴィオは驚きをかくせないだろう。

何しろ彼女自身にも深いかかわりのある古代ベルカの戦乱。その生き字引と言える存在が目の前にいるのだ。

「混迷を極める古代ベルカの戦乱。それが一つの転機を迎えたのは・大魔王バーンの出現でした。」

大魔王バーン。古代ベルカを恐怖で覆った最強にして最凶の王。

名前すら禁忌とされ・歴史から名前が消えた存在。

彼の脅威によりあまたの国が滅んでいった。

そんな中、聖王、覇王と初めとする数々の王たちが団結し、バーンにたちむかったのだ。

激しい戦い。古代ベルカの中で最も過酷な戦いを終え、その中で聖王がなくなるという結果を生みながらも、彼らは魔王を倒す。

そして・・・戦争は終わったのだ。激しい戦闘はバラバラだった数々の国をまとめ、お互いを理解、団結する結果となり、魔王の最後とともに覇王が中心となって世界はまとまり、平和な時代になったのだ。

歴史から見ても・・・大魔王の出現が戦乱の終わりの大きな要因だ



ったのは疑いようがない。

「・・・私はその彼の最後を・・・看取りました。」

古代ベルカの戦乱の世の終焉は魔王の最後とともにきていた。

燃え盛る炎が上がる空中に浮かぶ巨大な鳥のような宮殿。

それは魔王の居城にして最悪の破壊兵器。あらゆる国を滅ぼした死をもたらす巨大な鳥だった。  
その中央で大魔王がいた。

「ははは・・・これが余の最後か・・・。」

倒れた腹部にも大穴開いていた。

「さすがの余も・・・細胞単位でダメージを受ければ・・・助からぬか。」

全身がゆつくりと灰のように崩れ始めていたのだ。

「・・・・・・・・・・。」

そんな彼を見下ろすのは冥界の書——ヘル。

「ほう・・・噂に名高い冥界の書が我の最後の見届け人か。」

「・・・・・・・・なんで・・・そんなにすがすがしい顔をしているのですか

「？」

彼女はバーンが死ぬというのに、彼自身は満足そうな表情を浮かべている事に気づいていた。

「・・・何・・・余の目論見が見事に当たったからだ。これで・・・この世界は平和になる。」

「・・・・・・・・どういふことですか？」

ヘルの疑問にまるでドッキリが成功したかのような軽やかな笑みを浮かべた。

「元々・・・余が魔王として立ちあがったのはこのような結末を迎えるためだったのだよ。」

「なっ・・・・・・・・まさか・・・あなたは自分が倒される事を望んでいたと？」

「それだけではないよ。すべて・・・うまくいったのだからな。」

満足そうな独白を始めるバーン。

「余は最初からこの世界から戦乱を無くすために魔王軍を作ったのだ。今や世界は覇王を中心にまとまっておる。もう・・・安心だろう。」

「ばっ・・・ばかな。あなたは・・・・・・・・。そんなことのために？」

ヘルは驚きを隠せない。それはそうだ。目の前で死のうとしてい

る魔王は最初から平和を望んでいた。望んでいたからこそ恐怖と憎しみの対象として、魔王と言う悪になっていたという事になってしまふのだ。

「戦乱が終わらぬ理由・・・それ単純なことよ。終わらす事を望まぬ者がおったからだ。しかもその存在はあらゆる国に深く、巧みに根を張っておった。」

「そんな者・・・？」

その存在にヘルも実は心当たりがあった。戦乱で飛び交う傭兵や怪しげな科学者たち。

「それらを排除するために我はあえて・・・魔王となったわけだ。侵略と言う言葉を借りて、あ奴らを打ち倒し、真に平和を望む者たちを見極めるためにな。そのために、我らは民は捕まえたが、一切手を出しておらぬ。むしろ安全な別世界に開拓者として送っただけだ。記憶に恐怖をわざと描かせて我らの恐怖をあおるようなまねをさせておいたがな。もちろん・・・その恐怖も意図的にかからせもらったから・・・トラウマにならず・・・回復しておる。」

「・・・・・・・・・・。」

魔王軍の恐怖の一つとして、戦乱で疲弊した街を蹂躪して生き残った人達を一人残さず・・・死体すらのこさず焼き尽くすということ。

だが・・・実際には死んでいない。殺したように見せかけてもいたが、誰も殺していない。

彼らは全員別次元に新天地を用意し、そこで平和に暮らしてもら

ったのだ。

「なんで・・・そんなことを？」

あまりにも回りくどい。

普通に侵略するだけなら簡単だった。それこそ彼が持っていた神がかり的なカリスマと絶対的な統率力、そして・・・どんな賢者も軍師もかなわなかった軍略を用いれば簡単にベルカの世界を征服できたはずだった。

それをせずに、彼は倒されたのだ。回りくどい平和のために自分の命すら投げ出して。

それをした理由。それをヘルは知りたいと思っていた。

「・・・一人の少女がおってな。」

なつかしむようにバーンは始まりを思う。

「余は・・・この世界の者ではない。かつて勇者に敗れ、石と化して太陽に焼き尽くされた異界の大魔王よ。死んだはずなのに・・・この世界で全盛期の姿で生きておった。そんな余を一人の幼子とその家族がたすけてくれたのだ。」

それはバーンにとって二度目の人生。

「こやつらはこの世界の小国の王族だったのだ。王族にしては大変お人好しでな。異形の姿をした我を迎え入れたのだ。」

勇者に倒されたはずなのに・別世界で生きている不思議。

「・・・すぐに余のいた世界とは違う事をした。余は・・・やることを野望と理想を失ってしまった。当分は抜け殻の日々が続いたよ。」

元の世界に戻る術も判らぬバーンは地上を破壊し、魔界に太陽の恵みをもたらすという数万年にも続く己の野望が消えてしまった事を悟ってしまった。

でも、そんな彼に彼のいた国の姫はいった。バーンがここに来る前にやろうとした事も聞いたうえでだ。

「・・・あの姫・神様に逆らってまでやるなんてすごいと言ってやった。流石大魔王って。余が・己の人生の何万分の一にも満たない歳月しか生きてない小娘に褒められたのだぞ。その上で・・・なら今度はのんびりと自分のしたい事を見つけたらと言ったのだ。それだけのことを成し遂げかけたほどですから、もはや並大抵のことはできますねって。」

それを話すバーンは本当にうれしそうだった。自身が感じたことのない驚き、そして新鮮な嬉しさを覚えたのだ。

「それから・・・余はできることをするようになった。色々とな。料理は初めてだった故、うまくできなかったが・・・いまでは臣下たち全員にふるまえるほどにはなったよ。それを積み重ねていくうちに・・・余はその国の王になっていたよ。今は亡き知と歌の国、アースグレイア。その国の最後の王にな・・・。」

「・・・！？ではあなたはあの高名な・・・賢王様なのですか？」

「過ぎた・・・名前だよ。それに今になっては意味のない名だ。」

「では・・・あなた様の奥方は・・・あの高名な歌姫・・・リースさま？」

「ああ・・・倒れていた我を助け、そして我に気づかせてくれた者あれほどきれいになるとはおもってもいなかったがな。済んだ湖や晴れ渡った青空のような心。その歌は・・・本当に心に沁み渡った。余に取って・・・太陽のような人だった。・・・ふっ、あいつの表現を余が使う事になるとは思ってもいなかったがな。」

そこでヘルは自分の中にあるアースグレイアの最後を思い出す。友好を保っていたはずの隣国の突然の侵攻。それに対抗するためだと反対側の国まで侵攻してきて、その国が戦火に包まれ、滅んだのだ。

その中で・・・リースはなくなり、平和のためにあらゆる外交努力をしていた賢王とその娘や息子達も行方不明になった。

「余は・・・あいつと・・・あいつの大好きだった歌に約束をしていた。平和な時代になったら・・・共にあの国のいつも休んでいた野原で心地いい風を浴び、花に囲まれながら平和を喜ぶ歌を唄おうと。例えばそれが・・・死によって別つことになっても、生まれ変わったらいつか・・・と。戦乱の時代・・・いつ死ぬか判らぬ時代だったからだろうよ。そのような誓いを互いにかわした。それが平和のためにあちこち飛び回っていた余の大切な道しるべだった。」

「・・・・・・・・・・。」

「だったら・・・あやつが死んでも・・・余は約束を果たさないといけない。生まれ変わった後に・・・また出会うことがあったら、平和な時代になっていたらあの歌を唄おうと。だから・・・余はこの戦乱を終わらせる決意をした。悲しみも・・・怒りも、そして憎しみすらも大魔王と言う名に込め、本当の意味で皆が平和になるようにな・・・。。そして余は・・・ついに成し遂げたというわけだ。前世で果たせなかった己のなすべき事が・・・やることは違うが・・・いいいな。」

そこでヘルは気付く。魔王が・・・涙を流していた事に・・・。

「涙か、私にはない物だと思っていたよ。あやつを失った時も流せなかったのにな・・・。そうか・・・私も・・・泣く事ができたのだな。」

「・・・・・・・・・・。」

ヘルは魔王自身が意図していたこととはいえ。皆が大きな勘違いをして魔王を打倒していた事を確信していた。

彼は野心や自身の身勝手な欲望のために戦っていたのではない。

ただ・・・愛しい人との約束をかなえるためにたたかっていたのだ。

「でも、余はもうあやつとは会えぬだろうな。この世界に来る前も含めてだが・・・余は酷い事してきた。余のせいで多くの人が死んでしまった。お主らの仲間も・・・余の仲間もな・・・。魔王らしく・・・余は地獄へいくだろう。リースは・・・あいつは間違いなく天国にいるからな。」

それを見たヘルは己の中の何かが動くのを感じていた。

「初めてです。貴方のような大馬鹿者は……。あらゆる世界のあらゆる歴史を詳細に私は記録していますが……。あなたのような方はいませんでした。」

「……。それはそうだろうな。余の目的を臣下の者たちにも話していたが、皆……。啞然としてそのあと、大笑いしておったぞ。」

「でも……。それでもその人達はあなたについていった。」

「……。なるべく死ぬようにしていたが……。側近である2人を初めとして初めての友も……。多くが助からなかったよ。済まない……。と言っても謝り切れぬ。」

魔王の元には多くの人々が集った。彼の無二の友である竜王に二大魔神と呼ばれる二人の側近を初めとするいたのだ。

だが彼らも最後の戦で亡くなった。

「……。そうですか。」

それは確信。彼女はアルハザードが滅んでからあちこちの世界をさまよっていた。その理由は自身のマスターを探すため。この世界でも見つからないと思っていた。

だが……。彼女は確信してしまった。

そのマスターに足りえる人物が目の前にいることを・



「管理者権限使用・・・。マスター登録可能か検索。」

その言葉と共に冥界の書から魔道陣が発生、バーンを取り囲む。

「なっ・・・お主？」

「・・・検索結果・・・マスターとしての十分な資質があることを確認。」

その言葉と共に魔道陣が光輝き、バーンの身体の崩壊が止まってしまった。

「私は・・・ずっと私の主と足りえる人を探していました。資質を持つ人は・・・さすがに何人かいましたが、仮契約でしかできませんでした。資質はあっても精神的な面でどうしても拒絶してしまいましたから。でも・・・あなた様は違います。あなたほどの高潔で、なおかつ聡明で・・・愛にあふれ、純粋な人は初めてです。」

「・・・嘘を言っているのかも知れんど。それに余は人ではない・・・。褒めた生を歩めとはいえぬことを・・・。」

「ご安心を・・・それに関しては私の鎖が証明しています。それに人間です。例え種がちがってもあなた  
は誰もが誇る・・・立派な人間です。」

いつの間にかバーンを縛っていた鎖。それは嘘を暴く冥府の鎖だった。

「・・・この鎖・・・まさかヘルズチェーンか？」

「はい。貴方様の言っている事が真実だと確認とれました。前世の事も含め・・・すべて記録済みです。その上で・・・あなたを私のマスターにしたい。」

「・・・何を言っておる。余は・・・。」

「あなたは死んではいけない。少なくとも・・・約束があるはずで  
す。まだ叶えていない大切な約束が・・・」

「それは・・・。」

バーンは迷った。多くの人を死なせてしまった自身が自分だけ生き残ってもいいものか？皆それを覚悟して彼についていったのだが、それでも失ったという事実は変わらない。

だが・・・意外な者たちが彼によってきた。

それは彼の二人の臣下と友が封印していた四つのロストロギア。

神殺しの四大魔具と呼ばれる物だ。

一つは蒼い炎を上げる大斧。

一つは紅い光を放つ魔剣。

一つは黒い雷を纏う鎚。

一つは白い風が吹き荒れる槍。

その四つがバーンの周りを取り囲んでいたのだ。

「……このロストロギアには魂が宿っていますね。」

四つの武具が何を言いたいのか、バーンも察した。

「わかった。契約を結ぼう。果たせるか判らぬ約束。ほぼ死んでこの身体。可能性が低い上に助かっても記憶は失っているだろう。だから、成功したら代わりに約束を覚えておいてほしい。」

「……そこまで察してましたか。わかりまし……た？」

ヘルはそこでバーハルトの身体の上に紅い宝石が浮いている事に気付いていた。

「なんで……禁断の実が？」

「この世界の戦争の元凶となっていた奴を倒した時のものだ。これを使ってとんでもない怪物になったのだが……。」

「そうですか……。まさかこれにも選ばれたということ？でもこれは使えます。」

紅い宝石——禁断の実の存在。それがすべての終わりを……始まりに変えた。

「……転生させるつもりか？」

「はい。これに含まれる可能性の因子を利用すれば可能です。その

際・・・私からもこのヘルズチェーンをあなたに献上したいと思います。どうか・・・使ってください。」

バーンは改めて周りにある四つの武具をみる。だんだん霞んでいく意識が彼にあまり時間が残されていない事を意識させる、

————主らは余が泣く事ができないことをしっておった。そんな余の涙に・・・か。

「よろしく頼む。マスター・・・認証。よろしく・・・頼むぞ。」

マスター登録と共に、事切れるバーン・

「了解・・・マスター登録・・・完了しました。続いて・・・蘇生作業を開始。」

その言葉と共に辺りが紅蓮の炎と瓦礫に包まれる。

魔王の空中宮殿。その崩壊と共に魔王と冥界の書はベルカの世界から姿をけした。

ヘルがヴィヴィオに語っている頃・・・バーハルト達はアジトをゆつくりとり囲んでいた。

「さて・・・突入するタイミングはどうする？」

ティアナはバーハルトに意見を求める。

バーハルトはしばし止まる。

——さて・・・もうそろそろか。

「そうだな・・・。。。」

バーハルトがそう言いかけた時だった。

「みつ・・・みなさん！！上空に巨大な時空の歪みを検知。何か巨大な者が転送・・・。」

——・・・ん？巨大なって・・・うおっ！？

突然転送されてきたのは・・・翼を広げた鳥を模した巨大な戦艦。その大きさは時空官局の戦艦の二倍くらい。

「なっ・・・なにあれ？」

ディーノが驚いているのは無理もない。

「船・・・いや、戦艦だよな？」

ハイルの声が震えている。

「呆きらかにやばいことになっているわね・・・。」

ティアナは努めて冷静に状況を分析している。

だが・・・通信越しでも混乱しているのは目に見えている。

それを仕組んだバーハルトでさえ・・・この戦艦の登場には驚いている。

——デュラ・・・結局あの戦艦を持ち込んだか。

それはデュラが作ったまだ無名の万能戦艦。しかも完成率三十パーセントという未完成だというのだ。完成した時には改めて名前を拝命したいと言っていたのだ。完成した時の名前をバーハルトが考えている。

——だが・・・あれで二十パーセントだと？

戦艦から放たれる砲撃がアジトの周りに着弾。その威力は戦艦の主砲と同じかそれ以上のものがある。それに加えて恐ろしく高度で精密なワープジャンプ装甲も固く、シールドもある。

普通の戦艦から見ても破格なものがあるのだ。あれで二割しかできていないとなる。今あるのはカバー代わりの借りの装甲と装備。エンジンもまだ未完成だというのだ。

————完成したらどんな化け物戦艦になるというのだ？

慌てふためく犯人達。そこに戦艦から二つの影が降り立つ・

一つはアバドンにまたがった魔王ベブゼブズ。

もう一人はデュラ。

「なんで・・・魔王がここに？」

もちろんアバドンの上にいるベブゼブブはホログラムである。

「判らんだが・・・いま突入するかないだろ？」

「ええ。」

2人は混乱を極めたアジトの中に突入する。

「ちよっ・・・おっさん？」

「しかたねえ。こうなれば腹くるしかねえ。」

そのあとにディーノとハイルも続く。

「・・・・・・・・これが・・・主の第二の人生の終わりと私との契約の経緯です。」

ヴィヴィオはそこまでの話を聞いて・・・いつの間にか涙を流していた。

「・・・・・・・・。。。」

「優しい・・・方なのですね。主様のために・・・泣いてくれるのですか？」

「だって・・・・・・・・悲しすぎるよ。」

大魔王のあるいた奇跡は決して幸せな物とはいえない。幸せだった時もあったが、それを踏みにじられたのだ。

しかし、彼はそれを乗り越えなすべきことをした。王として・人として。

「でも・あの方は胸を張って第二の生を終わりました。それだけは忘れないでください。一人の命として・前世からしたらはるかに短いですが・それを超える密度を生きて、なすべき事を成しました。」

「じゃあ・今のバーハルトさんは？」

「・・・・・・。」

ヘルはヴィヴィオの質問に彼女はしばし黙る。

「今あの方は第三の人生を歩まれています。蘇生と言うより、崩壊していた体組織を禁談の果実とヘルズチェーンを初めとするロストログアと融合させ、新しく作り変えたのです。」

第三の人生・それは彼の第二の人生の終焉からとても永い時が立ってからになる。

崩壊していく魔王の宮殿から転送した彼らはとある世界の遺跡で永い眠りについていた。

そして・その遺跡で彼らはスクライア一族であるユーノによつ



て発掘、そして保護される。

その時のバーン——現在の名前バーハルトは幼い子供の姿をしていたのだ。

「体組織の崩壊・・・それがひどかったため・・・体を退化させて子供に戻しました。しかし・・・予想していたことではありませんが・・・主様は前世の記憶をすべて失いました。主様の発掘と同時に私も目覚め、しばらくは生まれ変わった主様の成長していく姿を見守っていました。」

聡明だったバーハルトは瞬く間にその才を発揮。古代ベルカの魔法も自分が使いやすいようにミッド式とミックスさせて扱ったり、博士号を取得したりと・・・。

「そんな主様に転機が訪れます。それは・・・前世で主様と戦った戦争を裏で操っていた組織——エデンが活動を再開したからです。」

歳の頃は十五、六歳となったバーハルトは皆と遺跡の発掘をしていた。その時遺跡から巨大な起動兵器が現れ、暴れ出したのだ。

おまけにそれを狙ってシードのセカンドが現れた。

とっさに皆を守ろうとするバーハルト。だが・・・力及ばず追い詰められていく。

そんな彼の前に・・・彼女は再び姿を現した。

「・・・誰だ？」

「はじめまして・・・でこの場合はよろしかったでしょうか？私は冥界の書。貴方様を主とする魔道書です。」

それが・・・永い時を経た一人の魔王と一冊の魔道書の再会だった。

「その後・・・主様は初めての変身をします。あの方の身体は・・・禁断の力の力を核にヘルズチェーンを神経とし、無数のロストログアを血肉として取り込んでいたのです。その力は凄まじく、目撃した一族の一人が・・・怪物と言ったほどです。まあ・・・その方は私がきっちり記憶を消去しましたので、主様の初変身を覚えているのは私だけです。」

「それって・・・ユーノさんが言っていた古代ベルカの戦車の暴走の話？」

公式記録ではこの事件は古代ベルカの戦車が発掘中に目覚め、暴走。しかし年月がたっていたので、暴走中に自己崩壊を起こして爆発して終わったとされている。

「・・・はい。あの場にはユーノさんもいらっしやいました。しかも彼は・・・私の姿も、そして主様の初変身もみていました。重傷を負っていて治したのですが、その際に記憶は失っています。」

「・・・・・・・・・・。」

「さて・・・すべて話してしまいましたね。約束通り・・・。」

ヘルは話を終えたヴィヴィオに迫ろうとする。

「まだ・・・肝心な事が聞けていない。」

でも、ヴィヴィオはひかなかった。

「どうした!？」

ヴィヴィオをさらった連中のアジトは大混乱に陥っていた。

「・・・・・・なんで戦艦が？」

シードのサードである男が現状をモニターに見て・・・啞然としていた。

「混乱に生じて・・・・くっ・・・管理局の連中まで侵入している。」

彼は魔道書を取り出し。あたりの検索を行う。そして・・・非常に不利な状態になっている事を察する。

「・・・・・・聖王のクローンを連れ出し、この場から逃げるぞ。転送魔法の準備を急げ。あれは私が迎えに・・・・・・?」

だが、アジトの司令室の天井を白い風と共にぶち破って乱入してくる者がいた。

「・・・・・・魔王・・・ベブゼブブ。」

「やっと見つけたぞ。」

左足の槍を元に戻しながらベブゼブブは男と対峙する。

「・・・そうだ、余は魔王ベブゼブブ。さあ、おまえに魔王と言う名の恐怖を味あわせてやる・・・冥土の土産にな。」

「・・・言ってくれる。まあ・・・私も名乗りをあげないといけないか。ルルイエ。」

「イエス・・・マイロード。」

男の傍に現れた魔道書はページを開く。ページの中から立ちこめる黒い瘴気。

それを男が浴び現れたのは異形の怪人。頭はタコのようにになっており、黄色に輝く瞳に口元に無数の触手がうごめく。ゆったりとした黄色の衣をしたローブ。その袖からも触手が見え隠れする。

まさに・・・異形にふさわしい姿。

「私の名前はクルー。シードのサードにして・・・ロストロギア、ルルイエ異本、そして黄金の衣の使い手・・・。」

それはベブゼブブが危惧したとおり・・・ロストロギアを使うシード――サード。

「・・・これは流石に骨がありそうだ。」

「ふっ・・・我々と同じサード・・・魔王の实力を見せてもらおうぞ。」

「・・・他にもいるのか？」

まだ見ぬ強敵が揃っている事に呆れながら、

魔王は軽く首を回し気合いを入れる。

「・・・押して参る。」

魔王はその一言と共に駆け、クルーはローブの下から触手を素早い槍の一閃のごとく飛ばす。

その触手を手で打ち払い、魔王はクルーの胴体に拳を叩き込む。

だが・・・その手ごたえが全くない。伝わるのはゴムの様に異常に柔らかい感触。それが拳の一撃の衝撃を吸収している。

「ん？」

「・・・いいパンチですね。私じゃなかったら無事じゃすまなかった。そして・・・直接この衣に触るのはいい度胸で・・・」

なぐった拳の纏う黄色いオーラ。それに伝う鈍い痛いに魔王はとっさに拳を引く

その瞬間にクルーは口元の触手を伸ばす。

「ぐっ!？」

それを拳でガードしつつ・・魔王はつぶやく。

「我が右手に纏うは・・蒼炎の大斧!!」

その言葉と共に右手に召喚される蒼い炎を上げる斧。

そして・・一撃を振り下ろす。

「黄金の衣・・絡め!!」

蒼い炎の一撃を黄金の衣は吸い寄せられるように絡め取り・・その炎を消したうえで受け止める。手に伝わる感触は布なのに今度は鋼のごとく固い。

「我が左足に宿るは白き魔槍!!」

その隙を見て左足に風を纏った魔槍を召喚。

絡め取られた右手を機転として回転蹴りを繰り出す。

鋭い一閃だったのか。右腕を拘束していた衣は切り裂かれてしまった。

「なっ?」

「我が右足に宿るは黒い鉄槌」

そして右足に黒い稲妻が纏い、左足の回転蹴りから連続で周し蹴りを放つ。

「ぐほっ!？」

重い衝撃を伴う一撃に流石のクルーも攻撃を相殺しきれずに吹き飛ぶ。

もっとも軽く吹き飛んだだけでそれほどダメージはないようだが。

「……伸縮、再生機能がある上に、硬度や柔軟性の自在の变化できて、それを利用して攻撃をいなすことができるのか。そして、浸食がその衣の真の特性。それを利用して相殺として防御、拘束に使うのが主な使い方みたいだな。」

「……もうこの衣の特性を見抜くとは……。」

「何・判っても対策はまだこれからだ。実に厄介とだけはいっておく。」

そんな彼に向って延ばされる触手。それは重い鎚になることもあれば・鋭い槍にもなった。おまけに黄金の衣の浸食機能まで付加されているのか黄色いオーラも纏っていた。

その触手は地面を突き破って襲いかかる。

だが……。

「鉄槌の結界。」

その言葉と共に右足が展開。彼の周りに増幅された重力の結界が展開され、触手を地面に縛り付ける。

「・・・・・・・・流石だな。」

「家々・それはこっちも流石に苦戦していますよ。これほどの相手とは・・・。」

「こんな物ではないの难道？」

「ええ。まだルルイエの力も見せていませんから。」

クルーの傍には未だに宙に浮いているルルイエ異本の姿。

「・・・楽しみだ。返礼として余も・・・全力を出させてもらう。」

同じ条件で戦う二体の異形。その激突はここからが本番だった。

その頃・・・デュラはアジトの中で愛しい人の姿を探しまわって、広い倉庫区画にきていた。

「ヘルさん・・・一体どこに？」

「兄上・・・まってくだ・・・！？兄上！」

アバドンの警告に止まるデュラ。

「・・・・・・・・ようやく見つけたぞ。」



デュラの目の前に現れたのは・・亡霊の鋼鉄騎士団——ナンバー7、グリーズとナンバー10、バトラがいた。

彼らは三十以上のスレイブをひきつれている。

「・・・本当だぜ。今はデュラハンと言うのか？」

「あの時僕を追いかけまわした人達ですか？」

「・・・今度こそ捕獲させてもらう。あの杖を修復した相手を・・・放置しておけない。」

「そういうことだ。」

グリーズとバトラが武器を抜き、彼らに襲いかかろうとした時だった。

「邪魔。」

その言葉と共に天井を突き破って光の奔流が放たれる。

『なっ!?!?』

超人的な反応で二体は後ろに飛びのきそれを交わす。生前に騎士として幾多の修羅場をくぐりぬけてきた勘と経験が二体の命を救ったのだ。

「何だ・・・かわしたのか。」

デュラの心底冷たい言葉。

そして・・・二体の騎士は機械の体なのにもかかわらず心底冷たい  
思いをしていた。

彼らが先ほどいた場所には戦車一台位簡単に落とせるくらいの大  
穴。

しかもその深さは地下も底が見えないくらいに深い。

「安心して・・・ただの戦艦の主砲だから。」

「安心できるか！！そんなもんこんな場所にぶち込むって正気か？」

「うん。正気だよ。ちゃんと巻き込まれる人が君たち以外いないこ  
とを確認したうえで出力を三割に落としてうちこんでいるから。そ  
れもう一発。」

バトラの突っ込みにしれっと応えるデュラはもう一度主砲を放つ。  
それを交わしながらグリーズは叫ぶ。

「そもそも・・・お前仮にも騎士だろ？そんな物騒な物を使うとは騎  
士の風上にも・・・。」

「私は剣は持っていますが、剣術は全く駄目です。そもそも、私の  
誇りは主様を守ることと、大切な人を守ることのためにあります。  
それ以外の誇りは私にとっては取るに足りません。できる事を最大  
限にやってその誇りと最良の結果を求めるのに何か不都合でも？」

「・・・・・・・・。」

その騒ぎにアジトの護衛をしていたスレイブタイプのアーマードがデュラの背後から現れる。

しかし・・・その程度でデュラは慌てない。

「アバドン・・・変形を許可します。前衛は任せましたよ。」

「・・・判りました兄上。」

その言葉と共にバイクだったアバドンが変形・・・甲冑を纏った女性の機械騎士の姿になる。

その右手は鋭い両刃の付いたランス、左手は盾になっていた。

「・・・最初に・・・あなた達には心底同情します。」

「唐突だな。」

「何しろ私・・・主様より兄上のストッパーになるように言われています。」

『!?!』

主・・・魔王ベブゼブブが護衛のためではなく・・・ストッパーのために同行させている。それが何を意味しているのか・・・判らない二体ではない。

「本当にタイミング悪い時に遭遇してしまった。今の兄上・・・本当に危険ですよ?」

「ピット・・・展開。同時に・・・DNM散布。」

アバドンの警告は正しい。

デュラの周囲に三十を超える拳銃ほどの大きさのピットが現れたのだ。その上、デュラの両肩から光輝く粒子のような物が噴出される。

それを見たスレイブ達が一斉に弾丸やエネルギー弾を放つが・・・デュラに届く前に全て霧散してしまう。

「・・・殲滅する。」

その言葉と共に向けられる光輝く粒子がスレイブ達を包む。そして包まれた瞬間、彼らはボロボロの砂となって分解し、瞬く間にスレイブ達は全滅する。

「・・・単なるナノマシンだ。気にするな。」

バトラは突っ込む。

「気にするなって言えるレベルか？・・・その前にあんなのありか？」

「・・・・・・・・。」

バトラの突っ込みに誰も答えられない。いや、応える気力がないだけだ。

「紹介が遅れました。私はアバドン。主様の鉄の馬にして・・・ライ

ダーとランサーの称号をもらいし者。兄上は・・・アーチャーと先ほどバーサーカーの称号を賜っています。」

『!?!』

二体の騎士はバーサーカーの称号をもらったというデュラをみる兜から見えるのは紅い瞳。それは紅く禍々しい光を放っている。その光は明らかに狂気のものであった。

弓兵にして狂戦士・・・その表現が憎たらしいくらい当たっていた。

「私と戦うときは馬上の騎士と戦うのと同じ覚悟を・・・そして・・・今の兄上と戦うのは数万の兵士と戦艦一隻を相手に同時に戦うのと同じと・・・思ってください。」

バトラは思った。

——あいつ・・・しばらく見ないうちにとんでもなくやばい奴になっている。しかも・・・どんでもなくくらいに・・・イカれている。頭のネジ・・・絶対どっか吹っ飛んでいるぜ。

「・・・あいつを逃がした事・・・これほど後悔することになるとは。」

「ああ、俺もそう思う。」

そんな二体の騎士は決死の覚悟をする。彼らの周りもスレイブがいるが・・・時間稼ぎ、または弾よけにしかないだろう。

「邪魔・・・するな。」

その言葉とともに彼の周りのピットから一斉に放たれる弾丸。そして・・・天井から二発戦艦からの砲撃も来た。それは明らかに過剰すぎる火力。

『ぎゃあああああああああつあああああ!?!』

二体の騎士の断末摩の悲鳴が爆音にかき消されていく。

「ヘルさん。今助けに行きます!!」

「主様にストッパーになってくれと承ったが・・・創造主を止めることが私にできるのだろうか？」

そんな彼らに心の底から同情しながら、アバドンはどのように止めた物か思索していた。

「あなた達ならどうしますか？」

「・・・・・・いるのは判っていたのね。」

その言葉に物陰に隠れていたティアナが姿を見せる。

彼女だけでない、変身したディーノと剣を構えたハイルの姿もある。

「・・・・安心してください。結果的にヴィヴィオ殿の救出の助けになると思います。」

「そんなことまで知っているのね。どうしてあなた達はこっちにきたの？」

「……姉上……ヘル殿が事件に巻き込まれたみたいで、兄上がそれで逆上しているのです。」

「……逆上って……。」

「でも安心してください。冷静に逆上しているだけですから。ここに姉上がいるのは判っているのでアジトが壊れない程度にやと思います。もっとも……アジトが壊れなければどんな手段を使ってくるのか私にも想像付きませんがね。」

アバドンが傍にある壁をランスで打ち砕く。

「ここで兄上をなだめておきます。あなた達は先に……。」

「いいの？」

「代わりに……あなたが姉上にあったら……すぐにこっちに来てほしいって伝えてください。主様以外で兄上を完全に止められるのは姉上しかいませんので。」

ティアナ達は暴れまわっているデュラをみる。

「ぐぬおおおおおおお！？」

「ヒイイ……おっ……お助け……ぐは！？」

二体の騎士たちが完全に弄ばれている光景があった。しかもそん

な彼らを見ても喜びもせず、あざけることもなく、ただ・・・無言で冷たい怒りをむける。

「わっ・・・判ったわ。ぜ・・・絶対に伝える。後・・・こっちからもお願いがある。」

「？」

「バーハルトさん・・・私の同僚なのだけど、はぐれちゃったの。まあ・・・何か分け合ってわざとはぐれたのだと思うけど。もしあったら外に出て待機していつっていつて。普通の人ならともかく・・・あの人はそう簡単にしにそうにないから。まあ・・・無事だと判った時点ですぐに連絡がほしいってつたえて!!」

心から心配しているのだとアバドンにも判っていた。ただ・・・少し顔を赤らめているのを見て、己の主の手の悪さに軽くため息をついた。

「ええ。主様の第三の僕の名――アバドンの名において必ず。」

「・・・騎士なのだな。」

ディーノの傍に現れた蒼い守護竜――ガロはライダーを見て軽く感心をする。

「紹介が遅れた我が名はガロヴィンド。主――ディーノを守護する守護竜なり。」

その名乗りにアバドンは最大の敬礼を持って答える。



「そう言うあなたも・・立派な騎士かと。」

竜と疾走の槍騎士との間に通じるものがあるらしい。

「なら・・この場を任せるしかねえか。本来は封印対象だけど・・今はそんなの目的じゃないし。」

「・・・・・まあそれしかねえか。」

ディーノは軽く呆れながらハイルと共に駆ける。

「でもガロ。突然現れて語るなんてどうしたの？」

突然現れたガロにディーノが何事か尋ねると・・・いささか変わった返事が返ってきた。

「・・・うむ。なんだか波長があつたのでな。あいつとは酒を酌み交わしたいものだ。」

「酒って・・。」

「いいねえ。俺も混ぜてくれ。」

ハイルもそれに参加したいと申し出、ガロ自身も快諾する。

「その勇者と酒飲みドラゴンそれと・・不良騎士!! さっさとこい!!」

そんな彼らに強力な激を飛ばすティアナ。

彼女に率いられて。三人と一体はアジトの中へと向かっていく。

「なんで・・・バーハルトさんは今も戦っているの？」

それはヴィヴィオの最後の質問。

「魔王ベブゼブブの姿を見て親しい人に怪物と呼ばれて、そして今も封印指定で管理局に追われているのに・・・。」

「・・・・・・・・。」

ヘルはヴィヴィオの目をみる。綺麗に涙でうるんだ瞳。その輝きに濁りはなく、ただ・・・バーハルトの身を案じているからというのが判る。

「・・・・・・・・怪物に変身した主は己の変化に戸惑っていました。それでも簡単に相手を倒したのですがね。問題が・・・その怪物が・・・スクライア一族の人がシードとして変身させられた物だったのです。」

化け物は人間だった。ただの哀れな一人の人間にして・・・スクライア一族の仲間だったのだ。

助けられなかったというのは覆せない事実。

「化け物・・・か。なら・・・これは怪物が怪物を倒した。ただ・・・それだけなのだろうな。それに・・・助けられなかった。」

バーハルトの周りには無くなった人の死体がある。その中には・  
彼にとって家族同然の人達も含まれている。

その彼の手が微かにだが震えていた。その現象にバーハルト自身  
が一番驚いている。

「・・・手が・・・震えているというのか？何故・・・。」

「・・・簡単な・・・事だと思うよ？」

「・・・えっ？」

それは倒れた人達の中にいた。

「ユーノさん!？」

あちこちから決して浅くない深さの傷とおびただしい血が噴き出  
している彼ははっきり言って重体だ。意識があるのが奇跡といえた。

「すごい姿だね。・・・まるで地球に伝わる冥府の主にして暴  
食を司る魔王・・・ベブゼブブのようだ。」

変身したままの異形に関してユーノは恐れる事もなく率直な感想  
をいう。

「・・・君は・・・感情がないって・・・それを気にしていたよね？」

バーハルトは助け出されてから・・・ほとんど感情を表に出すこと  
はなかった。恐ろしく優秀なのだが・・・そこがどうしてなのか判ら

なかったのだ。

「君には心があるよ？少なくとも・・・仲間が死んだ事に怒りを感じてくれている。それで変身したんだよね？」

「・・・・・・・・・・怒りを・・・感じたのか？この私が？」

「それだけじゃない・・・今君は・・・泣いているよ？」

「なっ？」

慌てて複眼となった眼元を触るとバーハルトの頬が濡れていた。

一筋の涙を彼は流していたのだ。

「涙・・・流せる。君は・・・怪物じゃないよ。」

その言葉はバーハルトの胸に不思議な温かさをもたらしてくれた。

しかし・・・そのユーノが苦しそうに吐血する。

「ユーノさん!？」

そしてそのまま気を失ったユーノ。

しかし・・・その傷をヘルは一瞬で癒してしまった。

「これでよろしいですか？」

「・・・・・・・・・・ありがとう。出来れば・・・他の者にも頼む。助けられ

るだけでいいから。」

「御意。」

次々と彼らを癒していくヘル。

「ヘル・・・と言ったな。お主このようなふざけた真似をしてくれた相手を知っているのか？」

それは明らかな怒りが含まれた言葉。

「はい。全てとはいいませんが。」

「なら教えろ。」

バーハルトは一つの決意をする、

「まさか・・・主様？」

「・・・ふざけた事をした奴らに・・・お仕置きをしにいく。」

「デッ・・・ですがその組織は強大だと思われますよ？これから詳しく説明はしますが、何しろ相手は神といってもいい。それを相手にするなんて・・・。」

ヘルはシードをもたらし相手の強大さを知っていた。古代のベルカで戦乱をもたらし、自在に操るほど。

大魔王ですら大規模な魔王軍を結成して時間をかけてようやく追いつめた程の相手。

そんな相手だというのにバーハルトは揺らがない。

「ふっ・・・なら・・・魔王になればいいだろう。」

「えっ？」

「相手が神ならそれを脅かす存在になればいい。それだけのことだ。それに・・・この姿はその魔王と言う言葉がふさわしい。」

異形になったその姿に皮肉みたいなものを思いながらバーハルトは決める。

「ふざけたことする相手が神でも・・・許すわけにはいかない。これはそのための力の様な気がするのだ。まあ・・・普通にはもう暮らせぬがな。」

「あっ・・・」

無数のロストログアと禁談の実が合体してできた異形の姿。助けるためとはいえ、彼をそんな姿にしたのは・・・ヘルの責任であった。

声を漏らしてしまったヘルを見てバーハルトは軽く笑む。

「そうか・・・。お主は知っているのだな。余の過去も、こんな姿になった理由も。」

「!？」

恐ろしい程に鋭い洞察力だった。記憶を失ったとはいえ、賢王と呼ばれていたころの聡明さは健在だった。

「その件に関しては無理に言わなくてもいい。お主が時を見て話してくれればいいよ。」

バーハルトはゆっくりと空を見上げる。

「それよりも・・・お主の力も借りるぞ。激しい戦いになるからな。」

「はい。」

ヘルはバーハルトの後ろについていく。

この時から二人の戦いは始まったのだ。

「私は・・・許されない事をしてしまったのかもしれませんが。ようやく巡り合えたマスターとはいえ・・・私はそのマスターを・・・怪物に変えてしまった。再び魔王としての道を歩ませてしまった。」

ヘルは独白の後・・・そう漏らしてしまった・

本来だったら死ぬはずだった彼が歩み始めた第三の生。しかし、それは彼の命を助けるためにロストログアと融合させてしまったことでまたも狂ってしまった。第二の生で戦乱により彼が魔王となるのを決意したのと同じように、今度も彼は魔王となる。神と言う存在を倒すために。

「それなのに私は幸せだとも感じている。未完成だった力も完全な物となり、こうやって魂も肉体も得た。幸せなのに・・・辛い。」

ヘルは涙を流す。今まで抑えていたものが漏れ出したのだろう。

でもそんな彼女にヴィヴィオは立ち上がる。

「そんなことないよ!!」

ヘルの抱いている思いを必死に否定するために。

「何故・・・そう思えるのですか？私は主に降りかかっている災厄の原因だと言えるのに？」

「だって・・・バーハルトさんは幸せだと思うから。」

幸せという言葉にヘルの目が見開かれる。

「だってバーハルトさんヘルさんの事を家族だって思っている。私知っているもん!!」

その根拠はヴィヴィオにバーハルトから相談を持ちかけられたときだった。

おいしく新鮮な食材が手に入る場所があるかと言う相談。

それで市場を紹介したのだが、その才理由を聞いたのだ。

「・・・家族が増えてな。血こそは繋がっていないが余はそう思っ



ておる。共に食事を取れなかった者もいたが、そうでなくなった。そんな彼らと共に食事をしたい。共にその幸せを分かち合いたいのだ。そうすれば、自然と抱えている悲しみも共に分かち合う事もできるはずだからな。」

バーハルトは少しため息をつきながら続ける。

「一人・色々と抱え込んでいるものもおる。そんな奴のためにもまずは幸せから分かち合おうとおもう。家族だからな。当然のことだ。そのためにはまず・・おいしくもいい糧になる。そんな料理をもっと追究したくてな。」

それを言ったバーハルトは本当に幸せそうだったのをヴィヴィオは覚えている。

「主さまが・・そんなことを？」

「うん。だから・・ヘルさんがそんなこと言ったらバーハルトさん達きつと悲しむよ。同じ家族がそんな風に落ち込んでいたら・・。」

バーハルトの心根をヘルは家族の誰よりも知っているつもりでいた。

実際そうだったのだ。

でも・・彼女が知っている以上に彼は懐が深い。そして・・優しい。

ヘルが思っていた以上に・・・だ。

「あ・・・ああ・・・。」

ヴィヴィオにとってそれは喧嘩していた友達と仲良くなるためにアドバイスを送っているのと同じ何気ないアドバイスだった。

でも・・・それが何よりもヘルの心に沁み渡ったのだ。

「えっ？」

流れ落ちる一筋の涙。それがきつかけとなり次々と堤防が結界したかのように涙を流すヘル。

「えぐ・・・う・・・うう・・・うううう・・・。」

それは数万年分の歳月よりも長く感じた後悔の日々。ほんの数年前の、長い地獄のように感じていたのだ。色々と我慢していた物がヴィヴィオの一言によって氷解してしまったのだ。

ヘルは思わずヴィヴィオを抱きしめてしまった。

## 聖王と魔王（大魔王の真実編）（後書き）

さて・・・ヘルさん・・・推定年齢はおそらく億は行っています。書いてみたら予想以上に長くなってしまい。しまったなと思いました。

この話でさらなる強敵と魔王の秘密を明らかにしました。

そしてこの話は次の複線にしようと思います。

しかし・・・デュラを修羅にしまいましたね。普段は戦いそのものを好みませんよ？ただ・・・戦いになったら情け容赦なく・・・徹底的にやるだけですけど。  
・・・自分で言うのもなんですが・・・彼・・・この話隠れ最強の一角になってしまうかも？

## 次回 聖王と魔王（解決編）

次でこの戦いを終えます。

デュラ「・・・逃がしたか。応援が来たとはいえ。」

アバドン「さすが・・・英霊ですね。あの攻撃で何とかですが生き延びるなんて・・・。」

ヘル「・・・一体何があったの？」

二体の騎士「・・・し・・・死ぬかと思った・・・。」

??? 「地獄としか言えない中で・・・よく生き残ったなお前ら。」

バーハルト「ほう・・・救出完了か……。だが・・・目の前の相手は少々きついな。」

クルー「これがルルイエ異本の真の力・・・深き者を相手いどこまで戦えるかな？」

ルルイエ異本の真の力が魔王の前に立ちふさがる。

ヴィヴィオ「お友達になってくれませんか？」

ヘル「友・・・ですか。そういった存在はいませんでしたから・・・どうすれば？」

ヴィヴィオ「そんなの簡単だよ。」

そして聖王と冥界の女王との間に絆が生まれる。数々の奇跡を呼び起こす尊い絆が。

## 聖王と魔王（解決編）（前書き）

少々・・予告とは違う形になってしまいましたが、この事件はこれで終結させます。

書きたいエピソードが結構あるというのに、一つの事件で四話くらいかかるとは・・。

完結させるまでに一体何話になるのだろうか？

でも・・・話・・こんな形になったのですが大丈夫だろうか？

## 聖王と魔王（解決編）

ヘルはひとしきり泣いた後・・・恥ずかしそうにうつむいていた。

「うう・・・この私が・・・歳上のはずなのに、こんなに泣いてしま  
うなんて恥ずかしいです。」

「まあ・・・まあ。」

そんな彼女をなだめるヴィヴィオ。歳の差は・・・億ほどあるとい  
うのに、自身の人生の一万分の一も満たない少女に慰められるのは  
少し恥だと思ってしまった。

「でも・・・この姿になって・・・厳密言う心を得たのはそんなに昔  
じゃないと思うよ？それに・・・いくつになっても悲しい事はあるし・  
・泣きたくなることもあると思うから。」

必死にフォローするヴィヴィオを見て、微笑みを向けるヘル。

自分のためにしてくれているというのが判って嬉しいのだ。

「記憶・・・消す必要なくなったか。」

「えっ？」

「主様の事をこれほど理解してくださる方です。魔王として戦って  
いる理由も受け止めてくれました。その上であなたは主様といつも  
通りに接する事ができるはずです。」

「そっ・・・そうかな？」

記憶を消されなくて済む。それをヴィヴィオは安堵していた。知らなければよかったと彼女は全く後悔していない。むしろ知れてよかったと思っただくらいだ。

「それに・・・記憶を消してしまうのがなんだかもったいないですから。主様も、私も理解してくれる人が現れたのですから。もちろん秘密は厳守してもらいますがね。」

「そっ・・・そんなの当然だよ。まあ・・・ママ達に初めての隠し事になってしまうけど。」

なのはには絶対話せない理由・・・それは先の事件でバーハルが魔王の名を送りつけたからだったりする。

「・・・本当に主が迷惑をかけてます。こちらからも言うておきますので・・・なんとか撤回はさせます。」

「お願いします。ママ・・・本気で怒っていたし・・・あのせいで魔王になりつつあるから。」

なのははかなりのショックを受けているらしい。必死にフェイト達もなだめているがまだ完全ではないらしい。

「絶対何とかします。出ないと・・・あれは私も怖かったですし。」

ヘルが思い出すのは怒りながら追い打ちのデイベインバスターを

放つ魔王の姿。

かなり恐ろしかったのを彼女は覚えている。

冥界の書であるヘルをビビらせているのは。

「ヘルさんから見ても・・・素質はあるのは違ってないみたい・・・だね。」

「はい。失礼ですが・・・本当に怖いです。」

2人はそろって笑い合う。

ひとしきり笑いあって・・・そしてヴィヴィオは切り出した。

「あの・・・友達になってくれませんか？」

「えっ？私と？」

「はい。」

「・・・ですが・・・私・・・友達と言う存在は今までいませんでした。どうすればいいのか・・・？」

魔道書として生まれたヘルには友と言う概念は今までなかった。それ故友達になる方法を知らない。

「そんなの簡単だよ。まあ・・・ママからの受け売りだけだね。」

ヴィヴィオは戸惑っているヘルにその方法を告げる。とても簡単なものだ。



「私の名前を呼んで・・・ヘルさん。」

それはなのはがフェイトと友達になるために言った言葉。

「・・・・・・・・判りましたヴィヴィオ。」

彼女は初めて名前を呼ぶ。

そして・・・理解する。名前を呼ぶ意味を。

「そうですか。ここから始まるのですね。」

「うん。そうだよ。」

そのように微笑みあう2人。

そんな彼女達に訪問者が来る。

壁をぶち破って現れたのはディーノ。

「ヴィヴィオ、無事なの!？」

そこから突撃してくるティアナは固まってしまった。

「なんで・・・冥界の書がここに？」

「ようやく迎えが来たみたいですね。」

ヘルはヴィヴィオに微笑みながら小さな宝石のような物を渡す。

「えっ？」

「——通信機・・・のようなものです。またおしゃべりしましう。」

ヘルは念話でそう言ってその場から去ろうとする。

「待った！！おまえの妹？から伝言だ。」

「妹・・・アバドンのことですか？」

アバドンが女性型をしているのを知っているのを見てヘルは立ち止まる。

「・・・速く兄上を止めてくれとのことだ。」

「止めて？一体何が起きているの？」

そんな疑問を覚えつつ。ヘルはとっさにハイルにヘルズチェーンを伸ばし、何を見て効いてきたのかを検索。

そして・・・顔を蒼くした。

「・・・どうしてデュラがそんなことに?!」

「俺たちが聞きたいわ!! っていうか、鎖を巻きつけるだけで全部わかるのかよ? まあ・・・早く向ってやれ。何か・・・相手が可哀そうだったし。」

ハイルの言葉に一も二も言わずにその場と後にしようとして、

「ちょっとまって？」

ティアナに呼び止められた。

「あなた・・・もしかしてヴィヴィオの事を守って？」

そこから先の言葉をいつの間にか目の前に現れていたヘルが指を当てて止める。

「そこから先は野暮です。それと・・・あなたの探し人なら大丈夫です。この件が終わったら無事に合流でき

るはずですよ。その時は・・・理由はあまり問わない方がいいかもしれませんね。貴方があの方を心配する理由は・・・これも野暮ですからきませんが。」

心配する理由。その一言に真っ赤になるティアナ。

「そっ・それってどういう？」

その反応を微笑ましく見るヘル。それは・・・優しい慈愛の笑みだった。それを見たティアナ達は驚きつつも、軽く呆けてしまっていた。

「さあ・・・では・・・。」

ヘルは姿を消していく。

それに対してヴィヴィオは笑顔で送る。

もちろん・・・ヘルも笑顔で姿を消したのだ・

「・・・さて・・・ヴィヴィオちゃん？ヘルと何をお話したのかな？」

「・・・ごめんなさい。全部は言えない。でも・・・」

ヴィヴィオはこれだけなら言っても問題ないと思い、堂々と宣言する。

「お友達になりました。」

「・・・へっ？」

ヴィヴィオが何を言ったのか理解するのにティアナはたっぷり一分程の時間を要したという。

「・・・ルルイエの門より来たれ・・・深き者よ。」

ベルゼブブと相対して、クルーはルルイエの力を解放する。

本から出てくる巨大な魔方陣。そこから現れるのは無数の触手を生やした怪物だった・

「・・・彼の名は旧支配者・・・クトウルー。我が姿の元となりし大いなる者の一柱なり。」

「……邪神の類を呼び自在に使役する。厄介な魔道書よ。本来ならその一部を召喚して、使役するのが正しいのではないのか？」

「……ほう。さすがですね。まあこれでもまだ上半身しか召喚していません故。」

クルーの言葉と共に雄叫びをあげるクトゥルー。

「それに……天下の魔王殿に出し惜しみは禁物と思ひまして。」

「……面白い。邪神と魔王の闘い……受けて立とうぞ。」

魔王ベブゼブブの宣言と共にクトゥルーが無数の触手を伸ばす。

「また触手なのか……ん？」

しかしその触手は波紋のように揺れる空間に吸い込まれ消え、次の瞬間魔王の周りに現れた。

「ぐっぬう？」

それは魔王の周囲を取り囲むようにして現れ、魔法全方位から触手の攻撃にさらされていた。

重い鎚のような触手の連撃に、魔王は膝をつく。

「流石の魔王も……クトゥルーの攻撃には……ん？」

しかし・・・クルーは途中で異変に気付く。触手が何かに阻まれている事に。

「触手ではないが・・・似たような物なら余は持っているのだ。」

それは無数の鎖によるもの。全身から伸びた鎖が四方八方から襲いかかってくる触手の攻撃を素早く反応して防御しているのだ。

「・・・流石と言うべきなのか・・・なら・・・。」

クトウルーは影の中に隠れていた両腕を見せる。身体の割には細めだが、カギ爪のついたたくましい腕。それが魔王に向かって振り下ろされたのだ。

「ぐっ!?!」

その振り下ろしの速度は巨体なのに速い。魔王が辛うじて避けられるほどに。そしてその一撃の重さは・・・鎖では到底受け止められない。

「出鱈目だな。」

「それで避けてつもりかね?」

しかし次の瞬間、ベルゼブブの身体は巨大な腕に吹き飛ばされていた。

「ぐっ!?!」

その腕は虚空より現れていたのだ。よく見るともう片方の腕が空間の歪みの中に消えている。

「ぐぐぐぐ……ううう……ぬうう。」

すさまじい程に重い一撃。それに立ち上がろうとするベブゼブブだが、地面の下から突き上げるようにして現れた腕に吹っ飛ばされ、そして中をまったところに無数の触手が襲いかかる。

「ぐあああああ……。」

そして、押して行くところに腕が再び現れ、巨大な手でベブゼブブを捕まえたのだ。

「ぐっ……うう……。」

その凄まじい握力はいかなる技量をもっても逃れられぬ。死へと直結する恐るべき拘束となっていた。

魔王は必死にその拘束を逃れようとしていたが、その腕から放たれる禍々しい黒い瘴気がその体を襲う。

「ぐおおおおおおおおおおおお！！！」

身体中に走る火花。

「さすがの魔王もクトゥルーには勝てませんか……。」

「ぐっ……ぬう……。」

「冥土の土産に良い事を教えてあげましょう。私達の同志として今度聖王の血筋を加えようと思います。」

聖王の血筋……。その単語に魔王は苦痛の声を止める。

「なんだ……。と？では……。ヴィヴィオを誘拐したのは……！」

「はい。クローンとはいえ立派な聖王の血統。彼女にシードを与え  
ば、確実に我々と同じサードになりま  
す。」

魔王の脳裏に笑顔のヴィヴィオの姿がよぎった。

「あいつを……。サードにするだと……！」

「何しろ……。古代ベルカの王たちは存在そのものがロストログアと  
言っている存在ですからねえ。ふふふ……。しかもまだ幼子・  
……。いいように作り変えることも可能です。」

楽しみでしかたないように笑うクルー。

一方の魔王は身体を震わせていた。

「……。そんなことのために……。か。」

それは彼自身が自覚していない怒りのために。

「……。負けられなくなったな。お前には……！」

「そんなセリフをこの状態でいうのですか……。時間をかけるの  
は危ないと聞きました故、速く止めとしましょう。」



魔王を拘束していた腕に瘴気が集まっていく。しかし・魔王は  
その中でつぶやく。

「我解き放つは・・・蒼炎の大斧！」

それは解放の呪文。

「我・・・解き放つは・・・紅の魔剣！！」

それと共にクトウルの口から言葉にもならない悲鳴が上がる。

「何？どうした？」

そして・・・次の瞬間・・・クトウルの腕が粉々に吹き飛ぶ。

破片が蒼い炎に焼かれ、紅い光により消滅しながら・・・。

「・・・とっておきをつかわせてもらう。」

魔王の右腕は蒼い炎を上げる斧に、左腕には紅い魔剣が展開されていた。

「・・・まさか邪神の肉体を破壊し、あまつさえ苦痛の悲鳴を上げさせるとは・・・」

破壊された腕の傷口には蒼い炎と紅い光が灯り、そこから邪神の肉体を浸食している。

とっさにクトウルは腕を切り離し、蒼い炎と紅い光による浸食は其の切り離された腕を消滅させる形で

終わる。

斬り落とした腕は瞬く間に再生する。

「神殺しの魔具は・・・伊達ではないか。」

クトゥルーは口元の触手を伸ばし、魔王を撃ちすえようとする。しかし、それを魔王は両手に持った魔具で迎え撃つ。

瘴気で包まれ、鉄の鈍器、または槍のようになった触手をまとめて右の斧で薙ぐ。それは空間をも切り裂き、後ろに会った触手もまとめて斬りさく。

その後ろから触手は振り向きながらの左手の魔剣が斬る。あらゆる者を浸食する剣は触手をまるで柔らかいバターのような感覚で楽々と斬り、その傷口からも紅い呪いが浸透し、苦しめる。

触手からつたわってくる苦痛にクトゥルーはのけ反る。

「・・・ついだ。余のとおきを受けるといい。」

魔王は両腕の魔具で唱える。

「我が解放しは蒼炎の斧と紅の魔剣。」

その言葉ともに両腕の魔具が鼓動する。

「右腕に宿るは断罪の斧。すべてを燃やしつくす蒼き炎。割れぬ、欠けぬ刃を持って運命すら断つ・・・こ

れ終焉の一撃。」

その言葉に右腕の斧から凄まじい勢いで炎が吹き荒れる。

「我が左腕に宿るは蝕みの魔剣。全てを蝕み、神すら殺し、無に帰す・・・これ神殺しの一撃。」

左腕の魔剣も禍々しい光と放つ。

「終焉と神殺し、二つの力を合わせ放つは・・・神々の黄昏。運命を裂き、無に帰す浄化の一撃なり。」

高まる二つの力の余は凄まじく。基地全体が揺れる。

「なっ・・・この力は・・・クトゥルー!!!」

その言葉と共に危機感を覚えたクルーは指示を飛ばす。

クトゥルーの両手に集まる黒い瘴気。そして、魔王の邪魔をしようと口元の触手を飛ばすが、それらは魔王に届く前に両腕から放たれる力の余波で消滅する。

「さあ・・・覚悟しろ。」

その言葉と共に魔王は力のこもった両腕を後ろ背中まで引いた状態で駆ける。

それに合わせてクトゥルーは瘴気を込めた両腕を叩きつける。

「ラグナロク!!!」

それに習うように魔王も両腕を叩きつける。

邪神と魔王の一撃がぶつかり合う。

「ぐううううううう……」

そして一瞬だけ拮抗を作って……

クトウルの両腕が粉々に砕け散る。

悲鳴をあげながら、とっさにクトウルは触手に覆われた口を開く。

闇の様に暗く深い中から放たれる、黒い瘴気。それが魔王を襲う。

しかし、その瘴気すら魔王の両腕に込められた力のかき消し、その一撃が胴体に命中する。

「があああああああああ！！？」

言葉にならない悲鳴を上げるクトウル。

その体到大穴があき、そしてそこから紅い光と蒼い炎が上がり、クトウルの全身を包み込む。

「……私の前に立ちふさがった事を後悔しながら逝け！異界の邪神よ。」

その言葉と共に爆散するクトウル。

「まさか……倒してしまうとは。」

「さすがに死んではないか。だが……向う数年、戦闘はできんぞ?」

「くく……ですが、流石に貴方もボロボロですね。」

両腕が戻った魔王だったが、その体はボロボロだった。

「ああ。だが……お前位ならまだ倒せるぞ。お前もあれだけの物を使役しただけあって魔力は空に近いはずだからな。」

「……確かに、あれだけの大物相手では私も限界です。」

クルーはそう言いながら宙に浮いたルルイエ異本を手にとる。

「それにアジトにあなたの僕を初めとした者たちが大暴れしてくれたおかげで計画はすでにめっちゃくちゃです。引き際でしょうね。」

「良い心がけだ。こちらからしたら厄介な心がけだがな。」

魔王のコメントにクルーは軽く笑う。

「魔王に厄介と言わしめるとはね。こっちも捨てたものではないらしい。」

クルーは満足そうにそう言いながら、身体を空間の歪みの中に沈めていく。

「この借りはいずれ返します。では・・・。」

クルーの姿が消え、その気配までも完全に消える。

それと同時に魔王は膝をつく。

「・・・流石に・・・同時解放はきついな。」

魔具二つの同時解放。それは身体に大きな負荷をかける。ダメージを負った状態で必殺技を放ったものあり、大きなダメージを負い、同時に体力も消耗することになっていた。

「・・・だが、一番の強敵を抑えた甲斐はあった。」

彼の脳裏に入ってくる念話はヴィヴィオの無事を知らせる物。

「さて・・・そろそろ合流しようか。流石にボロボロだが・・・まあ何とかなるだろう。」

魔王はその場を後にしていく。少しぎこちない身体の動きは全身の痛みを根性で押さえつけているからだ。

魔王がそして変身を解かないままある部屋に来た時・・・コメントに困る光景を見てしまった。

「しっ・・・死ぬかと思った。二度目の死をこんなところでむかるところだったぜ、」

「ああ……。なんとか……生きている。ラント……済まない……助かった。」

グリーズとバトラの二体は纏っている装甲はボロボロの状態。グリーズは右足がなくなっており、バトラも左腕を肩口ごとなくなっていた。

彼らの前には白い甲冑に神々しい金色でそうしょくされた盾を持つ第三の騎士——ラントがいた。

爆発の中唐突に彼は現れ、二人を盾で守っていたのだ。

「いや……私はここに來た事を後悔している。私の誇りがこの場で粉々に打ち碎かれたからだ。」

ラントが膝をつくとともに手にしていた盾が粉々に碎ける。

「……おいおい。その盾……ロストログアに近い防御力を持っているんだろ？なんで粉々に？」

三体の騎士は色々と深い傷を負っていた。

そしてその傷を負わせた男は。

「……あなたは……もう。一体何をしたらこんな惨状になるのよ!？」

助けに来た女性の前で正座して説教を受けていた・

「だって・・・ヘルさんの身になにかあったと。」

「だってじゃありません。心配してくれるのは本当に・・・まあ・・・本当にうれしいけど・・・やり方が過激すぎ！！この部屋でばれるだけでアジト全体が崩壊寸前ってどんな事をしたのよ！？」

「えっと・・・戦艦の砲撃に、三ヶタのピットによる一斉射撃。ナノマシンによる分子構造の破壊に・・・そうそう、空間歪曲による爆発もやって・・・他には・・・。」

「・・・もういいわ。貴方がやり過ぎというのはよくわかった。」

具体的に説明し始めたデュラにお手上げのヘル。

「でも・・・誰も殺していない。」

「えっ？」

「その騎士も殺していないように意図的にしたし。だって・・・。」

自信満々に言っただけのデュラ。

その態度は反則的にカッコよさと、可愛らしさを兼ね備えていた。

「僕の知っているヘルさんは、そんなの絶対に望まない。生と死を司るだけあって、誰よりも優しくて思いやりがあるとっても素敵な人だってわかっているから。」



「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヘルはその言葉に完全に固まっていた。そして、瞬間湯沸かし器の様に顔を真っ赤にさせながら叫ぶ。

「もう・そんな恥ずかしい事言わないで！！それはそれで嬉しいけど・・・・・・・・」

その光景を妹分であるアバドンは・・・・。

「・・・・甘い・甘すぎる・・・・。なんとか・してくれ・・・・・・」

あまりの糖分過多に倒れ込みながら、危険なけいれんを発していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・カオス・・だ。」

魔王のその一言で皆が一斉に気付く。

「なっ・・まっ・・魔王。」

グリーズ達はぼろぼろの状態。

そこに追い打ちの様にやってきた魔王。この状態で彼らに勝ち目どころか、生きて帰れることすらも不可能といえた。

「弱っている相手を倒す趣味はない。安心せい。」

しかし、彼らを倒すことを魔王はよしとしなかった。

「・・・初めて見る顔があるな。」

「初にお目にかかる。私は盾の騎士・・・ラントと申す。」

「真面目なやつよのう・・・だが、手痛くやられておる。むしろよく生きているとほめてやるべきかな？」

魔王は三体の騎士を見てその健闘に賛辞を贈る。

「いやな予感がしてきてみれば・・・二人がボロボロだった故とっさに守りましたが・・・。盾が・・・。」

亡霊の鋼鉄騎士団のナンバー5に位置するラント。彼は二人の悲鳴を伴う通信を聞いて駆けつけてくれたのだ。

だが、たどり着いたそこは戦場と言うのも生易しいくらいの地獄の光景だった。

それでも気高い彼は必死になって皆を守るが、自慢の盾が砕けてしまった。

「・・・盾の騎士の誇り・・・完璧に打ち砕きよったのか？」

「すみません・・・無我夢中で・・・。」

「まあ・・・相手の方に非がある故にこちらが何かする義務はないのだが・・・。」

痛々しい状態のラント。それを見て少々気不味い思いをしているデュラ。

「あの・・・襲いかかってきた敵にこんな事をするのはおかしいと思いますか・・・。」

デュラがおそろおそろ何かを提案しようとする。それを見て、魔王はやれやれと肩をすくめる。

「デュラ・・・さすがに気高い騎士達にこれは遣り過ぎだ。」

「すみません。つい・・・ですので・・・。」

「・・・手足の修復と変わりの盾を用意してやれ。」

『はあ？』

主としての命令に三人の騎士はそろって間抜けな声を上げる。

「了解であります。」

『なっ？』

それに嬉しそうにデュラは応え、それに三体の騎士はまた間抜けな声をあげた。

「さて・・・三人とも・・・じつとしてくださいね。」

デュラが色々な機器と転送させつつ、手足を変形・・・無数のマジックハンドを展開させながら三体に迫る。

「へっ・・・いや・・・ちよつと・・・まっ・・・」

「安心してください・・・痛くは・・・多分しませんから。」

「多分って!？めっちゃ不安なんだけど。」

「くっ・・・二人ともここは・・・なっ?何だ?」

三体は良い予感がせずに逃げようとするが、全身を何かに拘束される。

それは・・・ワイヤーであった。

ただのワイヤーではないのは、拘束された彼らの動きその物が強制的に止められていることから、三体の騎士は理解する。

巻きつくだけで動きを止めるワイヤー。

「・・・ヘルズチェーンの機能をさらにコピーしたか。すごいもう。」

魔王はそのワイヤーがヘルズチェーンとほぼ同じ性能であることをすぐに見抜きつつ、なすがままの三体の騎士をみる。

そして・・・ほんの一分ほどですべては終わる。

「はい。これで大丈夫だね。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

三体の騎士の身体は完璧に治っていた。

それどころか・・・。

「何だ？生前に近い身体感覚が・・・・。」

「簡単にチューニングしておいたよ。どう？」

「・・・悪くない。むしろ・・・調子があがっているくらいだ。」

グリーズも戸惑っているようだ。何しろ・・・敵であるはずのデユラからこのような施しを受けるなど想像もしてなかったのだ。

「ついでに・・・声も直しておいた。だいぶ改善されいたみたいだど、歌も歌えるくらいには調整をしておいたよ。」

グリーズの声も調子まで戻っている。

「それと・・・ラントさんっていいましたっけ？すみません。代わりの盾・・・試作のこれしかなかったのよ。よければ使って・・・・。」

「・・・いや・・・これはすごい盾だぞ？」

一方ラントも変わりにもらった銀色の装飾の盾に込められた盾の凄みを手にしただけで判っていた。

「それはそうだよ。それは・・・進化する盾だし。」

その言葉とともに、新たな盾はラントの前の盾の欠片を吸収。元の盾の姿になる。

「その盾・・・明確な自我はないけど・・・魂の元になるような物を仕込んでいる。それを共鳴して・・・自我が芽生えるかどうかの実験も兼ねて託す事にするよ。」

「・・・いいのか？そんなすごい物？」

「気にしないでくれ。こっちもやり過ぎたと思ったわけだし。それに発信機の類は一切仕込んでいないから安心してね。」

『・・・。。』

「安心せい。コヤツの誇りだ。それに・・・いくらお主たちが強くなるうともデュラ本人には勝てぬよ。そうだろ？」

「そうですねえ・・・あら？ちょっとまってください。」

魔王の言葉にデュラが応えようとしてしばし制止。そして軽くため息をつく。

「・・・・・・・・失礼な輩だ。」

その言葉と共に凄まじい轟音が大地を揺らした。

オウルシードはクルーの指令で基地から十キロ離れた上空で大規模な魔法を放とうとしていた。

理由は、基地の処分と中にいる者たちへの報復。

「この距離なら流石に気付かれねえか。」

オウルシードの周りで展開される巨大な魔力の塊。威力はSSランク以上はある大規模殲滅の魔法。

「では・・・邪魔ものさらばと・・・ん？」

しかし、オウルシードの上空から凄まじい閃光が下りてくる。

「なっ・・・なななななん!？」

オウルシードは避けることもできず、その閃光に飲み込まれ、そして消滅する。

そしてその閃光は地上に命中・・・巨大なドーム状の爆発を起す。

「・・・ぬ? そうか基地の消滅を狙っていたものがいたのか? すまぬな。助かったぞ。」

「いえ。主を守るのは当然です。」

「だが・・・流石に衛星兵器はやり過ぎだぞ？」

「・・・デュラ？何を作ったのか私にも全部教えなさい。主様だけでなく、私もきっちり把握しておく必要があるのが良く判ったわ。」

魔王の呆れた声と、ヘルの必死な形相。

そして・・・三人の騎士たちは・・・青ざめていた。

戦略規模の兵器すら指も使わず簡単に使用できるのだ。

はつきり言って・・・デュラは歩く最終兵器と言った存在になっている。

「・・・後・・・お主のボディはどの程度まで改良したのだ？おそろく・・・戦艦や衛星すらも生ぬるような状態になっていると思うが？」

「・・・やはりわかりますか？」

「わからないわけないだろ？お主のボディを簡単にスキャンさせてもらっただけで、余は軽くめまいを覚えたぞ。」

『・・・。。。。。。』

三人の騎士たちは力なく立ち上がる。



「もう帰るの？」

「ああ……。おまえを捕獲するのはもう……。止めにする。」

「その方がいいぞ。余もコヤツを倒せるかどうか：正直判らぬ程のレベルだからのう。」

「……。忠告感謝する。」

「ああ。魔王のお墨付きは流石に勘弁だわ。」

グリーズとバトラは力なく消える。後にはバトラが残っていた。

「あと、デュラ殿。盾・感謝する。また戦でま見える事があれば・この盾を使いこなしている姿をお見せする。」

「嬉しいですね。その時をまっています。ついでにデータもとれそうですね。」

「ああ。楽しみにしてくれ。」

2人の騎士は軽い会話である種の絆のような物を作ったのか、笑い合いながらラントは姿を消す。

「……。さて……。余も隊の皆と合流してくる。」

「はい……。ですが主様……。かなり酷いダメージが……。」

ヘルは変身を説いたバーハルトのダメージの大きさをすぐに見抜

く。

「余の再生力を利用すれば何とかなる。はぐれたことになっているのでな。すぐに合流せんと。それに少しボロボロの方がはぐれても何とかやっていたと説得力もあるだろう。」

バーハルトは苦笑しながら、ヘルとデュラにいう。

「アバドン。2人を先に送ってやれ。余は事後処理と・・・誓いを果たしてから帰る。」

「はい。では兄上、姉上・・・乗ってください。」

アバドンはバイクに変形し、その上にデュラが乗り、その後ろにヘルが乗る。

「しばらく二人で色々話しあっておけ。デュラがヘルの事をどれだけ大切に思っているのかと・・・そのヘルがデュラに対して抱いている心配などをな。」

『えっ？それって？』

「色々辛いと思うが頼むぞアバドン。」

「はい・・・出来れば私にその役目を投げ込まないでくれればありがたかったです。」

泣き声のアバドンはそのままやけくそ気味にアクセルを吹かせてその場から走り去る。

壁に激突する寸前で転送。魔王の三人の僕は基地から去って行った。

「ふっ・・・アバドンの泣きごとか・・・。あやつも成長しておるみたいだな。」

主であるバーハルトは僕の成長を感じながら、その場を後にした。

「ちよっと！？あなたボロボロじゃない！！」

ティアナがバーハルトと合流したのは魔王の僕が大暴れしていた部屋に向かっている最中のことであった。

「済まない。罠にはまって、別の階に転送させられたな。そこで戦っていたらあちこちで爆発が起こつて・・・それに巻き込まれてしまった。」

「・・・・ああ。あの魔王の僕の仕業ね。」

ボロボロになった基地内部を見回すティアナ。

「まあ・・・服がボロボロになっているだけだ。着替えも用意しているから、外に出ればすぐにでも・・・・。」

そう言って歩き出すバーハルト。その足取りは一見すると何でもないように見える。

だが、微かな違和感をティアナは覚えた。

そして・・・頬を伝う汗に血がにじんでいるを見て彼女は確信する。

「・・・・・・・・ちよつと待ちなさい!!」

その背中を見たティアナが彼を呼びとめる。

「なんだ？」

「何だ？ じゃない!!・・・・服だけじゃないでしょう!! あんた・  
見えないようにごまかしているけど酷い怪我をしているじゃない  
!!」

「・・・・・・・・なんのこと・・・・」

「ごまかしは無駄。ちよつと肩を貸してあげるから!!」

そう言って、ティアナはバーハルトに肩を貸す。

「・・・・・・・・良く判ったものだ。」

表情一つ変えてはいないが、今のバーハルトはボロボロだ。

関節一つ動かすだけで、身体が軋みをあげ、苦痛が全身によぎる。

苦痛に耐えるのは慣れてはいるが、それでも気力を使うものだ。

ティアナに肩を貸してもらう彼は安堵のため息とともに彼女に身

体を預ける。

かかってくる重みを見て、ティアナは自身の目が正しかった事を確信する。

「・・・無茶するんだ。あなたも・・・。」

ティアナのつぶやきに、バーハルトは苦笑するしかない。

「・・・感謝する。」

その一言は、色々な感謝が混じった言葉。有無を言わず肩を貸してくれる強い優しさと、怪我をした経緯を聞かないでいてくれる事。そして・・・自身の苦痛を見抜いてくれるその洞察力にたいしてだ。

「か・・・っ・・・勘違い・・・しな・・・いでよ。」

その一言にティアナはどう言ったらいいのか判らず憎まれ口をたたく。

「それでも・・・言わせてくれ。ありがとう。」

バーハルトの誠意がこもった感謝の言葉。

それはティアナの胸に大きく響く。これでは突っぱねることができない。

「いっ・・・一応・・・受け取っておく。」

顔を赤らめているのは幸か不幸か、バーハルトには見られなかったのだが。

「俺も肩貸すべきなんだろうけどな……。」

「止めとけ。空気読めないと周りから批判されるのが落ちだぞ。」

「その通りだ。でも……これはいいからかいのネタになる。」

ディーノがその光景にどうしたもんか迷いを見せているところに、ガロがしっかりとやめておけとくぎを刺す。

そして、ハイネは面白いもんをみたのにやにやしなながらその光景を見る。

だが……その光景を他の隊員達がバッチリ目撃していた事をその時のティアナは気付かなかったのだ。

「……ティアナお姉ちゃんにも春が来たのか。でも……相手が色々とすごいからなあ……。」

そして、その目撃者の中には無事に助け出されたヴィヴィオの姿もあったという。

ちなみにバーハルトは全身打撲と捻挫、軽度の筋肉の裂傷を起こしていて、全然大丈夫な状態ではなかったという。

だが、簡単な治療を終えた後、自身の誓い通りその日の昼をヴィオにごちそうした。食堂であらかじ

め仕込み、事件解決後・・わざわざその状態で調理して見せたのだ。

メニューはオムライス。デミグラスソースのかかったものだ。

ヴィオは痛みをこらえていたバーハルトをみる。

「なんで・・ご飯を？」

純粹な疑問。それにバーハルトは微笑みながら応える。

「・・・目の前にいたのに助けられなかった詫びと、市場の事を教えてもらった時の感謝だ。それに・・これはその市場の食材で作った新しい余のメニューなのだ。味付けは大丈夫だと思っていたのだが、是非・・感想もききたいのですね。」

「・・・酷い怪我をしているのに？」

ヴィオには彼の怪我の本当の理由が判っていた。

この基地にいた本当の強敵と彼は戦っていたのだと。

「ふっ・・おいしいという幸せを分かち合うためなら、これくらいは無茶はする。それに今夜は色々と苦勞をかけた我が家族にも振舞おうと思っているのだ。改善点があったら教えて欲しいのだ。感謝ついでで申し訳ないが・・。」

「うん……。いただきます。」

ヴィヴィオはオムライスを口にして……言葉を失う。

「優しい……味だね。」

「……また抽象的な感想だな……。ん？どうして泣いておる？」

「だって……。だって……。」

ヴィヴィオは本当の意味でバーハルトと言う人間を知ることができた。

優しすぎるのだ。

転生する前から今までも。

しかも、その優しさは永い年月が積み重なった深みと強さを兼ね備えたもの。傲慢ではなく、それでいてそよ風のように心地いいさりげなさを兼ねている。

それが……。オムライスの味にもでているのだ。

おいしいという前に……。ヴィヴィオが直感的に優しい味だと感想を漏らしてしまうくらいに。

「そうか……。なら……。もっと食べてくれ。」

残念なことと、ある意味尊いと言えるのは魔王本人が其のことを



全く自覚していないことだろうか？

戸惑いながらも、不味いと言われなかった事に嬉しく思うバーハルト。

「うん・うん・。」

「コラアアアアアアア！！勝手に病室を抜け出すな！！」

あちこち探し回ったのだろう。息を切らせながらティアナがバーハルトに詰め寄る。

「おおっ・・・わっ・・・わかった。判ったから落ち付け。」

ティアナの鬼気迫る状態に流石のバーハルトも若干だが慌てた様子。

「ふふふっ・・・・。」

それを見て今度は笑顔になるヴィヴィオ。

「あら？おいしそうなオムライスだね？誰が作ったの？」

同じくバーハルトを探していたのはがやってきてヴィヴィオが食べているオムライスをみる。

「・・・ママ、食べてみる？」

ヴィヴィオはなのはにオムライスを食べさせてみる。

これは早朝に起こった誘拐事件。

それが解決したのはその日のお昼前。

そして・・・バーハルトは正午に、ヴィヴィオへの誓いを果たしたのだった。

## 聖王と魔王（解決編）（後書き）

さて・・・この話を気に・・・当分！！デュラには戦闘に参加させません！！

私自身も・・・少々やりすぎたと思いますし、彼が暴走する理由が今のところないからです。

まあ・・・またヘルさんに危機が迫ったらこの話以上に恐ろしい彼本体の力を見せることになります。

見たい人があったら感想にどうぞ。

ある意味・・・デュラも魔王なのかもしれませんね。

さて・・・次の話はこの後に起こる事件の前の幕間としてティアナをスポットにした話を一話書きます。

次回予告 「ティアナのバーハルト観察日誌」

ティアナ「なんで・・・こんなにも彼がきになるのだろうか？」

彼女は自覚していく。魔王に惹かれている自分に。

ティアナ「でも・・・彼は魔王なのかもしれない。」

そして同時に彼女は真相に迫りつつあった。バーハルトの正体に。

仮面ライダーベブゼブ、ファーストヒロインとしてのティアナを楽しみにしてください。

では！！

## ティアナのバーハルト観察日誌。(前書き)

師走……。今年の残りも一カ月を切ったのですねえ。  
寒いです。

今回のこの話を終えた後の事件。

これをKI様とのコラボのMOVIE大戦にします。

今回の主役はティアナ。

この話でようやくティアナをヒロインらしく書けました。

ではどうぞ。

## ティアナのバーハルト観察日誌。

ティアナが彼と初めて出会ったのは彼がユーノ・スクライア司書長の使いで、管理局の地上本部に來た時だった。

その時淡々としていた彼は彼女を見て何故か軽く固まって驚いた様子を見せていた。

彼女は直感的に、可笑しいと思っていた。

何故初めて会ったはずなのに、そんな表情を向けるのか？

銀色の長い髪をした男など知り合いにまったくいなかった。

記憶違いかと思ったが、それでもおかしい。

それが・・・彼女がバーハルト・スクライアを監視するようになったきっかけであった。

「うむ。そういうものなのか？」

其の本人は今、食堂で楽しくおしゃべりしながら、食事をしている。

「はい。っていつでもある意味では本末転倒なんですけど。」

一緒に食べているのは大食い仲間であるディーノとハイル、ジュエルの三人。

そこにガロも加わっている。

「謙遜するな。助けるための術を磨いておくのは悪いことではないと思うが?」

「・・・そう・・・でしょうか?」

「俺もそう思うぜ。格闘だけじゃなく、レスキューも覚えておいて損はねえし。それにそう言った事態になれば、俺は真っ先におまえを頼る。」

「ハイルもいいことをいう。」

話しの内容は、ガロの装着者となったディーノがレスキュー隊としての訓練も今も週一だが続けているという点だ。

戦士としてそれでいいのか、生真面目にも彼は悩んでいたというわけだ。

「っていうか、お前は生真面目すぎる。もっと肩の力を抜いてだな。」

「・・・ハイルは抜きすぎだと思うよ。だからまた人の着替えを覗いてしまのだよ。」

ハイルに鋭い指摘をするジュエル。

「しっ・・・しかたねえだろ。」

「まあ・・・そんな星の下に生まれたっていつでも過言ではないみたいけど?」

「ははは・・・ジュエルの言うとおりだな。確か・・・ラッキースケベというのだな?」

ハイルに追い打ちをかけるのはバーハルト。

「そっ・・・それに・・・俺には心に決めた人が・・・。」

「ほう。それは面白い話を聞いたのう。」

思わず漏らしてしまうハイルに意地の悪い興味を示すバーハルト。

「はっ・・・しっ・・・しまった。今のは聞かなかった事に・・・。」

「まったく、まだまだ若いいう。迂闊に本音を漏らしてしまうとは。追及はせんが、気をつけろよ。そ

れが余計なひと言として、お主はまたどつかれておるのだから。」

「はいはい。・・・くう反論できねえ。」

やんちゃで扱いにくいで知られているハイルが弄られている姿。逆にいえば彼らが完全にこのチームに溶け込んでいるということだった。

「本当・・・すごいわねえ。」

ハイルは聖王騎士団の中でも有数のはみ出し者。単独行動、命令違反は当たり前。其の悪名は管理局までも届いていたくらいだ。

だが・・・このチームに入ってから彼はその実力を遺憾なく発揮し、連携すらもとっている。

メンバー全員、人が良いという要素も大きい。

だが最大の要因は、彼の實力と、意思を尊重したバーハルトの手腕だ。

彼がハイルの實力を引き出し、ハイルは今では捜査班の要として多くの犯罪者を摘発している。

その相方としてよくディーノとジュエルがいる。彼らとは心安い仲と言っても過言ではないだろう。

そのディーノとジュエルも特殊な位置にいた。勇者と呼ばれ、ロストログアに極めて近い謎のベルト・・・ガロヴィンドを纏う彼は結果として強大な魔道士すら勝てる力を得ていた。

強大な力。その扱いに上層部は紛糾したのが、はやての尽力で彼の因縁であるシードとの戦いに発揮できるようにこの部署に転属になったのだ。

ジュエルもパラディン製作者にしてガロヴィンドを把握している唯一の人間として一緒にきている。

彼が担当しているパラディン部隊もこの本部にあるので、主に彼はそこでパラディン達のデータの収集と改良、新たな武器の開発をしている。その関係でデスクワークが多いのだが、成果は目をはるものがある。そんな極めて優秀な彼にも上層部は目をつけている・



2人の狙い上層部は引き抜きに躍起になっていたのだが、それをバーハルトがことごとくかわすような施策をとってきたのだ。

通信や時には直接乗り込んできた彼らを真っ向から論破して諦めさせるバーハルト。その論議は・彼が階級すらないただの囑託と言うことすら忘れてしまうほどすごく、そして逆らえない。

そんな彼の尽力のおかげで、チームは最良の状態に保たれている。その事実を知っているのは、はやてとティアナの二人だけなのだが。

表でも裏でも彼はこのチームのかなめになっているのは間違いないかった。

「酒がうまい。これはどこの酒だ？」

「ああ。地球と言う管理外世界から取り寄せた日本酒だ。色々な物があるらしいが今回は癖ないさらさらした奴を取り寄せた。」

「・・・販売ルートおしえてほしい。これはいい。」

ガロヴィンドと酒の話をするバーハルト。ガロは無類の酒好きだった。しかも、量をのむわけではなく、その味と酔いを純粋に楽しむ本格派だ。

「おう。しかし、確かにこれはおいしい。良い米と水をつかっているのだな。酒造の方もかなりの熟練と聞いておるし。」

そう言いながら、バーハルトも酒を口にする。

ガロとバーハルトもすっかり仲がいい。かれも酒の良さが判る男なのだ。

だが・・ただ問題があるとすれば。

「って・・あんたら！！真昼間から、しかも勤務中に酒を飲むな！！」

ティアナがとんでもない光景に思わず怒鳴る。

そう今は勤務時間内。しかも正午。つまり真昼間だったのだ。

「良いではないか。それに、余もコヤツと同じくザルでな。酔いその物も直すことができる。それに・・軽くたしなむだけだ。」

「だからって問題あるわよ。風紀的に・・。」

ティアナの突っ込みは彼らのやり取りの中になじんでしまっている・

この奇跡のチームを率いるのは非常勤と形で司書の仕事の傍らに参加しているバーハルト・スクライア。

彼は基本的に真面目。だが天然で・・やや価値観が破天荒気味だった。

この二つが加わると大いに厄介で、それでティアナ達は酷い目に

あっている。

ある事件の書類整理をしていたら、倉庫に保管していた全ての資料のあらひ直しを始めたのだ。

その理由を頭痛を感じながらティアナが聞くと。

———どんな事件が乗っているのか見たくなったから。それにどのような事件が多いのか、まとめて統計に出してみたら面白いではないか？

という単純明快なものだったのだ。

おまけに容疑者の取り調べの際、気分を変えようと彼は取り調べ室から容疑者を出し、食堂で共に食事しながら調書を取り、そして空中に浮きながら取調べをとっていたのだ。

飛行魔法を使え、それを相手にも使用できる時点で驚きだが、はやてやティアナはそれを聞いて大いに慌てたという。

彼は常識と言う物を簡単に覆す。しかし、目的は必ず達成して見せるという恐ろしい男でもあるのだ。一見蛇足に見えて・・・意味があるというのが彼の恐ろしいところだ。

おまけに大食い。

それはスバルですら生易しく見えるほどのまさに暴食の君。

食堂に行くたびに、コック達も必死になる姿を見ている。

「いつもすまないな。」

でも彼はそんな彼らをいつもねぎらう事を忘れない。

迷惑かけないようにあらかじめ食事行く事を言っている。

その上、食堂の経営なども色々とアドバイスを送り、材料の仕入れの質まであがったのだ。

おまけに彼自身が知る限りの料理の知恵を教えたりして、結果として食堂はさらにパワーアップしている。

バーハルト自身も新しい料理など色々な話を聞いて有益だと笑っていた。

すっかり料理人たちと仲良くなっているのだ。

たまに彼もいっしょに何かを作っている姿も見える。

変わった男・・・。

違和感を抱きはじめながらティアナが次に抱いた彼の印象はそうだった。

その印象の中で彼女はもう一つの違和感に気づいていた・

「そう言えば・・・会った時はどこか淡々としていたのに・・・。  
どうして最近笑顔が多いのかな？」

初めて出会ったときは表情をあまり変えず、淡々としていた様子

のあるバーハルト。

しかし、最近のバーハルトの顔にはまだうつすらではあるが、笑みがこぼれていたのだ。

自然で、作り笑いではない掛け値なしの笑顔。

笑みだけではない。

優しさも溢れだしていた。

読みにくい男だと思っていた彼の変化。

「・・・・・・・・気になるわね。」

彼女は気付かない。

怪しいと思っていたバーハルトの監視。それがいつの間にかその趣が変わっていたことに。

ある日の夜、バーハルトはため息をつきながら報告書を書いているティアナを見かけた。

「ほう……。あの事件の報告書か？」

「ええ。あんたのおかげで不思議と解決してしまった事件のね。」

「・・・・余はただ・・昼食を分け合っただけなのだがな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あんだ本当にそう思っているの？」

それは前日のお昼時の話だった。

現金輸送車を襲った男達がいた。

彼らは全員で四人。計画通りにまんまと大金を取ったのはいいが、その際に2人が捕まってしまい残りの二人は必死で逃げていたのだ。

そこをティアナに見つかり、追い詰められた男達は商店街で一人の子供を人質に取ったのだ。

「うっ・・・・・・・・動くな!!」

「こいつの命が惜しいなら・・・・・・・・」

興奮状態の男達に涙目の子供。恐怖のあまりにすくみあがっている。

「くっ・・・・・・・・。」

管理局の応援が来るが、容易に踏み込めない状況。

「・・・・・・・・なんだこれは？」

その時、犯人の真後ろの店から出てきたのはバーハルトだった。

「・・・・・・・・なんであんだがここに・・・・・・・・って理由はわかるわ。」

ティアナが理由を聞くのをやめたのはバーハルトの手にしていた袋をみたからだ。

彼がいたのはパン屋。

彼がかつてきたパンの量は半端な量ではない。

「・・・なっ・・・なんだお前・・・。」

「イライラするな。折角出来たてのパンが手に入ったというのに・・・食べるか？」

「えっ？」

「まずは気持ちを落ちつけい。・・・お主も食べるか？」

「うっ・・・うん・・・。」

「ちよっ・・・。」

「つべこべ言わずにお主も食べる。」

『はい・・・。』

突然現れたバーハルトのペースに逆らえずになすがままの犯人達。

そして人質と犯人の男達はそろって渡されたパンを食べる。

彼らはそろって言う。

『おっ・・・おいしい。』

「そうか。やはり本物だったな。この店のパンは。マスター!! 自信を持ってよいぞ!! 余も職場の皆に配って宣伝しておく。」

バーハルトの言葉に店の中から事態に気づいていた店の主人は引き継いだ笑みを見せる。

「さて・・・色々と話をきかせてくれい。」

其のパンの味に完全に毒気抜かれた犯人達はバーハルトに色々な話をした。冷静になってこうなってしまった経緯をすべて話したのだ。

そして・・・涙しながら謝ってきた。

「よい。とりあえず、犯した罪くらいは償っておけ。出来る限り色々と酌量はしてやる。そうそう・・・先に捕まった仲間にもこのパンを渡しておこう。絶対に心が癒されるはずだ。」

『はい・・・本当にありがとうございました!!』

そう言ってパンを渡してから十分で事件を解決させてしまったのだ。

それにティアナを初めとする皆は啞然としながらそれを見守っていた。

その際、バーハルトは買ってきたパンをその場に居合わせた全局員にふるまわれた。



そしてそれを食べた皆はそろって・・・事件解決の最大の立役者の驚異的な威力を知ることになった。

「あのパンの味・・・不服だったか？」

「いや、あれは本当においしかった。店の場所を覚えてしまったぐらいだし。」

ちなみにティアナはバーハルトからもらったクロワッサンに完全に氣に行ってしまった、事件後、買いに来た位だ。

今コーヒーのお供にしているもの其のクロワッサンだったりする。

何かの魔法がかかっているのではないかと思うほど、魅惑的な味のするパン。それにティアナはまりつつある。

「そうか・・・ならよかったよ。」

紹介した甲斐があるとバーハルトは安堵の笑みを見せていた。

クロワッサンを食べながら聞いた話だと、このパン屋に関してはバーハルトが深くかかわっている。

半年前、思い通りのパンを作れず悩んでいた彼のところへバーハルトが店を訪れ、その悩みを聞き、そしてこまめに通いながら感想

と、アドバイスを送り続けたらしいのだ。

そして現在、あの事件をきっかけにその店は知る人ぞ知る名店になってしまった。

何しろ食べるだけで犯人が改心してしまうほどの味なのだから。

「マスターも・・・苦勞が報われたか。夢の味の域にこんなに速く達するとは・・・。」

「あっ・・・また笑った。」

満足そうな笑みを見てティアナが思わず声に出してしまう。

「笑う・・・？余がか？」

笑顔を浮かべていたという事実にはバーハルト本人はとても驚いている様子だ。

「うん。あんた・・・最近幸せそうな笑みが多い。何かあったの？」

「余が・・・笑っていたのか？」

「・・・もしかしてあんた・・・自覚なかった？」

「・・・ああ。余は・・・そう言ったのができないと思っていたのである。」

珍しく戸惑う様子のバーハルト。彼自身も気付かなかった変化だったらしいのだ。

「元々・あまり感情がないと思われていたのな。」

その話をきっかけにバーハルトは簡単にだがティアナに自身の過去を話す。

遺跡で見つけた事。

過去を一切覚えておらず、歳も推定でしかないこと。

神童と呼ばれるほどに驚異的な能力を持っていたが、その反面感情の起伏に乏しかった事。心がなくただの機械と思われるほどに淡々としていた。

密かにそんな自分に疑問を持ち、どうすれば当たり前のように感情を表す事ができるか悩んでいたことに。

「・・・何言っているのよ。前々から十分あんたは心があるわ。」

ティアナはそんな彼の過去を聞き、断言してみせる。

「どうしてだ？」

「だって・・・悩んでいるから。それってそんな自分が嫌だから、変わりたいと思っているから悩んでいるの。心がなくただ・・・淡々としている存在ならそんなことしない。」

優しい笑みを浮かべるティアナ。それにバーハルトはしばし目を見開き、そしてすぐに笑う。

「そうか・・そうだな。だったら、余が笑えているのは幸せだからなのだろう。」

「幸せ？」

「ああ。色々な人達と分かち合う幸せを知った。家に帰れば共に食事する家族ができてな。そこから変

われたのだと思うよ。悩みを共有して、共に考えたり、一緒に食事をしたりな。そうか・・これが幸せか。今まで気付かなかったわ。」

幸せの意味を悟るバーハルト。

「そうか・・だったら、余は気付かないうちに幸せだったのだな。」

「ちゃんとわかっているじゃない・・・・。」

そこまで言いかけてティアナは少し不安になってしまった。

「・・私達も今・・分かち合えている？」

彼女にしては強がりも見せない素の不安そうな表情。・

「少なくとも、お主・・いや何となくだが貴方の不安は感じておる。この時点で分かち合えておるよ。それに・・もうパンのおいしさを分かち合ったではないか。」

当たり前のように断言して見せるバーハルト。

—————これは・・敵わないわ。

「・・・そう言えば何の資料を持っているの？」

「例の容疑者の著書と・・・その原因となった金融業者の資料だ。あ奴ら・・・だまされて財産をすべて失ったらしい。家族も・・・ばらばらだ。」

昨日の現金輸送車襲撃の犯人達は悲惨な経緯を持って犯行に至ったらしい。

「事実かどうか調べ・・・確認は取れた。罪は犯したが、あ奴らは償う決意をしておるから我が言う事はない。だが・・・あ奴らを追い詰めた者たちを許すことは・・・できそうにないのう。」

のんきな口調だが、明らかに彼は怒っていた。

「まさか・・・摘発するつもりなの？」

「もう証拠は充分にそろえた。色々と伝手はある。」

しかも、摘発する準備完了しているらしい。相変わらず恐ろしいほど優秀だ。

どんだけ優秀な執務管もここまではやく、しかも的確に裏付けと証拠は集められない。

「一応・・・共にパンのおいしさを分かち合い、あ奴らの苦しみを聞いた仲なのでな。こちらも無関係ではなくなった。」

――・・・だから・・・ずるいよ。その表情。

ティアナが見たバーハルトの表情は今は・・気高い漢の顔をしていた。

「・・ではいつてくる。」

「うっ・・うん・・・気っ・・気をつけてね。」

紅くなった顔を、見せまいと必死に逸らしながらティアナは声をかけておく。

そしてバーハルトが部屋を後にした後・・盛大にため息をついた。

「うう・・・だから・・反則だって・・・。」

ティアナのバーハルトに対する評価を改めるたびに・・ドつぼにはまっていた

天然でやや破天荒気味で色々と騒動も起こす。でも、基本的に彼は純粹だ。感情の起伏に乏しいと思

うのは・・そのためなのかもしれない。混じりけや打算もなく人と接し、そして優しくする。それでいて頭も大変切れている。

そして天然の彼の最大のギャップは・・・とても気高いのだ。

まるでどこかの王さまのような威厳と貫録、そして素晴らしい誇りを持っている・

人は大なり小なりプライドは持っている。ティアナもその例外ではない。だが。その中でとても格好のいい気高さをもつ人はそうない。

しかも彼の気高さは、基本的に誰かのためのものである。

ずっとバーハルトを監視していたティアナだが、そのせいで逆に彼の人となりや誰よりも深く知ることになり・・・魅了されつつある。

「しまった・・・。私が魅了されてどうするのよ。」

ティアナも認めたくないと思いつつも惹かれているという事実を覆すことはできない。

「だって・・・彼はもしかしたら・・・。」

惹かれてしまったら・・・後に引き返せなくなる。

—————もしかしたら・・・魔王なのかもしれないのに・・・。

ティアナがバーハルトを疑い始めたのは最初の根拠は魔王が地上本部に現れた時。

バーハルトが騒ぎの中うまく皆とはぐれたのを見たのだ。

どうしたのかと思って後を追った時には彼の姿はなく、廊下の天井に大穴があいている光景だけだった。

それから魔王が現れ、彼が姿を消した後にはバーハルトの姿を確認した。

それだけだったら、根拠に足りないことではない。

でも同じような事が何度も続いたらそれは根拠になっていく。

ティアナが確認するかぎりでも、バーハルトが姿を見せない時に魔王ベブゼブは姿を現す。

其の疑念に関してティアナははやてに極秘に相談している。

ティアナの疑惑に最初は眉をひそめていたはやても何か思うところがあるのか、少し考えているい様子だった。

「………一応、優先的にバーハルトと優先的に組ませるようにはしておく。何か判ったら報告頂戴。」

「はい。」

まだ確固たる証拠はない。そうならないように彼はうまく立ち回っているのだ。それに、管理局のリーダーに引つ掛からない転送方法があるらしく、あちこちにすぐに現れるというのも厄介な点だ。

尻尾をつかめない。

おまけに彼の僕の中にロストログアを簡単に作れる相手がいて、ヴィヴィオがさらわれた事件でも、バイクの上に魔王がいて、となりにはバーハルトがいるという事態が起こってしまった。



バーハルトが魔王であるという疑惑を持ち続けても、それを証明することはより困難になっている。

いちちごっここにすらならない泥沼の状態。

あるのはティアナ自身の直感だけなのだから。

ティアナは端末を取りだし、そこにある秘密のファイルを取りだす、あえてあらゆる外部からの情報をシャットアウトしたそれはバーハルトに対する資料だ。

「・・・参ったな・・・。」

「おっと・・・すまないな。」

一人で頭を抱えて悩んでいたティアナだったが、そこに突然バーハルトが戻ってきていた。

「わっひゃ!?!とっ・・・突然どうしたのよ。」

「すまない。資料をわすれてしまっただけ・・・ん?」

バーハルトは端末を隠しながら驚いていたティアナをみる。

「なっ・・・何よ?」

「どうした?何か悩みか?」

「!?!」

先ほど悩んでいた事がまだ表情にのこっていたらしい。

本当に彼は聡い。

「・・・余ければ相談には乗るが？」

「え・・・と・・・。」

言えるはずがない。

何しろ悩みは色々複雑な上に、其のすべての原因が相談にのってくれるバーハルト本人なのだから。

「・・・あっ・・・すまない、時間がなかった。」

だがバーハルトはこの後の摘発に行くために、この場をあとにしないといけなかった。

その事実に関心安堵するティアナ。

「そっ・・・そうね。早く行ってとっとちめてなさい！」

「おうよ。」

バーハルトはそう言って部屋を後にしようとする。

「・・・力になれる事があつたら、いつでも言うが良い。」

しかし、立ち止まってティアナに声をかける。

「へっ？」

「お主の抱えている悩みがどのようなものか余には判らぬ。だが、お主の悩みを余は分かち合いたいと思っているぞ。何しろもう・お主は余の身内であり、仲間だ。」

「へっ？・えっと・・・・。」

「身内が困っているのは放置してはおけぬ。仲間のためなら、貸すための力を余は惜しまぬ。故に・何かあったら言ってほしい。余はお主のためなら喜んで・力になる。」

「あっ・・えっ・・っと・・・・。」

「大切な人でもあるからな。」

「はうっ!？」

不敵な笑顔でティアナを見つめるバーハルト。そして、「ではまたな」といってバーハルトは今度こそ摘発に向かった。

「あっ・・あああ・・ああああ・・・・。」

一人残されたティアナは時間差を置いて顔を真っ赤にさせてしまつて、声にならない声を口から漏らす。

バーハルトの真摯な気持ちと不敵な笑みに心が驚掴みにされ

「ああ・・ああ・・・・。」

大切な人と言う言葉に完全に心を打ち抜かれていた。

「ああああ・・・ああああああああああああ！！！」

誰もいない事を良い事に奇声をあげてしまうティアナ。

そうしないと・・・おかしくなりそうだったのだ。

「どっ・・・どうすればいいのよ!?!」

相手は正体不明、目的も不明。しかも管理局が第一級封印対象と  
している魔王である可能性が高い相手。

そんな相手なのに・・・ティアナは自身が自覚している以上にどう  
しようもなく惹かれてしまっていた。

心をつかまれてしまっている。

認めたくないのに・・・第三者から見たらティアナの気持ちは完全  
に積みに入っている。

「一体・・・どうすれば・・・。」

それゆえ・・・ティアナの悩みは深い。

弱々しい苦悩が声から漏れる。

「うわ・・・バーハルトさん天然ジゴロ。」

そして、その光景を出歯亀している人達がいる。

メンバーはディノ、ハイル、ジュエル、はやてだった。

「ほんとうや……。ティアナがあんなに悶えているのは初めて見たわ。」

「でも……。バーハルトさん、絶対の己の罪に気付いていないですね。」

「違いねえ。本当に罪だ。あれは……。」

はたから見てもティアナがバーハルトに惚れている事は明白だった。

「ははは……。本当に罪であり……。積みやな。」

はやてに関しては引きつった笑いを浮かべることしかできない。

「……………これは……。色々と辛いな。ティアナ……。」

事情を知っているはやてとしては、ティアナの抱えている深い葛藤を察しており、深く同情していた。

## ティアナのバーハルト観察日誌。（後書き）

さて・・・ティアナ・ランスターは優秀な執務官。それゆえにバーハルトの正体にまつさに疑惑を持ったということにしています。

でも・・・それゆえにドツボにはまってしまったことも同じく書いています。

ちなみに　バーハルトは気付いている人もいるように鈍感です。そのくせ・・・天然ジゴロという救いのない属性もちです。

彼自身の領域に一步踏み込む人はあまりいない上に隙もあまり見せないのもモテるとうわけではありません。

彼の内面を見始めたら・・・コロリと堕ちてしまうほどの破壊力があります。

その破壊力にティアナは完全にやられているのです。

ここもある意味では魔王クオリティーですかね。

次回からMOVIE大戦として話を書きます。

機動六課特別犯罪捜査班の面々が活躍するある事件を書こうと思います。

タイトルは「転生の歌姫」です。

このキーワードに該当するキャラを出します。彼女がセカンドヒロインです。

よろしくお願いします。

次回話「転生の歌姫、永き時を経た運命の再会」

???「……よろしく願いしますわ。」

バーハルト「アッ・ああ・（なんだ？とても懐かしく愛おしい感じが？」

ティアナ「……………（怒）」

その他一同「……ティアナさんが・怖い……………」

テレビを見ていたヘルは思わず叫ぶ。

ヘル「……なっ・なんであの方がここに?!」

デュラ「あの方って？」

???「あの歌は邪魔だ。我々の悲願のためにはな……………」

一人の歌姫の護衛が今・始まる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7280v/>

---

仮面ライダーベルゼブブ

2011年12月2日17時51分発行